財団法人 市原市文化財センター調査報告書　第29集

―― 千 葉 県 市 原 市 ――

千草山遺跡(ちぐさやま)・東千草山遺跡(ひがしちぐさやま)

1989

市　　原　　市
財団法人　市原市文化財センター

序　　文

風土に恵まれた房総半島の西側に位置する市原市は、太古より先人達が居住し、多くの遺跡が認められております。先にマスコミ等を賑わせた王賜銘鉄剣や上総国分寺の調査などによっても、悠久の歴史の一端を伺い知ることが出来ます。このような状況下では、各種の開発に伴ない埋蔵文化財が少なからず存在しているのが実情であります。

今回の調査も、市原市の長期総合計画(第1次)に伴ない、山倉ダム周辺を文化の核とする方針により、文化施設を能満千草山の地に設置するための緊急調査であります。

千草山遺跡と東千草山遺跡は、大規模な発掘調査が実施されて来た上総国分寺台遺跡群の東側近接地に所在し、特に、千草山遺跡は、以前より、「千草山廃寺跡」の存在が伝えられ、数度の調査を経て、上総国分寺と同笵の軒瓦を出土して注目されている遺跡であります。

調査の結果、千草山遺跡では、東北側の地区を実施し、廃寺跡に直接結びつく資料こそ得られませんでしたが、縄文時代から歴史時代に至る多くの遺構と遺物を検出し、古墳時代から歴史時代には、集落として最も盛んに当地が利用されていたことが伺い知れます。また、東千草山遺跡は、わずかな面積の調査ではありましたが、弥生時代を中心とする集落であったことの一端が明らかになりました。

当報告書は、これらの成果をまとめたものであり、研究者はもとより、広く市民の方々に文化財保護の理解にご活用いただければ幸いです。

文末となりましたが、調査にあたり、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課ならびに関係者の方々のご指導とご協力に厚くお礼を申し上げます。

平成元年3月

財団法人　市原市文化財センター
理事長　星　野　一　郎

例　　言

1．本書は、千葉県市原市能満字東千草山1467地先他に所在する千草山遺跡及び同市能満字東千草山1482－7地先他に所在する東千草山遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、市原市による文化施設建設に伴ない実施した3件の埋蔵文化財緊急調査である。

3．現地発掘調査と整理作業及び報告書作成作業は、以下のとおり行った。

千草山遺跡〈発掘調査〉

確認調査　　昭和60年1月10日～昭和60年5月25日〈対象面積〉15.000㎡

担当者　米田耕之助

本調査　　昭和60年11月11日～昭和61年3月31日〈対象面積〉15.000㎡

担当者　石田広美、大村直、木對和紀、田中清美

本調査　　昭和61年7月15日～昭和61年8月31日、〈対象面積〉2.400㎡

担当者　近藤敏、清藤一順

東千草山遺跡〈発掘調査〉

確認・本調査　　昭和62年4月1日～昭和63年1月31日、〈対象面積〉4.500㎡

担当者　清藤一順、大村直、田所真

千草山遺跡・東千草山遺跡〈整理、報告書作成作業〉

昭和62年7月1日～平成元年3月31日

担当者　田中清美（先土器時代については、近藤敏が担当した）

4．整理、報告書作成作業に際し、遺物実測の一部は、半田堅三氏が行ない、石質鑑定は、近藤敏氏の助言を得ている。また、東千草山遺跡の貝類や動物遺体については、早稲田大学ＯＢ忍澤成視氏の協力を得て、早稲田大学の金子浩昌先生の玉稿を賜った。

5．本書の原稿執筆編集は、近藤敏(先土器時代)と田中清美が行った。

6．発掘調査から整理、報告書作成の過程で以下の諸機関、諸氏のご指導、ご協力を賜わった。

千葉県教育庁文化課、市原市、市原市教育委員会文化課（順不同）

7．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1：50.000「千葉、姉崎」、市原市地形図1：2.500「Ｃ－5，Ｄ－5」を使用した。

8．調査遺跡の当センターでの略式記号は、千草山遺跡(15.000m²)が「セ27」
〃　(2.400m²)が「セ49」
東千草山遺跡(4.500m²)が「セ58」
である。

凡　　例

1．遺構の名称については、現地発掘調査時において「竪穴住居跡（ＳＩ）」、「掘立柱建物跡（ＳＢ）」、「方形周溝状遺構（ＳＸ）」、「溝状遺構（ＳＤ）」、「土壙（ＳＫ）」、「炉穴（ＳＦ）」、「土器（ＲＯ）」に区分したが、整理作業において、さらに、内容の不明な遺構は、単に○○遺構とした。なお、本書では、（　　）のアルファベット記号は省略した。

2．遺構の番号は、別表第2･123表のとおり、現地発掘調査時の番号と本書に使用した遺構番号は、変更している。また、昭和50年度に調査した西側隣接地区の遺構と区別するため、今回の調査ではすべて100番代から始まっている。

3．遺物の註記番号は、現地調査時点の遺構番号及び図面実測番号を使用し、本書記載の番号とは、別番号である。

4．方位については、確認調査より、座標北を使用した。

5．本書に掲載した遺構と遺物の挿図縮尺は、遺構は、1/30～1/120、遺物は、原寸～1/6で作成した。

6．図中のスクリーントーンは、次の様に使用した。

焼土（No.320）、粘土（No.1207）、灰（No.310）、炭（No.787）、貝（No.328）、
ローム土（No.1209）、遺構断面（No.1081）、貼り床（No.111）、柱のあたり部（No.415）
遺物赤彩（No.111）、黒色処理（No.1207）、煤（No.320）、漆（No.787）
石の強い使用痕（No.1207）、弱い使用痕（No.111）。

7．遺物実測図で、復元（半転）遺物は、中央線を1点鎖線で表わし、推定線は、すべて破線である。遺物観察表の数値の単位のないものはcmである。遺物番号は、文章、遺物観察表、挿図とも同じ番号で統一した。

8．竪穴住居跡の床の面積は、壁の下端からで、壁溝、ピット、炉、カマド等を含んだ範囲である。実測図中の床面内の一点鎖線は、踏み固められた面が明確に残る範囲を表わし、柱穴の間隔は、ピット下端の中心点間及び柱のあたり痕跡の中心点間の距離である。

9．当遺跡で取扱った標準土層は、概略次のとおりである。

Ⅰ層　表土攪乱層。腐植土。厚さ20～30cm

Ⅱ層　黒色腐植土層。厚さ15～100cm.（Ⅱ－ａ黒色土5～15cm、Ⅱ－ｂ新期テフラ混入土5～50cm、Ⅱ－ｃローム漸移土、）

Ⅲ層　ソフトローム層（黄褐色土）厚さ40～50cm

Ⅳ層　ハードローム層（黄褐色土）クラックが発達する。

(財)市原市文化財センター組織表(昭和59年度～昭和63年度)

昭和59年度(発掘調査)

役　員

理事長	星野一郎	(教育委員会教育長)
副理事長	横濱辰夫	(教育委員会教育指導部長)
常務理事	井原茂	(専任)
理事	滝口宏	(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴	(和洋女子大学教授)
理事	海上信久	(姉崎神社宮司)
理事	櫻井徹郎	(市企画部長)
理事	松崎良一	(市総務部長)
理事	中島英夫	(市都市部長)
理事	松下隆	(市総務部財政課長)
監事	白鳥一夫	(市会計課長)
監事	山口節	(教育委員会総務課長)

職　員

庶務課	課長	小茶文夫
	主事	浅利幸一
	主事補	相野光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	塚本和江
調査課	課長	郷田良一
	主任調査研究員	山口直樹
	調査研究員	宮本敬一
	調査研究員	米田耕之助
	(兼)調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	近藤敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所真
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	事務員(嘱託)	高浦貞子

(4月1日現在)

昭和60年度(発掘調査)

役　員

理事長	星野一郎	(教育委員会教育長)
副理事長	横濱辰夫	(教育委員会教育指導部長)
常務理事	内藤隆	(専任)
理事	滝口宏	(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴	(和洋女子大学教授)
理事	海上信久	(姉崎神社宮司)
理事	松崎良一	(市企画部長)
理事	斎藤栄亮	(市総務部長)
理事	中島英夫	(市都市部長)
理事	松下隆	(市総務部財政課長)
監事	白鳥一夫	(市会計課長)
監事	松本辰之助	(教育委員会総務課長)

職　員

庶務課	課長	田丸萬富
	主事補	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	藤澤ひとみ
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課長	清藤一順
	主幹	石田広美
	主幹	山口直樹
	主任調査研究員	宮本敬一
	調査研究員	米田耕之助
	調査研究員	田中清美
	調査研究員	近藤敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所真
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村直
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	事務員(嘱託)	高浦貞子

昭和61年度(発掘調査・整理作業)

役　員

理事長	星野一郎	(教育委員会教育長)
副理事長	横濱辰夫	(教育委員会教育指導部長)
常務理事	岩見一民	(専　任)
理　事	滝口　宏	(早稲田大学名誉教授)
理　事	寺村光晴	(和洋女子大学教授)
理　事	海上信久	(姉崎神社宮司)
理　事	松崎良一	(市企画部長)
理　事	斎藤栄亮	(市総務部長)
理　事	地引希壱	(市都市部長)
理　事	松下　隆	(市総務部財政課長)
監　事	白鳥一夫	(市会計課長)
監　事	斎藤崇雄	(教育委員会総務課長)

職　員

庶務課	課	長田丸萬富
	主事	補大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	藤澤ひとみ
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課	長清藤一順
	主	幹石田広美
	主	幹山口直樹
	主任調査研究員	宮本敬一
	主任調査研究員	米田耕之助
	調査研究員	田中清美
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村　直
	調査研究員	近藤　敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所　真
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	事務員(嘱託)	高浦貞子
	事務員(嘱託)	長谷川いづみ

昭和62年度(整理作業)

役　員

理事長	星野一郎	(教育委員会教育長)
副理事長	大野　皎	(教育委員会教育指導部長)
常務理事	岩見一民	(専　任)
理　事	滝口　宏	(早稲田大学名誉教授)
理　事	寺村光晴	(和洋女子大学教授)
理　事	海上信久	(姉崎神社宮司)
理　事	飯山英雄	(市企画部長)
理　事	宮崎芳雄	(市総務部長)
理　事	地引希壱	(市都市部長)
理　事	安藤隆一	(市総務部財政課長)
監　事	元吉末喜	(市会計課長)
監　事	斎藤崇雄	(教育委員会総務課長)

職　員

庶務課	課	長田丸萬富
	主事	補大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課	長清藤一順
	主	幹石田広美
	主	幹加藤正信
	主任調査研究員	宮本敬一
	主任調査研究員	米田耕之助
	調査研究員	田中清美
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村　直
	調査研究員	近藤　敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所　真
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	事務員(嘱託)	高浦貞子
	調査補助員(嘱託)	田中裕子

昭和63年度(整理作業・報告書刊行)

役　員

理事長　星野一郎(教育委員会教育長)
副理事長　大野義規(教育委員会社会教育部長)
常務理事　須田昇三(専　任)
理　事　滝口宏(早稲田大学名誉教授)
理　事　寺村光晴(和洋女子大学教授)
理　事　海上信久(姉崎神社宮司)
理　事　根本正夫(市企画部長)
理　事　宮崎芳雄(市総務部長)
理　事　地引希壱(市都市部長)
理　事　安藤隆一(市総務部財政課長)
監　事　元吉末喜(市会計課長)
監　事　河野徳三(教育委員会総務課長)

職　員

庶務課	課長	田丸萬富
	主事補	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課長	石田広美
	主幹	加藤正信
	主任調査研究員	宮本敬一
	主任調査研究員	田中清美
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村直
	調査研究員	近藤敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所真
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	事務員(嘱託)	高浦貞子
	調査補助員(嘱託)	田中裕子

本文目次

序文
例言
凡例
(財)市原市文化財センター組織表
第Ⅰ章　序説
1．遺跡の立地と周辺の環境(千草山遺跡) …… 3
2．調査に至る経緯と調査状況(千草山遺跡) … 11
(1) 調査に至る経緯 …… 11
(2) 調査状況 …… 11
第Ⅱ章　検出した遺構と遺物(千草山遺跡) …… 15
1．先土器時代
(1) 第101号遺構 …… 15
2．縄文時代
(1) 第102号遺構 …… 17
(2) 第101号炉穴群 …… 19
(3) 第102号炉穴群 …… 20
(4) 第103号炉穴群 …… 21
(5) 第142号住居跡 …… 23
(6) 第143号住居跡 …… 26
3．弥生時代
(1) 第131号住居跡 …… 30
(2) 第136号住居跡 …… 34
4．古墳時代、奈良・平安時代等
(1) 第101号住居跡 …… 38
(2) 第102号住居跡 …… 42
(3) 第103号住居跡 …… 47
(4) 第104号住居跡 …… 53
(5) 第105号住居跡 …… 59
(6) 第106号住居跡 …… 62
(7) 第107号住居跡 …… 64
(8) 第108号住居跡 …… 70
(9) 第109号住居跡 …… 74
(10) 第110号住居跡 …… 80
(11) 第111号住居跡 …… 84
(12) 第112号住居跡 …… 87
(13) 第113号住居跡 …… 91
(14) 第114号住居跡 …… 97
(15) 第115号住居跡 …… 104
(16) 第116号住居跡 …… 111
(17) 第117号住居跡 …… 115
(18) 第118号住居跡 …… 119
(19) 第119a号住居跡 …… 125
(20) 第119b号住居跡 …… 128
(21) 第120号住居跡 …… 132

（22）第121号住居跡 …… 136
（23）第122号住居跡 …… 142
（24）第123号住居跡 …… 145
（25）第124号住居跡 …… 150
（26）第125ａ号住居跡 …… 153
（27）第125ｂ号住居跡 …… 157
（28）第104号遺構 …… 162
（29）第126号住居跡 …… 163
（30）第127号住居跡 …… 166
（31）第128号住居跡 …… 171
（32）第129号住居跡 …… 175
（33）第130号住居跡 …… 179
（34）第132号住居跡 …… 184
（35）第133ａ号住居跡 …… 187
（36）第133ｂ号住居跡 …… 193
（37）第134号住居跡 …… 194
（38）第135号住居跡 …… 196
（39）第137号住居跡 …… 202
（40）第138号住居跡 …… 207
（41）第139号住居跡 …… 209
（42）第140号住居跡 …… 217
（43）第141号住居跡 …… 223
（44）第144号住居跡 …… 224
（45）第145ａ号住居跡 …… 230
（46）第145ｂ号住居跡 …… 230
（47）第146号住居跡 …… 233
（48）第147号住居跡 …… 235
（49）第148号住居跡 …… 237
（50）第149号住居跡 …… 240
（51）第150ａ号住居跡 …… 243
（52）第150ｂ号住居跡 …… 245
（53）第151号住居跡 …… 247
５．掘立柱建物跡
（1）第101号掘立柱建物跡 …… 251
（2）第102号掘立柱建物跡 …… 251
（3）第103号掘立柱建物跡 …… 253
（4）第104号掘立柱建物跡 …… 258
６．方形周溝状遺構
（1）第101号方形周溝状遺構 …… 259
（2）第102号方形周溝状遺構 …… 261
（3）第103号方形周溝状遺構 …… 261
（4）第104号方形周溝状遺構 …… 267
７．土坑
（1）第101号土坑 …… 268
（2）第102号土坑 …… 268
（3）第103ａ・ｂ号土坑 …… 268
（4）第104号土坑 …… 270
（5）第105号土坑 …… 270
（6）第106号土坑 …… 270
（7）第107号土坑 …… 271
（8）第108号土坑 …… 272
８．蔵骨器 …… 274
９．溝状遺構等
（1）第101・102・103号溝及び第109号土坑 … 275
（2）第104号溝 …… 283
10．その他の主な出土遺物 …… 283
第Ⅲ章　まとめ（千草山遺跡）
１．先土器時代 …… 285
２．縄文時代 …… 285
３．弥生時代 …… 285
４．古墳時代から奈良平安時代 …… 286
５．掘立柱建物跡 …… 294
６．溝状遺構 …… 295
７．方形周溝状遺構 …… 295
８．土坑 …… 296
９．蔵骨器 …… 296
第Ⅳ章　遺跡の位置と調査内容（東千草山遺跡）
１．遺跡の位置と環境 …… 299
２．調査内容 …… 299
第Ⅴ章　検出した遺構と遺物（東千草山遺跡）
１．ローム層内トレンチ …… 301
２．竪穴住居跡
（1）第１号住居跡 …… 302
（2）第２号住居跡 …… 303
（3）第３号住居跡 …… 305
（4）第４号住居跡 …… 307
（5）第５号住居跡 …… 312
（6）第１号遺構 …… 313
（7）第６号住居跡 …… 314
（8）第７号住居跡 …… 317
（9）第８号住居跡 …… 319
（10）第９号住居跡 …… 320
（11）第10号住居跡 …… 321
（12）第11号住居跡 …… 323
（13）第12号住居跡 …… 326
（14）第13号住居跡 …… 326
（15）第14号住居跡 …… 328
３．土坑
（1）第１号土坑 …… 328
（2）第２号土坑 …… 330
４．溝状遺構
（1）第１号溝状遺構 …… 330

（2）第２号溝状遺構 …… 334
（3）第３号溝状遺構 …… 334
第Ⅵ章　東千草山遺跡の住居内貝塚から検出された動物遺体 …… 336
第Ⅶ章　まとめ（東千草山遺跡）
１．竪穴住居跡等 …… 347
２．土坑 …… 348
３．溝状遺構 …… 348

挿図目次

第１図　千草山遺跡、東千草山遺跡の位置と周辺の主な遺跡
第２図　昭和30年頃の地形図
第３図　千草山遺跡出土鐙瓦と宇瓦
第４図　遺跡周辺の地形図及び調査区域
第５図　遺跡周辺の小字名図（２色刷り）
第６図　確認調査全体図（昭和59年度分）
第７図　昭和50年度と今回の調査地区合成全体図
第８図　今回の調査区域全体図
第９図　千草山遺跡調査区南側壁（M13区付近）
第10図　先土器時代石器地点分布の出土状況及び出土遺物実測図
第11図　第102号遺構実測図
第12図　第102号遺構出土遺物実測図
第13図　第101号炉穴実測図
第14図　第101号炉穴出土遺物実測図
第15図　第102号炉穴実測図
第16図　第102号炉穴出土遺物実測図
第17図　第103号炉穴実測図
第18図　第103号炉穴出土遺物実測図
第19図　第142号住居跡実測図
第20図　第142号住居跡炉跡実測図
第21図　第142号住居跡出土遺物実測図（１～６）
第22図　第142号住居跡出土遺物実測図（７～13）
第23図　第143号住居跡実測図
第24図　第143号住居跡炉跡実測図
第25図　第143号住居跡出土遺物実測図
第26図　第131号住居跡実測図
第27図　第131号住居跡土層セクション図及び断面図
第28図　第131号住居跡出土遺物実測図
第29図　第136号住居跡遺物・焼土出土状況
第30図　第136号住居跡実測図
第31図　第136号住居跡出土遺物実測図
第32図　第101号住居跡実測図
第33図　第101号住居跡断面図
第34図　第101号住居跡カマド実測図
第35図　第101号住居跡出土遺物実測図（１～５）
第36図　第101号住居跡出土遺物実測図（６～８）
第37図　第102号住居跡実測図
第38図　第102号住居跡カマド実測図
第39図　第102号住居跡カマド掘り方実測図
第40図　第102号住居跡出土遺物実測図（１～９）
第41図　第102号住居跡出土遺物実測図（10～14）
第42図　第103号住居跡遺物出土状況図
第43図　第103号住居跡実測図
第44図　第103号住居跡カマド実測図
第45図　第103号住居跡カマド掘り方実測図
第46図　第103号住居跡出土遺物実測図（１～14・23）
第47図　第103号住居跡出土遺物実測図（15～22）
第48図　第104号住居跡実測図
第49図　第104号住居跡断面図
第50図　第104号住居跡遺物等出土状況
第51図　第104号住居跡カマド実測図
第52図　第104号住居跡カマド掘り方実測図
第53図　第104号住居跡出土遺物実測図（１～12）
第54図　第104号住居跡出土遺物実測図（16）
第55図　第104号住居跡出土遺物実測図（13～15）
第56図　第105号住居跡実測図
第57図　第105号住居跡カマド実測図
第58図　第105号住居跡カマド掘り方実測図
第59図　第105号住居跡出土遺物実測図（11）
第60図　第105号住居跡出土遺物実測図（１～10）
第61図　第106号住居跡実測図
第62図　第106号住居跡カマド及びカマド掘り方実測図
第63図　第106号住居跡出土遺物実測図（１～３）
第64図　第107号住居跡遺物等出土状況図
第65図　第107号住居跡実測図
第66図　第107号住居跡カマド実測図
第67図　第107号住居跡カマド掘り方実測図
第68図　第107号住居跡出土遺物実測図（１～８）
第69図　第107号住居跡出土遺物実測図（９～13）
第70図　第107号住居跡出土遺物実測図（14～16）
第71図　第108号住居跡実測図
第72図　第108号住居跡カマド実測図
第73図　第108号住居跡出土遺物実測図（１～12）
第74図　第108号住居跡出土遺物実測図（13～15）
第75図　第109号住居跡実測図
第76図　第109号住居跡断面図

（ｂ－ｂ′，ｅ－ｅ′）及び土層図（Ｂ－Ｂ′）
第77図　第109号住居跡出土遺物実測図（１・２）（13・14）
第78図　第109号住居跡カマド及びピット実測図
第79図　第109号住居跡出土遺物実測図（３～12）
第80図　第109号住居跡出土遺物実測図（15）
第81図　第110号住居跡実測図
第82図　第110号住居跡出土遺物実測図
第83図　第111号住居跡実測図
第84図　第111号住居跡カマド実測図
第85図　第111号住居跡出土遺物実測図
第86図　第112号住居跡実測図
第87図　第112号住居跡断面図（ｅ－ｅ′，ｆ－ｆ′）
第88図　第112号住居跡カマド実測図
第89図　第112号住居跡カマド掘り方実測図
第90図　第112号住居跡出土遺物実測図（１～７）
第91図　第112号住居跡出土遺物実測図（８・９）
第92図　第113号住居跡遺物出土状況
第93図　第113号住居跡実測図
第94図　第113号住居跡土層図（Ｂ－Ｂ′）及び断面図（ｂ－ｂ′，ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′）
第95図　第113号住居跡カマド実測図
第96図　第113号住居跡カマド掘り方及び遺物出土状況実測図
第97図　第113号住居跡出土遺物実測図（１～10）
第98図　第113号住居跡出土遺物実測図（11～15）
第99図　第113号住居跡出土遺物実測図（16～18）
第100図　第114号住居跡実測図
第101図　第114号住居跡土層図（Ｂ－Ｂ′）及び断面図（ｂ－ｂ′，ｃ－ｃ′）
第102図　第114号住居跡カマド実測図
第103図　第114号住居跡出土遺物実測図（１～15）
第104図　第114号住居跡出土遺物実測図（16～18）
第105図　第114号住居跡カマド掘り方実測図
第106図　第114号住居跡出土遺物実測図（19・20）
第107図　第115号住居跡実測図
第108図　第115号住居跡遺物焼土等出土状況図
第109図　第115号住居跡出土遺物実測図（１～８）
第110図　第115号住居跡カマド実測図
第111図　第115号住居跡出土遺物実測図（９～11）
第112図　第115号住居跡出土遺物実測図（12～19）
第113図　第116号住居跡実測図
第114図　第116号住居跡カマド実測図
第115図　第116号住居跡カマド掘り方実測図
第116図　第116号住居跡出土遺物実測図
第117図　第117号住居跡実測図
第118図　第117号住居跡出土遺物実測図（20）
第119図　第117号住居跡カマド実測図
第120図　第117号住居跡カマド掘り方実測図
第121図　第117号住居跡出土支脚実測図
第122図　第117号住居跡出土遺物実測図（１～18）
第123図　第118号住居跡遺物出土状況
第124図　第118号住居跡実測図
第125図　第118号住居跡断面図及び土層図
第126図　第118号住居跡カマド実測図
第127図　第118号住居跡カマド掘り方実測図
第128図　第118号住居跡出土遺物実測図（１～７・16～19）
第129図　第118号住居跡出土遺物実測図（８～15）
第130図　第119ａ・ｂ号住居跡実測図
第131図　第119ａ・ｂ号住居跡断面図
第132図　第119ａ・ｂ号住居跡断面図（ｇ－ｇ′，ｈ－ｈ′）
第133図　第119ａ・ｂ号住居跡遺物出土状況図
第134図　第119ａ号住居跡カマド実測図
第135図　第119ｂ号住居跡カマド実測図
第136図　第119ａ号住居跡出土遺物実測図（１～８）
第137図　第119ａ・ｂ号住居跡出土遺物実測図（９～14）
第138図　第120号住居跡実測図
第139図　第120号住居跡遺物出土状況
第140図　第120号住居跡カマド実測図
第141図　第120号住居跡出土遺物実測図
第142図　第121号住居跡実測図
第143図　第121号住居跡遺物出土状況
第144図　第121号住居跡カマド実測図
第145図　第121号住居跡カマド掘り方実測図
第146図　第121号住居跡出土遺物実測図（１～６）
第147図　第121号住居跡出土遺物実測図（７～14）
第148図　第121号住居跡出土遺物実測図（15・16）
第149図　第122号住居跡実測図及びカマド実測図
第150図　第122号住居跡出土遺物実測図
第151図　第123号住居跡焼土、炭化物、土器等出土状況図
第152図　第123号住居跡実測図
第153図　第123号住居跡断面図（ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′）及び土層セクション図（Ｂ－Ｂ′）
第154図　第123号住居跡カマド実測図
第155図　第123号住居跡出土遺物実測図（８・９）
第156図　第123号住居跡カマド掘り方実測図
第157図　第123号住居跡出土遺物実測図（１～７）
第158図　第124号住居跡実測図
第159図　第124号住居跡断面図（ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′）

第160図　第124号住居跡カマド実測図
第161図　第124号住居跡出土遺物実測図
第162図　第125ａ号住居跡及び第103号遺構実測図
第163図　第125ａ号住居跡断面図
（ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′，ｅ－ｅ′）
第164図　第125ａ号住居跡カマド実測図
第165図　第125ａ号住居跡出土遺物実測図
第166図　第125ｂ号住居跡実測図
第167図　第125ｂ号住居跡カマド実測図
第168図　第125ｂ号住居跡出土遺物実測図
第169図　第104号遺構出土遺物実測図
第170図　第126号住居跡実測図
第171図　第126号住居跡出土遺物実測図（２・３）
第172図　第126号住居跡カマド実測図
第173図　第126号住居跡出土遺物実測図（１）
第174図　第127号住居跡実測図
第175図　第127号住居跡カマド実測図
第176図　第127号住居跡出土遺物実測図（１～12）
第177図　第127号住居跡出土遺物実測図(13～17）
第178図　第127号住居跡出土遺物実測図(18･19）
第179図　第128号住居跡実測図
第180図　第128号住居跡遺物出土状況
第181図　第128号住居跡カマド実測図
第182図　第128号住居跡出土遺物実測図（１～16）
第183図　第128号住居跡出土遺物実測図(17）
第184図　第129号住居跡実測図
第185図　第129号住居跡カマド実測図
第186図　第129号住居跡出土遺物実測図（１・２）
第187図　第129号住居跡出土遺物実測図（３～５）
第188図　第130号住居跡実測図
第189図　第130号住居跡断面図
（ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′，ｅ－ｅ′）
第190図　第130号住居跡カマド実測図
第191図　第130号住居跡カマド掘り方実測図
第192図　第130号住居跡出土遺物実測図（１～５･11）
第193図　第130号住居跡出土遺物実測図（６～10）
第194図　第132号住居跡実測図
第195図　第132号住居跡カマド実測図
第196図　第132号住居跡出土遺物実測図
第197図　第133ａ・ｂ号住居跡実測図
第198図　第133ａ・ｂ号住居跡断面図
（ｄ－ｄ′，ｅ－ｅ′）
第199図　第133ａ号住居跡カマド実測図
第200図　第133ａ号住居跡カマド掘り方等実測図
第201図　第133ａ号住居跡出土遺物実測図（１～９）
第202図　第133ａ号住居跡出土遺物実測図(10～12）
第203図　第133ａ号住居跡出土遺物実測図(13～17）
第204図　第133ｂ号住居跡出土遺物実測図
第205図　第134号住居跡実測図
第206図　第134号カマド実測図
第207図　第134号カマド掘り方実測図
第208図　第134号住居跡出土遺物実測図
第209図　第135号住居跡実測図
第210図　第135号住居跡断面図
（ａ－ａ′，ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′，ｂ－ｂ′）
第211図　第135号住居跡カマド実測図
第212図　第135号住居跡出土遺物実測図（１～８）
第213図　第135号住居跡出土遺物実測図（９～12）
第214図　第137号住居跡実測図
第215図　第137号住居跡断面図（ｄ－ｄ′，ｅ－ｅ′）
第216図　第137号住居跡カマド実測図
第217図　第137号住居跡出土遺物実測図（１～13･17）
第218図　第137号住居跡出土遺物実測図(14～16）
第219図　第138号住居跡実測図
第220図　第138号住居跡出土遺物実測図
第221図　第139号住居跡実測図
第222図　第139号住居跡土層図（Ｂ－Ｂ′）及び
断面図（ｂ－ｂ′，ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′，
ｅ－ｅ′）
第223図　第139号住居跡カマド実測図
第224図　第139号住居跡出土遺物実測図（１～５）
第225図　第139号住居跡出土遺物実測図（６～13）
第226図　第139号住居跡出土遺物実測図
(14～16･20）
第227図　第139号住居跡出土遺物実測図(17～19）
第228図　第140号住居跡実測図
第229図　第140号住居跡カマド実測図
第230図　第140号住居跡出土遺物実測図（１～13）
第231図　第140号住居跡出土遺物実測図
(14～16･21･22）
第232図　第140号住居跡出土遺物(瓦)実測図(17～20）
第233図　第141号住居跡実測図
第234図　第141号住居跡カマド実測図
第235図　第141号住居跡出土遺物実測図
第236図　第144号住居跡実測図
第237図　第144号住居跡カマド実測図
第238図　第144号住居跡カマド掘り方実測図
第239図　第144号住居跡出土遺物実測図（１～13）
第240図　第144号住居跡出土遺物実測図(14～19）
第241図　第144号住居跡出土遺物実測図(20～23）
第242図　第145ａ号住居跡実測図
第243図　第145ａ号住居跡カマド実測図

第244図　第145ｂ号住居跡実測図
第245図　第146号住居跡実測図
第246図　第146号住居跡カマド実測図
第247図　第146号住居跡出土遺物実測図
第248図　第147号住居跡実測図
第249図　第147号住居跡出土遺物実測図
第250図　第148号住居跡実測図
第251図　第148号住居跡カマド実測図
第252図　第148号住居跡出土遺物実測図
第253図　第149号住居跡実測図
第254図　第149号住居跡遺物出土状況実測図
第255図　第149号住居跡カマド実測図
第256図　第149号住居跡出土遺物実測図（１～７）
第257図　第149号住居跡出土遺物実測図（８・９）
第258図　第150ａ・ｂ号住居跡実測図
第259図　第150ａ号住居跡カマド実測図
第260図　第150ａ号住居跡カマド実測図
第261図　第150ａ号住居跡出土遺物実測図（３）
第262図　第150ｂ号住居跡出土遺物実測図（１～６）
第263図　第151ａ号住居跡実測図（１・２）
第264図　第151号住居跡実測図
第265図　第151号住居跡実測図
第266図　第151号住居跡出土遺物実測図（１～７・11）
第267図　第151号住居跡出土遺物実測図（８～10）
第268図　第101号掘立柱建物跡柱痕跡検出状況平面図
第269図　第101号掘立柱建物跡実測図
第270図　第102号掘立柱建物跡柱痕跡検出状況図
第271図　第102号掘立柱建物跡実測図
第272図　第103号掘立柱建物跡実測図
第273図　第104号掘立柱建物跡実測図
第274図　第101号方形周溝状遺構実測図
第275図　第102号方形周溝状遺構実測図
第276図　第101号方形周溝状出土遺物実測図
第277図　第103号方形周溝状遺構実測図
第278図　第103号方形周溝状遺構土層セクション図
（ｅ－ｅ′，ｆ－ｆ′，ｇ－ｇ′）
第279図　第103号方形周溝状遺構主体部実測図
第280図　第102・103号方形周溝状遺構出土遺物実測図
第281図　第104号方形周溝状遺構実測図
第282図　第101号土坑実測図
第283図　第102号土坑実測図
第284図　第103ａ・ｂ号土坑実測図
第285図　第103ａ号土坑出土遺物実測図
第286図　第104号土坑実測図
第287図　第105・106号土坑実測図
第288図　第107号土坑実測図
第289図　第108号土坑実測図
第290図　蔵骨器出土状況実測図
第291図　蔵骨器実測図
第292図　第101・102・103号溝状遺構及び
第109号土坑実測図
第293図　第101・102・103号溝状遺構及び
第109号土坑断面図
第294図　第101・102・103号溝状遺構及び
第109号土坑土層図
第295図　第101～104号溝状遺構出土遺物実測図
第296図　第104号溝状遺構実測図
第297図　その他の主な出土遺物実測図
第298図　東千草山遺跡調査遺構配置全体図
第299図　トレンチ設定状況図
第300図　第１号住居跡実測図
第301図　第１号住居跡出土遺物実測図
第302図　第２号住居跡実測図
第303図　第２号住居跡出土遺物実測図（１）
第304図　第２号住居跡出土遺物実測図（２）
第305図　第３号住居跡実測図
第306図　第３号住居跡出土遺物実測図
第307図　第４号住居跡実測図
第308図　第４号住居跡出土遺物実測図（１）
第309図　第４号住居跡出土遺物実測図（２）
第310図　第４号住居跡出土遺物実測図（３）
第311図　第５号住居跡実測図
第312図　第５号住居跡出土遺物実測図
第313図　第１号遺構出土遺物実測図（１）
第314図　第１号遺構出土遺物実測図（２）
第315図　第６号住居跡実測図
第316図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）
第317図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）
第318図　第７号住居跡遺物出土状況
第319図　第７号住居跡実測図
第320図　第７号住居跡出土遺物実測図
第321図　第８号住居跡実測図
第322図　第８号住居跡出土遺物実測図
第323図　第９号住居跡実測図
第324図　第９号住居跡出土遺物実測図
第325図　第10号住居跡実測図
第326図　第10号住居跡出土遺物実測図
第327図　第11号住居跡実測図
第328図　第11号住居跡出土遺物実測図（１）
第329図　第11号住居跡出土遺物実測図（２）
第330図　第12号住居跡実測図
第331図　第12号住居跡出土遺物実測図

第332図　第13号住居跡実測図
第333図　第13号住居跡出土遺物実測図
第334図　第14号住居跡出土遺物実測図
第335図　第14号住居跡実測図
第336図　第１号土坑出土遺物実測図
第337図　第１・２号土坑実測図
第338図　第１号溝状遺構実測図
第339図　第１号溝状遺構断面図
第340図　第１号溝状遺構出土遺物実測図（１）
第341図　第１号溝状遺構出土遺物実測図（２）
第342図　第２号溝状遺構実測図
第343図　第３号溝状遺構断面図
第344図　東千草山遺跡住居跡内貝層の貝類組成
第345図　東千草山遺跡における住居跡内貝層中
　　ハマグリの殻高分布
第346図　東千草山遺跡出土オオツタノハガイ製貝輪

表　組　目　次

第１表　第１図番号表
第２表　竪穴住居跡新旧対照名称表
第３表　第102号遺構出土遺物観察表
第４表　第101号炉穴群ａ～ｅ計測表
第５表　第102号炉穴群ａ～ｅ計測表
第６表　第142号住居跡ピット計測表
第７表　第143号住居跡ピット計測表
第８表　第131号住居跡ピット計測表
第９表　第131号住居跡出土遺物観察表（１）
第10表　第131号住居跡出土遺物観察表（２）
第11表　第136号住居跡出土遺物観察表（１）
第12表　第136号住居跡出土遺物観察表（２）
第13表　第136号住居跡ピット計測表
第14表　第101号住居跡出土遺物観察表（１）
第15表　第101号住居跡ピット計測表
第16表　第101号住居跡出土遺物観察表（２）
第17表　第102号住居跡ピット計測表
第18表　第102号住居跡出土遺物観察表（１）
第19表　第102号住居跡出土遺物観察表（２）
第20表　第103号住居跡ピット計測表
第21表　第103号住居跡出土遺物観察表（１）
第22表　第103号住居跡出土遺物観察表（２）
第23表　第103号住居跡出土遺物観察表（３）
第24表　第104号住居跡ピット計測表
第25表　第104号住居跡出土遺物観察表（１）
第26表　第104号住居跡出土遺物観察表（２）
第27表　第105号住居跡出土遺物観察表
第28表　第105号住居跡ピット計測表
第29表　第107号住居跡ピット計測表
第30表　第107号住居跡出土遺物観察表（１）
第31表　第107号住居跡出土遺物観察表（２）
第32表　第107号住居跡出土遺物観察表（３）
第33表　第107号住居跡出土遺物観察表（４）
第34表　第108号住居跡出土遺物観察表（１）
第35表　第108号住居跡出土遺物観察表（２）
第36表　第109ａ・ｂ号住居跡ピット計測表
第37表　第109ａ・ｂ号住居跡出土遺物観察表（１）
第38表　第109ａ・ｂ号住居跡出土遺物観察表（２）
第39表　第110号住居跡ピット計測表
第40表　第110号住居跡出土遺物観察表（１）
第41表　第110号住居跡出土遺物観察表（２）
第42表　第111号住居跡出土遺物観察表（１）
第43表　第111号住居跡出土遺物観察表（２）
第44表　第112号住居跡ピット計測表
第45表　第112号住居跡出土遺物観察表
第46表　第113号住居跡ピット計測表
第47表　第113号住居跡出土遺物観察表
第48表　第114号住居跡ピット計測表
第49表　第114号住居跡出土遺物観察表（１）
第50表　第114号住居跡出土遺物観察表（２）
第51表　第115号住居跡ピット計測表
第52表　第115号住居跡出土遺物観察表
第53表　第116号住居跡ピット計測表
第54表　第116号住居跡出土遺物観察表
第55表　第117号住居跡出土遺物観察表（１）
第56表　第117号住居跡ピット計測表
第57表　第117号住居跡出土遺物観察表（２）
第58表　第118号住居跡ピット計測表
第59表　第118号住居跡出土遺物観察表（１）
第60表　第118号住居跡出土遺物観察表（２）
第61表　第119ａ号住居跡ピット計測表
第62表　第119ａ・ｂ号住居跡出土遺物観察表
第63表　第120号住居跡ピット計測表
第64表　第120号住居跡出土遺物観察表
第65表　第121号住居跡ピット計測表
第66表　第121号住居跡出土遺物観察表（１）
第67表　第121号住居跡出土遺物観察表（２）
第68表　第121号住居跡ピット計測表
第69表　第121号住居跡出土遺物観察表（３）
第70表　第122号住居跡ピット計測表
第71表　第122号住居跡出土遺物観察表
第72表　第123号住居跡ピット計測表

第73表　第123号住居跡出土遺物観察表
第74表　第124号住居跡ピット計測表
第75表　第124号住居跡出土遺物観察表
第76表　第125ａ号住居跡ピット計測表
第77表　第125ａ号住居跡出土遺物観察表
第78表　第125ｂ号住居跡ピット計測表
第79表　第125ｂ号住居跡出土遺物観察表
第80表　第126号住居跡出土遺物観察表
第81表　第127号住居跡出土遺物観察表(１)
第82表　第127号住居跡出土遺物観察表(２)
第83表　第128号住居跡出土遺物観察表(１)
第84表　第128号住居跡出土遺物観察表(２)
第85表　第128号住居跡ピット計測表
第86表　第129号住居跡ピット計測表
第87表　第130号住居跡出土遺物観察表
第88表　第130号住居跡ピット計測表
第89表　第132号住居跡出土遺物観察表
第90表　第133ｂ号住居跡出土遺物観察表(１)
第91表　第133ａ号住居跡ピット計測表
第92表　第133ｂ号住居跡ピット計測表
第93表　第133ａ号住居跡出土遺物観察表(２)
第94表　第133ｂ号住居跡出土遺物観察表
第95表　第135号住居跡ピット計測表
第96表　第135号住居跡出土遺物観察表(１)
第97表　第135号住居跡出土遺物観察表(２)
第98表　第137号住居跡ピット計測表
第99表　第137号住居跡出土遺物観察表(１)
第100表　第137号住居跡出土遺物観察表(２)
第101表　第138号住居跡出土遺物観察表
第102表　第139号住居跡ピット計測表
第103表　第139号住居跡出土遺物観察表(１)
第104表　第139号住居跡出土遺物観察表(２)
第105表　第140号住居跡出土遺物観察表(１)
第106表　第140号住居跡出土遺物観察表(２)
第107表　第144号住居跡出土遺物観察表(１)
第108表　第144号住居跡出土遺物観察表(２)
第109表　第146号住居跡出土遺物観察表
第110表　第147号住居跡出土遺物観察表
第111表　第147号住居跡ピット計測表
第112表　第148号住居跡ピット計測表
第113表　第148号住居跡出土遺物観察表
第114表　第149号住居跡ピット計測表
第115表　第150ｂ号住居跡ピット計測表
第116表　第150ｂ号住居跡出土遺物観察表
第117表　第151号住居跡ピット計測表
第118表　第101号掘立柱建物跡ピット(掘り方)計測表
第119表　第102号掘立柱建物跡ピット(掘り方)計測表
第120表　第103号掘立柱建物跡ピット(掘り方)計測表
第121表　第104号掘立柱建物跡ピット(掘り方)計測表
第122表　千草山遺跡住居跡別出土器分類表
第123表　遺構別新旧対照表
第124表　東千草山遺跡貝類組成
第125表　東千草山その他の自然遺物

図　版　目　次

〈千草山遺跡〉遺構
図版１　航空写真、遺跡遠景、確認調査頃の遺跡
図版２　遺跡近景、101～103号住居跡
図版３　104～112･148号住居跡
図版４　113～116･118～120･122号住居跡、
　　103号炉穴
図版５　121･123～127号住居跡
図版６　128～131･133ａ・ｂ･142号住居跡
図版７　132･134～139号住居跡
図版８　139～141･143～145ａ・ｂ号住居跡
図版９　146･147･150ａ・ｂ・151号住居跡、
　　第102･103ａ・ｂ号土坑
図版10　第104･106～108号土坑
図版11　第101～102号炉穴、第101～104号方形周溝状
　　遺構
図版12　第101～104号掘立柱建物跡、第101～104号溝
　　状遺構
〈東千草山遺跡〉遺構
図版13　調査風景、調査前の状況、遺跡近景
図版14　１～４号住居跡
図版15　４・６号住居跡
図版16　４・７・８号住居跡
図版17　５・７・８・９号住居跡
図版18　10～14号住居跡、第１・２号土坑、第２号溝
図版19　第１～３号溝
〈千草山遺跡〉遺物
図版20　第102号遺構、第102･103号炉穴、
　　142号住居跡
図版21　143･131･136･133ｂ号住居跡
図版22　101･102･104号住居跡
図版23　104･105･106号住居跡
図版24　107･108号住居跡
図版25　108～110号住居跡
図版26　110･112･113号住居跡
図版27　113～115号住居跡

図版28　115～117号住居跡
図版29　117・118号住居跡
図版30　119ａ・ｂ・120・121号住居跡
図版31　121～123号住居跡
図版32　124～126号住居跡、第103号遺構
図版33　127・128号住居跡
図版34　128～130・132号住居跡
図版35　132・133ａ・134・138号住居跡
図版36　135・137号住居跡
図版37　139・140号住居跡
図版38　140・141・144住居跡
図版39　144・146～149号住居跡
図版40　149～151号住居跡、第102・103号方形周溝状
　　遺構
図版41　〈千草山遺跡出土遺物〉
　　第103号方形周溝状遺構
　　第103ａ号土坑
　　第101～103号溝状遺構
　　〈東千草山遺跡出土遺物〉
　　１～３号住居跡
〈東千草山遺跡〉遺物
図版42　４・８・９号住居跡
　　１号遺構
図版43　６・７・10・11号住居跡
図版44　12・13・14号住居跡
　　１号土坑
　　11号住居跡
　　１号溝
図版45　第６号住居跡検出貝類

千　草　山　遺　跡

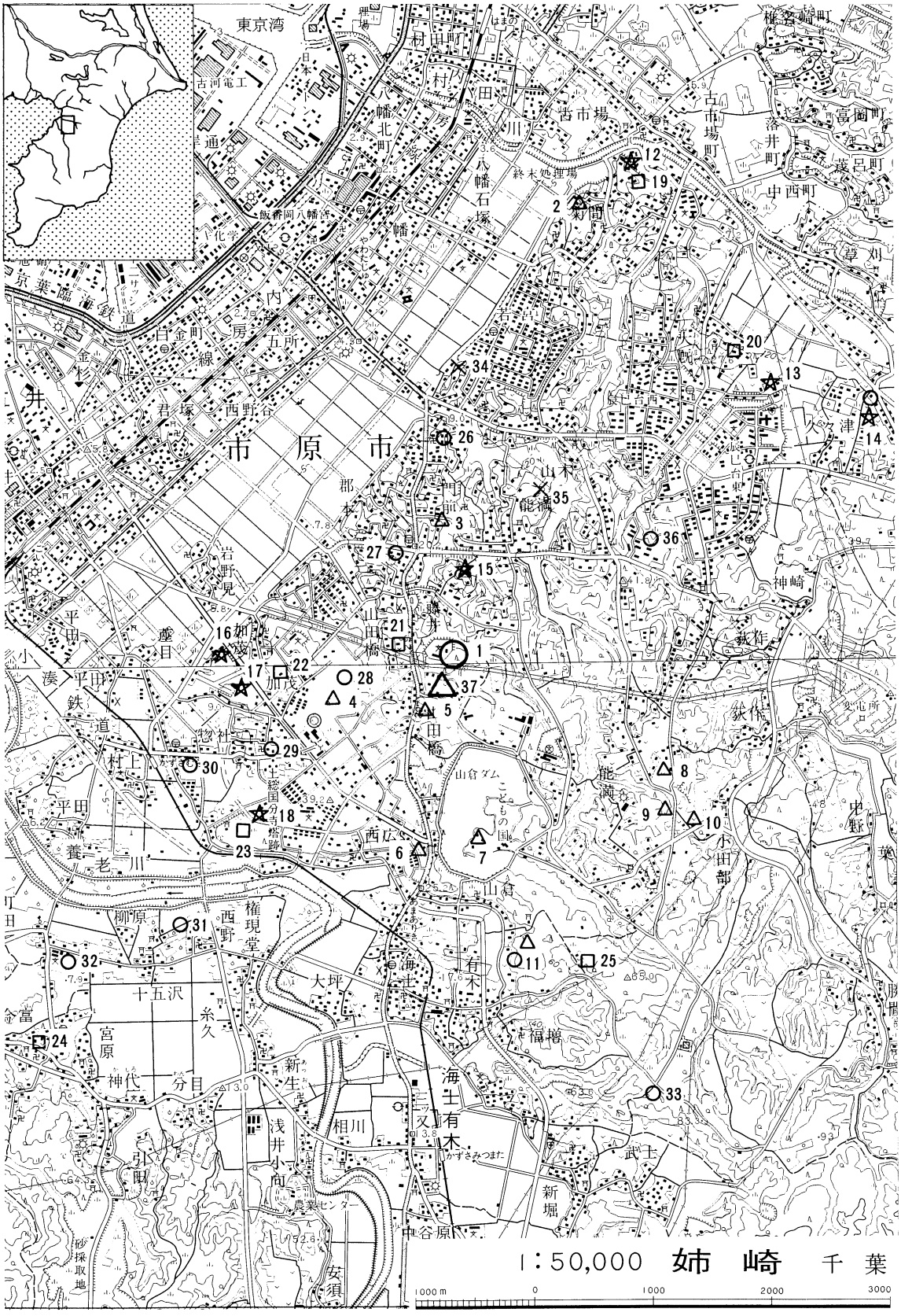
第Ⅰ章　序　説

1．遺跡の立地と周辺の環境（千草山遺跡）

千草山遺跡は、千葉県市原市能満字東千草山1467地先他に所在する。房総半島の東京湾旧海岸線より約4ｋｍ東に入った地点で、湾を望む洪積台地の西端部からは、約2.5ｋｍ入っている。周辺は、房総半島の東京湾に注ぐ河川の内、養老川と村田川に挟まれた洪積台地で、樹枝状の小谷によって幾枝にも複雑に刻まれている。また小谷の水系も、両河川に属さず、その中間地帯に存在する新田川や金杉川の範囲に含まれるようである。当遺跡は、この台地上に位置し、標高は、約32ｍで、東、北、西側を小谷が囲み、北側に突出した、いわゆる舌状台地状を呈している。台地上は、ほぼ平坦で、その総面積は約80.000㎡である。小谷との比高は、約15ｍを測る。谷への傾斜面は、それほど急峻ではなく、北側では、小さな谷が2ケ所わずかに入り込んでいる。今回の調査範囲は、この台地上の北東部分で、傾斜面を一部含めた地域である。基本土層については、凡例に記してあるが、腐植土層→ローム土層（立川・武蔵野）→粘土層（姉ケ崎層）→成田層の上位から下位の層序と考えられる。東側傾斜面の下位付近では、砂質の黄褐色土（成田層上部）が露出している。(註1)また、腐植土層Ⅱｂ層は、斜面に厚く推積する。

周辺の主な遺跡は、先土器時代では、大規模な発掘調査が実施された国分寺台遺跡群で、ナイフ型石器や尖頭器などが出土している。特に当遺跡の小谷を隔てて約500ｍ西側の稲荷台遺跡からは、第Ⅱ黒色帯よりユニットが検出されている。(註2)また、北側約0.7ｋｍの唐崎台遺跡より、尖頭器が採集され、(註3)広範な活動の存在が予想される。縄文時代では、早前期の撚糸文系、条痕文系を主体とする炉穴などを東間部多遺跡などで多く検出されている。(註4)また、周辺には、貝塚が多く、詳細な調査の実施された後期から晩期を中心とする西広貝塚(註5)や袖園原貝塚が注目される。(註6)

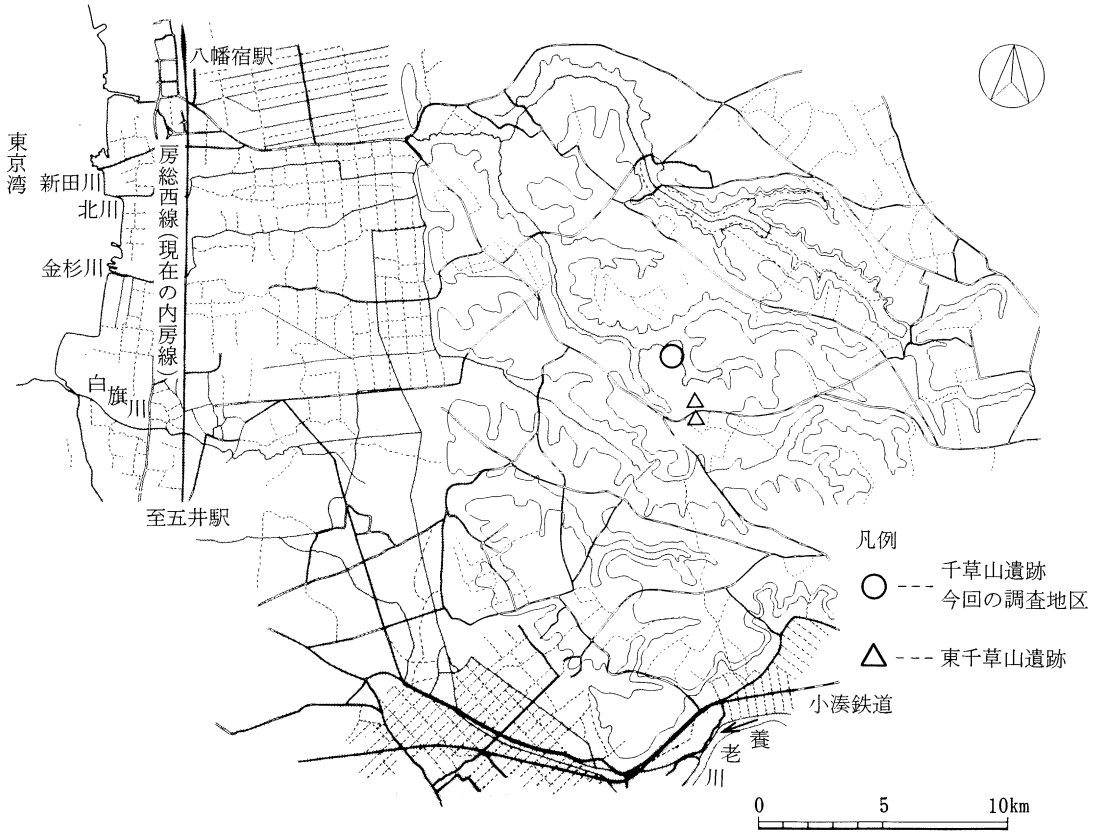
この他には、山倉貝塚(註7)、烏堀込貝塚(註8)、未調査ではあるが、能満分区貝塚、山倉天王貝塚などの大規模な貝塚も存在する。また、中期を主体とする上大堀遺跡(註9)や小田部小谷吹上遺跡(註10)なども貴重な資料を提供している。さらに、破壊が著しく一部しか残存しない門前貝塚や亥の海道貝塚なども今後取り上げなければならない遺跡である。弥生時代では、中期の方形周溝墓をもつ諏訪台遺跡(註11)や台遺跡(註12)が、また、主体部より銅釧を出土した根田遺跡(註13)、集落跡では、唐崎台遺跡(註14)や天神台遺跡(註15)、鉄斧を出土した御林跡遺跡(註16)などがある。古墳時代では、古墳が国分寺台地区で数百基調査されている。東日本で最古といわれる神門古墳群(註17)、盤龍鏡を出土した諏訪台古墳群(註18)、そして、王賜銘鉄剣を出土した稲荷台1号墳(註19)、さらに、人物埴輪などを出土した山倉古墳群(註20)など、全国的に注目される古墳が多く存在する。この他にも、持塚(註21)、東間部多(註22)、南向原(註23)、根田(註24)などの各古墳群がある。集落跡



第1図　千草山遺跡、東千草山遺跡の位置と周辺の主な遺跡

第１表　第１図番号表(千草山遺跡の位置と主な周辺の遺跡)

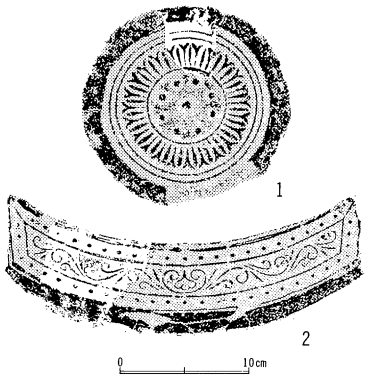
番号	遺跡名(等)	番号	遺跡名(等)	番号	遺跡名(等)
1	千草山遺跡	13	大厩遺跡	26	光善寺廃寺跡
2	菊間手永貝塚	14	西山遺跡	27	郡本遺跡(市原郡衙推定地)
3	門前貝塚	15	唐崎台遺跡	28	上総国分尼寺跡
4	祇園原貝塚	16	台遺跡	29	上総国分僧寺跡
5	亥の海道貝塚	17	御林跡遺跡	30	上総国府推定地(村上城跡)
6	西広貝塚	18	天神台遺跡	31	海上郡衙推定地
7	山倉貝塚	19	菊間古墳群	32	海上廃寺跡
8	能満分区貝塚	20	大厩古墳群	33	武士廃寺跡
9	烏堀込貝塚	21	稲荷台古墳群	34	白船城跡
10	小谷吹上遺跡	22	加茂遺跡	35	能満城跡
11	山倉天王貝塚	23	諏訪台古墳群	36	南大広遺跡
	(古宿古墳群)	24	今富塚山古墳	37	東千草山遺跡
12	菊間遺跡	25	福増古墳群		



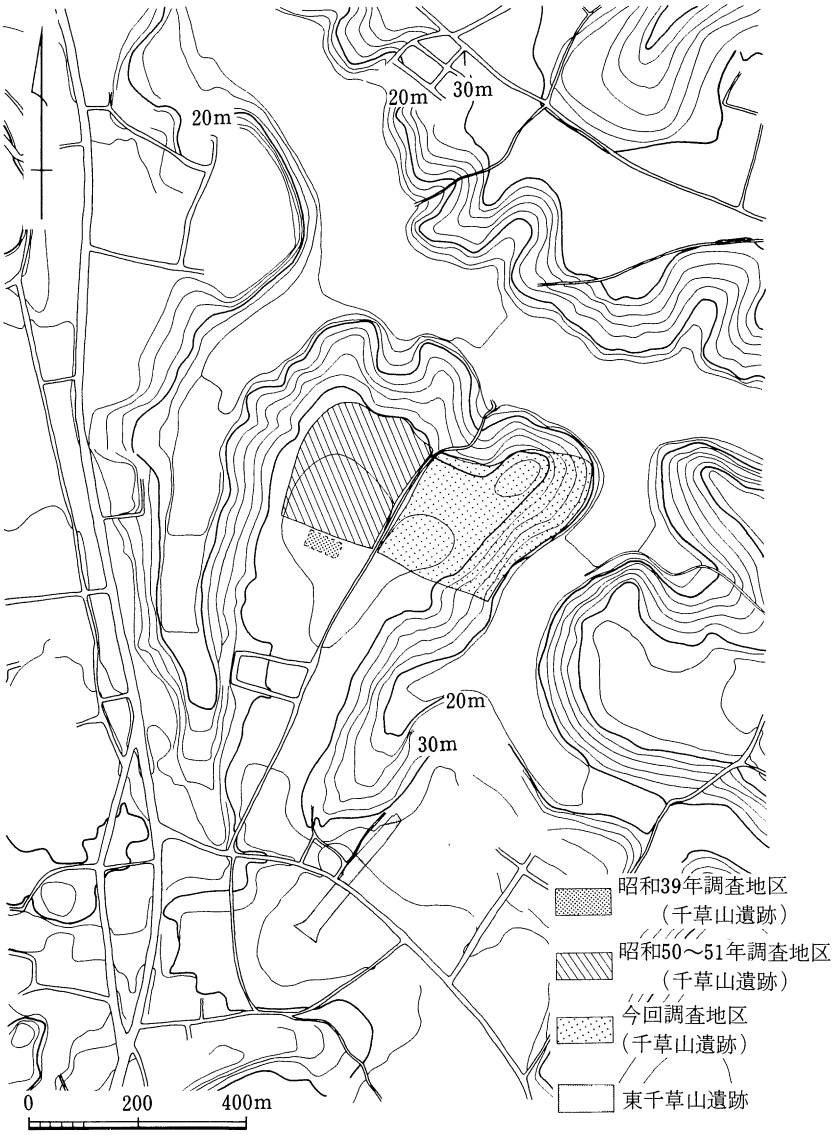
第２図　昭和30年頃の地形図

では、小銅鐸を出土した天神台遺跡(註25)や加茂A・B(註26)、御林跡、台の各遺跡が大集落跡となっている。奈良・平安時代では、上総国分僧・尼寺跡が広範囲に調査されている。

上総国分僧寺跡は、南北475m、東西250～300mの寺域が確認され、大官大寺に似た伽監様式と考えられ、寺域北辺部の調査で、僧坊相当の施設が検出されている(註27)。上総国分尼寺跡は、南北372m、東西285mの全国最大規模の寺域が確認され、中心伽監とともに北側を中心として付属雑舎などの諸施設の内容が明確にされてきている(註28)。また、荒久遺跡(註29)や坊作遺跡(註30)は、集落として、神門(註31)と南田(註32)及び祇園原(註33)の各瓦窯跡も国分寺関連の遺跡として重要視されている。他には、当遺跡の南側に隣接する山田橋表道遺跡(註34)で古代の道路状遺構が検出され、官道と推定されている。また、貞観17年の墨書土器が出土した稲荷台遺跡(註35)は、多数の掘立柱や緑釉陶器片を検出し、官衙的様相を呈した遺跡である。さらに、上総国府(註36)や市原郡衙の推定地(註37)が存在するが、未だ確定していない。中世では、



第3図　千草山遺跡出土鐙瓦と宇瓦(註44)



第4図　遺跡周辺の地形図及び調査区域

市原城跡や能満城跡が周知されているが、最近、白船城跡の郭が調査されている(註38)。また、宮前遺跡(註39)や台遺跡(註40)では、各種の墳墓群が検出されている。さらに建築物であるが、府中日吉神社は、室町時代の建物として県指定である。

千草山遺跡の調査は、昭和38年平野元三郎氏により、千草山廃寺跡推定地の確認調査が実施され(註42)、「数個の礎石を伴う基壇」を検出している。また、多量の布目瓦や鉄釘などが出土し、出土瓦に上総国分寺跡の創建期と同笵の二十四葉蓮華文鐙瓦が認められた。また、昭和50年から51年にかけて、市原中学校の新設に伴う調査が、遺跡の北西部約10,000㎡について実施され(註43)、縄文時代早、前期の炉穴群5基、中期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期から奈良、平安時代の竪穴住居跡72軒、円形周溝(円墳)1基、掘立柱建物跡10棟などが検出されている。奈良、平安時代の竪穴住居跡からは、神功開寶や鉄釘、「寺」と書かれた墨書土器が出土している。また、上総国分寺と同笵の均整唐草文軒平瓦が採集されている。この調査は、千草山廃寺跡推定地の北側に相当するとみられていたため、奈良、平安時代の遺構については、寺の関連施設とも考えられるが、未だ、千草山廃寺跡本体の概要が不明のため、不確定要素が多い。また、周辺の小字名によると、北西側の谷には、「千草寺谷」といわれる場所があり、寺の存在が伝えられてきたことがわかる。

註

(1)『国分寺台周辺の自然地理』杉原重夫他「南向原」 市原市教育委員会 上総国分寺台遺跡調査団 昭和51年

(2)「稲荷台遺跡の調査」浅利幸一、谷島一馬「上総国分寺台調査概報」 昭和55年

(3)「唐崎台(略報)」鈴木英啓他 唐崎台遺跡発掘調査団 昭和54年

(4)「東間部多古墳群」須田勉、宮本敬一、田中新史他、市原市教育委員会、上総国分寺台遺跡調査団 昭和49年

(5)「西広貝塚」米田耕之助他、市原市教育委員会 上総国分寺台遺跡調査団 昭和52年

(6)「上総国分寺台発掘調査概要Ⅴ－祇園原貝塚－」米田耕之助他、市原市教育委員会 上総国分寺台発掘調査団 昭和53年
「上総国分寺台発掘調査概要ⅩⅠ 祇園原貝塚Ⅲ 小川和博、鷹野光行他 上総国分寺台発掘調査団 市原市教育委員会 昭和58年

(7)「市原市山倉貝塚調査報告」(住居跡・遺構編)－付・山倉貝塚人骨所見概報 昭和43年 山倉貝塚調査団

(8)『烏堀込貝塚』高橋康男 市原市文化財センター年報 昭和60年度 (財)市原市文化財センター 昭和61年

(9)「上大堀遺跡」米田耕之助 (財)市原市文化財センター 市原市都市部街路課 昭和62年

(10)「小谷吹上遺跡(略報)」 市原市小田部小谷吹上遺跡調査団 昭和52年

(11)「諏訪台古墳群調査概報」須田勉、田中新史他 市原市教育委員会 上総国分寺台遺跡発掘調査団 昭和50年
「上総国分寺台発掘調査概要ⅩⅡ 諏訪台古墳群」須田勉 米田耕之助他 上総国分寺台発掘調査団 昭和59年
「諏訪台古墳群」田所真 市原市文化財センター年報 昭和60年度 (財)市原市文化財センター 昭和61年

(12)「上総国分寺台調査概報」台遺跡A地点の調査・台遺跡B地点の調査 半田堅三他 市原市教育委員会 上総国分寺台遺跡調査団 昭和52年

(13)『根田遺跡』米田耕之助 市原市文化財センター年報 昭和60年度(財)市原市文化財センタ

ー　昭和61年

(14) 註(3)と同じ

(15)「天神台遺跡発掘調査概報」平野元三郎、谷島一馬他　市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡発掘調査団　昭和50年
「天神台遺跡」浅利幸一　市原市文化財センター年報　昭和57・58年度　(財)市原市文化財センター　昭和60年

(16)『御林跡遺跡の調査』「上総国分寺台調査概報」　千葉県市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡調査団　昭和54年

(17)『神門4号墳の調査』「上総国分寺台調査概報」　千葉県市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡調査団　昭和51年
『市原市神門四号墳の出現とその系譜』田中新史「古代第63号」　早稲田大学考古学会　昭和52年など

(18)『古墳時代の鏡』田所真「私たちの文化財5」　(財)市原市文化財センター　昭和61年ほか

(19)「王賜銘鉄剣概報」滝口宏監修　市原市教育委員会　(財)市原市文化財センター　吉川弘文館　昭和63年

(20)『上総山倉1号墳の人物埴輪』米田耕之助「古代第59・60合併号早稲田大学考古学会　昭和51年

(21)『持塚古墳群』「上総国分寺台調査概報」　千葉県市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡調査団　昭和51年など

(22) 註(4)と同じ

(23)「南向原」須田勉、田中新史他　市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡調査団　昭和51年

(24)『古墳の調査』「上総国分寺台調査概報」千葉県市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡調査団　昭和55年
註(13)と同じ

(25)『千葉県市原市天神台遺跡出土の小銅鐸』浅利幸一　考古学雑誌第68巻第3号　昭和58年
註(15)と同じ

(26)『加茂遺跡A地点の調査』「上総国分寺台調査概報」　昭和51年など

(27)「上総国分寺址調査報告」滝口宏　上総国分寺址調査団　昭和43年
「上総国分寺」滝口宏、須田勉　千葉県教育委員会　昭和48年
「上総国分寺台発掘調査概要Ⅷ　上総国分僧寺跡ー寺域東南部における調査ー」須田勉　昭和56年、上総国分寺台発掘調査団　市原市教育委員会
「上総国分寺台発掘調査概要Ⅸ　上総国分僧寺跡ー寺域北辺部における調査ー」須田勉、浅利幸一他　上総国分寺台発掘調査団　市原市教育委員会　昭和57年
「上総国分寺台発掘調査概要Ⅹ　上総国分僧寺跡ー寺域東南部における調査ー」須田勉、浅利幸一他　上総国分寺台発掘調査団　市原市教育委員会　昭和57年

(28)『上総国分尼寺跡の調査』宮本敬一「上総国分寺台調査概報」　市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡調査団　昭和55年
『上総国分尼寺の伽監と付属諸院』宮本敬一「月刊歴史教育」　昭和56年
『上総国分尼寺』須田勉、宮本敬一　特集諸国国分寺の発掘調査　仏教芸術103号　昭和56年

(29)『Ⅱ調査遺跡の概要』「南向原」　上総国分寺台遺跡調査団編　昭和51年

(30)『坊作遺跡の調査』「上総国分寺台発掘調査概要Ⅳ」　千葉県市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡調査団　昭和52年

(31) 註(29)と同じ

(32) 註(31)と同じ

(33)『祇園原瓦窯跡』高橋康男「市原市文化財センター年報　昭和62年度」　(財)市原市文化財センター

(34)「山田橋表道遺跡」近藤敏　市原市文化財センター年報　昭和60年度　(財)市原市文化財センター　昭和61年

(35) 註(2)と同じ

(36)『上総国府の諸問題』須田勉「古代第61号」　早稲田大学考古学会　昭和51年
「上総国府推定地」田所真　市原市文化財センター年報　昭和57・58年度　(財)市原市文化財センター　昭和60年

「村上城跡(上総国府推定地)」山口直樹　市原市文化財センター年報　昭和59年度　(財)市原市文化財センター　昭和60年

(37)「郡本遺跡」石田広美　市原市文化財センター年報　昭和60年度　(財)市原市文化財センター　昭和61年

(38)『12. 白船城跡』石田広美「市原市文化財センター年報　昭和61年度」(財)市原市文化財センター
『1. 白船城跡(2次)』近藤敏「市原市文化財センター年報　昭和62年度」(財)市原市文化財センターなど

(39)「宮前遺跡第1次第2次調査報告書」對馬郁夫、谷島一馬、浅利幸一他　市原市教育委員会　昭和51年

(40) 註(12)と同じ
『本邦地下式壙の類型学的研究』半田堅三「伊知波良2」　昭和54年

(41)「府中日吉神社本殿修理工事報告書」瀧本平八他　市原市教育委員会　昭和62年

(42)「市原市上総国府関係遺跡」平野元三郎　千葉県遺跡調査報告書　千葉県教育委員会　昭和39年

(43)「千草山遺跡発掘調査報告書」安藤鴻基他　千草山遺跡発掘調査団　市原市　昭和54年

(44) 安藤鴻基氏作成

その他の参考文献

1.「南大広遺跡」市毛勲他　市原市教育委員会　昭和43年

2.「加茂C地点発掘調査報告書」對馬郁夫、谷島一馬、浅利幸一他　市原市教育委員会　上総国分寺台遺跡発掘調査団　昭和51年

3.『千葉県市原市国分寺台出土の有角石斧』浅利幸一「伊知波良」　伊知波良刊行会　昭和55年

4.『縄文時代後期における住居形態の一様相』米田耕之助「伊知波良」　伊知波良刊行会　昭和55年

5.「池ノ谷遺跡・福増遺跡」田所真　(財)市原市文化財センター　市原市清掃施設課　昭和60年

6.「千葉県の貝塚」千葉県所在貝塚遺跡分布調査報告書　千葉県文化財保護協会　昭和58年

7.「千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書」　千葉県教育委員会　昭和61年

8.「日本城郭大系6(千葉・神奈川)」　新人物往来社　昭和55年

9.『市原市の地形と地質』木村泰治　市原市史別巻　昭和54年

10.『企画展「房総の古瓦」解説目録』　千葉県房総風土記の丘　昭和53年

11.「千葉県埋蔵文化財分布地図(2)」　千葉県教育委員会
昭和61年

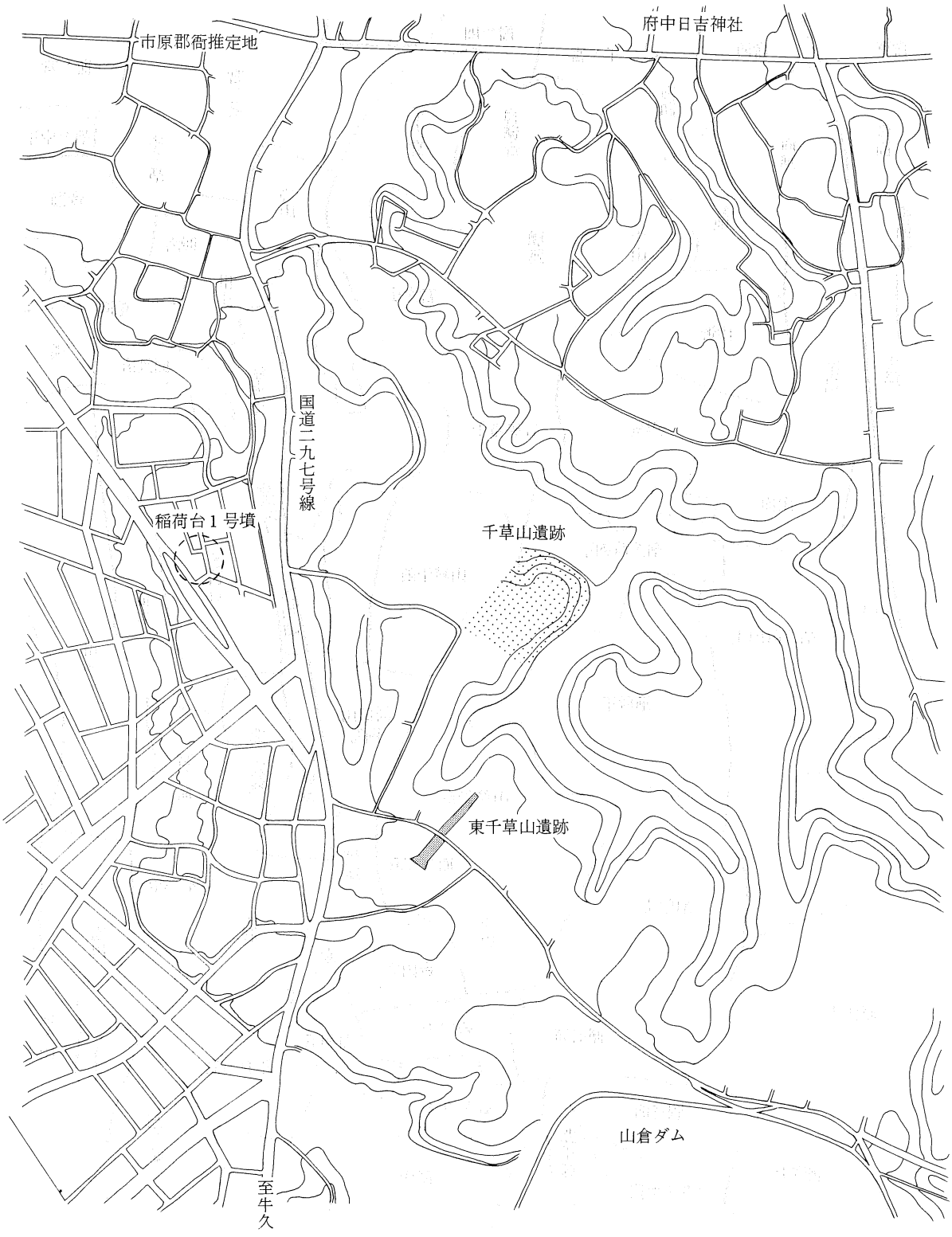
12.「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)」　千葉県文化財センター　昭和62年

13.「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 －北部編－」　市原市教育委員会　昭和63年

14.『能満番面台遺跡』田所真　市原市文化財センター年報　昭和57・58年度　(財)市原市文化財センター　昭和60年

15.『能満上細工多遺跡』宮本敬一　市原市文化財センター年報　昭和59年度　(財)市原市文化財センター　昭和60年

16.『千草山遺跡』米田耕之助　市原市文化財センター年報　昭和60年度
(財)市原市文化財センター　昭和60年



第5図　遺跡周辺の小字名図

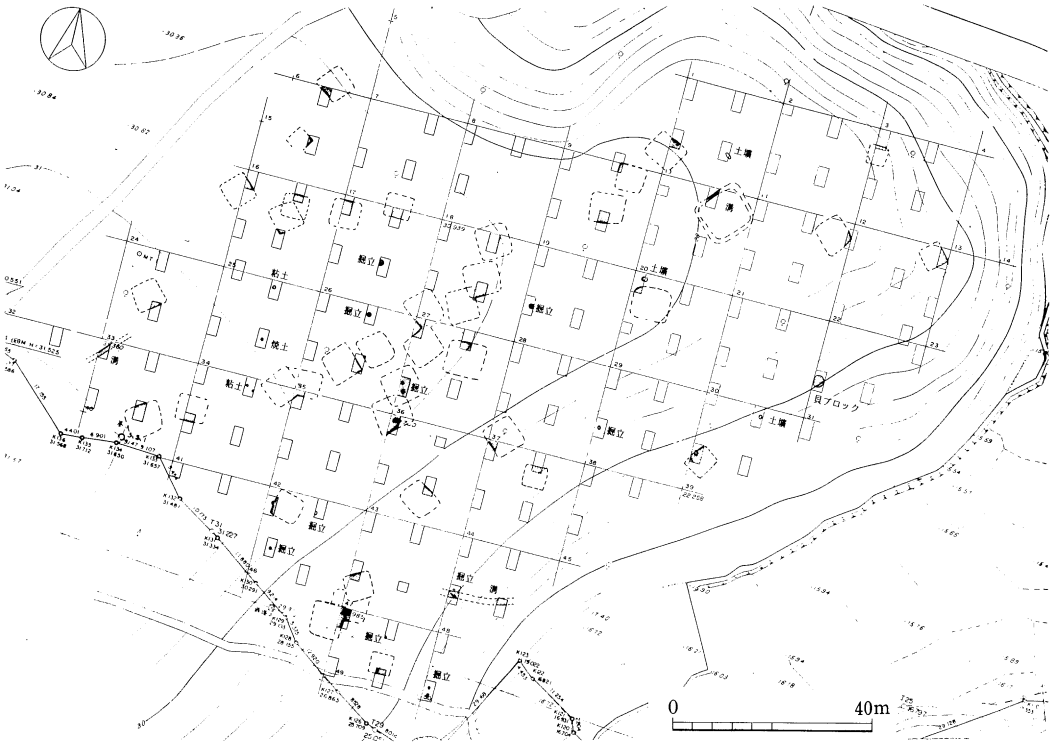
2　調査に至る経緯と調査状況(千草山遺跡)

(1) 調査に至る経緯

昭和59年11月30日付で、市原市長井原恒治は、千葉県市原市能満字東千草山1.467地先他19.388㎡の文化施設建設に伴う「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出した。それを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会文化課の現地踏査等の結果により、昭和60年2月15日付けで、「縄文土器、土師器散布地、1か所」の回答がなされた。この回答による協議の結果、15.000㎡の記録保存を実施することが決定した。発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの受託事業として、昭和60年1月10日より同年5月25日まで確認調査を行ない、その結果に基づき、本調査も、対象面積の全域を、昭和60年11月11日より昭和61年3月31日まで実施した。また、その南側隣接地の市原市能満字東千草山1.475地先他の2.400㎡については、協議の結果、同じく、財団法人市原市文化財センターの受託事業として、昭和61年7月15日から同年8月31日まで本調査を実施している。

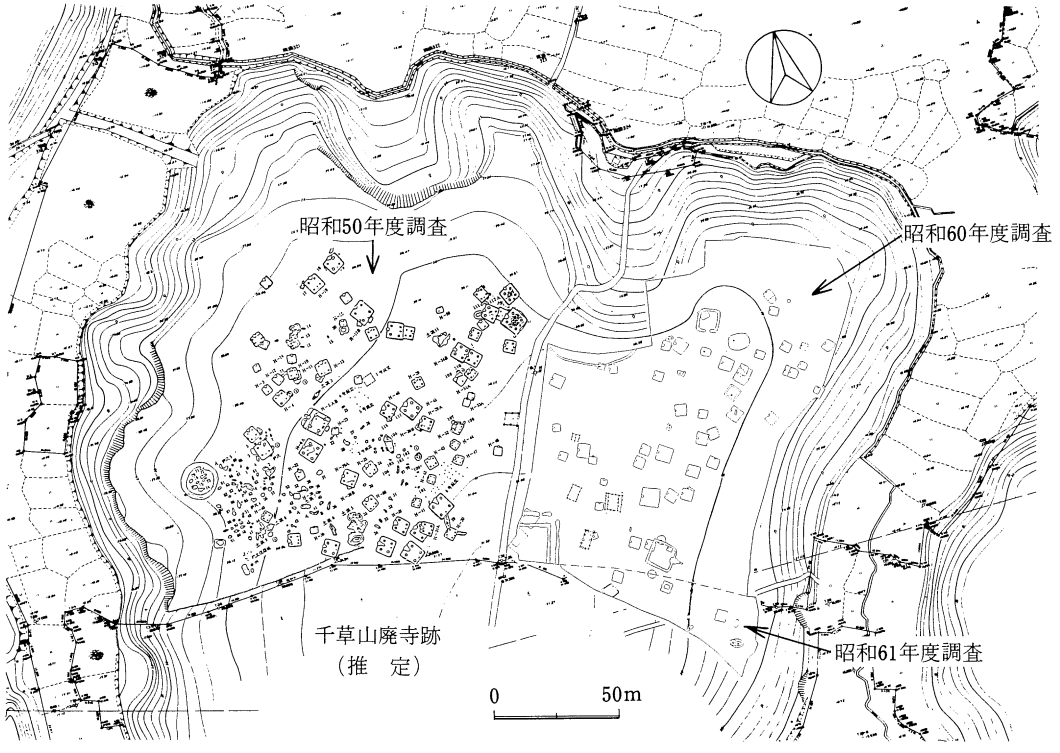
(2) 調査状況

調査前の遺跡は、松や櫟などの雑木林となっており、斜面部も同様であった。西側隣接地は、市原中学校が建っているが、これも以前は、同様の雑木林で、昭和50～51年の発掘調査によっ

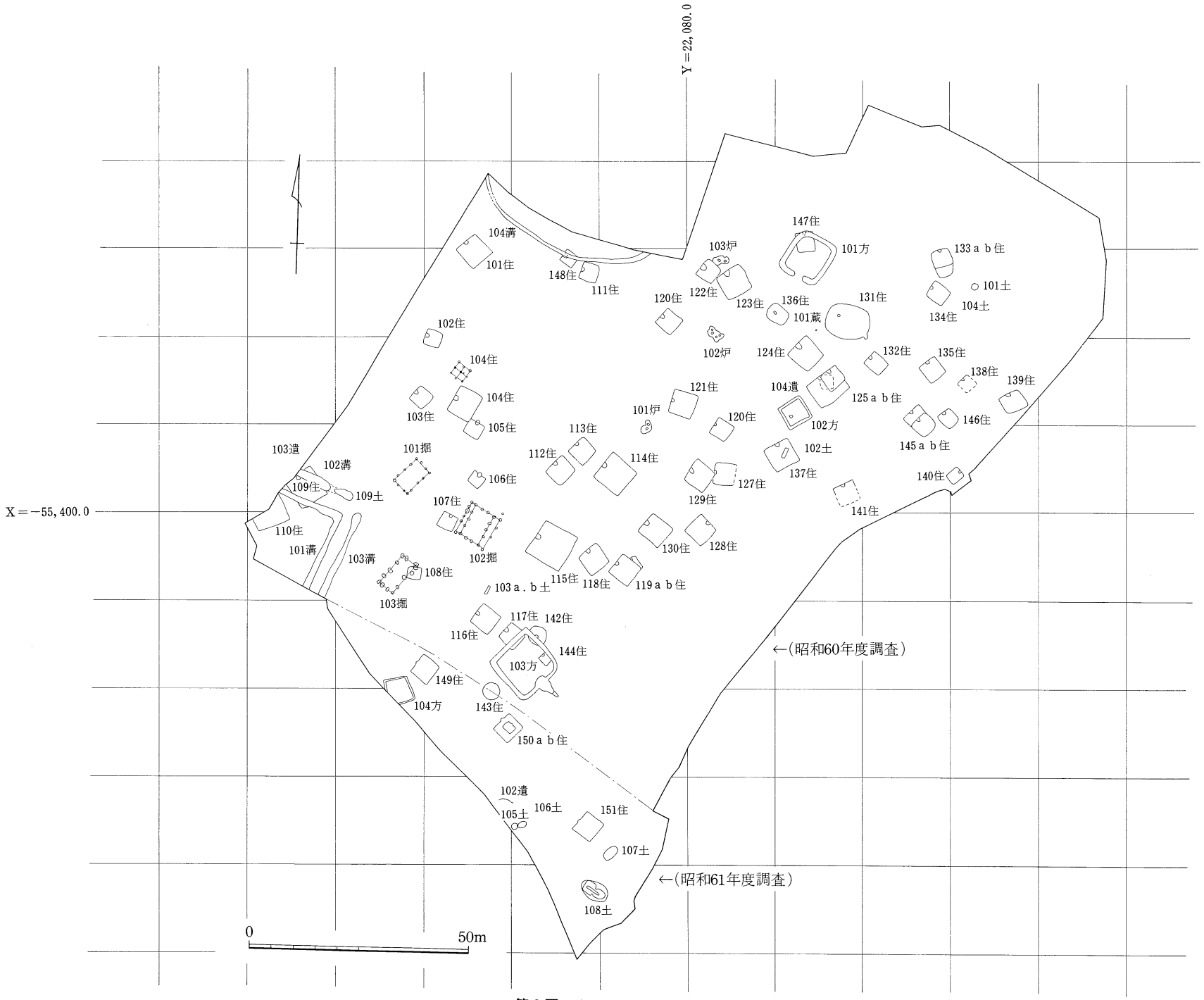


第6図　確認調査全体図(昭和59年度分)　スクリーントーンは、遺構面

て、台地が約10m程削平されている。また、南側隣接地は、千草山廃寺跡の建物跡の存在が想定される部分であるが、同様に松を中心とする雑木林となっている。しかしその南側には、住宅地が迫ってきている。さらに、東側、北側、西側の小谷部分は、調査前は、台地周囲に小川が流れ、全体は、谷水田に利用されていたが、西側の一部は、既に中学校の侵入道路として埋め立てられている。今回の調査と昭和50年～51年調査地域の境付近は、工事で既に削徐されている模様で、両者の全体図は、隣接地でありながら連結しない。調査は、確認調査時点より、座標北を使用し、方眼を組んでいる。基本は20m四方であるが、トレンチは2×4mの大きさを20m×20m内に4ケ所設けている。本調査は、確認調査の状況によって、表土を重機により削除し、その後に遺構プランを確認し、遺構自体を調査する方法を採った。最終的な本調査面積は、約17.400㎡である。なお、凡例でもふれているように、現地調査時の遺構番号と本書で取り扱う遺構番号には、別表第2表のとおり呼び名の違いがある。また、昭和60年度の年報に記載した遺構名、番号も多少違いがある。実測図は、グリッドポイントを基本として、平面図、土層図、断面図は、1/20、カマド、遺物出土状況等は、1/10の縮尺で主として行ない、状況に応じて、縮尺を変えている。写真は、6×7版、35㎜を白黒とリバーサルで記録した。また、調査の最終段階で、セスナ機による航空写真をキャビネ版と35㎜の白黒とリバーサルで撮っている。なお、千草山遺跡の今回調査の略式記号は、15.000㎡分がセ27、その南側隣接地の2.400㎡がセ49である。



第7図　昭和50年度と今回の調査地区合成全体図　※ 昭和50年度の位置は推定である。



第 8 図　今回の調査区域全体図

第 2 表　竪穴住居跡新旧対照名称表

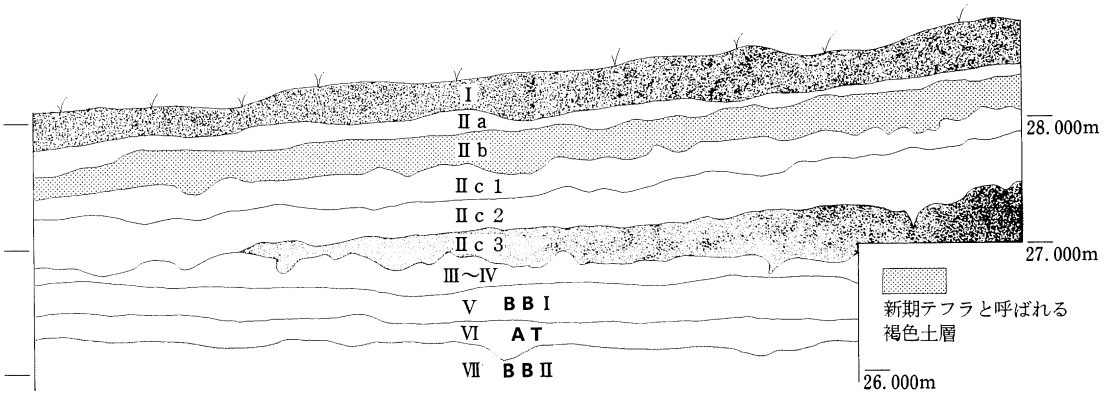
旧名称	当書使用名	旧名称	当書使用名
101	101	133 a	133 a
102	102	133 b	133 b
103	103	134	134
104	104	135	135
105	105	136	136
106	106	137	137
107	107	138	138
108	108	139	139
109	109	140	140
110	110	141	141
111	111	202	142
112	112	203	143
113	113	201	144
114	114	209	145 a
115	115	211	145 b
116	116	210	146
117	117	207	147
118	118	206	148
119 a	119 a	214	149
204	119 b	215 b	150 a
120	120	215 a	150 b
121	121	213	151
122	122		
123	123		
124	124		
125 a	125 a		
208	125 b		
125 c	125 c		
126	126		
212	127		
129	128		
130	129		
205	130		
131	131		
132	132		

第Ⅱ章　検出した遺構と遺物(千草山遺跡)

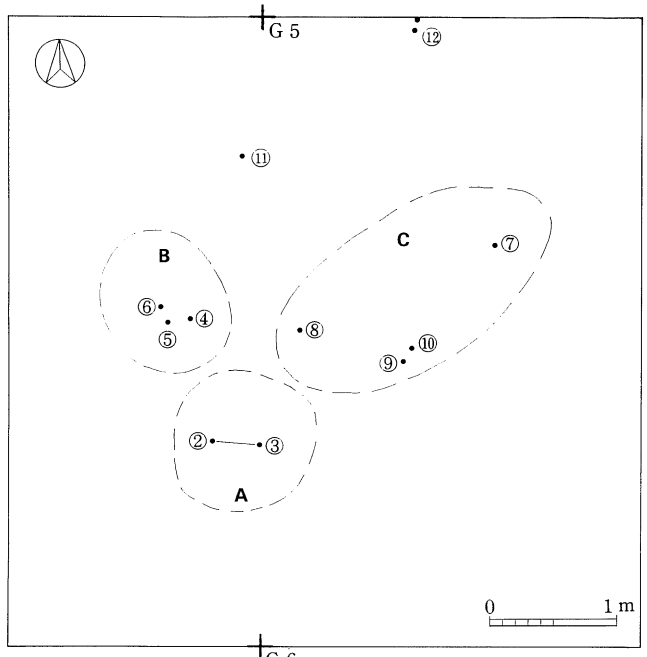
1．先土器時代の遺構と遺物

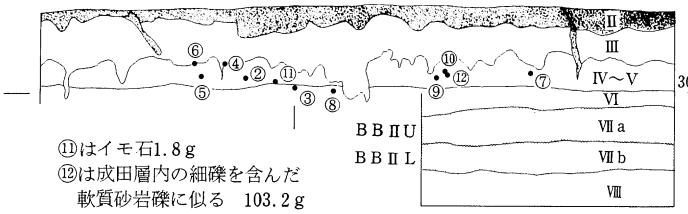
(1) 第101号遺構

先土器時代の地点分布は、千草山遺跡が占地する台地の東側寄りのほぼ中央から斜面に入る前の平坦面にある。出土層位はＡＴの呼ばれる火山ガラスを含む武蔵野台地基準層等のⅥ層上部にあたると考えられる。千草山遺跡ではＡＴの火山ガラスがローム層内にブロック状３～５cmの塊となって散在して検出される。それらの検出面上を出土層と考えたい。第10図に出土状況を載せた。Ａ・Ｂ・Ｃの同一母岩集団とも径１ｍ内外の範囲に入り、地点分布としては径３ｍ、９点と小規模である。道具製品は皆無で、残核状のフレイク及び石屑チップ等のみである。接合は**Ａ**の②と③のみで、③は打面調整の剥片であるらしい。**Ｂ**は⑤の自然礫面を一部に残したものと横長の剥片及び残核である。石核自体もあまり大きくない。細長い剥片は折り取りがある様子である。**Ｃ**はチャート礫自体の節理面で多く複雑な割れを呈している。⑦は残核と思われる。⑧⑩は節理面で割れが入っている。⑨はやや縦長の剥片が折れていて、左側縁部は使用による刃こぼれがある。Ｆ５・Ｇ５区の地点分布は石器製作跡と考えられ、製作されたものは全て持ち出された様である。黒曜石を使用せず、縦長の剥片を作出しない技術は房総におけるⅥ層文化層の一端を表していると考えられる。下図は当遺跡の保存状態の良い東側斜面部の層序図である。Ⅱｂ層は新期テララの呼ばれるもので、縄文時代後期包含層を覆い、弥生時代中期遺構が切り込む、Ⅱｃ層は縄文時代包含層で、Ⅱｃ３層は純黒色土を呈し早期包含層となる。Ⅲ～Ⅳ層はソフトローム化したハードロームで混合比率は１：１程度である。Ⅴ層は第１ブラックバンド、Ⅵ層はＡＴ(火山ガラス)が斑点状のブロックとして含む。Ⅶ層は第２ブラックバンドのなっている。緩斜面とはいえ、ソフトローム上面まで２ｍに及ぶ層序は、上総地域の縄文時代包含層を層厚なものとし、保存状態の良い遺構を時として提供してくれる。それらは、東京湾東岸地域という自然地理的な立地条件の反映なのだろう。



第９図　千草山遺跡 調査区南側壁(M13区付近)

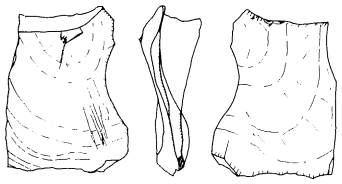




⑪はイモ石1.8g
⑫は成田層内の細礫を含んだ
軟質砂岩礫に似る　103.2g

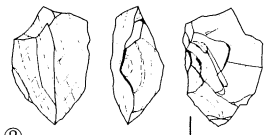
土層説明

Ⅱ	黒褐色土層。縄文時代包含層。
Ⅲ	黄褐色ソフトローム層。
Ⅳ～Ⅴ	褐色ハードローム層。赤色スコリアを若干含む。
Ⅵ	明褐色ハードローム層。斑点状にATのうすいブロックを含む。
Ⅶa	暗褐色ハードローム層。赤色スコリアが多い。
Ⅶb	暗褐色ハードローム層。赤色スコリアが多い。
Ⅷ	褐色ローム層。やや粘性がある。



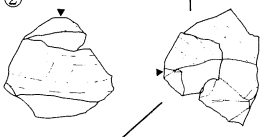
① セ49 M13 0035（粘板岩）5.6g

A



セ49
F 5
002
（メノウ）
2.8g

②



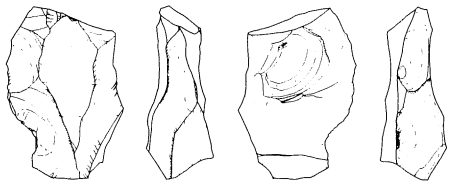
F 5 002と003の接合



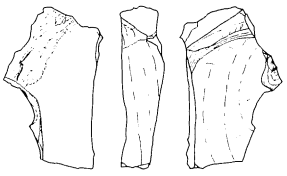
③

セ49
F 5
003
（メノウ）
0.4g

先土器時代 石器 地点分布の出土状況（破線内は同一母岩）
（第101号遺構）



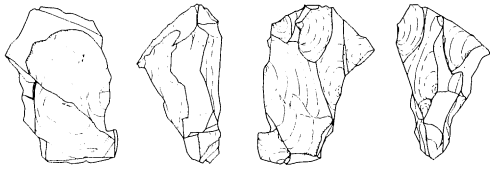
B ④ セ49 F 5 005（粘板岩）8.4g



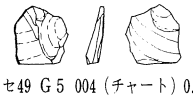
⑤ セ49 F 5 007（粘板岩）5.7g



⑥ セ49 F 5 004（粘板岩）0.7g



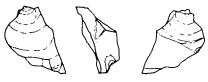
C ⑦ セ49 G 5 006（チャート）8.2g



⑨ セ49 G 5 004（チャート）0.2g



⑩ セ49 G 5 004（チャート）0.2g



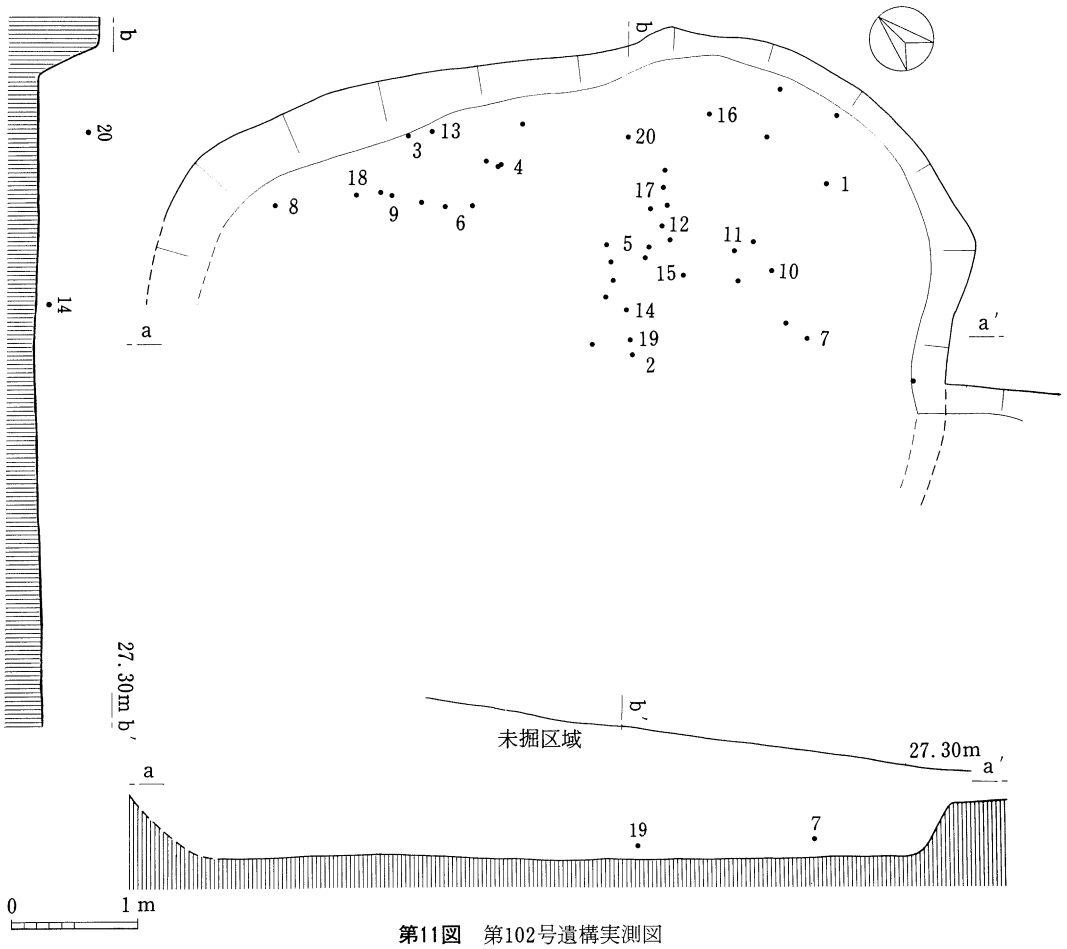
⑧ セ49 G 5 003（チャート）0.5g

第10図　先土器時代石器地点分布の出土状況及び出土遺物実測図　0　5cm（2：3）

2．縄文時代の遺構と遺物

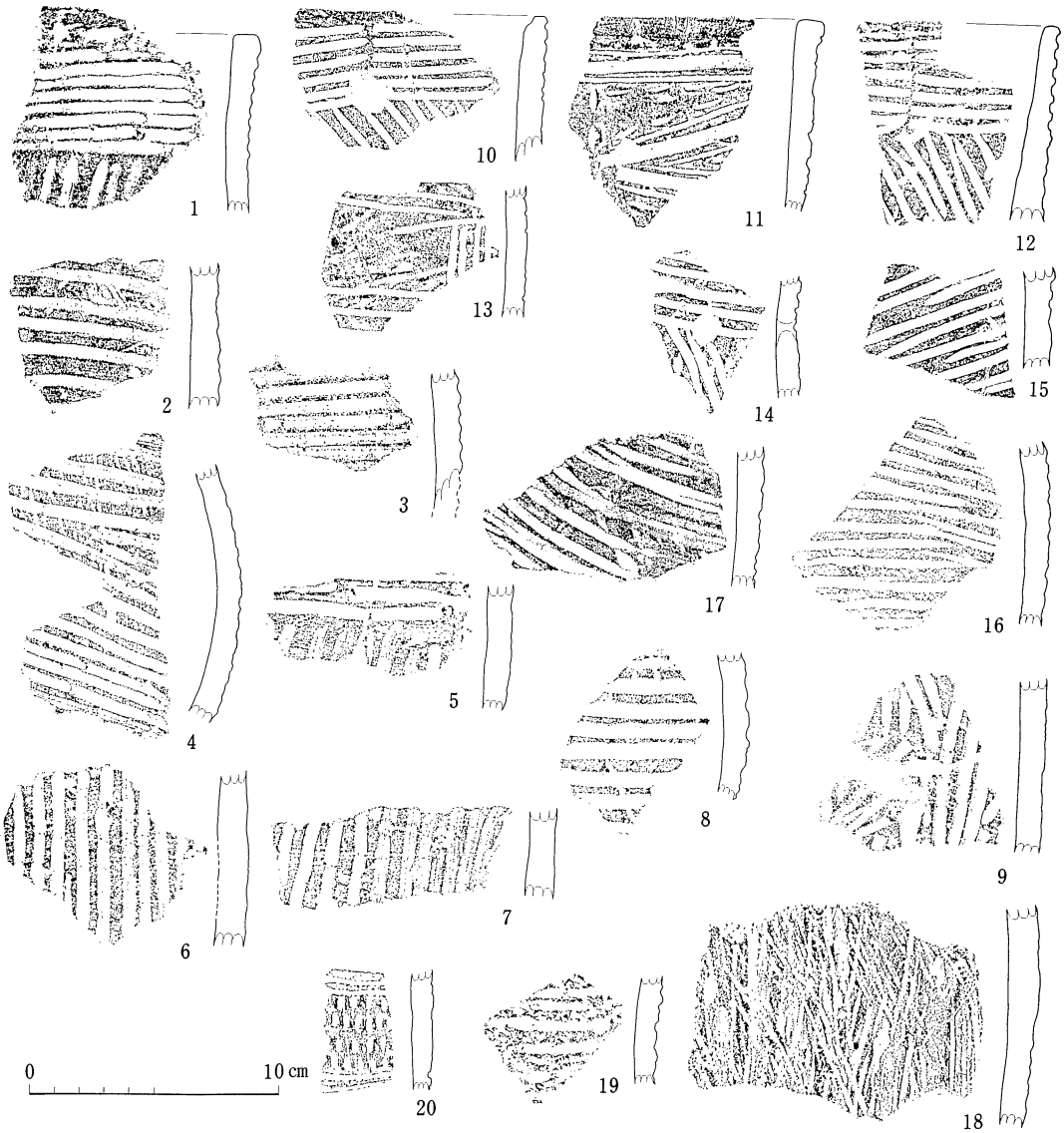
縄文時代の遺構は、竪穴状遺構1基(第102号遺構)、炉穴群3ヶ所(第101号、102号、103号で各々さらに合計12基に分かれると考えられる)、竪穴住居跡2軒(第142号、第143号)が検出された。以下順次解説する。また、表採や遺構覆土中などより多数の土器片等が出土しているが、これらは、各々の出土場所及び別項(その他の出土遺物)で幾つかを取り上げた。

(1) 第102号遺構



第11図　第102号遺構実測図

当遺構は、調査地区の南西側に位置し、南側未調査地区との隣接地に所在する。形態は、北東側が緩やかな立ち上がりをもち、南西側は、平坦で開いた形を呈する。平面形体は、丸みをもった不整形の円形で、立ち上がりは最大で、50cmを測る。また、一方が開いているが、規模は、長軸6.40m、短軸3.20mをもつとみられる。底部は、比較的平坦で、ソフトローム上位レベルに設定され、ピット等の施設は認められない。出土遺物は、覆土下位より散在して検出した。



第12図　第102号遺構出土遺物実測図

第３表　第102号遺構出土遺物観察表

挿図 番号	a．器　種 b．器　厚	器質 { c．胎土 d．焼成	形態、成整形、文様等の特徴及び色調	出土位置他
図12 1～9 19	a．甕 b．0.9～1.2cm	c．小礫３㎜以下を含む。 d．普通	太い沈線を横及び縦位に施文する。単位は６～８条ともみられる。 No.１は、口縁部で、口唇部は、平坦となる。 〈色調〉外面=暗褐色、淡茶褐色、内面=褐色、一部黒褐色、暗褐色	覆土下位 三戸式
図12 10～17	a．甕 b．0.8～1.1cm	c．砂粒を含む。 d．普通	細い沈線を横、縦、斜めに施文する。No.10、11、12は口縁部で、口唇部は、平坦。No.14は、小さな穿孔がみられる。 〈色調〉両面とも淡褐色	覆土下位 田戸下層式
図12 18	a．甕 b．1.0～1.2cm	c．小礫４㎜以下含む d．普通	細い沈線を条痕状に交差させる。 〈色調〉外面=茶褐色、内面=淡褐色	覆土下位 田戸下層式
図12 20	a．甕 b．0.7～0.8cm	c．小礫２㎜以下含む d．普通	２条の横位の竹管文(条線)で囲まれた中に刺突文が縦位に４段施文される。〈色調〉外面=暗褐色、内面=淡褐色	覆土下位 田戸上層式

（2）第101号炉穴群

調査地区のほぼ中央付近に位置し、東南方向に約10mで、小谷側に向って傾斜する地点に所在し、東側の小谷を望める場所である。また、周辺には、縄文時代の遺構は、検出されなかった。

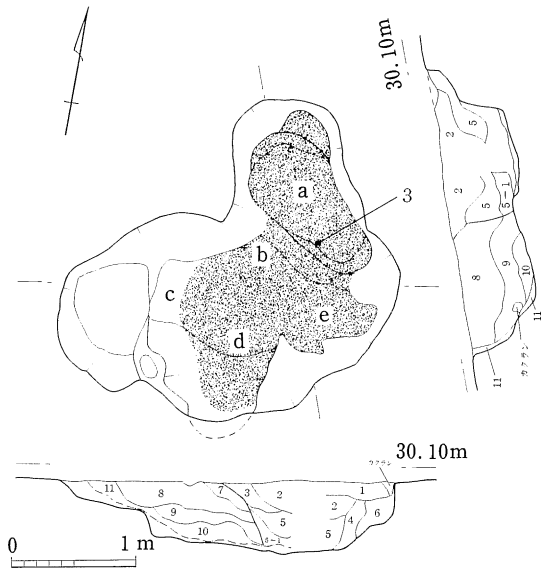
当炉穴は、平面や底部の形態及び土層の状況より、長円形の形体を呈する炉穴がａ～ｅまで5基重複していると推定される。土層観察による新旧は、ａ～ｅの順とみられ、各々の大きさは、別表第4表のとおりである。立ち上がりは、50～60cm前後を測り、ｄは、オーバーハングしている。短軸は、75～105cm、長軸は、130～184cmである。また、各々底部に火床を有している。覆土は、自然堆積で、黒褐色土を主体とし、ローム粒と粘土粒を多く含む。出土遺物は、3が覆土下位、1・2・4は、覆土中の検出である。

1は、口縁部片で口唇部は丸く、器厚は、8㎜である。色調は、両面とも、淡褐色一部暗褐色で、胎土は、全体的に緻密であるが、極少量2㎜程度の小礫がみられる。焼成は、わずかに不良。施文は、縦位の撚糸文であり、稲荷台式と考えられる。2・3・4は、縄目の大きな斜縄文が施される。器厚は、2が8㎜、3・4は、11～13㎜である。色調は、2～4とも、外面が黒褐色と暗褐色、内面が淡茶褐色を呈する。胎土は、繊維を含み、焼成は、やや不良である。

2は、口縁部片で、口唇部は、細くなっている。

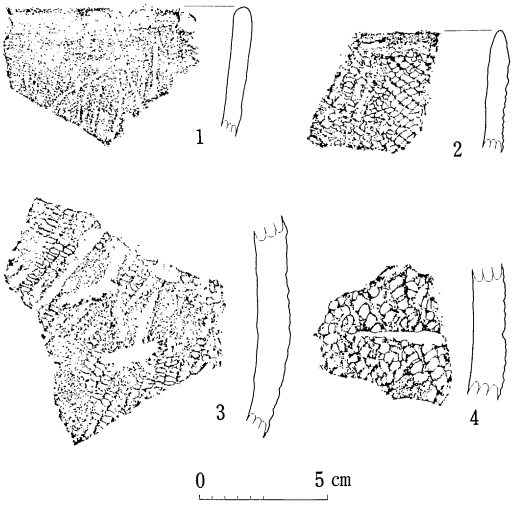
第4表　第101号炉穴群ａ～ｅ計測表（cm）

炉穴名	長軸	短軸	深さ
101ａ	184	84	61
101ｂ	170	(75)	56
101ｃ	(165)	105	49
101ｄ	(130)	(100)	57
101ｅ	(170)	(85)	59

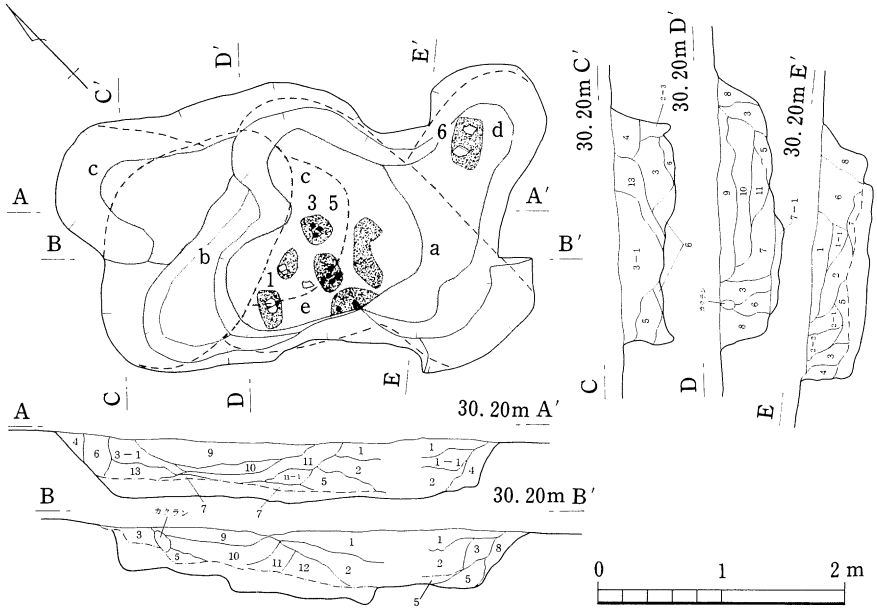


第101号炉穴土層説明
1．黒褐色土。ローム粒と焼土粒を含む。
2．黒褐色土。焼土粒を多量に含む。焼土粒を含む。
3．黒褐色土。ローム粒を含む。焼土粒を少量含む。
4．黒褐色土(明るい)。焼土粒とローム粒を多量に含む。
5．黒褐色土。焼土塊を多量に含む。ローム粒を含む。
5－1．焼土塊をブロック状にちかく含む。
6．暗褐色土(少し軟質)。ローム土塊を含む。
7．黒褐色土。ローム粒を含む。焼土粒を極少量含む。
8．黒褐色土。焼土粒を極少量含む。
9．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒と焼土粒を極少量含む。
10．暗褐色土(少し硬質で明るい)。ローム土塊と焼土塊をブロック状に含む。
11．暗褐色土(少し硬質で明るい)。ローム土塊をブロック状に含む。

第13図　第101号炉穴実測図



第14図　第101号炉穴出土遺物実測図



第15図　第102号炉穴実測図

3片とも、黒浜Ⅱ式の特徴をもつと考えられる。

(3) 第102号炉穴群

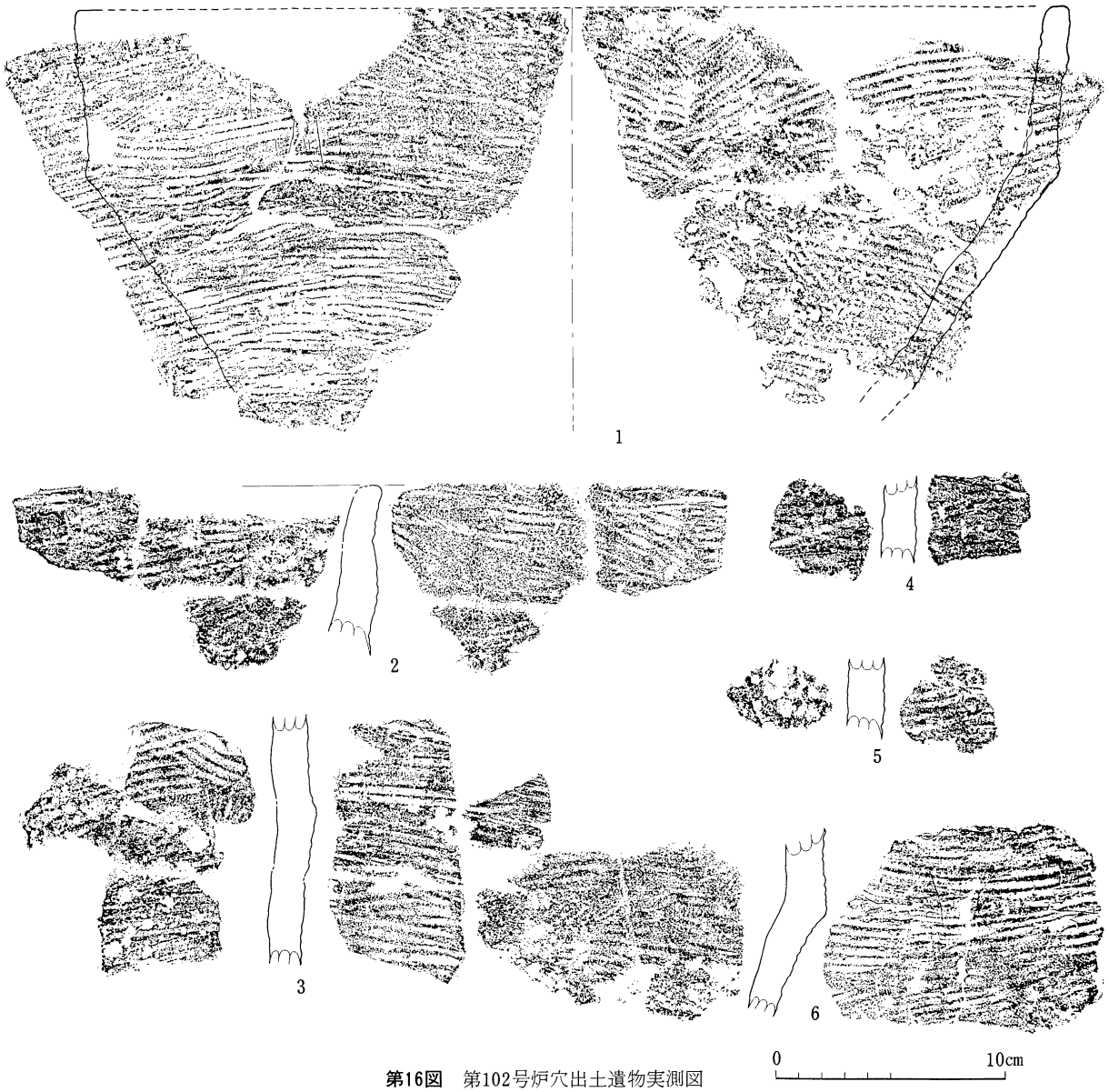
調査地区の北側平坦部に位置し、北西約20mで北側の小谷に傾斜する地点である。土層観察や形態より5基が重複していると推定され、第102a～102e号までの名称で区別した。規模は、下表第5表のとおりである。各々の形体は、長円形を呈し、火床を底部に有する。立ち上がりは、40～55cmで、大きさは、長軸170～235cm、短軸90～120cmを測る。覆土は、複雑に切り合っているが、主として、黒褐色土でローム粒と焼土粒が多く混入している。出土遺物は、No.1～6が各々底部付近の焼土内より検出されている。複雑に重複しているため、No.1・2・4の所属は不明であるが、No.3・5は、第102c号、No.6は、第102d号に伴なうとみられる。No.1は、鉢と推定される胴上位～口縁部片であり、全体の1／4の残存、口径は、43.7cm、胴部は、斜め方向に開いて立ち上がり、口縁部は、屈曲して直立する。器厚は、1.2～1.5cmである。No.2・3は、口縁部片で外面にわずかな隆部帯が一条横位に認められる。No.6も、胴部片であるが、隆部帯が有る。No.2～No.6とも器厚は、比較的厚く1.0～1.5cmである。また、各々色調は、両面とも黒褐色と暗褐色である。胎土は、繊維を含み、小礫3㎜以下も混入している。焼成は、少し不良である。文様は、

第102号炉穴土層説明

1. 黒褐色土。焼土粒を多量に含む。
1－1. 少し硬質。
2. 黒褐色土。焼土粒を少量含む。
2－1. 焼土粒を極少量含む。
2－2. 少し硬質。
2－3. 少し軟質。
3. 暗褐色土。焼土粒とローム粒を含む。
3－1. ローム粒を少量含む。
4. 暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
5. 黒褐色土(少し軟質)。焼土粒を多量に含む。ローム土塊を含む。
6. 黒褐色土。ローム土塊と焼土粒を少量含む。
7. 黒褐色土と焼土粒がブロック状を呈する。
8. ローム土塊(少し軟質)。焼土粒を極少量含む。
9. 黒褐色土(わずかに硬質)。焼土塊を極少量含む。
10. 黒褐色土(少し硬質)。焼土塊とローム粒を含む。
11. 黒褐色土。焼土塊を含む。
11－1. 焼土塊を多量に含む。
12. 暗褐色土。焼土塊とローム土塊を含む。
13. 暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊がブロック状を呈する。焼土粒を少量含む。

第5表　第102号炉穴群a～e計測表(cm)

炉穴名	長軸	短軸	深さ
102a	170	115	46
102b	213	120	40
102c	235	(115)	50
102d	235	(90)	43
102e	－	－	55



第16図　第102号炉穴出土遺物実測図

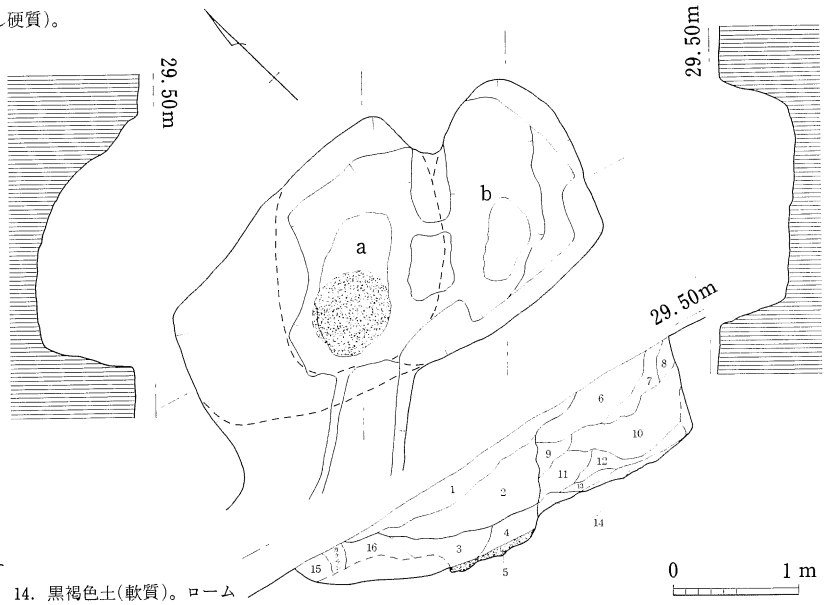
貝殻条痕文を内外両面に施文している。No.1～No.6とも茅山上層式と考えられる。

(4) 第103号炉穴群

調査地区の北側に位置し、第122号住居跡に南側を切られている。西側は、北西方向に小谷へ傾斜する地点である。土層観察と形態より2基の重複が考えられ、第103a号と第103号b号の名称で区別した。各々の平面形体は、少し不整の長円形で、第103a号は、西側の立ち上がりが緩やかである。大きさは、第103a号が長軸2.00cm、短軸136cm、深さ84cm、第103b号が、長軸2.05m、短軸1.44cm、深さ84cmを測る。No.103a号の底部には、厚く焼土が堆積し、火床を形成している。出土遺物はNo.1～No.4の4点検出され、すべて覆土中からの出土である。No.

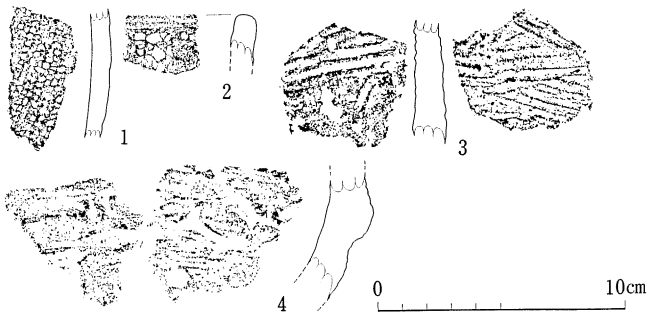
第103号炉穴土層説明

1．黒褐色土(少し明るく、少し硬質)。ローム粒を多量に含む。
2．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。焼土粒を極少量含む。
3．暗褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。焼土粒を含む。
4．褐色土。ローム土塊と焼土塊を多量に含む。
5．焼土。ローム土塊を少量含む。
6．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を多量に含む。
7．暗褐色土。軟質のローム粒を多量に含む。
8．暗褐色土(明るい)。軟質のローム粒をブロック状に含む。
9．黒褐色土(少し明るい)。ローム粒を多量に含む。
10．褐色土(少し硬質)。ローム土塊がブロック状に混入。黒褐色土が全体にうすく含まれる。
11．黒褐色土(暗い)。ローム粒を多量に含む。
12．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を多量に含む。
13．黒褐色土(軟質)。ローム粒と焼土粒を含む。
14．黒褐色土(軟質)。ローム土塊を含む。焼土粒を少量含む。
15．褐色土。ローム粒をブロック状に含む。
16．暗褐色土。ローム粒と焼土粒を含む。



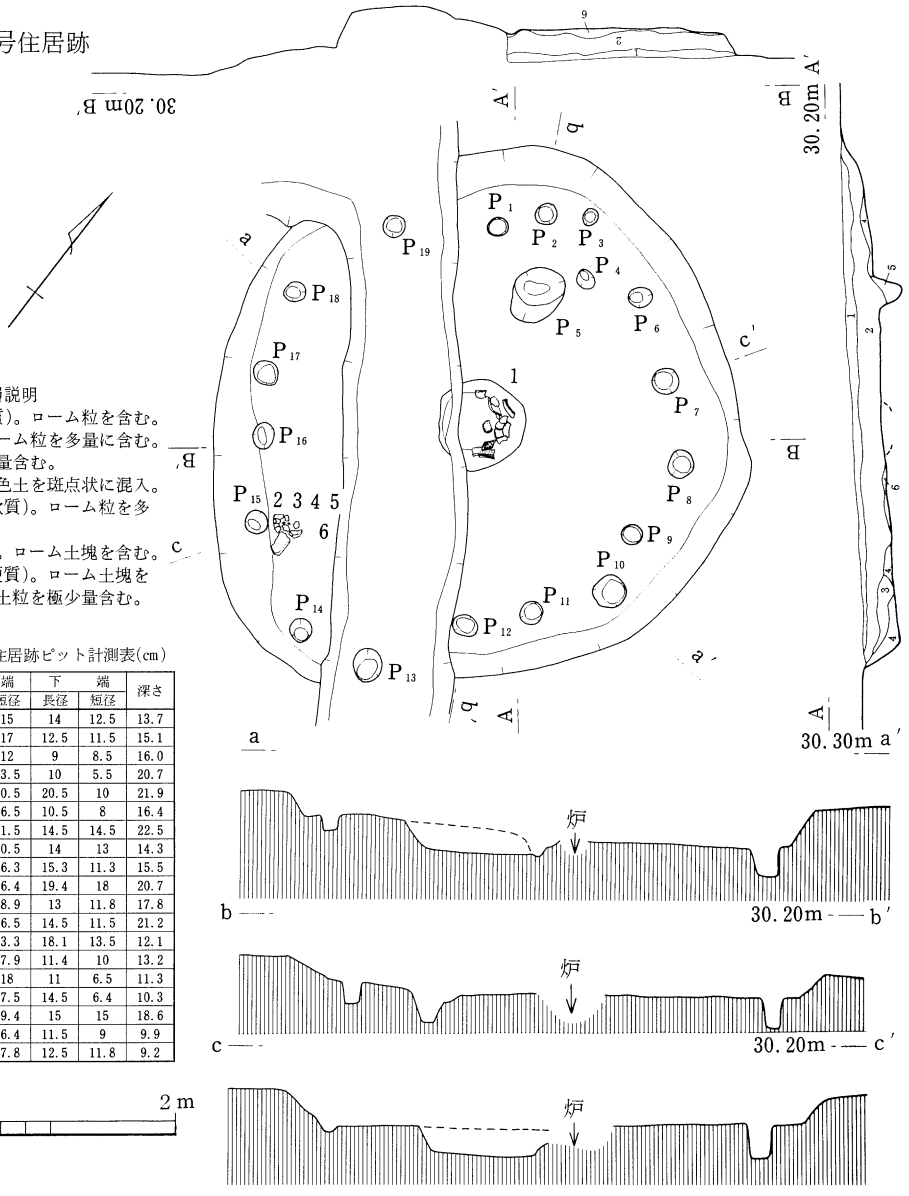
第17図　第103号炉穴実測図

1は、鉢の胴部片と考えられ、器厚は8㎜を測り、色調は、外面が茶褐色、内面が黒褐色と褐色を呈し、胎土は、砂粒を含み、焼成は、やや不良である。単節の縄文を施している。No.2は、口縁部片で、器厚は、10㎜、色調は、両面とも黒褐色を呈し、胎土には、小礫4㎜～2㎜以下を含む。焼成は、やや不良である。施文は、やや大きめの単位の単節縄文を施す。No.1・2は、稲荷台式と考えられる。No.3・4とも鉢の胴部片とみられ、No.3は、器厚が1.0～1.4cm、色調は、両面とも黒褐色、胎土には繊維を含み、小礫も3㎜以下を混入する。焼成は、少し不良である。No.4は、隆部帯を一条横位にもち、器厚は、1.3～1.9cm。色調は、外面が、黒褐色と褐色、内面が、淡白褐色と暗褐色を呈する。胎土は、砂粒を含み、繊維を混入し、焼成は、少し不良である。No.3・4とも、貝殻条痕文を内外に施文しており、茅山上層式の特色をもっていると考えられる。したがって、当炉穴の上限は、茅山上層式期以降とみられる。



第18図　第103号炉穴出土遺物実測図

(5) 第142号住居跡



第142号住居跡土層説明

1．暗褐色土(軟質)。ローム粒を含む。
2．茶褐色土。ローム粒を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
3．暗褐色土。褐色土を斑点状に混入。
4．褐色土(少し軟質)。ローム粒を多量に含む。
5．褐色土(軟質)。ローム土塊を含む。
6．褐色土(少し硬質)。ローム土塊を少量含む。焼土粒を極少量含む。

第6表　第142号住居跡ピット計測表(cm)

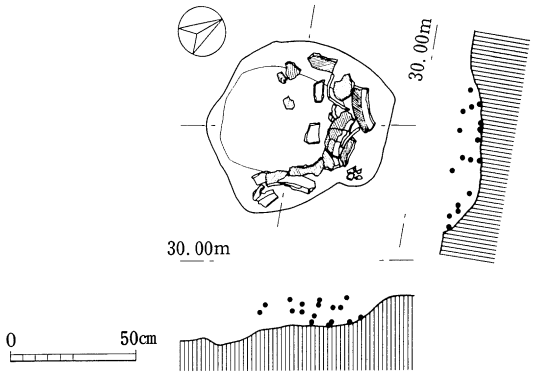
ピット名	上端 長径	上端 短径	下端 長径	下端 短径	深さ
P1	17	15	14	12.5	13.7
P2	17.5	17	12.5	11.5	15.1
P3	14.5	12	9	8.5	16.0
P4	17	13.5	10	5.5	20.7
P5	46.5	40.5	20.5	10	21.9
P6	19.5	16.5	10.5	8	16.4
P7	21.5	21.5	14.5	14.5	22.5
P8	22.5	20.5	14	13	14.3
P9	17	16.3	15.3	11.3	15.5
P10	27	26.4	19.4	18	20.7
P11	18.9	18.9	13	11.8	17.8
P12	20.5	16.5	14.5	11.5	21.2
P13	27.4	23.3	18.1	13.5	12.1
P14	19.3	17.9	11.4	10	13.2
P15	18.5	18	11	6.5	11.3
P16	21.5	17.5	14.5	6.4	10.3
P17	22.3	19.4	15	15	18.6
P18	18.5	16.4	11.5	9	9.9
P19	18.5	17.8	12.5	11.8	9.2

第19図　第142号住居跡実測図

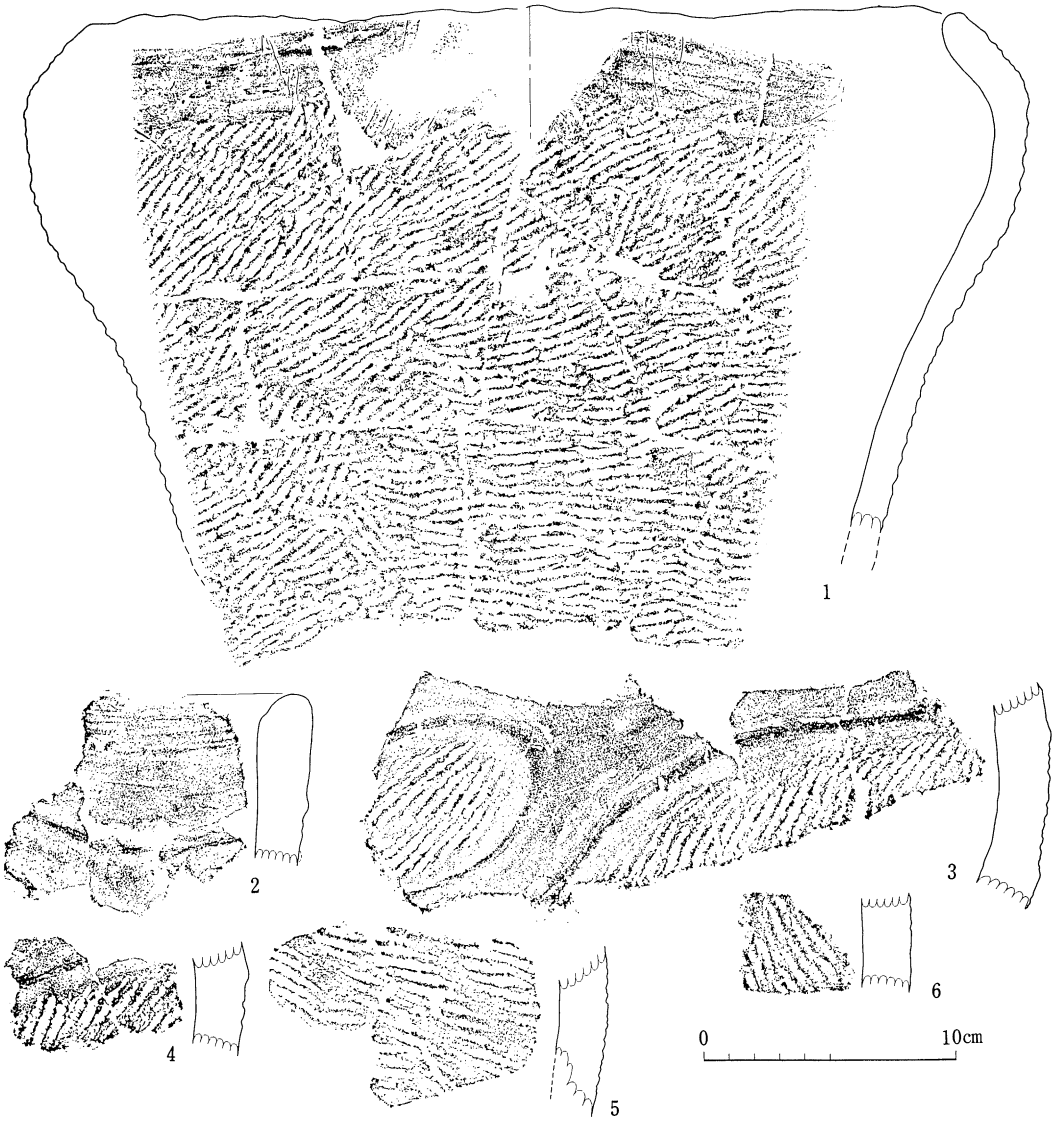
第142号住居跡は、調査地区の南東側に位置し、南東方向に約10mで小谷に傾斜する地点である。また、第103号方形周溝状遺構にプランの中央やや西側が切られており、床面は、約20cmの深さで削除されている。竪穴の平面形体は、不整円形で、長径4.74m、短径4.30mをはかる。主軸方位は、長径方向を測り、N－10°－Eを示す。壁の立ち上がりは、急傾斜で、壁高は、最大で32cm、床面は、ほぼ平坦で面積は11.36㎡である。ピットは、床面内の壁付近に、不整円形に組み合わされて並んでいる。P_5は、最も大きく、また床面の中央寄りに位置する。床面のほぼ中央付近に炉跡が存在する。地床炉であるが、周囲に鉢の口縁部片を設置しており、

土器囲い炉である。平面形は、不正円形で、長径75cm、短径69cm、深さ13cmを計る。炉内には、焼土が充満している。竪穴の覆土は、自然堆積であり、ローム粒を多量に含む茶褐色土を主体として、大きく6層に分けられる。なお、床面内のピットの規模は別表ピット計測表(第6表)に示した。

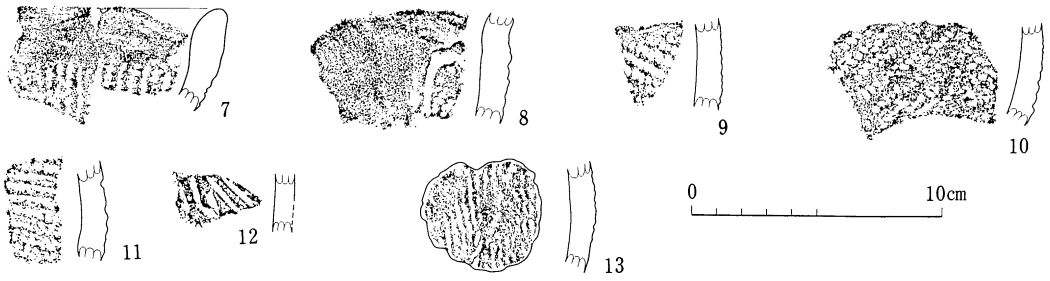
出土遺物は、No.1が炉跡内より設置し



第20図　第142号住居跡炉跡実測図



第21図　第142号住居跡出土遺物実測図(1～6)



第22図　第142号住居跡出土遺物実測図（７～13）

た形で、No.２～６は、南西側床面より、No.７～13は、覆土内の検出である。

No.１は、鉢で、胴上部から口縁部片で、最大径を口縁部にもち、上位は内傾する。口径は、35.5cm、最大径は、40.4cm、器厚は、1.1～1.6cmを計る。口縁部上位は、ヘラナデによる無文帯となり胴部は、斜縄文が施文されている。胎土は、小礫を少量含んでいる。

No.２～No.６は、同一個体と推定される。No.２は、鉢の口縁部片で、ヘラナデによる無文部分であるが隆起帯が横位にやや孤状を描いて存在する。No.３・４は、楕円形を呈する隆起帯に囲まれた斜縄文をもち、No.５・６は、斜縄文のみである。各破片とも、器厚は、1.95～2.25cm、胎土は、緻密、焼成は、やや不良、色調は、外面が暗褐色一部淡褐色、内面が黒褐色を呈する。

No.７は、鉢の口縁部で、上位は、ヘラナデ、下位は、縦走する単節の縄文を施文する。器厚は、1.3cm、ややロ縁部が細くなる。胎土は、緻密で、焼成は、やや不良、色調は、外面が、褐色一部暗褐色、内面が、暗褐色を呈する。

No.８は、ヘラナデの無文帯と楕円形と考えられる沈線に囲まれた単節の斜縄文を配する。器厚は、1.2cm、胎土は、緻密で、焼成は、やや不良、色調は、外面が、暗褐色と淡褐色、内面が、暗褐色一部茶褐色を呈する。

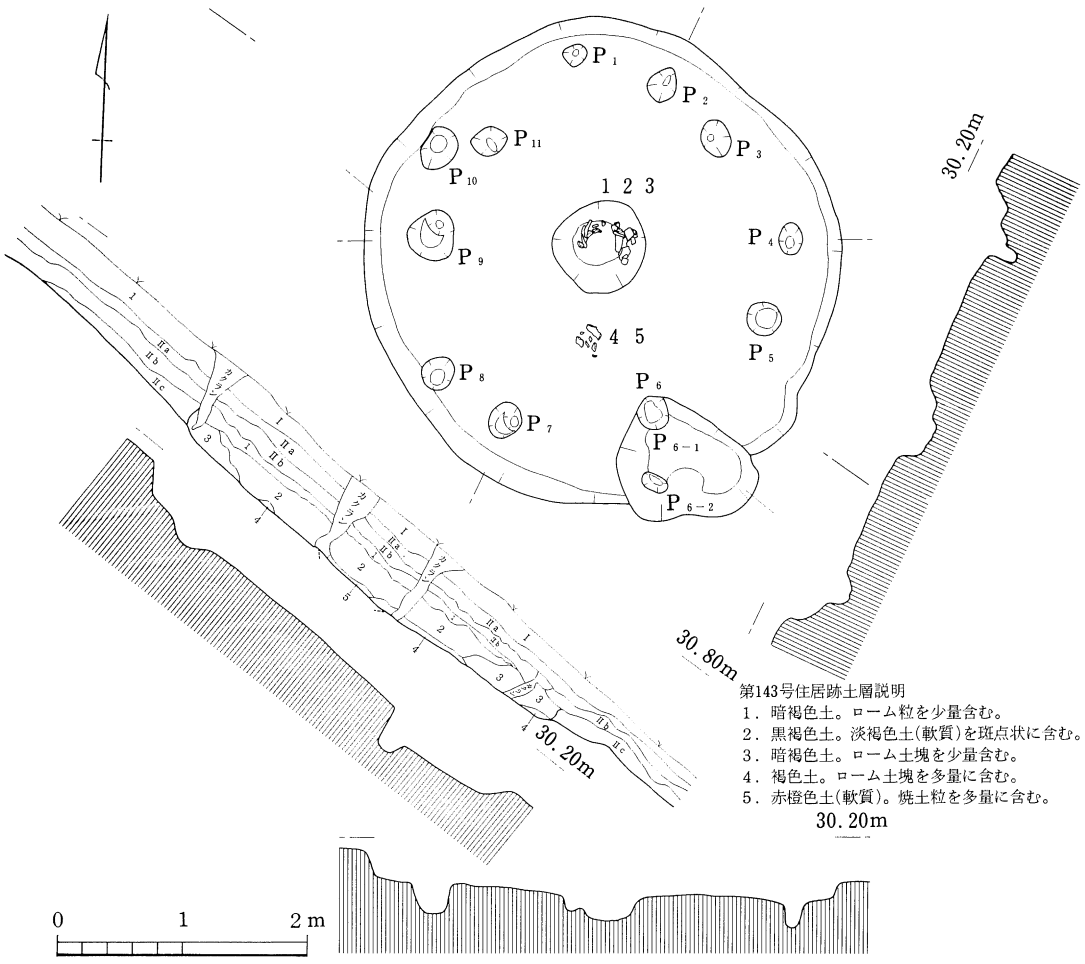
No.９、No.10は、単節の斜縄文を施文している胴部片で、No.９は右傾、No.10は左傾している。器厚は、1.05cm、胎土は、緻密で、焼成は、やや不良、色調は、外面が暗茶褐色、内面が淡褐色を呈する。

No.11は、斜縄文を施文している胴部片とみられる。胎土は、緻密で、焼成は、やや不良、色調は、外面が、茶褐色、内面が、褐色を呈している。

No.12は、半截竹管状工具による沈線文が施文されている小片である。器厚は0.8cm、胎土は、緻密で、焼成は、やや不良、色調は、両面とも淡褐色である。

No.13は、単節の縄文を施文しており（Ｌ－Ｒ）、土錘に利用されている。器厚は、0.9～1.0cmで、胎土は、金雲母を含み、砂粒を混入する。焼成は、やや不良、色調は、外面が、暗褐色、内面が黒褐色を呈する。

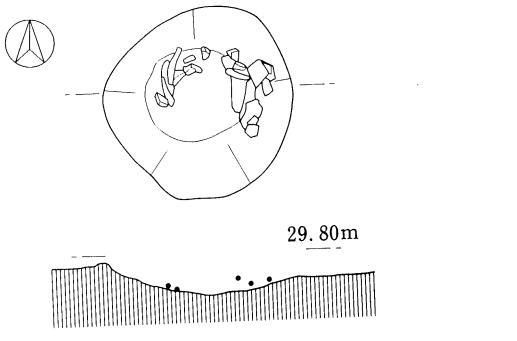
(6) 第143号住居跡



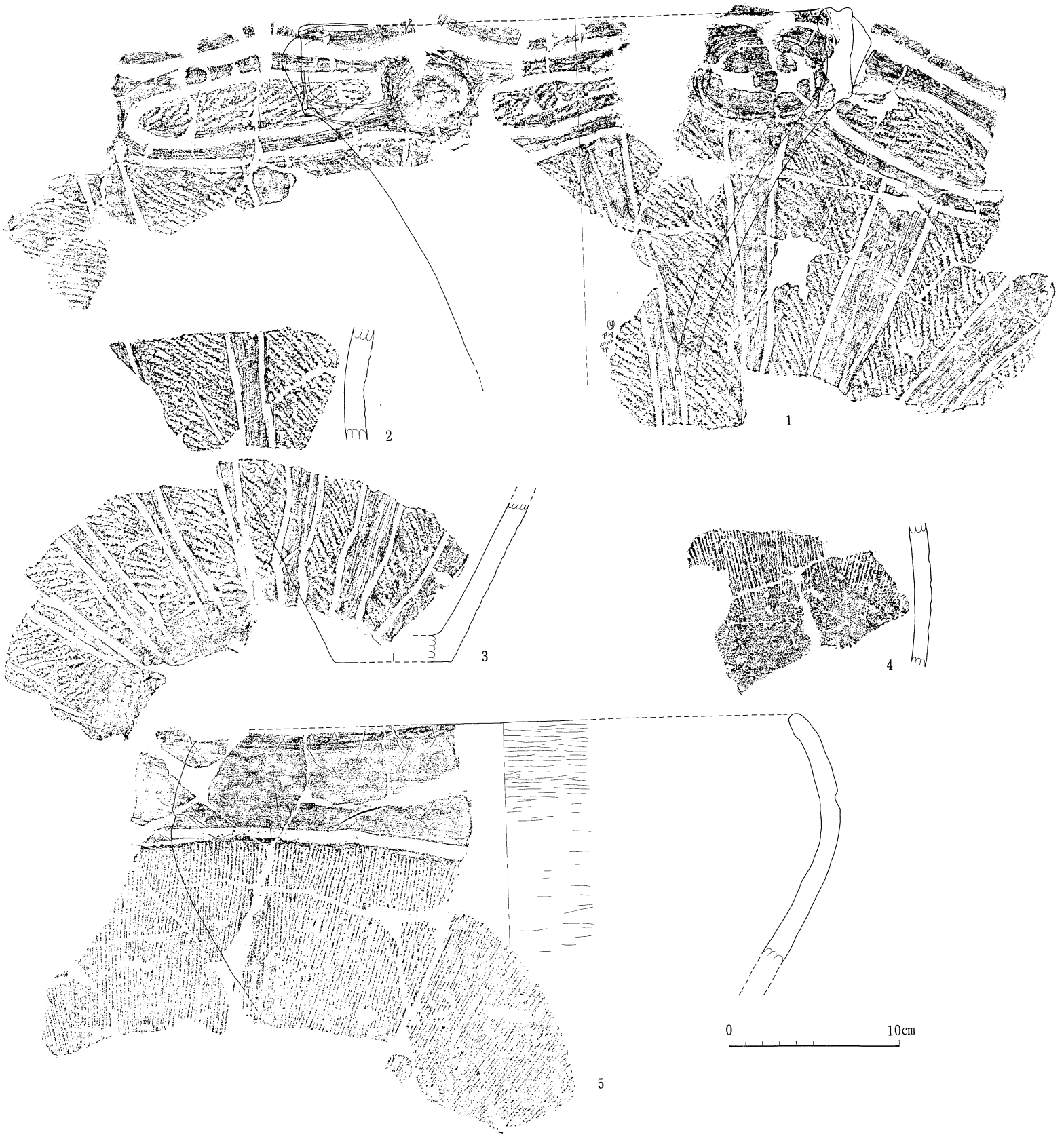
第23図　第143号住居跡実測図

第７表　第143号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端		下端		深さ
	長径	短径	長径	短径	
P 1	19.8	16	5.7	4.5	11.6
P 2	28.9	23	9.6	3.9	11.3
P 3	30.5	22.7	5.4	5.2	20.2
P 4	25.8	19.3	9.8	6.5	35.7
P 5	28.5	27.3	17.5	16.5	17.7
P 6	117.3	94.5	83	47.5	21.6
P 6－1	27.8	24.5	17.5	13	32.7
P 6－2	22.3	13	13	4.5	8.3
P 7	30.5	25	8.5	6.5	18.0
P 8	28	26	13.2	11.8	17.5
P 9	40.5	39.5	6.8	5.8	28.0
P 10	36	26.5	14.5	12.5	30.4
P 11	29.5	23.5	12.5	5.5	8.9



第24図　第143号住居跡炉跡実測図



第25図　第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡は、調査地区の南側に位置し、東に約５ｍで小谷に傾斜する地点である。第142号住居跡より南西に約15ｍ離れている。当住居跡は、北東側と南西側をほぼ半分ずつ２次期に分けて調査が行なわれた。平面形体は、ほぼ円形で、長径3.95ｍ、短径3.83ｍ、壁高は、最大で25cmを測る。床面は、中央部に向かって全体に窪んでいる。踏み固められた面は、炉跡の周辺に主として認められるが、やや不明確である。床面積は約9.73㎡である。ピットは、床面の壁近くに、ほぼ円形に組み合って存在する。P_6は大型で内に２ヶ所の小ピット（P_{6-1}，P_{6-2}）をもち、竪穴の壁外に出る形をとるが、覆土が竪穴の覆土と同様な土層であったため、住居跡に関連する遺構として取り扱った。また、P_7とP_9は、立ち上がりが２段を呈する。特に深いピットは、P_4、P_{6-1}とP_9及びP_{10}である。炉跡は、床面のほぼ中央に設置され、地床炉で焼土を多く充満し、鉢の口縁部付近を利用して周囲に備え付けられ、いわゆる土器囲い炉となっている。平面形は、不整円形で、大きさは、長径81cm、短径72cm、深さ14cmを計る。竪穴の掘り込みは、標準土層のⅡｃ層上位より掘り込まれており、覆土は、テフラを含む黒褐色土を主として、大きく４層に分けられ、自然堆積を示す。出土遺物は、No.１・２・３が炉跡内より、炉を囲んだ状態で、No.４・５は、炉の南側床面より検出されている。

No.１は、鉢の胴上半部より口縁部片で、約６割程度の残存である。口縁部には、沈線に挟まれた隋円形の隆起帯の中に単節の斜縄文を配し、胴部は、縦描き沈線により区画され無文帯と斜行する磨消縄文帯を施文する。器厚は1.1～1.3cm、胎土は、砂粒を少量含み、焼成は、普通、色調は、両面とも、暗褐色と黒褐色を呈する。

No.２は、No.１と同一個体と推定され、半截竹管の背による垂下平行沈線に挟まれた無文帯と斜行する磨消縄文帯を施文する。

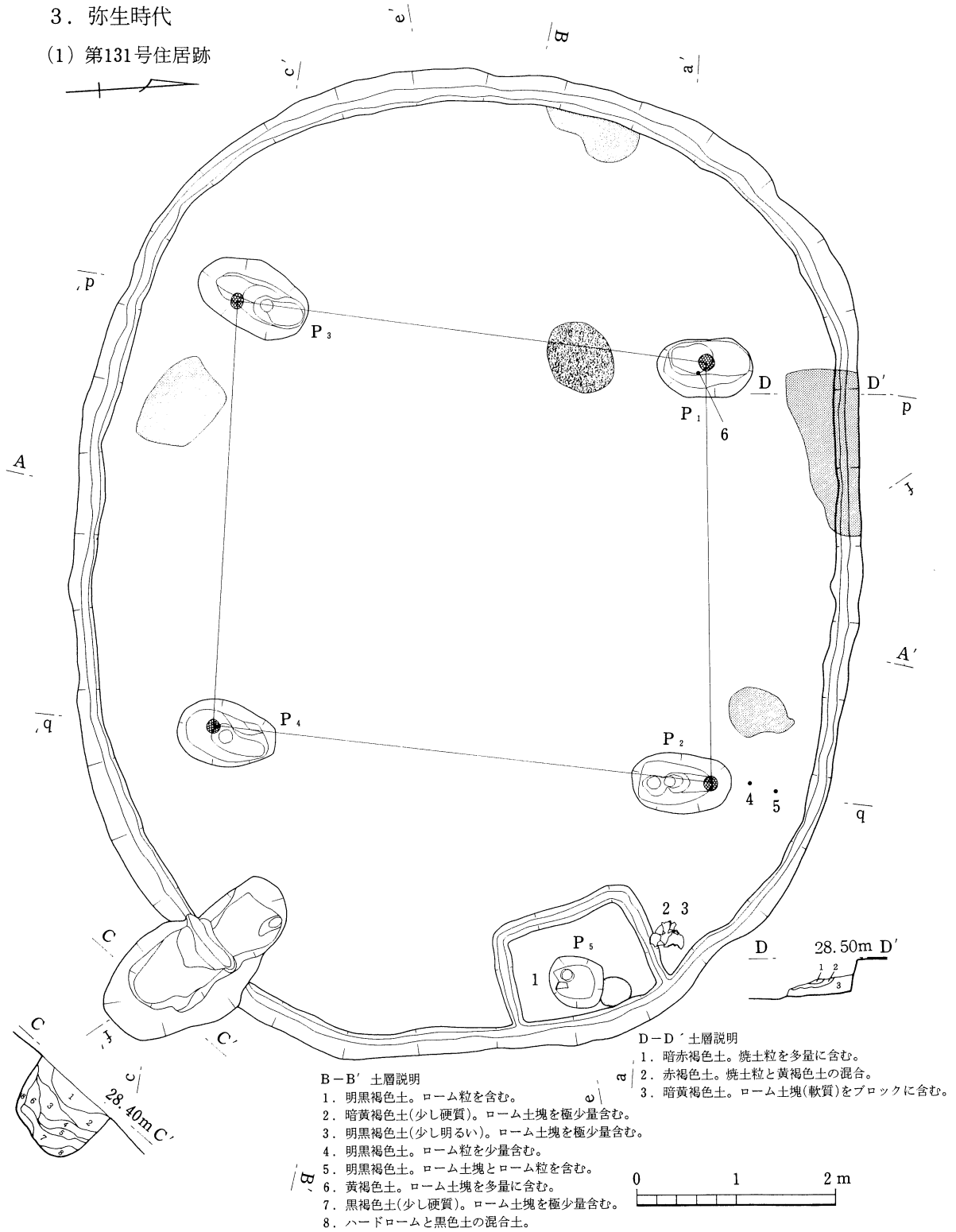
No.３は、No.１・２と同一個体と推定され、底部片である。底部全体の80％を残存する。底径は、6.9cmとみられ、文様は、底部付近まで、No.２と同様な沈線に区画された縦位の無文帯と斜行縄文帯が底下位付近まで施文されている。

No.４は、鉢の胴下位片と推定される。文様は、縦走する櫛目文を配し、下位では施文されない。内面はヘラナデがなされる。器厚は、1.0cm、胎土は、緻密、焼成は、少し不良、色調は、両面とも淡褐色一部暗褐色である。当破片は、No.５と同一個体と考えられる。

No.５は、鉢の胴上部から口縁部片で、１／４程残存している。口縁部は、内傾し、最大径を、口縁部下位にもつ。文様は、口縁部上位が、ヘラナデによる無文帯で、下位に太い横位の沈線が回り、胴部は、縦走する櫛目文を配する。

3．弥生時代

(1) 第131号住居跡

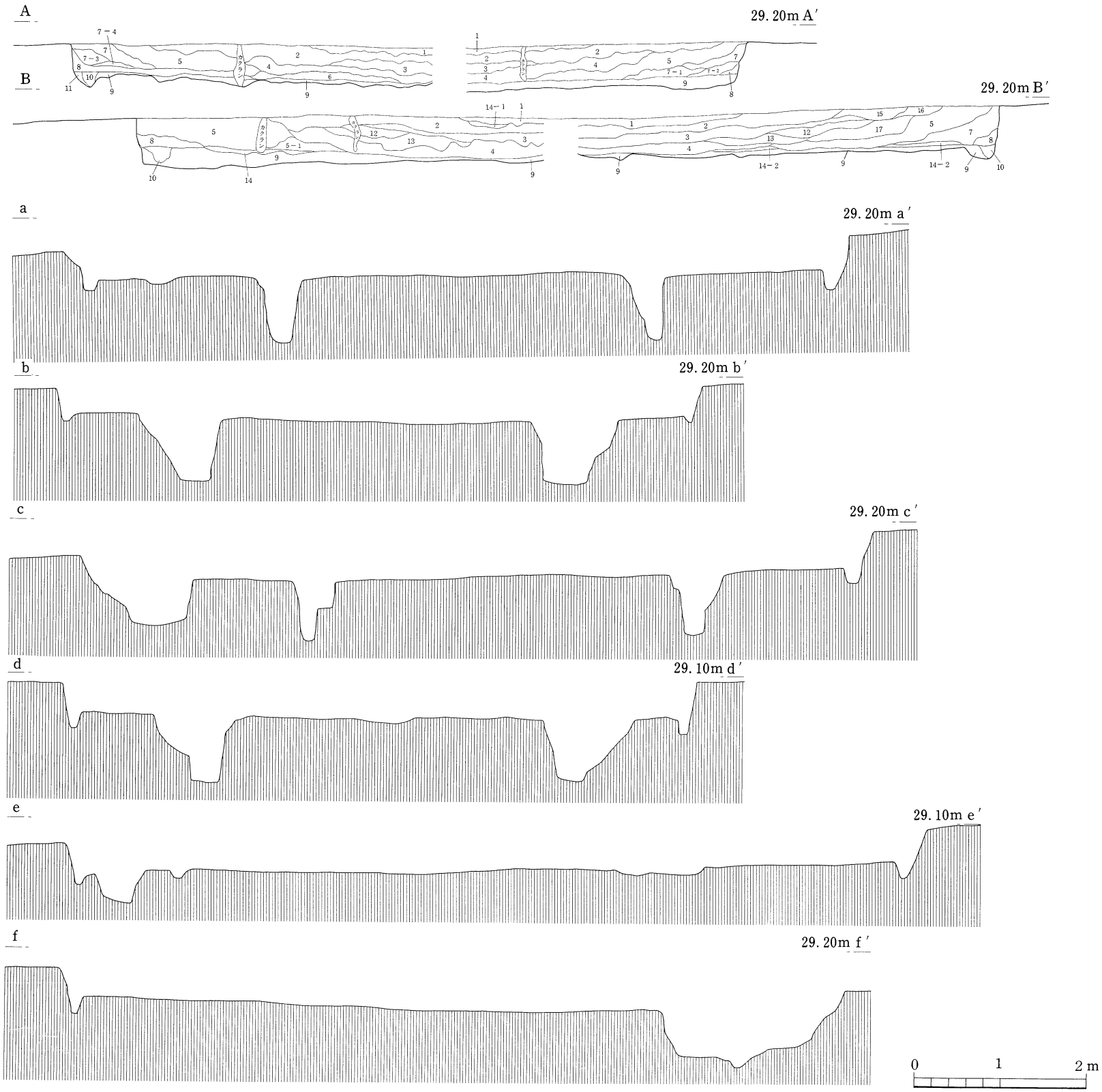


B－B′ 土層説明
1．明黒褐色土。ローム粒を含む。
2．暗黄褐色土(少し硬質)。ローム土塊を極少量含む。
3．明黒褐色土(少し明るい)。ローム土塊を極少量含む。
4．明黒褐色土。ローム粒を少量含む。
5．明黒褐色土。ローム土塊とローム粒を含む。
6．黄褐色土。ローム土塊を多量に含む。
7．黒褐色土(少し硬質)。ローム土塊を極少量含む。
8．ハードロームと黒色土の混合土。

D－D′ 土層説明
1．暗赤褐色土。焼土粒を多量に含む。
2．赤褐色土。焼土粒と黄褐色土の混合。
3．暗黄褐色土。ローム土塊(軟質)をブロックに含む。

0　1　2 m

第26図　第131号住居跡実測図



第131号住居跡土層説明

1．黒色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。
2．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。焼土粒を極少量含む。
3．黒褐色土(暗い)。淡褐色土塊(軟質)を含む。
4．黄褐色土(少し暗い)。黒色土塊(軟質)を多量に含む。
5．黄褐色土。黒色土塊(軟質)を少量含む。
5－1．軟質
6．黄褐色土(明るい)。黒色土塊(軟質)を少量含む。
7．黄褐色土(暗い)。黒色土塊(軟質)をブロック状に含む。
7－1→7－2→7－3しだいに暗くなる。
7－4．焼土粒を含む。
8．暗褐色土。黒褐色土と褐色土が斑点状に混合。
9．褐色土(硬質)。ローム土塊をブロック状に含む。黒色土塊を少量含む。
10．褐色土(軟質)。ローム土塊をブロック状に含む。
11．褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
12．黄褐色土。黒色土粒と黄色土粒の混合土。
13．黄褐色土(暗い)。黒色土粒を多量に含む。
14．黄褐色土。ローム土塊をブロック状に含む。焼土粒を含む。
14－1．焼土粒を多量に含む。
14－2．ローム土塊を多量に含む。
15．暗褐色土(明るい)。黒色土塊を斑点状に含む。
16．明黒褐色土。黄色土塊を斑点状に含む。
17．暗褐色土(少し硬質)。黒色土粒を多量に含む。

第８表　第131号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端		下端		深さ
	長径	短径	長径	短径	
P1	98	60	41	30	78
P2	101	60	14, 11	13, 11	77
P3	116	71	13	13	70
P4	100	66	14	14	74
P5	57	51	43	34	39

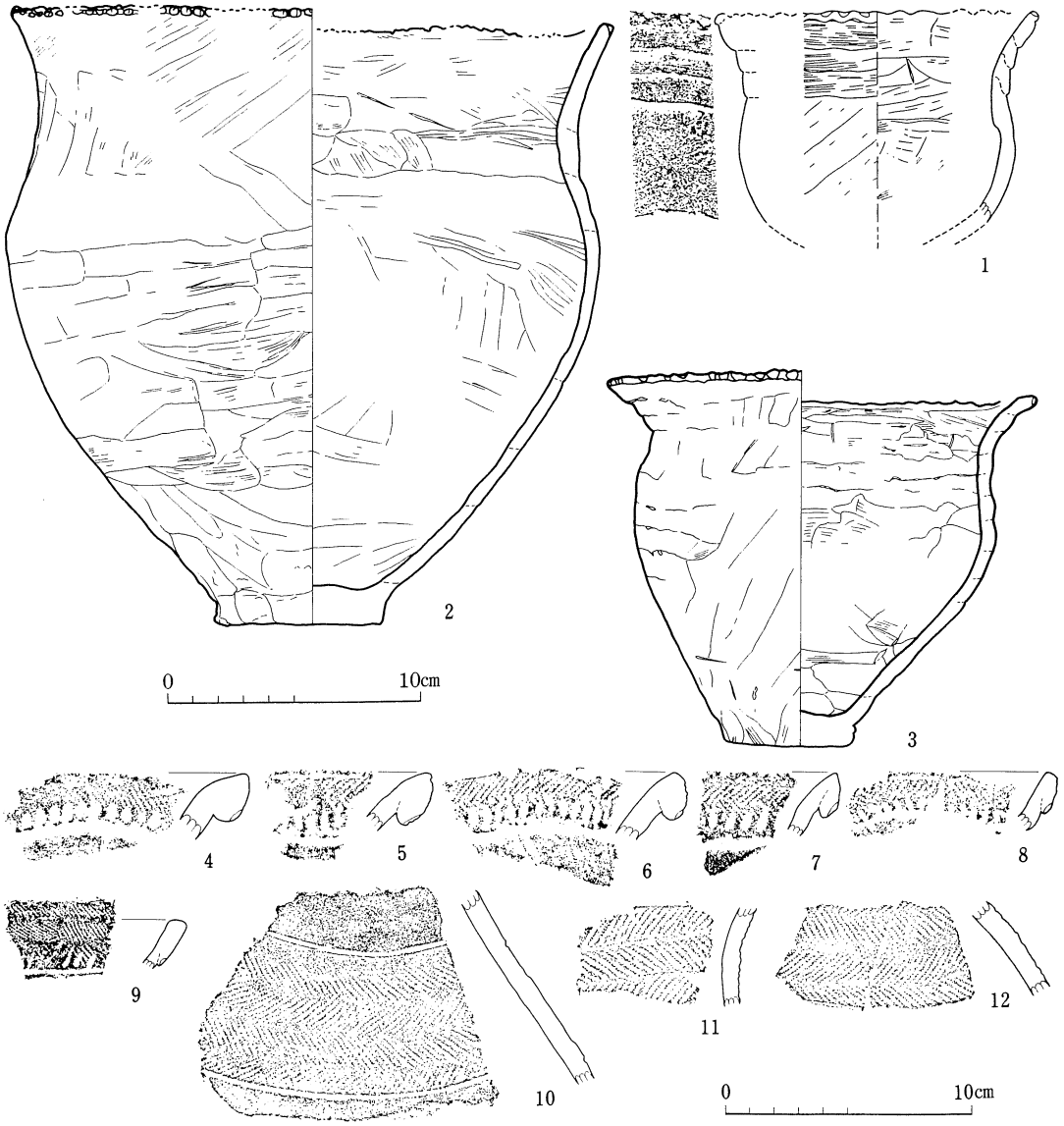
第27図　第131号住居跡土層セクション図及び断面図

第131号住居跡は、調査地区の北東側に位置し、北側と東側の小谷に近く、北へ30m、東へ約15mでそれぞれ傾斜面となる地点である。平面形体は、長円形を呈し、いわゆる小判型である。規模は、長軸10.15m、短軸8.00m、主軸方位は、長軸方向を測り、N－72°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で42cmをはかり、しっかりしている。床面は、ほぼ平坦で、焼土の流れ込みが4ヶ所みられる。床面積は、約60.07㎡である。壁溝は、ほぼ全周し、下端幅は、4～13cm、深さは12～20cmを測る。床面内のピットは、5本検出され、P_1～P_4が主柱穴と考えられ、掘り方が各々長円形で、竪穴の短軸とピットの長軸が一致する様な形体を示す。P_2は、下端が2ヶ所みられる。また、柱のあたり痕跡が4本とも認められるが、ピットの下端とは一致しない。主柱穴間の距離は、あたり痕跡の中心点間で測ると、P_1～P_2が4.25m、P_2～P_4が5.07m、P_4～P_3が4.33m、P_3～P_1が4.78mである。P_5は、北東側の壁近くに有り、周囲に壁溝から続く方形の溝が存在する。溝の幅は、上端幅12～19cm、最深部は、床面より8cmをはかる。さらに、南東側床面に土坑状の落ち込みが存在する。平面形は、不整の長円形で、長径2.13m、短径1.12m、深さは、竪穴壁外より計り、65cmである。長軸方位は、N－38°－Wを示す。土坑の南側は、竪穴外に突出する。底部は、ほぼ平坦であり、特に固い面などは認められない。底部のほぼ中央に横切る溝が存在する。竪穴住居跡の壁溝より、レベルが約55cm低いが位置的に合致するような形態をもつ。本遺跡は、覆土が竪穴と同一であることと、底部に存在する溝が竪穴の壁溝と位置が一致することなどから竪穴に伴うと考えている。炉跡は、北東側床面でP_1とP_3の間やややP_1寄りに存在する。平面形体は、長円形で、大きさは、長軸

第9表　第131号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図281	a.(甕) b.P5内 c.胴部から口縁部片	口径(13.1) 胴部最大径(11.2)	d.緻密 e少し不良	甕の胴部から口縁部で球状の胴部から外反する口縁部をもつ、最大径は、口縁部にある。輪積み痕は3段有り、口唇部は波状を呈する。	胴部=斜め方向のヘラナデ 口縁部=粘土ヒモを三段に積み上げ、指で若干ナデている。 口唇部=指の押圧による波状口縁を呈する。 〈色調〉淡褐色、黒褐色	胴部=横及び斜め方向のヘラナデ 口縁部=横方向のヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図282	a.(甕) b.北東側床面直上 c.全体の80%の残存	口径24.4 胴部最大径24.1 底径6.8 器高25.2	d.緻密 e.少し不良	平底の底部より、わずかに直立して、胴部は、大きく開きぎみに立ち上がり、胴部最大径は、上位にある。口頸部でやや内傾し、口縁部は、外反する。	胴下位=縦及び斜め方向のヘラケズリ 胴中部=横及び斜め方向のヘラナデ 口縁部=縦方向のヘラケズリの後、ユビナデ、一部に粘土紐積み上げ痕がある。上部ヘラナデ 口唇部=竹管状工具の押圧による波状文 〈色調〉淡褐色、黒褐色	胴部=ヘラナデの後、指ナデ、一部に横方向のヘラミガキ 口縁部=横方向のヘラミガキ、指痕跡有り 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色
図283	a.甕 b.北東側床面直上 c.胴部から口縁部の30%を欠損	口径17.5 胴部最大径14.8 底径5.0 器高15.3	d.緻密 e.普通	平底の厚い底部より斜めに立ち上がり、胴中位に最大径をもつ。口頸部で内傾し口縁部は、外反する。	胴部下位=ヘラナデツケ 胴部=縦及び横方向のヘラナデ、一部上位に粘土紐積み上げ痕有り 口縁部=粘土紐痕が残る 口唇部=指の押圧により波状を呈する。 〈色調〉黒褐色、暗褐色	全体にヘラナデの後、指ナデ、口縁部に粘土紐積み上げ痕(2段)有り。 〈色調〉褐色、一部暗褐色。

78cm、短軸64cmである。覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の状況を示す。出土遺物は、No.1がP5内より、No.2・3が、東側のP5を囲む方形区画の隣接床面、No.4・5は、北東側床面のP2付近より、No.6が北西側床面のP1内より各々出土している。他にNo.7～No.12までの小片を取り上げたが、これらは、すべて覆土下位よりの出土である。



第28図　第131号住居跡出土遺物実測図

(2) 第136号住居跡

調査地区の北東側に位置し、第131号住居跡より西へ約6m離れた地点である。平面形体は、楕円形にちかい隅円方形で、規模は、長軸5.03m、短軸4.35m、主軸方位は、長軸方向を測り、N

第10表　第131号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.器厚	器質 c.胎土 d.焼成	形態、成整形、文様等の特徴及び色調	出土位置他
図28 4	a.(壷) b.1.1cm	c.砂粒を含む。 d.少し不良	口縁部片で、複合口縁を呈し、右傾の斜縄文を配する。複合口縁端部には、押捺による刻目がある。〈色調〉外面=淡褐色、内面=暗赤褐色	P_2付近床面 久ケ原式
図28 5	a.(壷) b.0.75cm	4と同様	口縁部片で、複合口縁を呈し、左傾の斜縄文を配する。端部に、押捺による刻目がある。また、体部には、赤彩がなされる。〈色調〉淡褐色	4と同様
図28 6	a.(壷) b.0.9cm	4と同様	4と同様 〈色調〉外面=暗褐色、暗赤褐色　内面=暗赤褐色	P_1内 久ケ原式
図28 7	a.(壷) b.0.7cm	4と同様	口縁部片で、複合口縁を呈し、羽状縄文を配する。複合口縁端部には、押捺による刻目がある。〈色調〉両面淡褐色	覆土下位 久ケ原式
図28 8	a.(壷) b.0.7cm	c.緻密 d.少し不良	口縁部片で、複合口縁を呈し、斜縄文を左傾と右傾を重ねて施文している。複合口縁端部には、押捺による刻目を有する。〈色調〉暗褐色	7と同様
図28 9	a.(壷) b.0.8cm	c.緻密 d.わずかに不良	口縁部片で、薄い複合口縁を呈し、羽状縄文を配して、複合口縁端部には、押捺による刻目を施す。〈色調〉外面=黒褐色、内面=淡褐色	7と同様
図28 10	a.(壷) b.0.7～0.8cm	c.砂粒と石英、長石粒を多く含む。 d.やや不良	壷の胴部片で、単節のＲＬ、ＬＲの羽状縄文を２段、横位に配し、その上下を１本の沈線が横位に走る。また、その上下は、無文部でヘラミガキ後、赤彩がなされる。〈色調〉外面=暗茶褐色、内面=褐色	7と同様
図28 11	a.(壷) b.0.7～0.75cm	c.小礫１～２㎜を多く含む。 d.普通	壷の頸部片で、単節の羽状縄文を２段? に配するとみられる。〈色調〉両面褐色	7と同様
図28 12	a.(壷) b.0.7～0.9cm	c.砂粒を多く含む。 d.やや不良	壷の胴部片で、単節の羽状縄文を２段? に配するとみられる。〈色調〉外面=淡褐色一部暗褐色、内面=暗褐色一部黒褐色	7と同様

－63°　－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、しっかりしており、壁高は、最大で48cmである。床面は、平坦で、床面積は、約16.83㎡である。壁溝は、認められない。ピットは、床面内に14本の小ピットが検出された。竪穴の壁より40～50cm離れて存在し、壁と並列するような配置である。特に西側では密集する。P_{14}は、南東側で壁と接し、長円形を呈する。炉は、西側床面中央に有り、不整円形で、長径90cm、短径82cm、深さ９cmをはかる。竪穴の覆土は、自然堆積で、焼土の流れ込みが存在する。出土遺物は、No.１が炉跡周辺、No.２が南側床面、No.３・４は覆土内。

第11表　第136号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図31 1	a.(甕) b.炉内及びその周辺 c.胴部片	胴部最大径 25.0	d.緻密 e.普通	胴部最大径を中位にもつと推定され、頸部は、粘土紐積み上げ痕を残す。	指により、横及び斜め方向にナデており、指頭痕も多く認められている。〈色調〉暗褐色、淡褐色	胴部=ヘラによる横方向のナデの後、指ナデ 頸部=指によるナデ 〈色調〉暗褐色、褐色
図31 2	a.甕→甑 b.南東側床面直上 c.口縁部を欠損、胴部は60%	胴部最大径 24.9	d.緻密 e.不良	底部は、平底で、焼成後に、７㎜程の穿孔がある。胴部最大径は、中位に有る。	胴部下位=縦方向のヘラナデ 胴部=斜め方向のヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉暗褐色、淡褐色	胴部=横及び斜め方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色、淡褐色

第12表　第136号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.器厚	器質 c.胎土 d.焼成	形態、成整形、文様等の特徴及び色調	出土位置他
図31 3	a.(甕) b.0.5～0.6cm	c.緻密 d.やや不良	甕の口縁部片で、指による押圧による波状口縁を呈する。〈色調〉両面とも淡褐色	覆土 久ケ原式
図31 4	a.(甕) b.0.75～0.9cm	c.緻密 d.やや不良	壷の口縁部片で、複合口縁をもつ。ＲＬの単節の縄文を上位に配し、複合口縁の下端部は、押捺による刻目がみられる。一部赤彩 〈色調〉外面=暗赤褐色、淡褐色、内面=暗赤褐色、一部淡褐色	覆土 久ケ原式

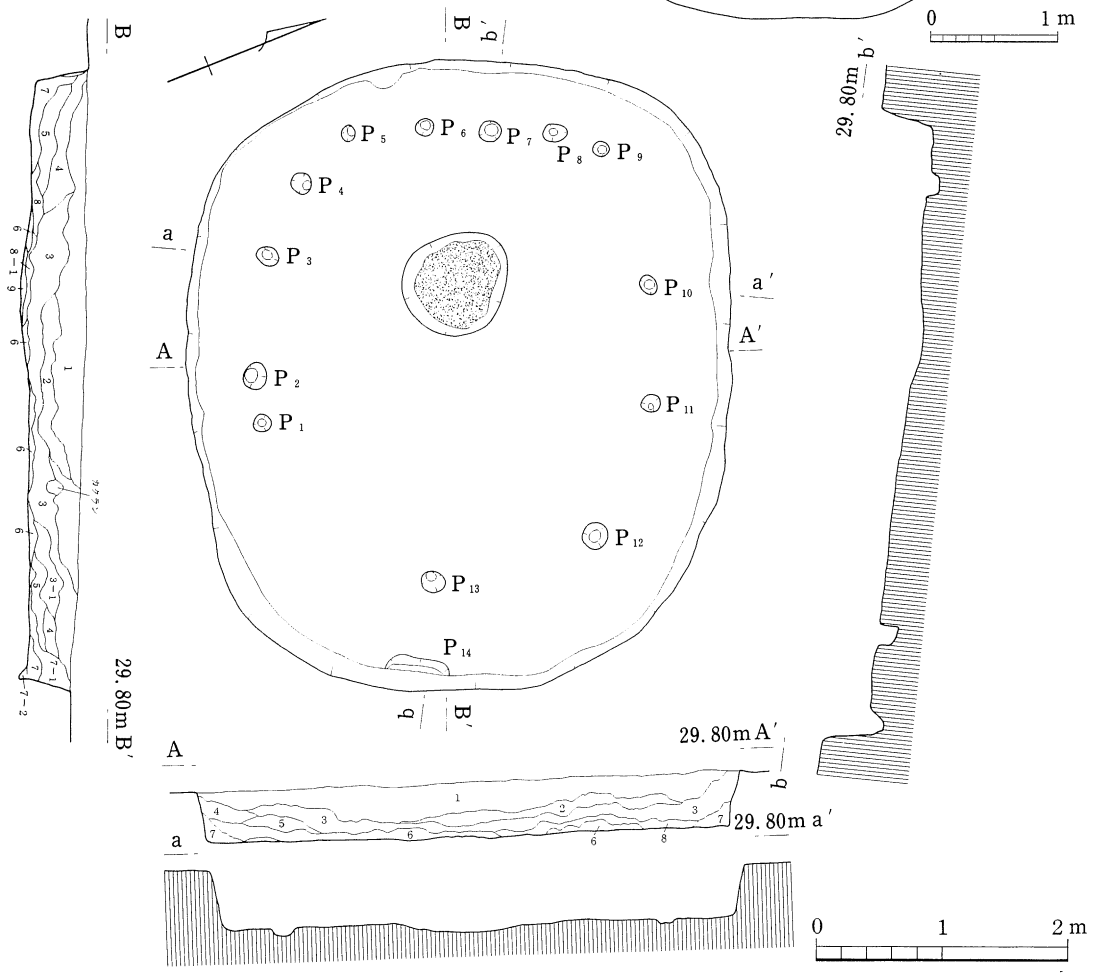
No.５は、砥石で、白褐色を呈し、凝灰岩製である。長さ5.2cm、幅3.65cm、厚さ2.55cm、重量76ｇを計る。６角柱状で、６面とも使用痕が認められる。覆土下位の出土である。

第13表　第136号住居跡ピット計測表(cm)

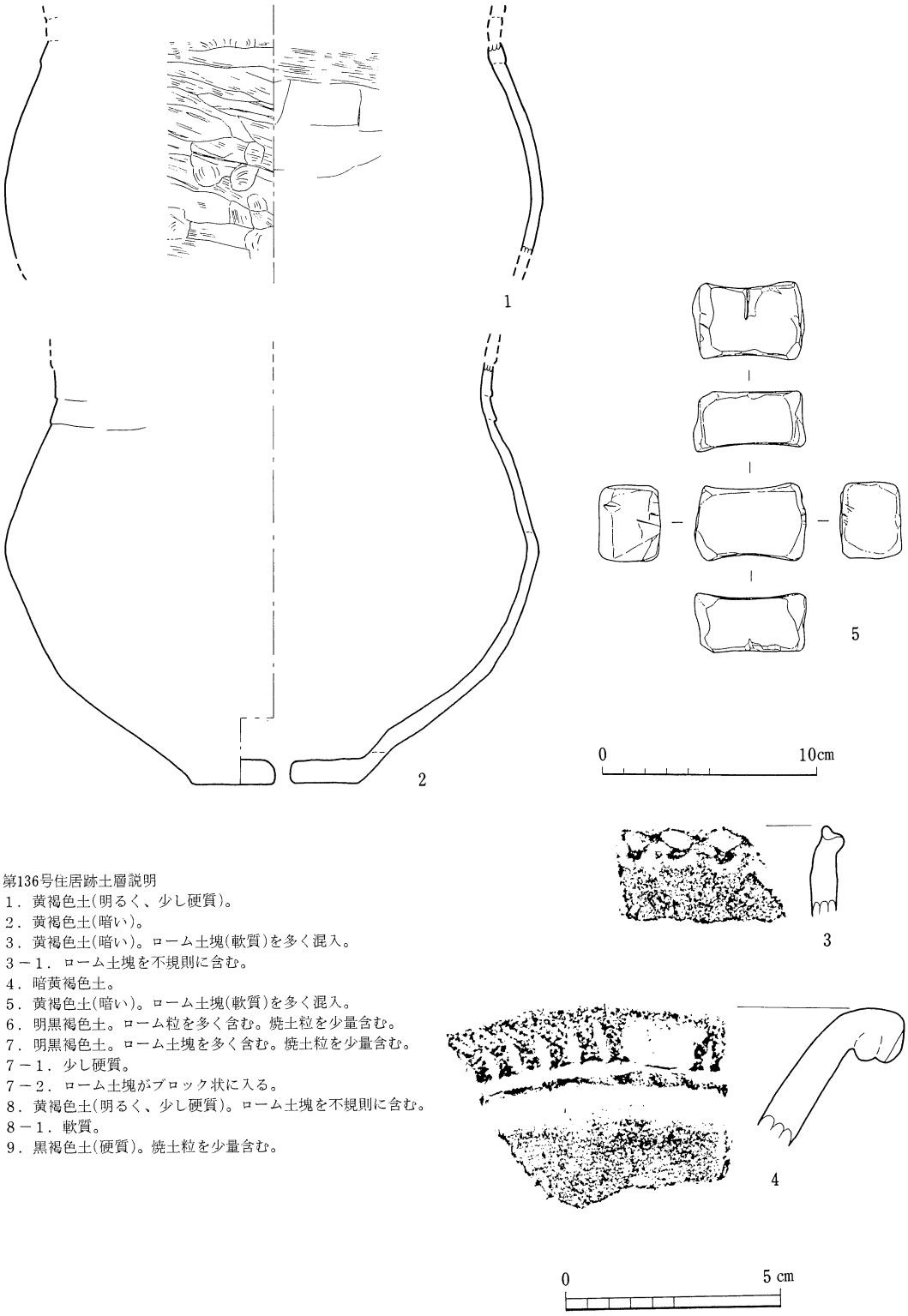
ピット名	上端 長径	上端 短径	下端 長径	下端 短径	深さ
P1	15	14.5	7	6.5	3.8
P2	21.5	18.5	11	10	8.3
P3	19	15	9	7	4.6
P4	17	16.5	8	7	6.9
P5	14.5	11.5	8.5	6	5.3
P6	15	14	8	7	7.0
P7	17	17	10.5	9.5	7.0
P8	20	14.5	7	5	6.8
P9	14	13	7	7	4.9
P10	16.5	13.5	8	7	3.2
P11	16.5	14.5	5	4	7.1
P12	21	21	10	8.5	3.7
P13	19.5	16.5	8.5	7	13.9
P14	51	12.5	45	5	7.9



第29図　第136号住居跡遺物･焼土出土状況



第30図　第136号住居跡実測図

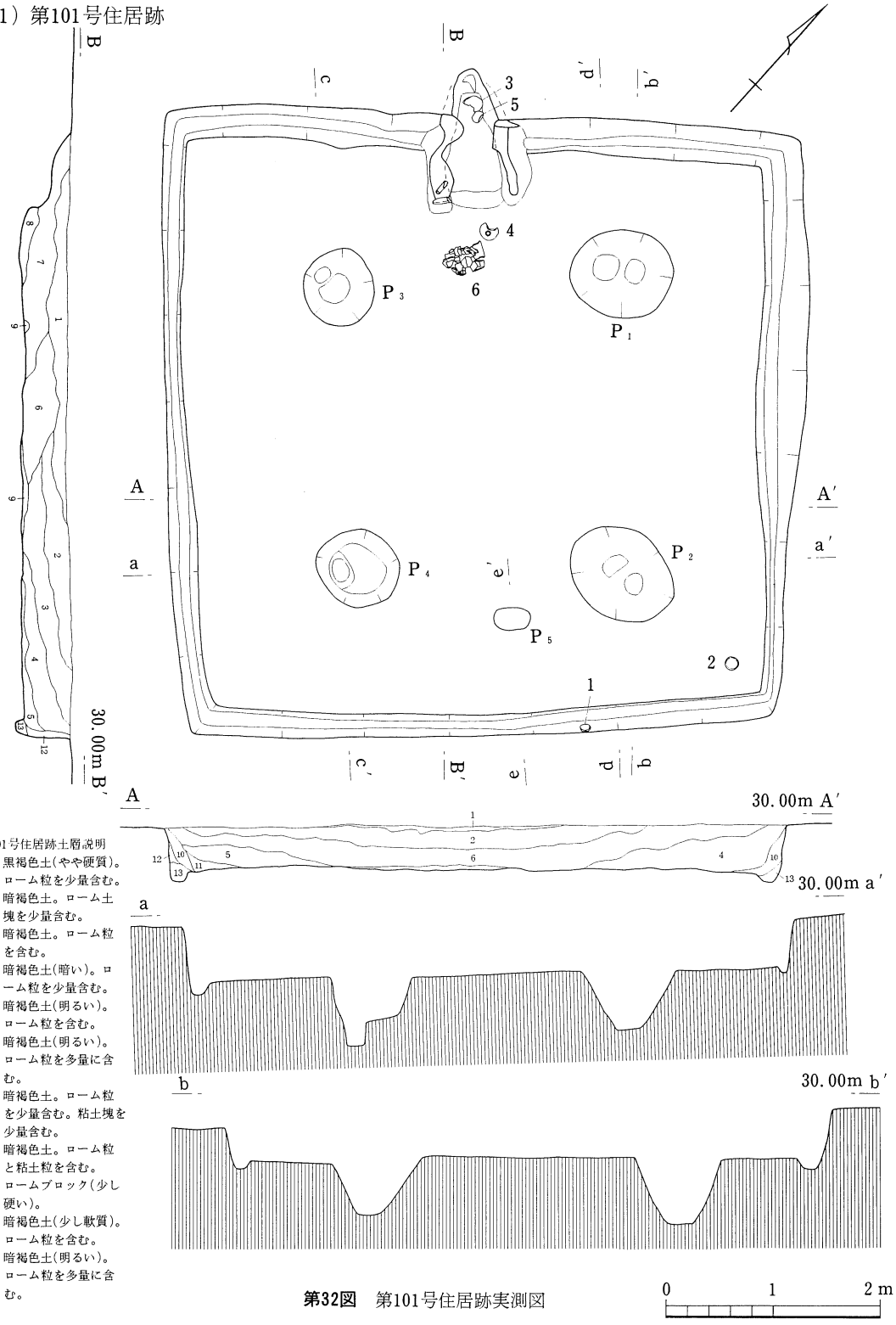


第136号住居跡土層説明
1．黄褐色土(明るく、少し硬質)。
2．黄褐色土(暗い)。
3．黄褐色土(暗い)。ローム土塊(軟質)を多く混入。
3－1．ローム土塊を不規則に含む。
4．暗黄褐色土。
5．黄褐色土(暗い)。ローム土塊(軟質)を多く混入。
6．明黒褐色土。ローム粒を多く含む。焼土粒を少量含む。
7．明黒褐色土。ローム土塊を多く含む。焼土粒を少量含む。
7－1．少し硬質。
7－2．ローム土塊がブロック状に入る。
8．黄褐色土(明るく、少し硬質)。ローム土塊を不規則に含む。
8－1．軟質。
9．黒褐色土(硬質)。焼土粒を少量含む。

第31図　第136号住居跡出土遺物実測図

4．古墳時代、奈良･平安時代の遺構と遺物

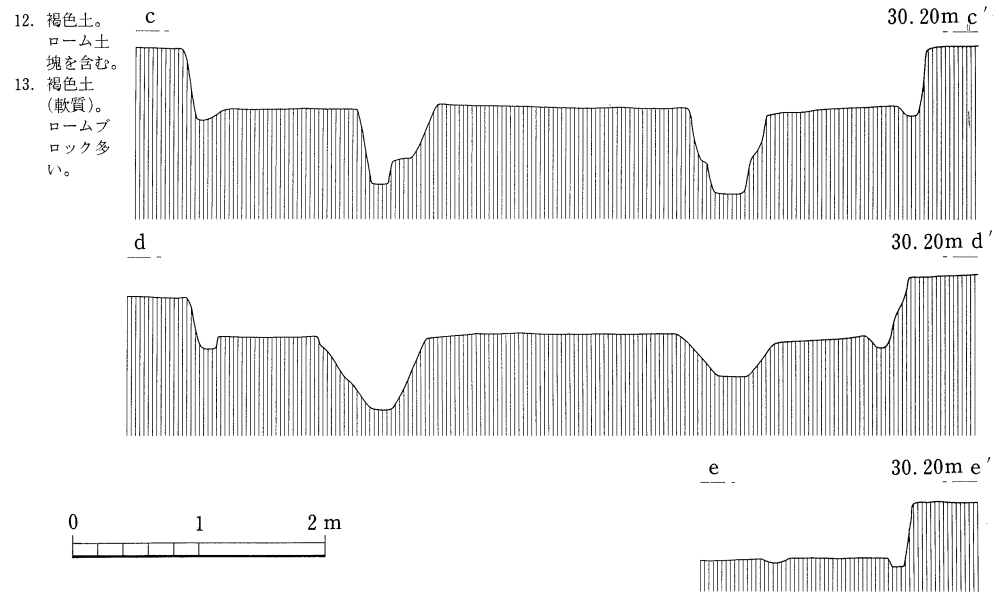
(1) 第101号住居跡



第101号住居跡土層説明

1．黒褐色土(やや硬質)。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土。ローム土塊を少量含む。
3．暗褐色土。ローム粒を含む。
4．暗褐色土(暗い)。ローム粒を少量含む。
5．暗褐色土(明るい)。ローム粒を含む。
6．暗褐色土(明るい)。ローム粒を多量に含む。
7．暗褐色土。ローム粒を少量含む。粘土塊を少量含む。
8．暗褐色土。ローム粒と粘土粒を含む。
9．ロームブロック(少し硬い)。
10．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を含む。
11．暗褐色土(明るい)。ローム粒を多量に含む。

第32図　第101号住居跡実測図



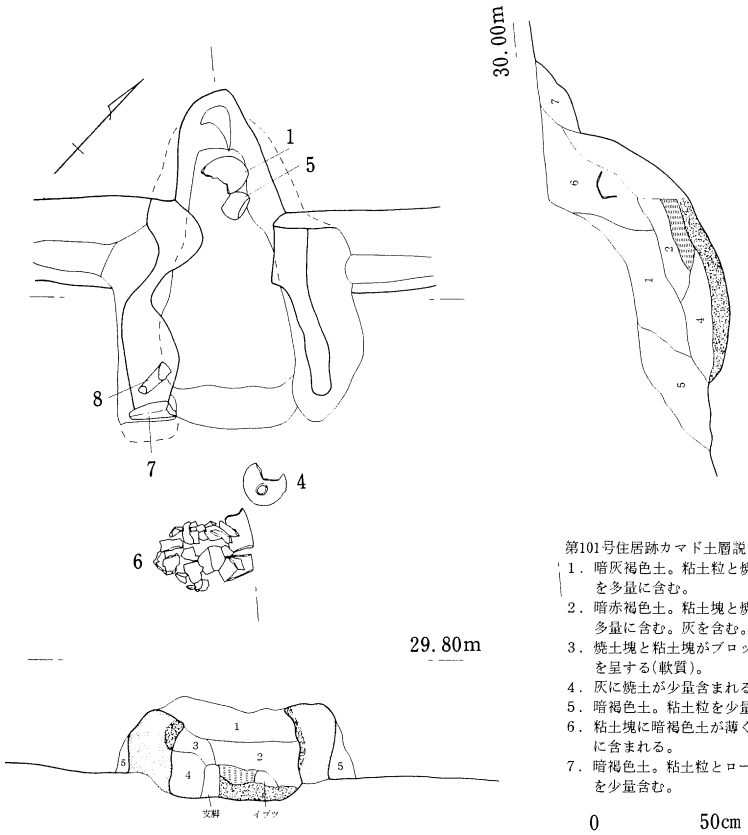
第33図　第101号住居跡断面図

第101号住居跡は、調査地区の北西側に位置し、北側約10mで小谷に傾斜する地点である。平面形体は、ほぼ方形で、わずかに胴張りがみられる。規模は、長軸6.00m、短軸5.80m、長軸方位は、N－42°－Wを示す。壁の立ち上がりは、しっかり残っており、残存壁高は、最大で53cmをはかる。床面は、ハードローム層内のレベルに構築され、平坦で、踏み固められた面は、カマド前面から床面中央及びP_5付近まで認められるが、やや不明確である。床面積は、約31.30㎡である。壁溝は、全周し、特に北東側が幅広い。幅は下端値で3～13cm、深さは、3～14cmをはかる。床面内のピットは、5本認められ、P_1～P_4は、方形に組み合わされ、主柱穴とみられる。各々下端が2ヶ所認められる。P_5は、わずかに窪んでいる程度の深さである。カマドは、北西側壁の中央に位置し、燃焼部には、焼土と灰を多く堆積する。両袖は良く残り、内壁は焼土化している。天井部は、残存せず、煙道部は、竪穴壁外に約90cm入り込み、2段の立ち上がりを呈する。竪穴の覆土は、自然堆積である。出土遺物は、No.1坏が、東側壁付近の覆土中位より、No.2坏が、東側床面隅付近より、No.3、5の鉢は、カマド煙道部より、No.4とNo.6は、カマド前面の床面より、またNo.7、8の土製支脚が、カマド左袖前面の床面直

第14表　第101号住居跡出土遺物観察表（1）

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図35 1	a.坏 b.東側壁付近覆土 c.口縁部の一部欠損	口径11.6 最大径11.9 (口縁部) 器高4.3	d.緻密 e.やや不良	丸底で椀状に立ち上がり、口縁部で内湾ぎみに曲がる。	全面=横方向のヘラナデ、全体に少し摩耗している 〈色調〉黒褐色、暗褐色	体部=ヘラミガキ 口縁部=横ナデ(指) 〈色調〉暗茶褐色
図35 2	a.坏 b.東側隅床面直上 c.口唇部は10%残存	口径(11.7) 最大径 (11.8) 器高4.0	d.緻密 e.やや不良	丸底で椀状を呈し、口縁部で少し内湾ぎみに立ち上がる。	体部=横方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデの後、ヘラによる斜め方向のナデ 全体に少し摩耗 〈色調〉黒褐色、一部淡褐色	体部=ヘラミガキ 口縁部=横ナデ 一部に剝離がある 〈色調〉暗褐色、暗茶褐色

上より出土している。No.7は、方柱状を呈し、上端が細くなる形体である。残存高は、17.8cm、上端幅は、3.6cmをはかる。下部は、欠損している。色調は、暗橙褐色を呈する。No.8は、上部と下部を欠損するが、No.7と同様に方柱形で上端が細くなる形体とみられる。No.7より、錘形にちかいと推測される。色調は、暗橙褐色を呈している。



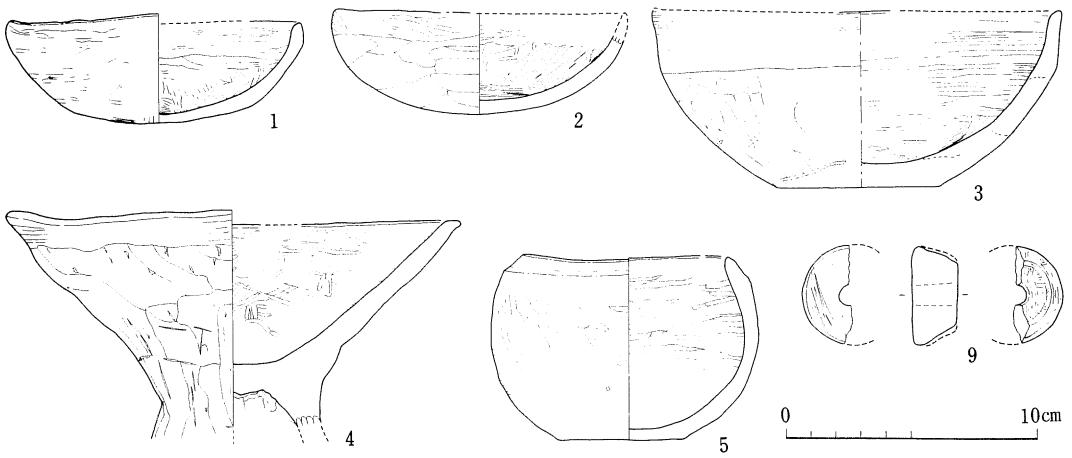
第101号住居跡カマド土層説明

1．暗灰褐色土。粘土粒と焼土粒を多量に含む。
2．暗赤褐色土。粘土塊と焼土を多量に含む。灰を含む。
3．焼土塊と粘土塊がブロック状を呈する(軟質)。
4．灰に焼土が少量含まれる。
5．暗褐色土。粘土粒を少量含む。
6．粘土塊に暗褐色土が薄く全体に含まれる。
7．暗褐色土。粘土粒とローム粒を少量含む。

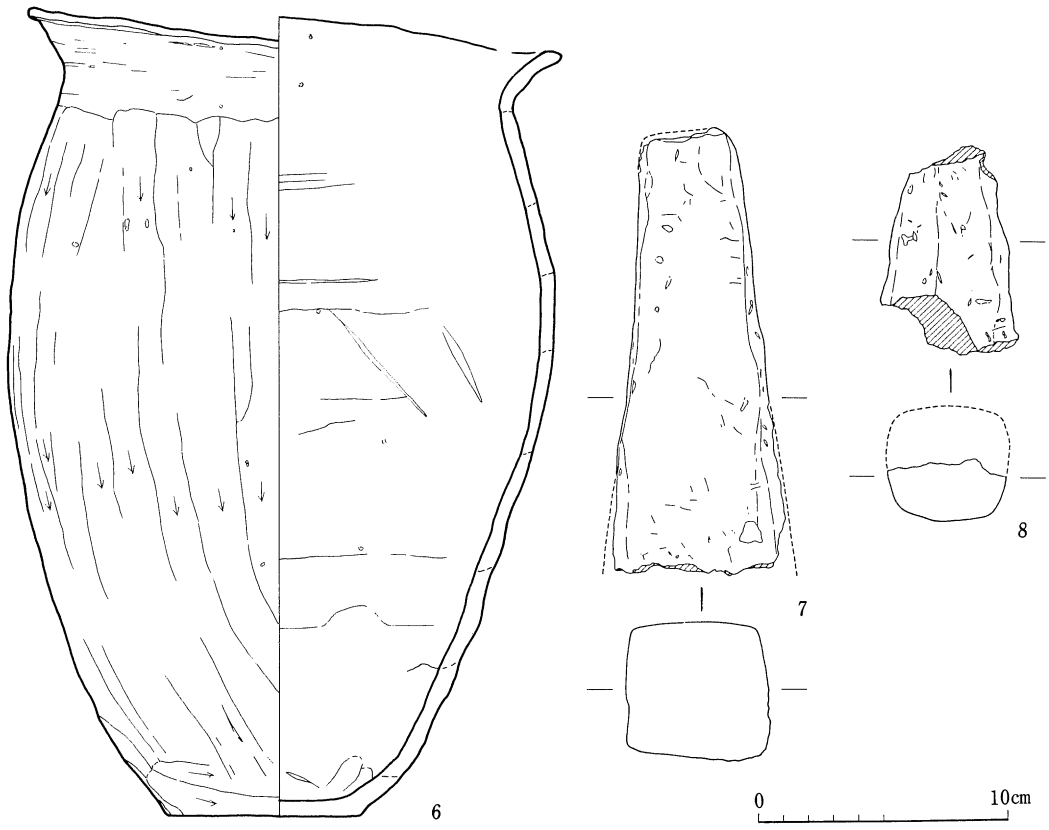
第15表　第101号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端 長径	上端 短径	下端 長径	下端 短径	深さ
P1	98	82	25	24	33
			23	18	64
P2	106	82	24	14	58
			21	17	55
P3	73	65	30	22	65
			17	12	44
P4	76	70	22	14	64
P5	54	46	34	21	4

第34図　第101号住居跡カマド実測図



第35図　第101号住居跡出土遺物実測図(1～5)

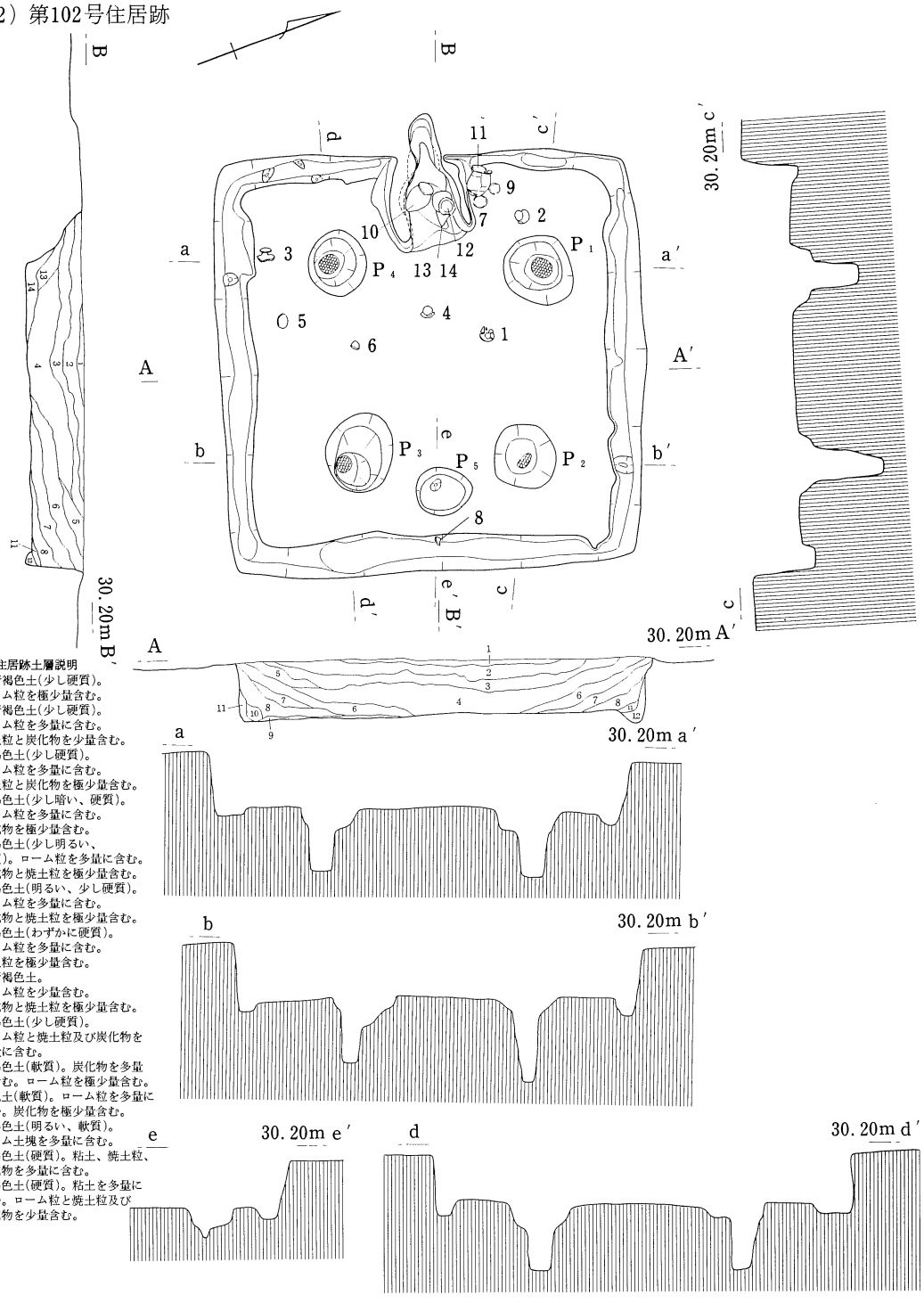


第36図　第101号住居跡出土遺物実測図（６～８）

第16表　第101号住居跡出土遺物観察表（２）

挿図番号	a．器種 b．出土位置 c．遺存度	法量(cm)	器質 { d．胎土 e．焼成 }	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図363	a．坏 b．カマド煙道部内 c．全体の3/4の残存	口径16.3 底径6.5 器高7.0	d．緻密 e．少し不良	平底より椀状に立ち上がり、口縁部では直立ぎみになるためわずかな稜をもつ。	体部=縦方向のヘラケズリの後、横方向のヘラナデ 口縁部=横ナデ 全体に少し摩耗 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	体部=ヘラミガキ 口縁部=横ナデ 表面の剝離が多い 〈色調〉淡褐色
図364	a．高坏 b．カマド前面床直 c．脚部を欠損する	口径18.1 胴上位6.2	d．１㎜前後の小礫を少量含む e．やや不良	しっかりとした脚部をもち、坏部は、逆ハの字状に立ち上がる。	脚部上位～坏体部=縦方向のヘラケズリ 坏口縁部=横ナデ 摩耗多い 〈色調〉淡褐色、淡茶褐色	胴部上位=ヘラケズリダシ 坏部全面=ヘラナデ 摩耗多い 〈色調〉淡褐色、暗褐色
図365	a．鉢 b．カマド煙道部内 c．口唇部の一部欠損	口径８．２ 体部最大径10．７ 器高７．３ 底径５．０	d．１㎜前後の小礫を少量含む e．少し不良	平底より体部は椀状に立ち上がり、口縁部は内傾する。	体下部は摩耗が多い 体上部=ヘラミガキ 口縁部=横ナデ 〈色調〉淡褐色、暗褐色	体下部は摩耗が多い 体上部=ヘラミガキ 口縁部=横ナデ 〈色調〉淡褐色
図366	a．甕 b．カマド前面床面直上 c．胴部～口縁部90%の残存	口径21．２ 胴部最大径21．４ 底径７．６ 器高32．２	d．２㎜前後の小礫を含む e．少し不良	平底で、胴部最大径は上位にあり、口縁は、くの字状を呈する。	胴下位=横方向のヘラケズリ 胴部=縦方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 〈色調〉暗褐色、一部黒褐色、茶褐色	胴部=横方向のヘラナデの後、布状工具によるナデ 口縁部=横ナデ 剝離が多い 〈色調〉暗褐色、一部淡褐色

（2）第102号住居跡



第102号住居跡土層説明

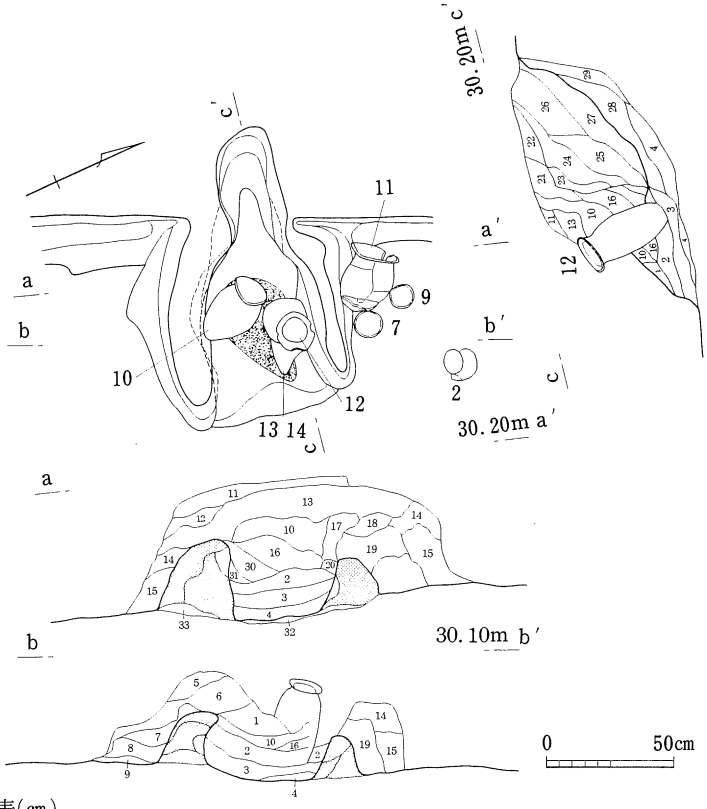
1．極暗褐色土(少し硬質)。
ローム粒を極少量含む。
2．極暗褐色土(少し硬質)。
ローム粒を多量に含む。
焼土粒と炭化物を少量含む。
3．暗褐色土(少し硬質)。
ローム粒を多量に含む。
焼土粒と炭化物を極少量含む。
4．暗褐色土(少し暗い、硬質)。
ローム粒を多量に含む。
炭化物を極少量含む。
5．暗褐色土(少し明るい、
軟質)。ローム粒を多量に含む。
炭化物と焼土粒を極少量含む。
6．暗褐色土(明るい、少し硬質)。
ローム粒を多量に含む。
炭化物と焼土粒を極少量含む。
7．暗褐色土(わずかに硬質)。
ローム粒を多量に含む。
焼土粒を極少量含む。
8．極暗褐色土。
ローム粒を少量含む。
炭化物と焼土粒を極少量含む。
9．暗褐色土(少し硬質)。
ローム粒と焼土粒及び炭化物を
多量に含む。
10．黒褐色土(軟質)。炭化物を多量
に含む。ローム粒を極少量含む。
11．褐色土(軟質)。ローム粒を多量に
含む。炭化物を極少量含む。
12．暗褐色土(明るい、軟質)。
ローム土塊を多量に含む。
13．暗褐色土(硬質)。粘土、焼土粒、
炭化物を多量に含む。
14．暗褐色土(硬質)。粘土を多量に
含む。ローム粒と焼土粒及び
炭化物を少量含む。

0　1　2m

第37図　第102号住居跡実測図

第102号住居跡カマド土層説明

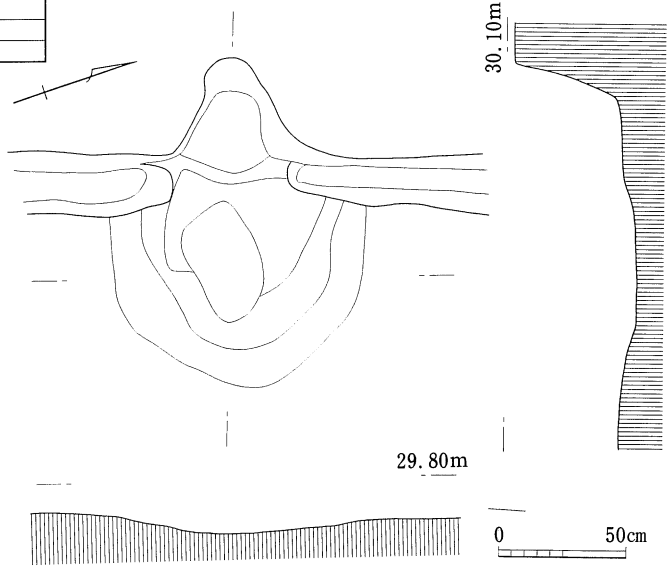
1．白灰色土(硬質)。白灰色粘土を多量に含む。
2．暗赤褐色土(軟質)。焼土塊を多量に含む。
山砂と炭化物を少量含む。
3．極暗灰色土(少し軟質)。山砂を多量に含む。
炭化物と焼土粒を極少量含む。
4．暗褐色土(少し硬質)。山砂を多量に含む。
ローム土塊を少量含む。
5．暗灰色土。白灰色粘土塊を多量に含む。
ローム粒と山砂を少量含む。
6．暗褐色土。炭化物と山砂を少量含む。
粘土塊を極少量含む。
7．暗白灰色土(硬質)。粘土と山砂を多量に含む。
8．暗褐色土(硬質)。山砂とローム粒を少量含む。
9．暗褐色土(硬質)。ローム粒を多量に含む。
山砂を少量含む。
10．白灰色土(少し硬質)。粘土を多量に含む。
11．暗褐色土(硬質)。粘土と山砂を少量含む。
12．白灰色土(硬質)。粘土を多量に含む。
13．極暗褐色土(硬質)。粘土と山砂を少量含む。
炭化物を極少量含む。
14．白灰色土(硬質)。粘土がブロック状に入る。
15．暗褐色土(軟質)。山砂を極少量含む。
16．暗白灰色土(少し軟質)。粘土と山砂を多量に含む。
焼土粒と炭化物を極少量含む。
17．極暗白灰色土(少し軟質)。粘土を多量に含む。
山砂を極少量含む。
18．暗白灰色土(わずかに硬質)。粘土を多量に含む。
19．暗褐色土(少し軟質)。粘土を極少量含む。
20．暗赤褐色土(軟質)。山砂と焼土粒を少量含む。
21．極暗褐色土(少し軟質)。山砂を多量に含む。
焼土粒と炭化物を極少量含む。
22．極暗褐色土(少し軟質)。焼土粒と炭化物を多量に含む。
23．暗黄灰色(少し軟質)。山砂を多量に含む。
24．暗褐色土(軟質)。山砂を多量に含む。焼土粒と炭化物
を極少量含む。
25．極暗灰色土(少し硬質)。山砂を多量に含む。
焼土粒を極少量含む。
26．暗褐色土(少し軟質)。炭化物、焼土粒を含む。山砂を少
量含む。
27．暗黄灰色土(少し軟質)。山砂を多量に含む。
灰と炭化物と焼土を少量含む。
28．暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。焼土と炭化物を極
少量含む。
29．暗灰褐色土(少し軟質)。山砂と粘土を多量に含む。
ローム土塊を含む。
30．暗褐色土(軟質)。焼土を極少量含む。
31．暗赤褐色土(軟質)。粘土の焼土化した土塊を多く含む。
32．暗褐色土。炭化物、焼土、粘土、山砂を少量含む。
33．暗黄灰色土。山砂を多量に含む。粘土を少量含む。



第38図　第102号住居跡カマド実測図

第17表　第102号住居跡ピット計測表(cm)

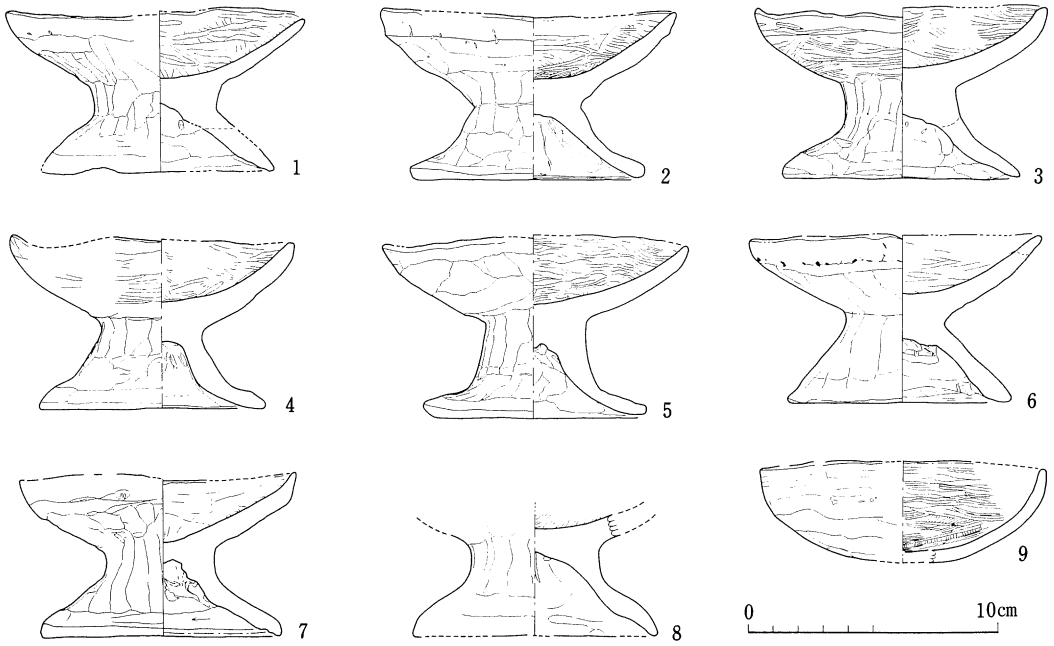
ピット名	上端	下端	深さ
P1	67×61	20×17	59
P2	62×57	32×27	76
P3	72×59	27×19	59
P4	60×52	29×23	57
P5	50×43	41×32	28



第39図　第102号住居跡カマド掘り方実測図

第102号住居跡は、調査地区の北西側に位置し、第103号住居跡から北に約12mの地点である。平面形体は、隅円方形を呈し、規模は、長軸3.87m、短軸3.72m、主軸方位は、短軸方向を測り、N－72°－Wを示す。壁の立ち上がりは、しっかりしており、残存高は、最大で、55cmをはかる。床面は、ハードローム

層内のレベルに設置され、踏み固められた面が、カマド前面から中央部及びP_5付近まで認められる。床面積は、約12.50㎡である。壁溝は、全周し、やや幅広く、小ピットもみられる。幅は、4～27cm、深さは、6～12cmをはかる。床面内のピットは、5本有り、P_1～P_4は、方形に組み合わされ、主柱穴とみられる。各々の下端に柱のあたり痕跡が確認できる。主柱穴間の距離は、柱のあたり痕跡の中心点間を計り、P_1～P_2が1.75m、P_2～P_3が1.60m、P_3～P_4が1.80m、P_4～P_1が1.90mである。P_5は、いわゆる出入口相当施設用のピットと考えられ、底部内に小ピットがある。カマドは、西側壁のほぼ中央に設置され、燃焼部より甕2と土製支脚2が出土している。煙道部は、竪穴壁外に70cmほど掘り込んでいる。竪穴の覆土は、ローム粒を含む暗褐色土を主体とし、自然堆積であるが、焼土粒と炭粒も含んでいる。出土遺物は、No.1・4・6高坏が中央床面、No.3・5高坏が南西側床面、No.8高坏が東側壁溝内、No.2・7高坏、No.9坏、No.11甕がカマド右側床面、No.12・14甕がカマド内より出土している。



第40図　第102号住居跡出土遺物実測図(1～9)

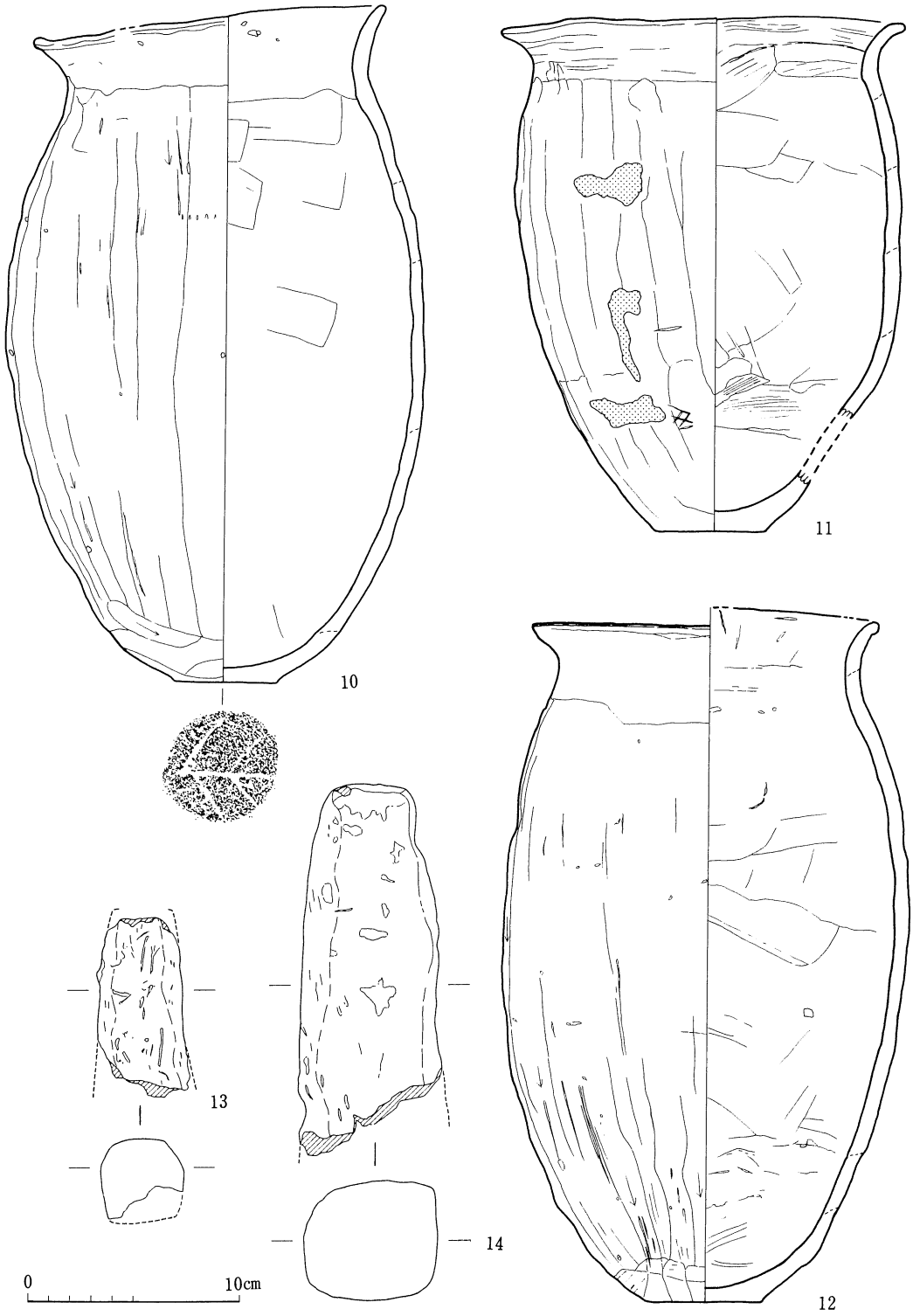
第18表　第102号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図40 1	a.高坏 b.床面中央 c.口縁部は90%、脚下半は40%の残存	口径12.1 脚上位径 5.0 脚下端径 9.5 器高6.5	d.緻密 e.やや不良	脚部はわずかに丸みをもって大きく開いたハの字状に立ち上がり、上位は少し直立し、脚に比して小さな坏部と接合する脚部は、浅い埦状を呈する。	脚裾部=横方向のヘラケズリの後、ヘラナデ 脚上部～坏体部=縦方向のヘラケズリ 口縁部下位=横方向のヘラケズリ 口縁部上位=横ナデ(指) 〈色調〉暗褐色、淡褐色	脚裾部=横方向のヘラケズリの後、ヘラナデ 脚上部=ヘラケズリダシ 坏部=全面ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色

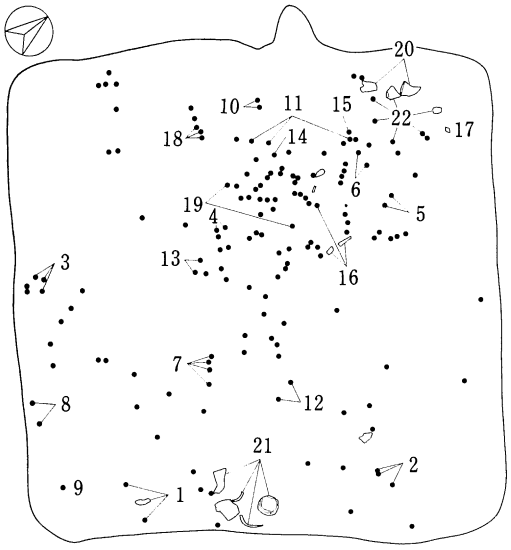
第19表　第102号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図402	a.高坏 b.カマド右側床面直上 c.坏上半部1/3の残存	口径12.0 脚上位径4.3 脚下端径9.5 器高6.5	d.緻密 e.普通	脚部はゆるやかな弧を描いて立ち上がり、上位はわずかに直立する。脚部に比して小さな坏部は浅い椀状を呈している。	脚下位=横方向のヘラナデの後、指ナデ 脚上部～坏体部=縦方向のヘラケズリ 坏体部上位=横方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ	脚部=ヘラケズリダシ 坏部=ヘラミガキ 〈色調〉両面暗褐色
図403	a.高坏 b.南西側床面直上 c.口縁部は80%残存	口径11.8 脚上位径4.6 脚下端径9.6 器高6.9	d.緻密 e.やや不良	図40－２と同様の形態を呈する。	脚裾部=横方向のヘラケズリ 脚上部=縦方向のヘラケズリ 坏体部=横方向のヘラミガキ 口縁部=横ナデ	脚部=ヘラケズリダシ 坏部=ヘラミガキ 〈色調〉両面暗褐色
図404	a.高坏 b.床面中央 c.全体の80%の残存	口径11.7 脚上位径4.1 脚下端径9.2 器高6.9	d.緻密 e.やや不良	脚裾部は、やや膨らむ他は図40－２と同様。	脚裾部=横方向のヘラケズリ 脚下位=指ナデ 脚上部=縦方向のヘラケズリ 坏体部=縦方向のヘラケズリの後、横方向のヘラミガキ 口縁部=横ナデ(指)	〈色調〉両面暗褐色、一部淡褐色
図405	a.高坏 b.南西側床面 c.全体の40%の残存	口径12.4 脚上位径4.1 脚下端径9.0 器高7.4	d.緻密 e.普通	脚裾部は少し横に開き、脚上部は直立ぎみに立ち上がる。脚に比して小さな坏部は、浅い椀状を呈する。	脚裾部=横方向のヘラナデ 脚部=縦方向のヘラケズリ 坏部=横方向のヘラケズリ 指頭痕有り 〈色調〉暗褐色	脚部=ヘラケズリダシ 坏部=ヘラミガキ 〈色調〉脚部=暗褐色 坏部=淡褐色
図406	a.高坏 b.床面中央 c.ほぼ完形	口径11.9 脚上位径3.9 脚下端径9.0 器高6.9	d.緻密 e.やや不良	脚部はハの字状を呈し、脚部に比して小さな坏部は椀状である。	両面とも摩耗多い 脚部～坏体部=ヘラケズリ 口縁部=粘土紐接合痕が残る。 〈色調〉両面淡褐色	脚部=ヘラケズリダシ 坏部=ヘラナデ 煤が残る 裾部の一部が黒褐色
図407	a.高坏 b.カマド右側床面 c.ほぼ完形	口形11.2 脚上位径5.0 脚下端径9.8 器高6.5	d.緻密 e.不良	図40－６と同様の形態である。	両面とも少し摩耗している 脚裾部=横方向のヘラケズリ 脚中位～坏体部=縦方向のヘラケズリ 坏口縁部=横ナデ	脚部=ヘラケズリダシ 坏部=ヘラナデ 〈色調〉両面とも暗褐色及び淡褐色
図408	a.高坏 b.東側壁溝内 c.脚上部	脚上位径5.2 裾部径10.0	d.緻密 e.不良	少し丸みをもった脚部が上位で直立ぎみに坏部と接合する。	脚下部=横方向のヘラナデ 脚上部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面暗褐色～淡褐色	脚裾部=横ナデ(指) 脚部=ヘラケズリダシ 坏体下部=ヘラミガキ
図409	a.坏 b.カマド右側床面 c.全体の30%の残存	口径11.6 器高4.1	d.緻密 e.普通	やや器高の低い椀状を呈する坏。	体部=横方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 〈色調〉暗褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉黒色
図4110	a.甕 b.カマド内 c.ほぼ完形	口径16.2 胴部最大径18.5 底径5.4 器高32.6	d.小礫４㎜前後を多く含む e.やや不良	平底の長胴甕で最大径は、胴中位にある。口縁部は、わずかに外反する。	胴下位=横方向のヘラケズリ 擦過痕が多い 胴部=縦方向のヘラケズリ 摩耗が多い 口縁部=横ナデ 〈色調〉暗茶褐色、黒褐色	胴部=ヘラナデ 口縁部=ヘラによるナデの後、横ナデ 〈色調〉暗褐色
図4111	a.甕 b.カマド内 c.全体の90%の残存	口径18.8 最大径17.9 底径5.1 器高24.1	d.緻密 e.やや不良	小さな平底より少し丸みをもって急激に立ち上がり、胴部最大径は上位にある。口縁部は外反。	胴下位=横方向のヘラケズリ 胴部=縦方向のヘラケズリ カマド粘土付着 口縁部=横ナデ	胴部=ヘラナデの後、布状工具によるナデ 口縁部=横ナデ(指) 〈色調〉両面暗褐色～淡褐色
図4112	a.甕 b.カマド内 c.全体の90%の残存	口径16.6 胴部最大径19.1 底径4.7 器高32.0	d.小礫３㎜前後を多く含む e.やや不良	小さな平底をもち、長胴甕で、口縁部はわずかに外反する。	胴下位=横方向のヘラケズリ 胴中位=縦方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 〈色調〉暗褐色、淡褐色	胴部=横方向のヘラナデ 口縁部=横ナデ 〈色調〉暗褐色、暗茶褐色

また、本住居跡は、高坏が８個体と多出している点が特徴的である。土製支脚は、No.13・14がカマド内より出土している。両者とも方柱形で上端が細くなる形体を呈する。No.14は、下部が欠損し、上端幅は、6.3×5.6cmをはかる。色調は、淡橙褐色である。No.13は、やや小型で上端、下端とも欠損するが、上端は、推定で幅が2.8cmとみられる。色調は、淡橙褐色である。



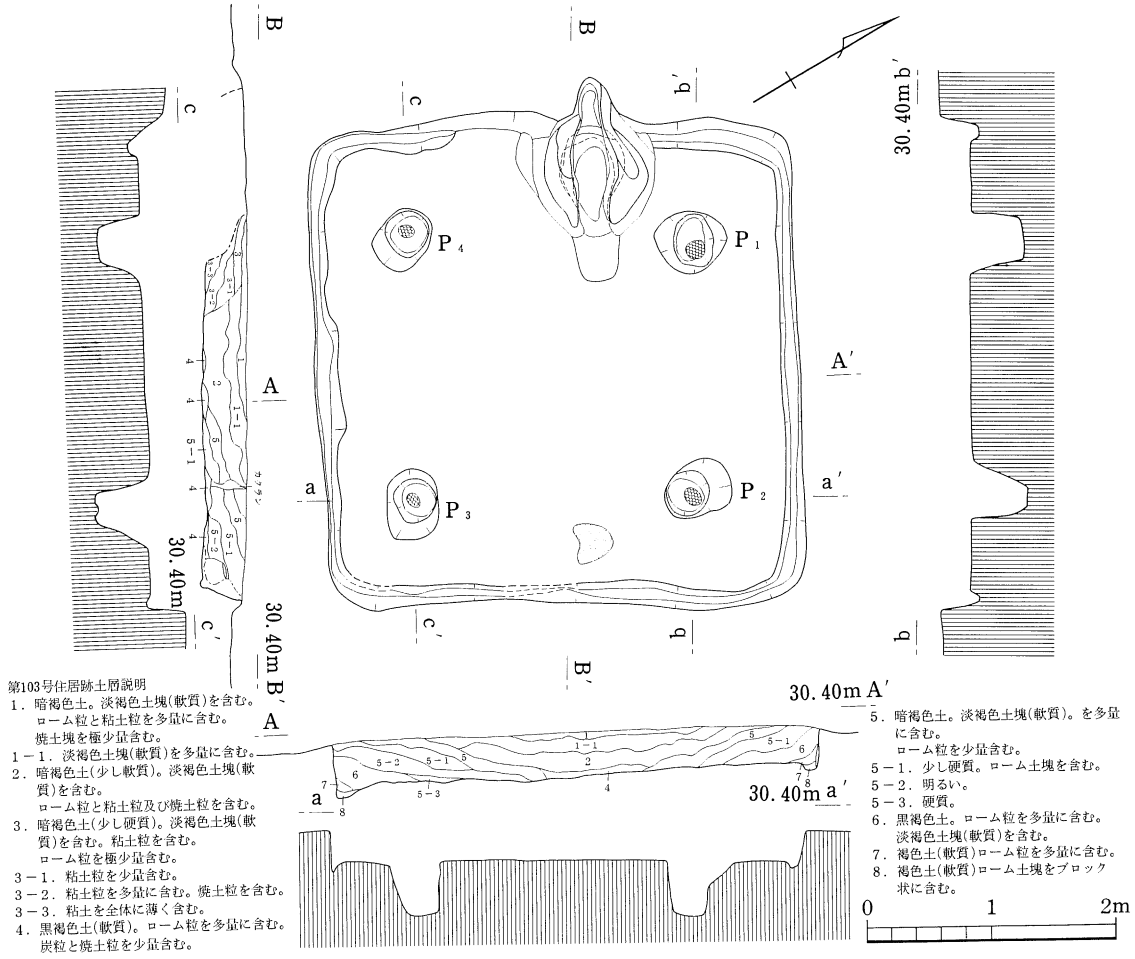
第41図　第102号住居跡出土遺物実測図(10～14)



第42図　第103号住居跡遺物出土状況図
（縮尺は下図第43図と同じ）

（3）第103号住居跡

調査地区の西側に位置し、第104号住居跡より西に約５ｍ離れている。平面形体は、ほぼ隅円方形で、規模は、長軸3.95ｍ、短軸3.90ｍ、長軸方向は、Ｎ－61°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、やや低く、残存壁高は、最大で28㎝である。床面は、平坦で、ハードローム層上位のレベルに設定され、床面積は、約13.69㎡である。踏み固められた面は、カマド前面から中央部付近に認められる。また、焼土の流れ込みが南東側床面のカマド右袖前より認められる。壁溝は、カマド左側部分が途切れる以外は、周っている。幅は、下端で１



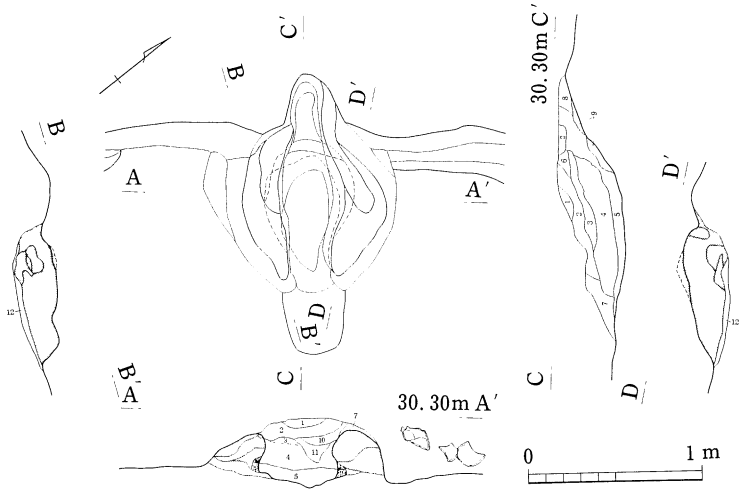
第103号住居跡土層説明
1．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。
　ローム粒と粘土粒を多量に含む。
　焼土塊を極少量含む。
1－1．淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。
2．暗褐色土(少し軟質)。淡褐色土塊(軟質)を含む。
　ローム粒と粘土粒及び焼土粒を含む。
3．暗褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊(軟質)を含む。粘土粒を含む。
　ローム粒を極少量含む。
3－1．粘土粒を少量含む。
3－2．粘土粒を多量に含む。焼土粒を含む。
3－3．粘土を全体に薄く含む。
4．黒褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
　炭粒と焼土粒を少量含む。
5．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)。を多量に含む。
　ローム粒を少量含む。
5－1．少し硬質。ローム土塊を含む。
5－2．明るい。
5－3．硬質。
6．黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
　淡褐色土塊(軟質)を含む。
7．褐色土(軟質)ローム粒を多量に含む。
8．褐色土(軟質)ローム土塊をブロック状に含む。

第43図　第103号住居跡実測図

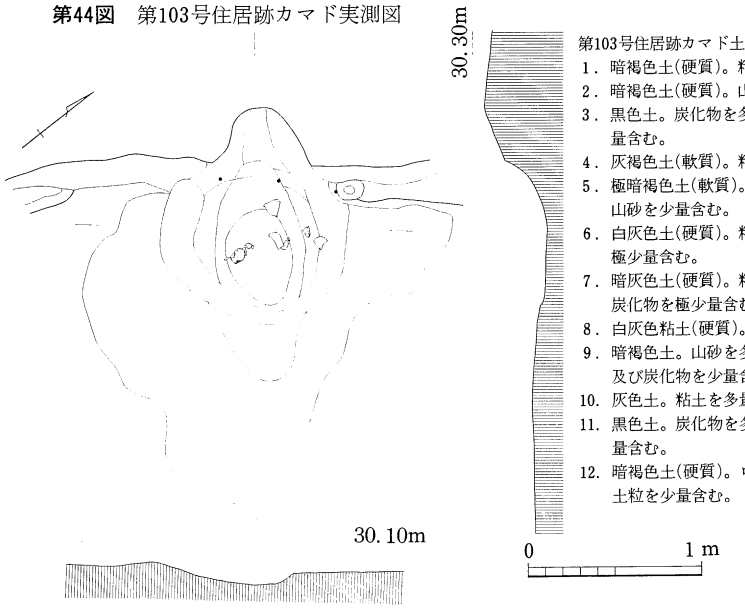
～13cm、深さは、3～8cmをはかる。床面内のピットは、4本検出され、やや竪穴の壁寄りに位置し、方形に組み合わされ、主柱穴と考えられる。柱のあたり痕跡が認められ、各々の間隔は、P_1～P_2が2.00m、P_2～P_3が2.24m、P_3～P_4が2.16m、P_4～P_1が2.32mを測る。カマドは、西側壁やや北寄りに片寄って設置され、焚口は20cmの幅をもち、燃焼部は幅50cmで円形に広がる。煙道部は、竪穴壁を約30cm掘り込み、立ち上がりは緩やかである。竪穴の覆土は、暗褐色土が主体で、粘土やローム土塊を上部より多く含んでおり、人為的な埋没が考えられる。出土遺物は、床面及び覆土中より多くの土器片等が検出されている。

第20表　第103号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	59×50	35×22	42
P_2	55×43	29×24	45
P_3	57×41	28×25	44
P_4	51×40	28×26	34



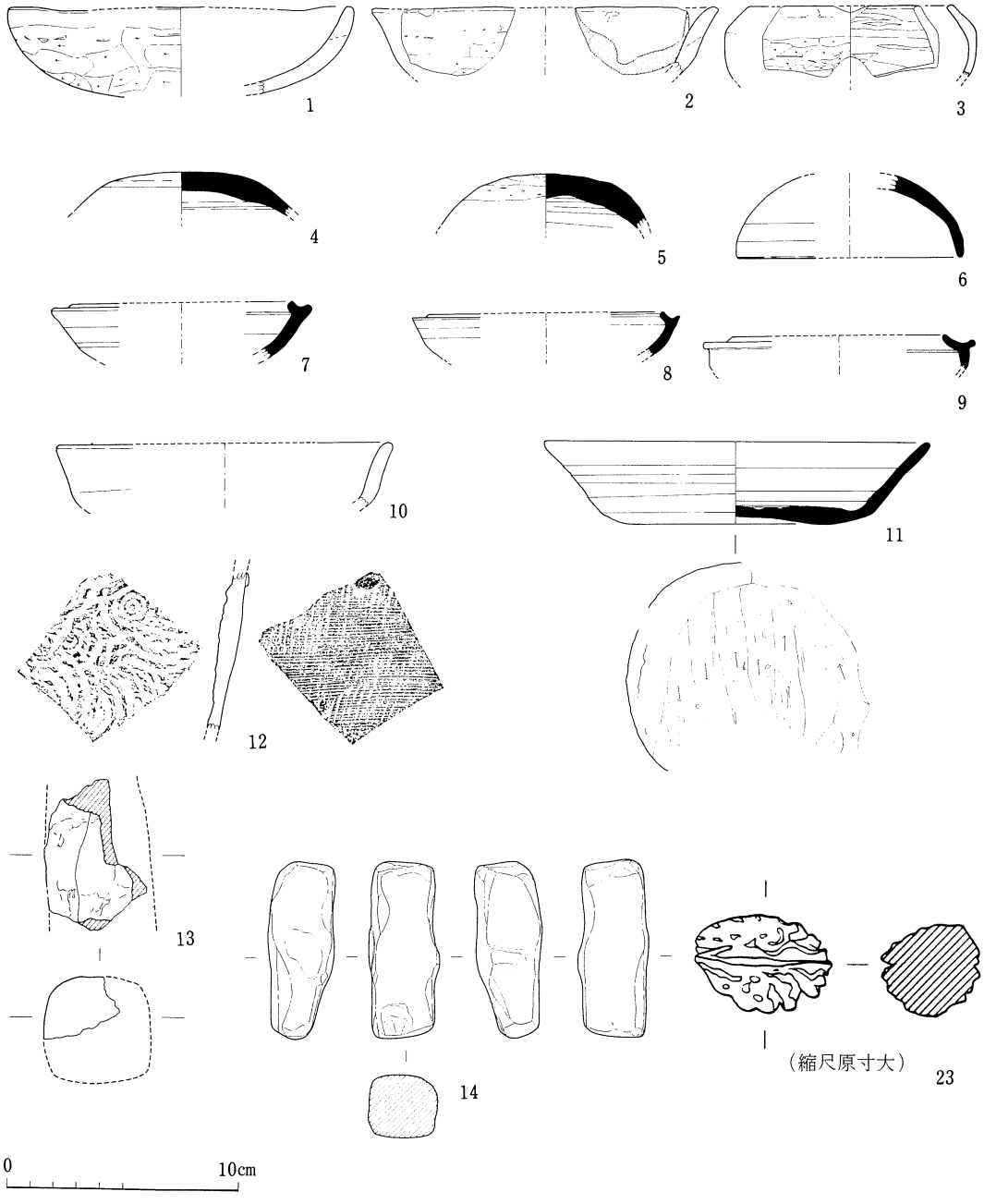
第44図　第103号住居跡カマド実測図



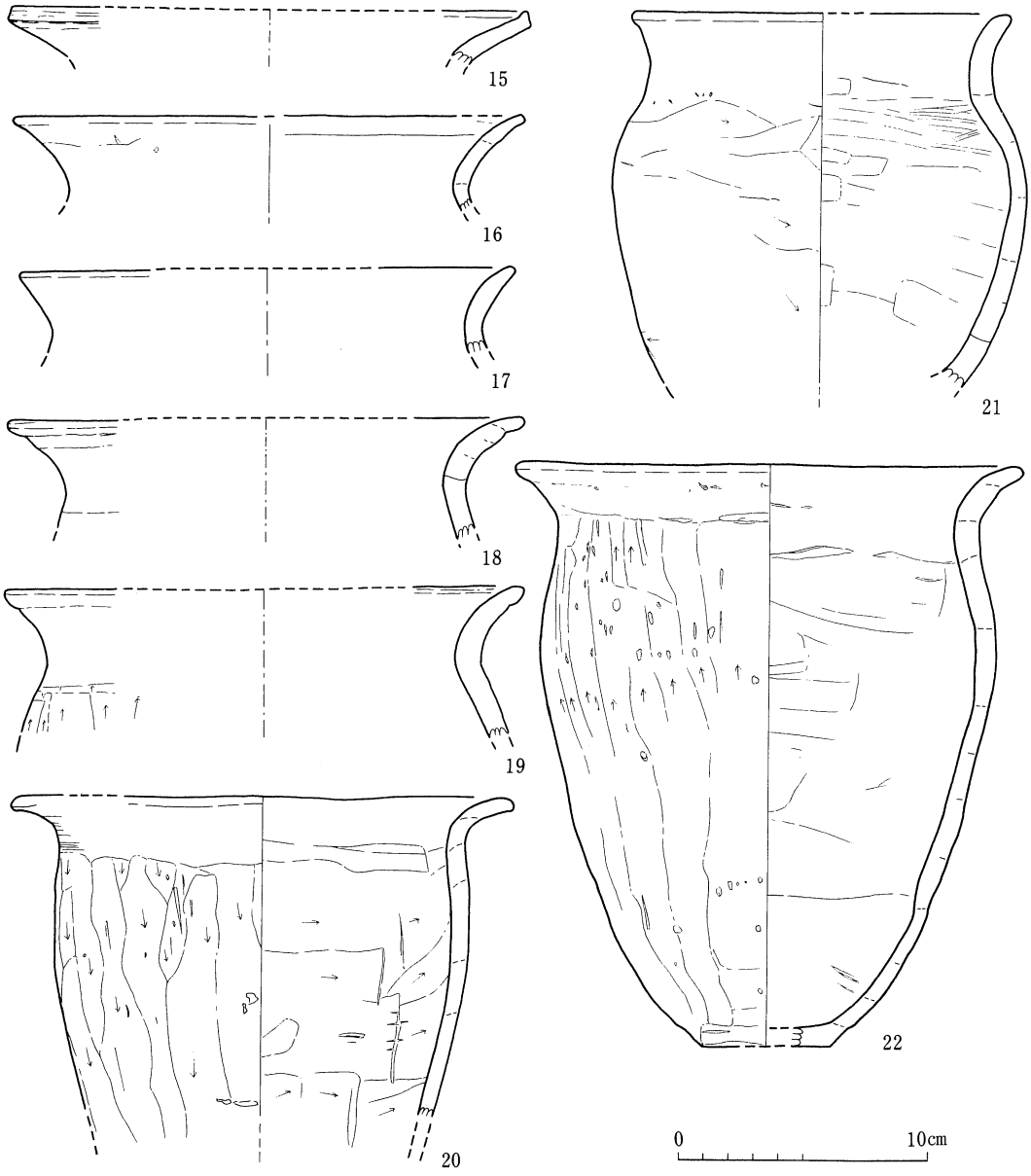
第103号住居跡カマド土層説明

1．暗褐色土(硬質)。粘土と山砂を多量に含む。
2．暗褐色土(硬質)。山砂を多量に含む。粘土を含む。
3．黒色土。炭化物を多量に含む。山砂と粘土を少量含む。
4．灰褐色土(軟質)。粘土と山砂を多量に含む。
5．極暗褐色土(軟質)。焼土と炭化物を多量に含む。山砂を少量含む。
6．白灰色土(硬質)。粘土を多量に含む。炭化物を極少量含む。
7．暗灰色土(硬質)。粘土と山砂を多量に含む。炭化物を極少量含む。
8．白灰色粘土(硬質)。
9．暗褐色土。山砂を多量に含む。ローム粒と粘土及び炭化物を少量含む。
10．灰色土。粘土を多量に含む。炭化物を少量含む。
11．黒色土。炭化物を多量に含む。山砂と粘土を少量含む。
12．暗褐色土(硬質)。ローム土塊を多量に含む。粘土粒を少量含む。

第45図　第103号住居跡カマド掘り方実測図



第46図　第103号住居跡出土遺物実測図（１～14・23）



第47図　第103号住居跡出土遺物実測図(15～22)

第21表　第103号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図461	a.坏 b.覆土中位 c.全体の40%の残存	口径15.0	d.小礫を少量含む e.普通	丸底の椀状を呈し、やや偏平な形体。	体部=横方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 〈色調〉淡褐色、黒褐色	全面をヘラミガキ 〈色調〉暗褐色、黒褐色
図462	a.(坏) b.覆土上位 c.口縁部片	口径(15.2)	d.緻密 e.やや不良	口縁部にわずかに稜をもち、口唇部にむかって外反する。	体部=横方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 〈色調〉黒褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図463	a.(鉢) b.覆土上位 c.口縁部片	口径(8.9)	d.緻密 e.普通	球状に立ち上がるとみられる体部から口縁部にいたり内傾する。	体部=横方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデの後、ヘラミガキ 〈色調〉茶褐色、黒褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉褐色
図464	a.須恵器(蓋坏) b.覆土上位 c.天井部付近のみ		d.緻密 e.普通	須恵器蓋坏の天井部片で、丸みをもっているが、回転ヘラケズリが2段認められる。	上位に2段の回転ヘラケズリがなされ、他は仕上げナデとみられる。自然釉が一部にかかる。 〈色調〉淡黄灰色	仕上げ指ナデ 〈色調〉暗灰色
図465	a.須恵器坏蓋 b.覆土上位 c.天井部付近のみ		d.緻密 e.普通	少し丸みをもった天井部片で、回転ヘラケズリが上位にみられる。	上位に数段の回転ヘラケズリがなされ、他は仕上げナデ 〈色調〉両面とも暗灰色	仕上げ指ナデ

第22表　第103号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図466	a.須恵器坏蓋 b.覆土中位 c.天井部を欠損する	口径9.9	d.緻密 e.普通	天井部は、やや丸みをもつとみられ、口縁部には、わずかな稜が認められる。	天井部上位の回転ヘラケズリは、認められない。他は、仕上げ指ナデ 〈色調〉両面とも淡灰色	指ナデ
図467	a.須恵器坏身 b.覆土上位 c.底部付近欠損	口径11.4	d.緻密 e.良好	口縁部にわずかなかえりをもった小型の坏身で、体下半部まで回転ヘラケズリが認められる。	底部～体下半部=回転ヘラケズリ 体上部～口縁部=指ナデ 〈色調〉黒灰色	口縁部に有るかえりの両側に沈線が周っている。 〈色調〉淡黄灰色

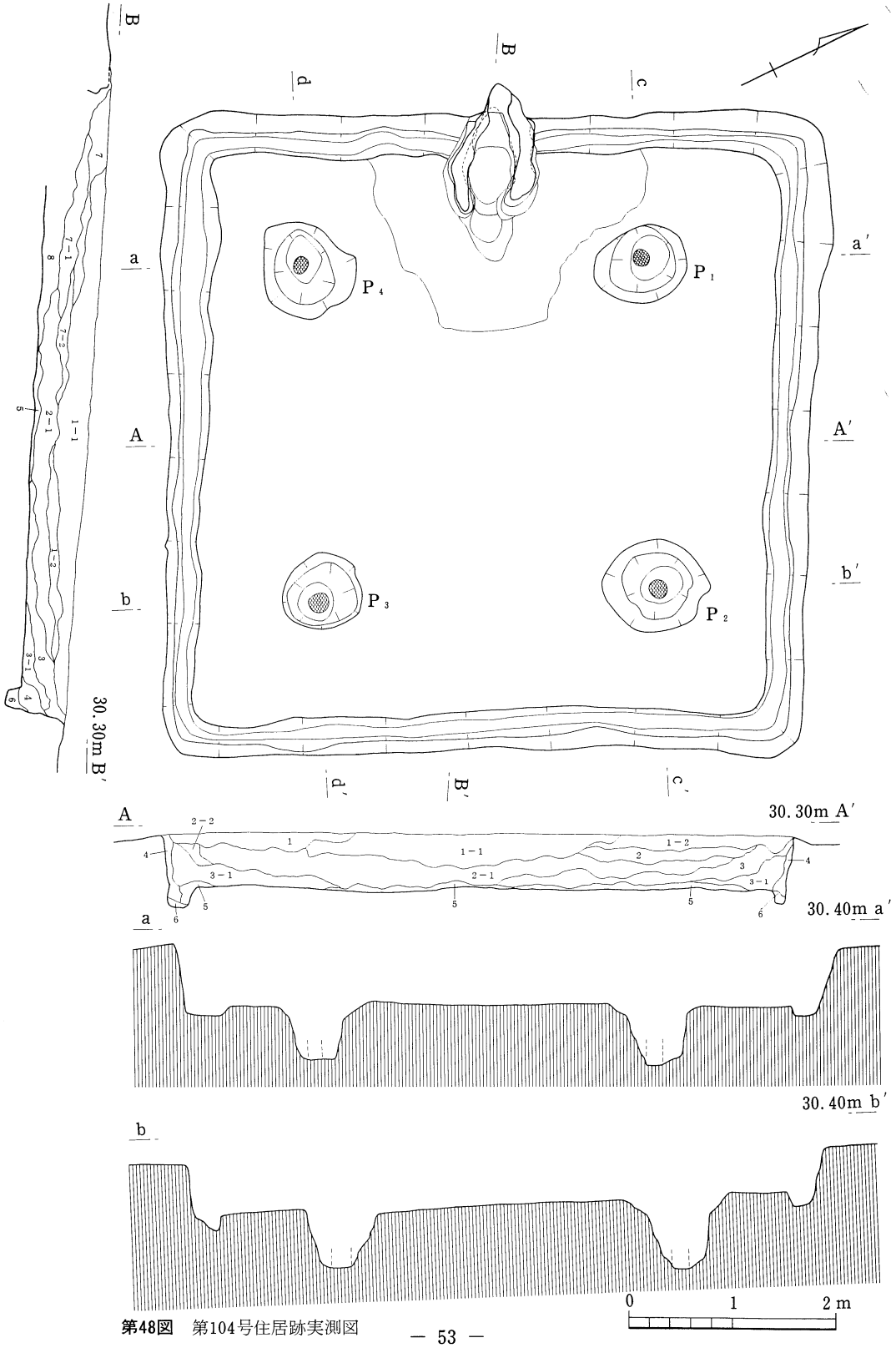
No.23は、桃の実と考えられる１点が出土している。

第23表　第103号住居跡出土遺物観察表(３)

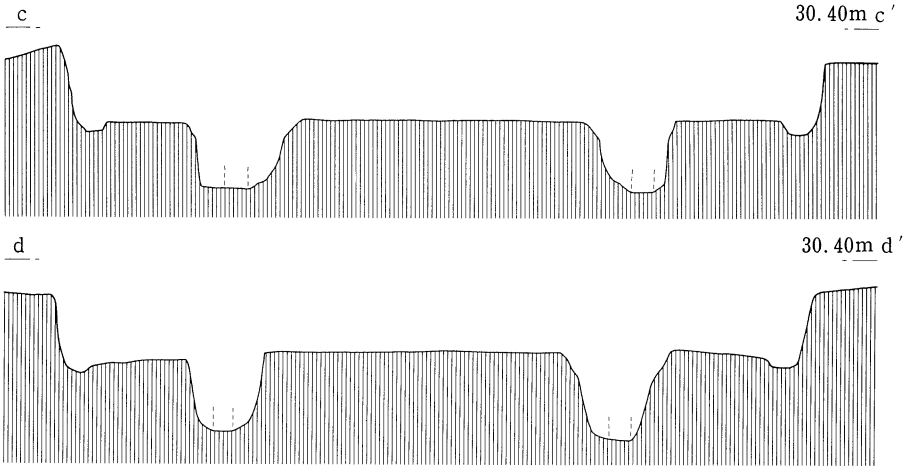
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図468	a.須恵器坏身 b.覆土中位 c.体部上位のみ	口径11.7	d.緻密 e.良好	口縁部にわずかなかえりをもった小型の坏身で、体部上位のみの破片である。	指ナデ 小片のため、ヘラケズリの有無は不明。 〈色調〉灰色	指ナデ 〈色調〉淡灰色
図469	a.須恵器坏身 b.覆土上位 c.体上部から口縁部の破片	口径11.9	d.緻密 e.良好	口縁部にわずかなかえりをもった小型の坏で、かえりの長さが7・8より少し長いが、立ち上がり方は同じ高さである。	指ナデ 小片のため、ヘラケズリの有無は不明。 〈色調〉暗灰色	指ナデ 〈色調〉灰色
図4610	a.(坏) b.覆土上位 c.口縁部付近のみ	口径14.7	d.緻密 e.少し不良	体部と口縁部の境に、ヘラケズリによるわずかな稜をもち、口縁部は少し外反ぎみに立ち上がる。	体部=ヘラケズリ 口縁部=横ナデ 両面とも摩耗している。 〈色調〉両面淡赤褐色	ヘラミガキ?
図4611	a.須恵器坏身 b.覆土中位 c.全体の3/4の残存	口径16.9 器高3.6 底径9.5	d.砂粒を多く含む e.不良	底部は平底で、やや凹む。周囲を回転ヘラケズリし、立ち上がりは直線的に開く。	体下位=回転ヘラケズリ 〈色調〉黒灰色	指ナデ 〈色調〉灰色
図4612	a.須恵器甕 b.覆土下位 c.胴部片	器厚 0.45～0.9	d.砂粒を多く含む e.やや不良	甕の胴部破片と考えられる。	平行線のタタキ目が、カキ目によって消されている。 〈色調〉暗灰色	青海波文のアテ目がみられる。 〈色調〉灰色
図4715	a.(甕) b.覆土下位 c.口縁部片	口径21.0	d.小礫3㎜前後を多く含む e.良好	口縁部は外反し、口唇部は少しつまみ上げており、稜をもつ。	両面とも横ナデ 〈色調〉両面とも淡赤褐色	
図4716	a.(甕) b.覆土下位 c.口縁部片	口径20.8	d.小礫3㎜前後を多く含む e.良好	少し薄手で、口縁部は単純に外反し、口唇部は丸みがある。	両面とも横ナデ 〈色調〉淡褐色	〈色調〉淡赤褐色
図4717	a.(甕) b.覆土下位 c.口縁部片	口径20.2	d.小礫2～3㎜前後を多く含む e.良好	口縁部は外反し、口唇部は丸みをもっている。	両面とも横ナデ 〈色調〉淡褐色	〈色調〉淡赤褐色
図4718	a.(甕) b.覆土中位 c.口縁部のみ残存	口径21.2	d.小礫5㎜以下を多量に含む e.良好	ゆるやかな弧状を呈して外反する口縁をもち、口唇部は丸みをもって厚くなっている。	胴上位=縦方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 口縁部上位=粘土紐接合痕をわずかに2段認められる。	横ナデ 〈色調〉両面とも茶褐色
図4719	a.(甕) b.覆土中位 c.胴上位から口縁部片	口径21.3	d.小礫2㎜前後を含む 石英も含む e.良好	18と同様	18と同様であるが、粘土接合痕はみられない。 〈色調〉両面とも茶褐色	横ナデ
図4720	a.(甕) b.覆土下位 c.胴部下位から底部を欠損	口径20.3 胴部最大径17.0	d.小礫2㎜前後を含む e.良好	胴部最大径を上位にもち、口縁部は短く横方向に外反する。	胴部=縦方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 〈色調〉両面とも淡褐色	胴部=ヘラ横ナデ 口縁部=横ナデ
図4721	a.(甕) b.床面直上 c.胴部下位から底部を欠損	口径15.5 胴部最大径16.9	d.砂粒を多く含む e.少し不良	胴部最大径は上位に有り、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸みをもち、厚となる。	胴部=斜め方向のヘラケズリ 口縁部=横ナデ 煤が一部に付着する 〈色調〉淡褐色	胴部=ヘラ横ナデ 口縁部=横ナデ 〈色調〉淡褐色、黒褐色
図4722	a.(甕) b.覆土下位 c.全体の1/3残存	口径20.6 胴部最大径18.4 底径5.3 器高23.7	d.小礫1～4㎜を含む e.少し不良	21と同様であるが、器最大径は胴上位にもつ。	21と同様 〈色調〉淡褐色、暗褐色	21と同様であるが、器最大径は、胴上位にもつ。 〈色調〉黒褐色

No.13は、土製支脚で方柱形の上端が細い形体を呈する。上端部付近の破片で、上端部幅は、4.7×4.7cmをはかる。色調は、淡茶褐色で覆土下位の出土である。No.14は、砥石とみられ、砂岩で、全体に摩耗している。長さ7.6cm、幅1.8～2.8cm、厚さ3.1cmをはかる。淡灰青色を呈し、覆土下位出土。

（4）第104号住居跡



第48図　第104号住居跡実測図



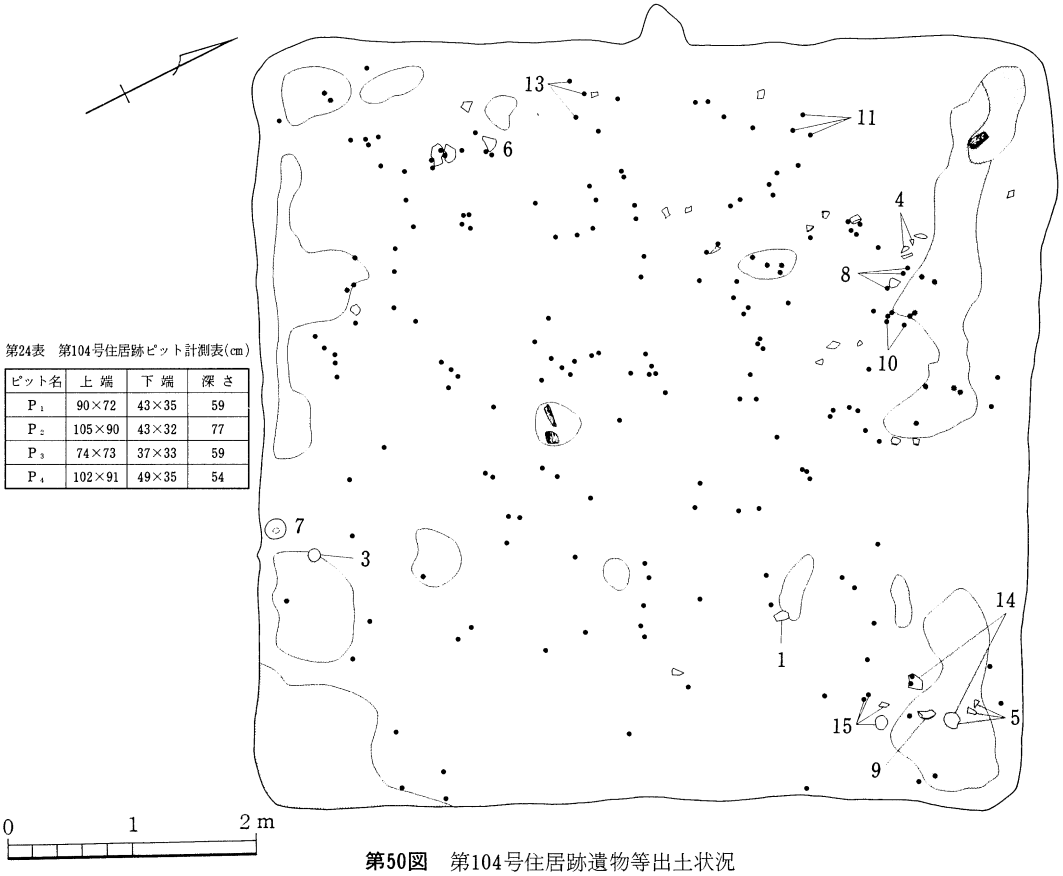
第49図　第104号住居跡断面図

第104号住居跡土層説明

1．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊と粘土塊を少量含む。
1－1．明るい。
1－2．粘土塊は、含まない。
2．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を少量含む。
2－1．ローム土塊を含む。
2－2．ローム土塊を多量に含む。
3．暗褐色土(少し明るい)。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を含む。
3－1．ローム粒を多量に含む。
4．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒(軟質)を多量に含む。
5．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒と炭粒及び焼土粒を含む。
6．褐色土(軟質)。ローム粒をブロック状に含む。
7．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒と粘土粒を含む。
7－1．粘土粒を多量に含む。
8．暗灰褐色土。ローム粒を含む。粘土を全体に薄く含む。

第24表　第104号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	90×72	43×35	59
P2	105×90	43×32	77
P3	74×73	37×33	59
P4	102×91	49×35	54

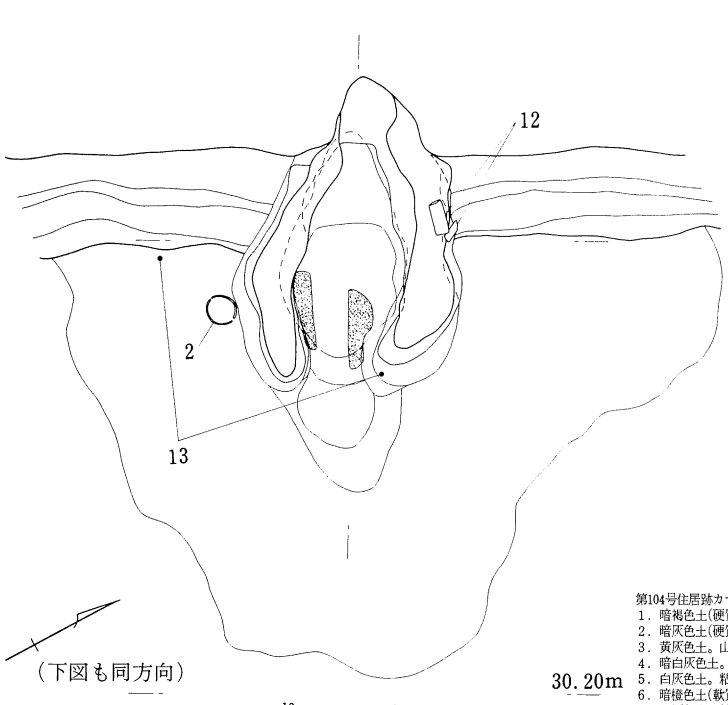


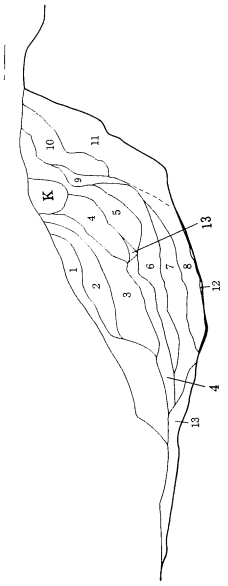
第50図　第104号住居跡遺物等出土状況

第104号住居跡は、調査地区の西側に位置し、南側の隅を第105号住居跡によって切られている。また、第104号掘立柱建物跡が北側約１ｍに近接して所在する。平面形体は、隅円方形を呈し、規模は、長軸6.17ｍ、短軸6.15ｍでほぼ正方形である。主軸方位は、長軸方向を測り、Ｎ－62°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、急傾斜で、深さは、最大で60㎝をはかる。床面は、平坦で、ハードローム層内のレベルに設定され、踏み固められた面は、やや不明確であるが、カマド前面から床中央付近に認められる。床面積は、約32.90㎡である。壁溝は、全周し、やや幅広い。下端幅は６～17㎝、深さは８～15㎝をはかる。小ピットは、特に認められていない。床面内のピットは、４本検出され、方形に組み合い、主柱穴と考えられる。下端に柱のあたり痕跡が認められる。各柱穴間隔は、P_1～P_2が3.20ｍ、P_2～P_3が3.30ｍ、P_3～P_4が3.28ｍ、P_4～P_1が3.30ｍを測る。竪穴への焼土の流れ込みが、南と北側から認められる。カマドは、西側壁の中央に設置され、カマド周辺の床面がわずかに窪んでいる。袖部は、平面がやや弧状を呈し、燃焼部が径１ｍ程の間隔が有る。煙道部は、約70㎝竪穴の壁を掘り込んでおり、立ち上がりは、わずかに段が３段認められる。竪穴の覆土は、ローム土塊を含む暗褐色土が主体で、人為的に埋没した可能性が大きい。したがって覆土内より大小の土器片も多く出土している。出土遺物は、No.１・４・５・７が覆土下位、No.６・８・11が床面直上、No.３・９・10・14・15が覆土中位、No.２・12・13がカマド付近、他は覆土上位の出土である。

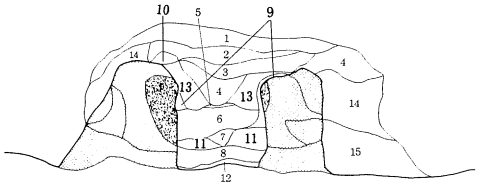
第25表　第104号住居跡出土遺物観察表（１）

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図53 1	a.坏 b.覆土下位 c.全体の80％の残存	口径12.1 器高4.3	d.砂粒を含む e.普通	丸底で椀状を呈し、口縁部でわずかな稜をもち、少し直立ぎみに立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、黒褐色	ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色
図53 2	a.坏 b.カマド左側床面 c.全体80％残存	口径11.5 器高3.5	d.緻密 e.やや不良	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部でわずかな稜をもって直立ぎみに立ち上がる。	１と同様 やや全体に摩耗している	１と同様
図53 3	a.坏 b.南側床面 c.完形	口径10.5 器高3.8	d.砂粒を含む e.普通	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部でわずかな稜をもって内傾ぎみに立ち上がる。	１と同様	ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図53 4	a.坏 b.覆土下位 c.全体の1/3底部欠損	口径12.2 器高(4.4)	d.砂粒を含む e.普通	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部でわずかな稜をもち、少し外反する。	１と同様	ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色
図53 5	a.坏 b.東側覆土下位 c.口縁部の1/3を欠損	口径11.7 器高4.4	d.緻密 e.普通	２と同様	１と同様	１と同様
図53 6	a.坏 b.覆土上位 c.口唇部を欠損	口径11.9 器高4.3	d.緻密 e.少し不良	２と同様	１と同様 全体に摩耗する 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	１と同様
図53 7	a.鉢 b.南側覆土下位 c.完形	口径11.5 体部最大径13.1 底径5.8 器高10.5	d.砂粒を含む e.普通	平底で丸みをもって立ち上がり、体部最大径は上位にあり、口縁部はやや直立ぎみである。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 体下部=粘土紐接合痕を少し残す 〈色調〉淡褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラナデ 〈色調〉黒褐色





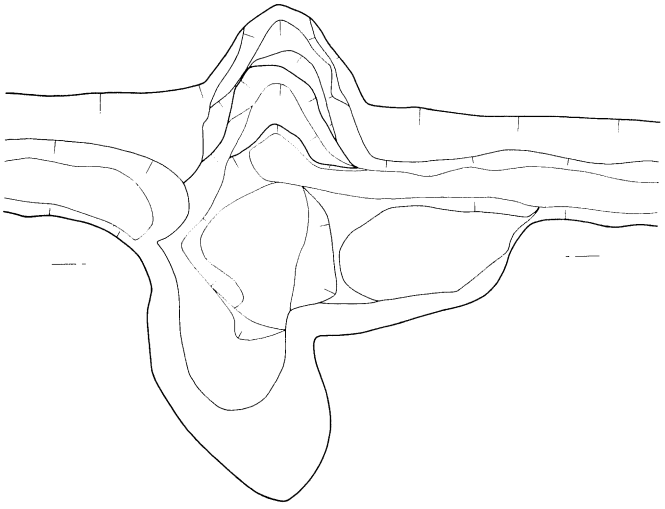
30.20m



第104号住居跡カマド土層説明
1．暗褐色土(硬質)。山砂と粘土を多量に含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
2．暗灰色土(硬質)。粘土を多量に含む。粘土粒と炭化物を少量含む。
3．黄灰色土。山砂を多量に含む。炭化物を少量含む。
4．暗白灰色土。粘土を多量に含む。山砂を少量含む。
5．白灰色土。粘土と山砂を多量に含む。焼土粒を少量含む。
6．暗橙色土(軟質)。山砂と灰を多量に含む。粘土粒を少量含む。
7．黒灰色土。粘土と山砂及び灰を多量に含む。粘土粒と炭化物を少量含む。
8．灰色土。粘土を多量に含む。ローム土塊と山砂を少量含む。
9．赤橙色土。焼土化した山砂を多量に含む。炭化物を少量含む。
10．暗褐色土。粘土と山砂を少量含む。
11．暗赤橙色土。焼土塊を多量に含む。
12．褐色土。ローム土塊と焼土塊を多量に含む。
13．暗灰色土。山砂を多量に含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
14．暗褐色土。山砂と粘土を多量に含む。
15．暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。山砂と炭化物を少量含む。

第51図　第104号住居跡カマド実測図

30.40m



30.20m



0　1m

（上図第51図も同縮尺）

第52図　第104号住居跡カマド掘り方実測図

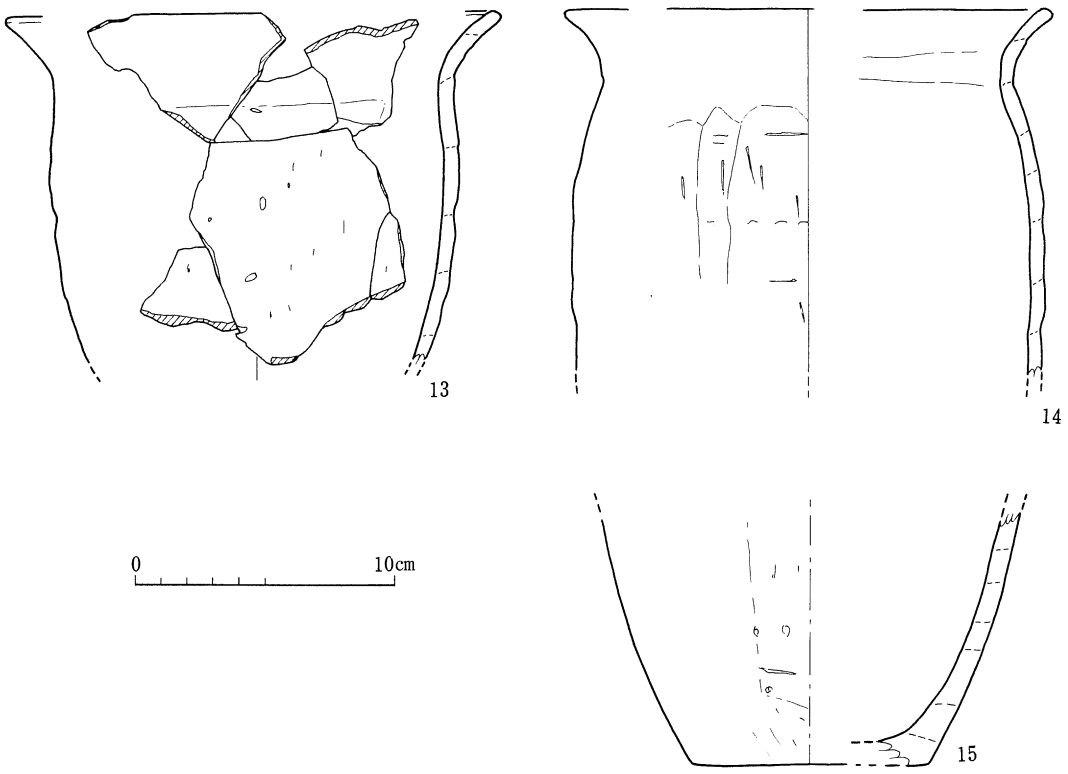


土製支脚は、3点出土している。No.10は、カマド右後方の床面より、No.11は、カマド右側床面、No.12は、カマド右袖に寄りかかるような位置に出土している。3個とも円柱形で上端が細くなる形体である。No.10は、上端部片で、上端径は4.5cm、色調は暗茶褐色を呈する。No.11は下部片で、色調や胎土がNo.10と似ており、同一個体の可能性がある。No.12は下部を欠損する。上端部は少し細く、上端径は2.4cmをはかる。色調は暗褐色を呈する。

また、鉄滓が大小7点出土している。さらに、不明の鉄製品が1点出土。

第54図　第104号住居跡出土遺物実測図(16)

第53図　第104号住居跡出土遺物実測図(1～12)

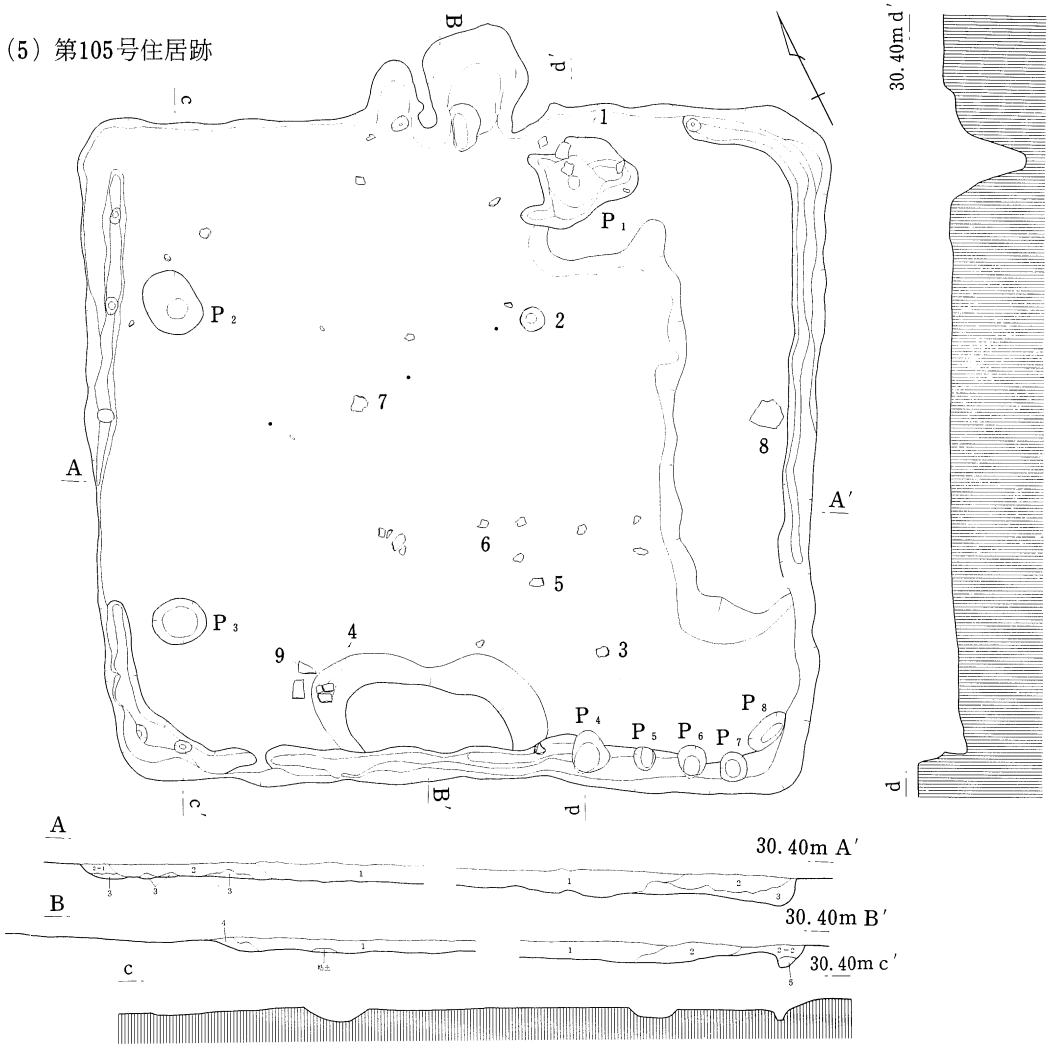


第55図　第104号住居跡出土遺物実測図(13～15)

第26表　第104号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図53 8	a.(壺) b.北側覆土上位 c.底部を欠損、全体の1/5残存	口径10.25	d.砂粒を含む e.少し不良	胴部最大径を中位にもち、口縁部は小さく直立ぎみに立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡褐色、一部黒褐色	ヘラミガキ
図53 9	a.須恵器短頸壺 b.東側床面直上 全体の1/3の残存	口径8.1 体部最大径9.25 器高5.0	d.緻密 e.普通	底部は丸底ぎみであるが、ヘラケズリがなされているためやや平坦で、体部は強く張り出し、最大径は中位にある。口縁部は小さく直立する。内面の体部と口縁の境に稜をもつ。	体下位=回転ヘラケズリ 自然釉がかかる 〈色調〉灰褐色	ナデのみ 〈色調〉灰褐色
図55 13	a.(甕) b.カマド左側床面直上 c.胴上半部から口縁部が残存	口径20.0 胴部最大径16.6	d.小礫3㎜を多く含む e.少し不良	胴部最大径は上位にあり、口縁部は外反する。	胴部=ヘラケズリ 口縁部=横ナデ 両面とも摩耗 〈色調〉淡茶褐色	胴部=ヘラナデ 口縁部=横ナデ 剝離が多く、ひどく不明確 〈色調〉暗褐色
図55 14	a.(甕) b.東側床面直上 c.胴部中位から口縁部1/3の残存	口径(19.0) 胴部最大径(18.4)	d.小礫2㎜～を含む e.やや不良	長胴の甕で、口縁部は外反する。	胴部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面、淡褐色、黒褐色	全体にヘラ横ナデ
図55 15	a.(甕) b.東側床面 c.底部の一部と胴部下半の1/3の残り	底部径(9.2)	d.小礫2㎜～を含む e.やや不良	長胴の甕の底部と考えられる。やや大きめの底部より、胴部は直線的に立ち上がる。	胴下位=横方向のヘラケズリ 胴中位=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面淡褐色、黒褐色	全体ヘラ横ナデ

(5) 第105号住居跡



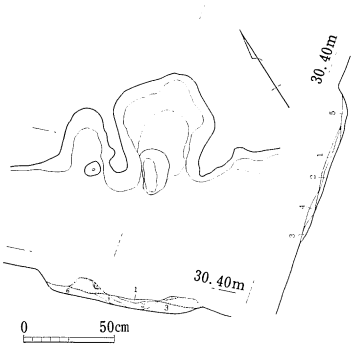
第105号住居跡土層説明

1．明黒褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に少量含む。
2．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。
2－1．少し明るい。
2－2．明るい。ローム粒を多量に含む。
3．黄褐色土。黒色土粒を含む。
4．黒褐色土。ローム土塊を極少量含む。
5．黒色土(少し硬質)。

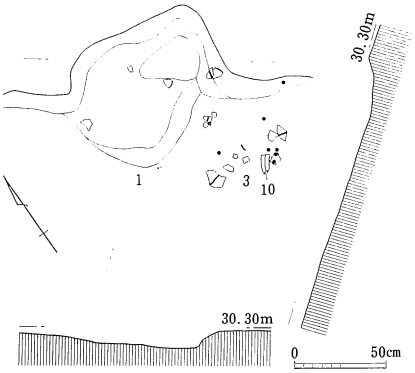
第56図　第105号住居跡実測図

第105号住居跡カマド土層説明

1．暗赤褐色土(軟質)。
　焼土粒を多量に含む。
　粘土粒を少量含む。
2．暗灰褐色土(軟質)。
　灰を多量に含む。
　粘土粒と炭粒及びローム粒を少量含む。
3．暗褐色土(少し硬質)。
　ローム土塊を多量に含む。
　焼土粒を少量含む。
4．暗褐色土。粘土粒と焼土粒を含む。
5．暗灰褐色土。
　粘土粒とローム粒を多量に含む。
　焼土粒を極少量含む。
6．褐色土(少し硬質)。
　ローム土塊をブロック状に含む。



第57図　第105号住居跡カマド実測図

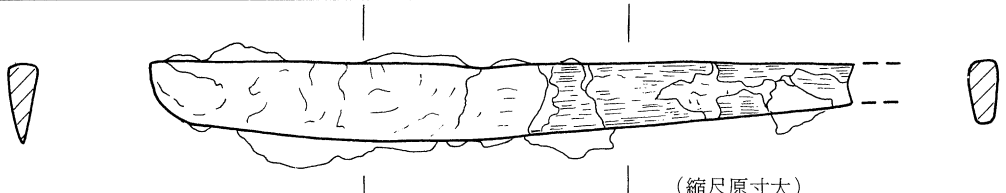


第58図　第105号住居跡カマド掘り方実測図

第105号住居跡は、調査地区の西側に位置し、本遺構の北西隅が第104号住居跡の南東隅を切っている。また、第106号住居跡が南側約6mの地点にある。平面形体は、隅円の方形を呈し、長軸3.88m、短軸3.68mを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、N－27°－Eである。壁の立ち上がりは低く、残存状況は悪い。深さは、最大で14cmである。床面はソフトローム上面に設置され、踏み固められた面は、不明確であるが、カマド前面から床面中央に存在する。また、北東側と南側に壁溝と接して一段高い面がある。周辺の床面より比して5～7cm高く、南側は幾分踏み固められている。床面積は、約12.82㎡である。壁溝は、部分的に途切れ、南東側、南西側、北西側の一部は無い。壁溝の幅は最大で13cm、深さは同じく13cmである。また、南東側の壁溝の無い部分には、小ピット（P_4～P_8）が存在する。床面内のピットは、この他に西側の壁近くに2本（P_2，P_3）、東側カマド右前面に1本（P_1）検出した。P_1は、不整円形で浅い。いずれのピットも用途は不明である。竪穴の覆土は、自然堆積と考えられる。カマドは、上部

第27表　第105号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図60 1	a.坏 b.P_1内 c.全体の1/2の残存	口径(13.2) 底径5.4 器高4.5	d.緻密 e.普通	平底でやや小型。逆台形にちかい形体である。	底部は右回転ロクロによる糸切り離しで、体部もロクロ成形 〈色調〉両面とも淡褐色、一部暗褐色	ロクロ成形痕
図60 2	a.坏 b.床面中央 c.底部中央を欠損全体の1/6の残存	口径(12.9) 底径(6.5) 器高(4.3)	d.小礫3㎜前後を含む e.普通	1と同様	1と同様 〈色調〉両面淡褐色	1と同様
図60 3	a.坏 b.南東側床面直上 c.完形	口径13.15 底径5.8 器高5.2	d.小礫3㎜以下を少量含む e.普通	1と同様	1と同様 指頭痕が目立つ 〈色調〉淡褐色、淡暗褐色	1と同様 〈色調〉淡暗褐色
図60 4	a.坏 b.南側床面 c.1/3残存	口径(12.9) 底径(5.9) 器厚(4.1)	d.緻密 e.やや不良	やや小型で器厚が厚く、少し浅い。	〈色調〉褐色 他は1と同様	仕上げナデ 〈色調〉淡褐色
図60 5	a.坏 b.南側床面 c.破片		d.3と同様 e.3と同様		〈色調〉両面褐色 他は1と同様	
図60 6	a.坏 b.南側床面 c.破片	底径(5.2)	d.3と同様 e.3と同様		〈色調〉両面淡褐色 1と同様	
図60 7	a.坏 b.床面中央 c.破片	底径(5.1)	d.3と同様 e.3と同様		〈色調〉両面淡褐色 1と同様	
図60 8	a.須恵器(甕)片 b.覆土 c.(胴部片)	器厚0.7～0.8	d.緻密 e.良好		平行のタタキ目を有する 〈色調〉暗灰色	〈色調〉淡灰色
図60 9	a.須恵器(甕)片 b.覆土 c.(胴部片)	器厚0.6～0.8	d.緻密 e.良好		〈色調〉4と同じ	〈色調〉暗灰色



（縮尺原寸大）

第59図　第105号住居跡出土遺物実測図(11)

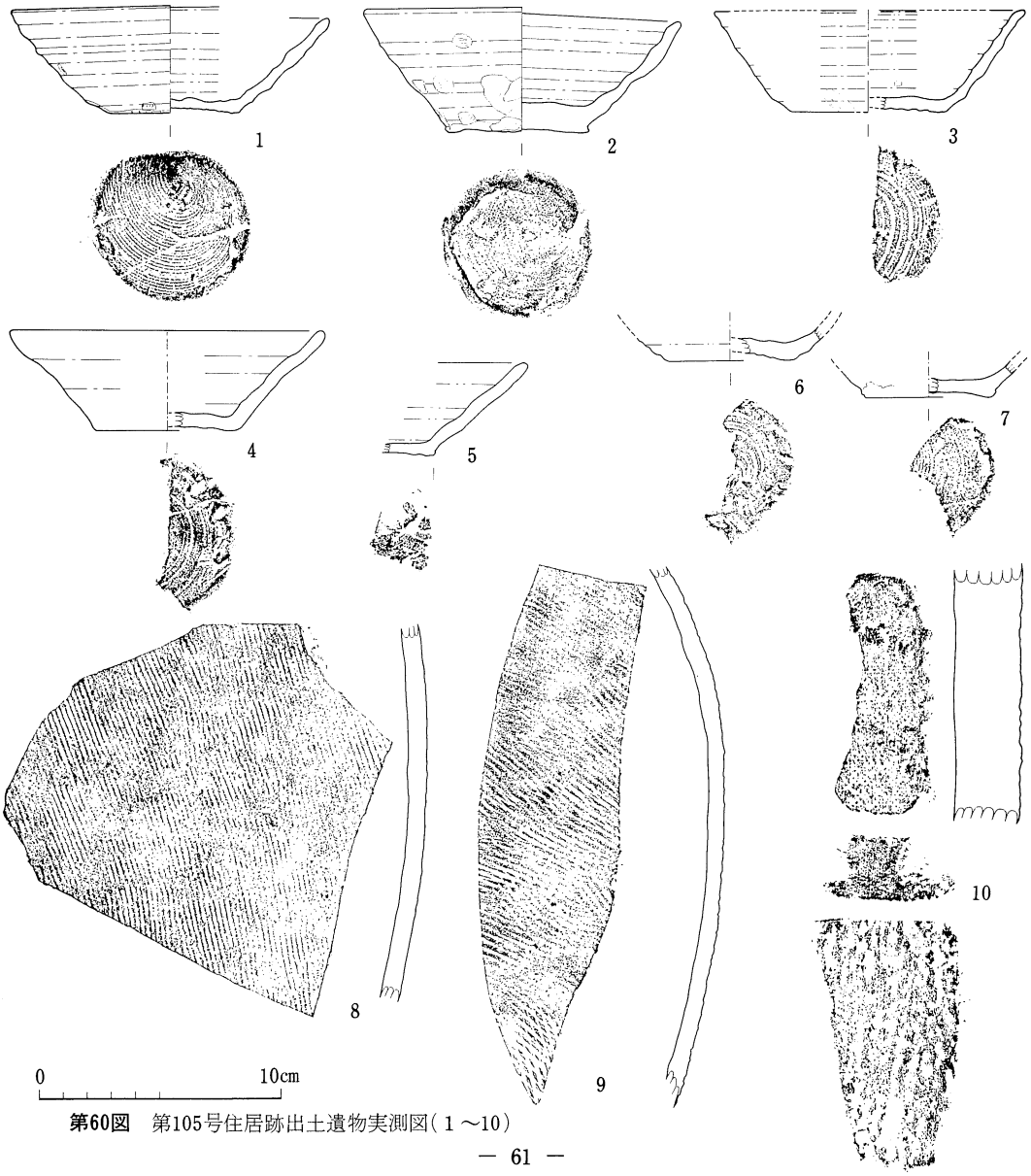
11

より大半が削平され、残存状況は悪く、袖部付近は4～7cm程しか残っていない。左側の袖は、ローム土を床面の深さまで削平しないままに残して利用している。煙道部は、竪穴外に壁を掘り込んで袖部も入り込み、幅91cm、長さ45cmをはかる。出土遺物は、No.1がカマド右側床面とP1内より、No.2は床面中央ややカマド寄りの東側床面、No.3が南側床面とカマド右側床面、No.5は南西側床面より、などである。

第28表　第105号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	62×46	27×24	45
P2	36×27	11×10	8
P3	29×24	19×17	5
P4	22×20	17×13	4
P5	13×11	11×6	7
P6	16×15	12×8	8
P7	16×14	9.5×7.5	5
P8	25×13	15×4.5	4

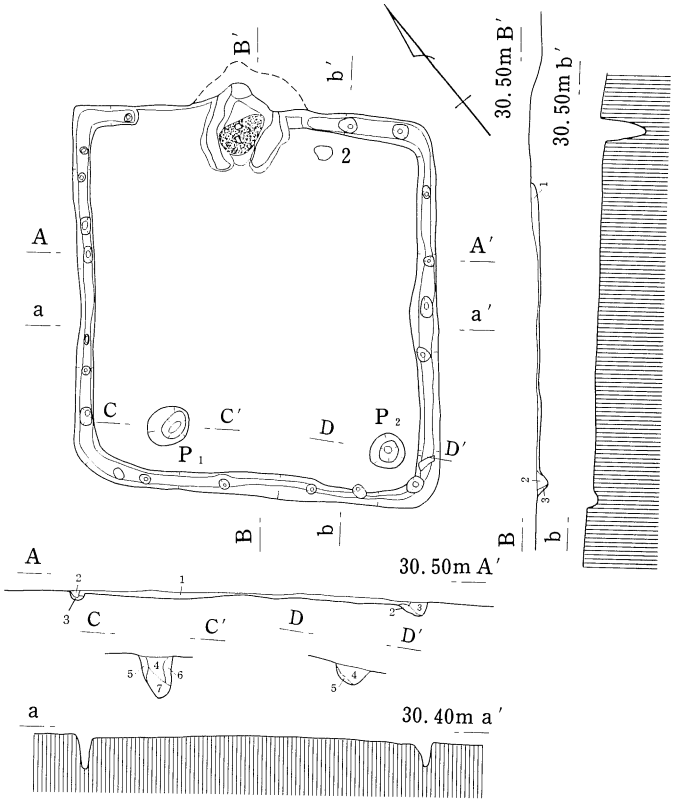
No.10女瓦(平瓦)、カマド右側床面直上出土。色調は淡橙褐色、焼成は普通で、胎土は緻密である。厚さ2.6cm、側部は面取りされ、凹面は布目、凸面は縄叩目が残る。また、11は、刀子(鉄製)であり、木質部を残している。



第60図　第105号住居跡出土遺物実測図(1～10)

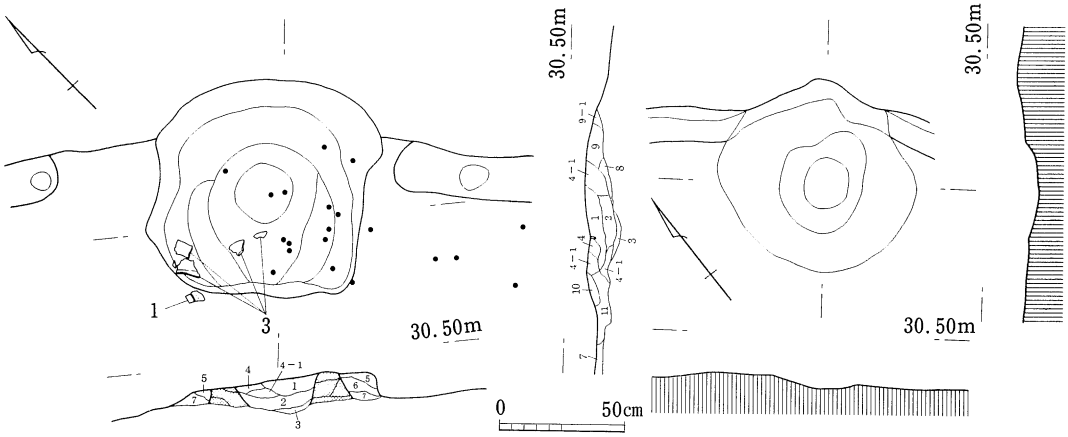
（6）第106号住居跡

調査地区の西側に位置し、第105号住居跡は北に約6m、第107号住居跡が南西に約8mの距離に存在する。形体は、不整方形で少し歪む。規模は、長軸3.15m、短軸2.88mを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－39°－Eを示す。壁の立ち上がりは、最大で6



第106号住居跡土層説明
1．暗褐色土。ローム粒を多量に含む。焼土塊と粘土塊を極少量含む。
2．暗褐色土(軟質)。暗褐色土粒を多量に含む。
3．褐色土。ローム粒をブロック状に含む。
4．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
5．褐色土。ローム粒を多量に含む。
6．極暗褐色土。暗褐色土を斑点状に含む。
7．暗褐色土。ローム土塊を斑点状に含む。

第61図　第106号住居跡実測図

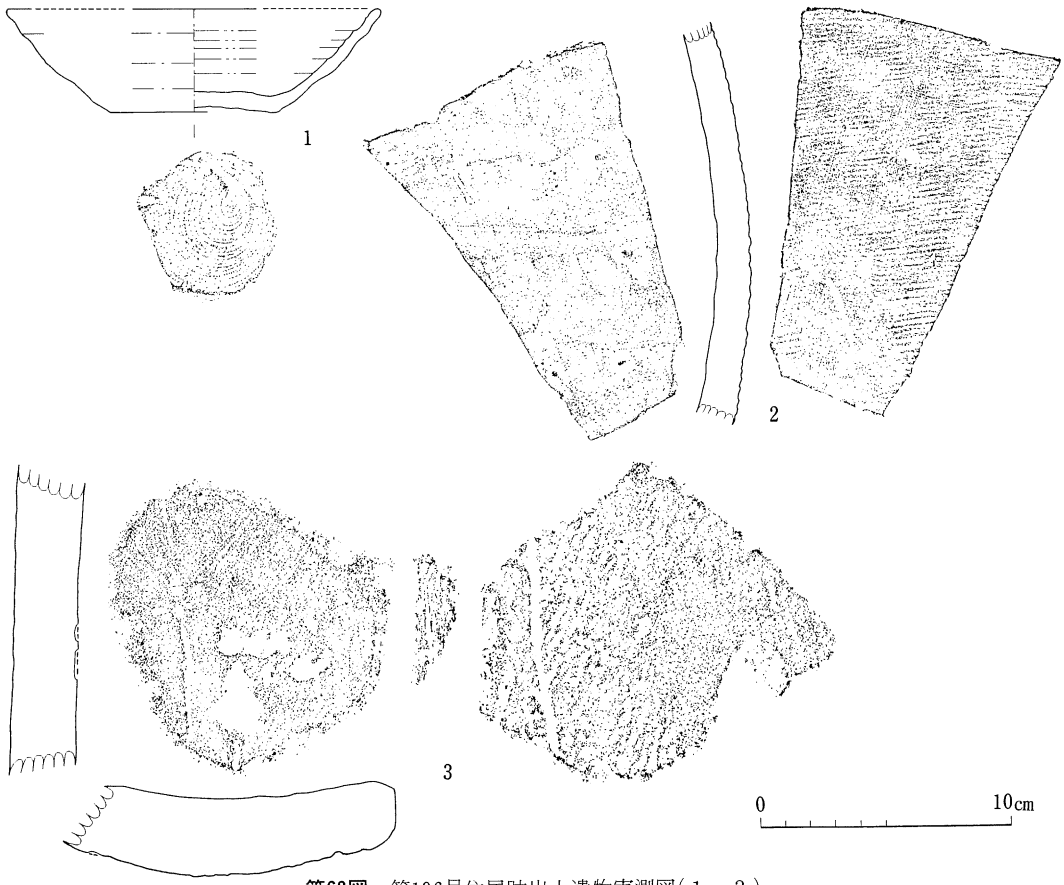


第106号住居跡カマド土層説明
1．暗橙褐色土。焼土と粘土及び山砂を多量に含む。
2．暗褐色土(軟質)。炭化物と山砂を少量含む。
　焼土粒を極少量含む。
3．褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
　炭化物を少量含む。
4．暗灰色土。粘土と山砂及び焼土塊を含む。
4－1．焼土塊が多い。
5．暗灰色土。粘土と炭化物を少量含む。
6．暗灰色土。粘土を多量に含む。
7．暗褐色土。粘土を多量に含む。
　炭化物と焼土物を少量含む。
8．褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
　粘土と焼土及び炭化物を極少量含む。
9．黒褐色土。粘土とローム粒と炭化物を極少量含む。
9－1．粘土粒を含まない。
10．粘土
11．暗褐色土。炭化物を多量に含む。粘土を少量含む。

第62図　第106号住居跡カマド及びカマド掘り方実測図

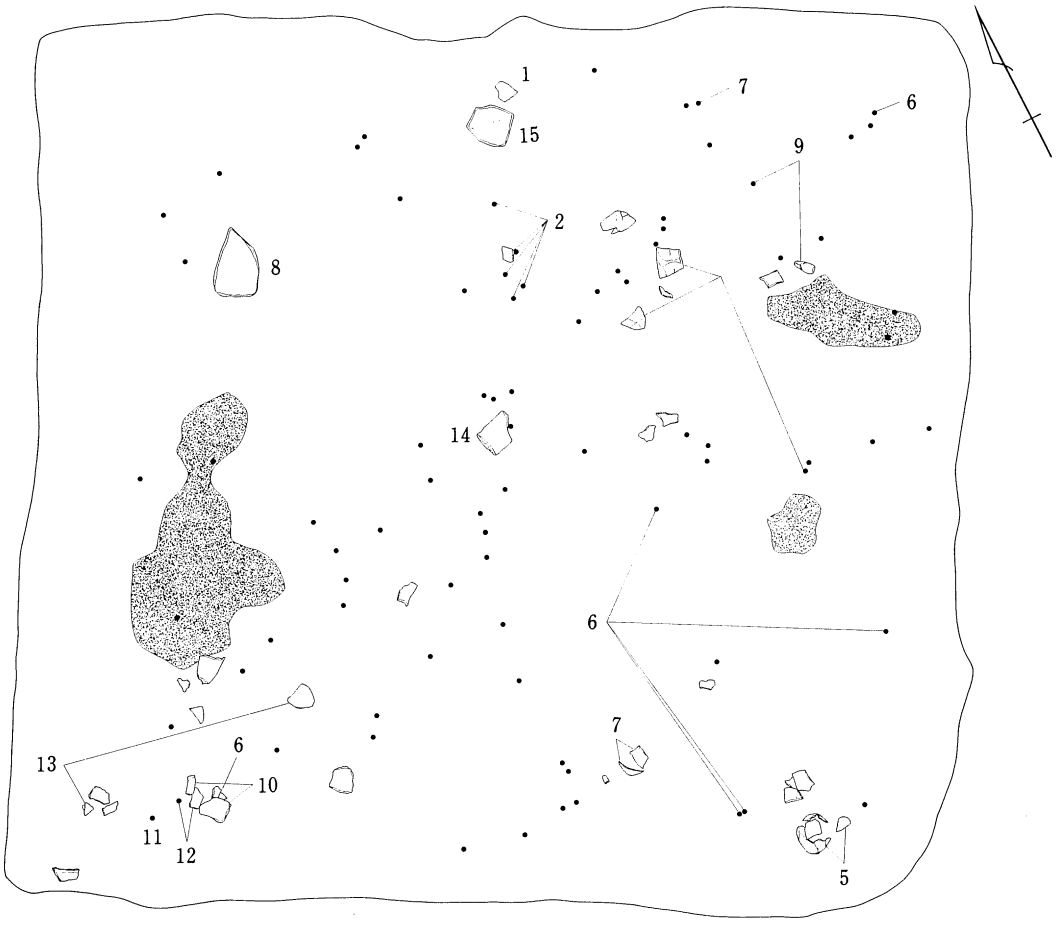
cmで残存高は少なく、保存状況は、あまり良くない。

床面は、ソフトローム層上位のレベルに設定され、踏み固められた面は、カマド前面から床面中央付近に若干認められる。床面積は約8.26㎡である。壁溝は北西側のカマド左側で途切れている。また内部に小ピットが多く認められる。壁溝の幅は4～10cm、深さは8～24cmである。床面内のピットは、東側に存在する。P_1 P_2とも立ち上がりが2段になっている。竪穴の覆土は、下層のみ確認できた。ローム粒を多量に含む暗褐色土で、焼土と炭粒も極少量みられる。カマドは、北側壁のやや西寄りに設置され、残存状況は悪い。袖部の残存高は12cm程で、煙道部は竪穴壁を約20cm掘り込んでいる。出土遺物は少なく、カマド付近から検出されている。No.1は坏で60%の残存、ロクロ水挽き成整形で底部は、右回転ロクロ糸切り離し無調整である。胎土は緻密、色調は両面とも暗褐色を呈する。大きさは口径15.0cm、底径6.7cm、器高4.1cmを計る。No.2は須恵器甕の胴部片で、器厚は1.2～1.5cm、外面は平行タタキ目(一部にカキ目状の線がみられる)、内面は指ナデである。色調は、両面とも暗灰色、焼成は普通、胎土は緻密。No.3は平瓦(女瓦)片で、凹面は布目痕と糸切り痕を残し、凸面は縄タタキ目及び合わせ目痕がみられる。厚さは1.7cm、胎土は、緻密、焼成はやや不良、色調は暗褐色を呈する。



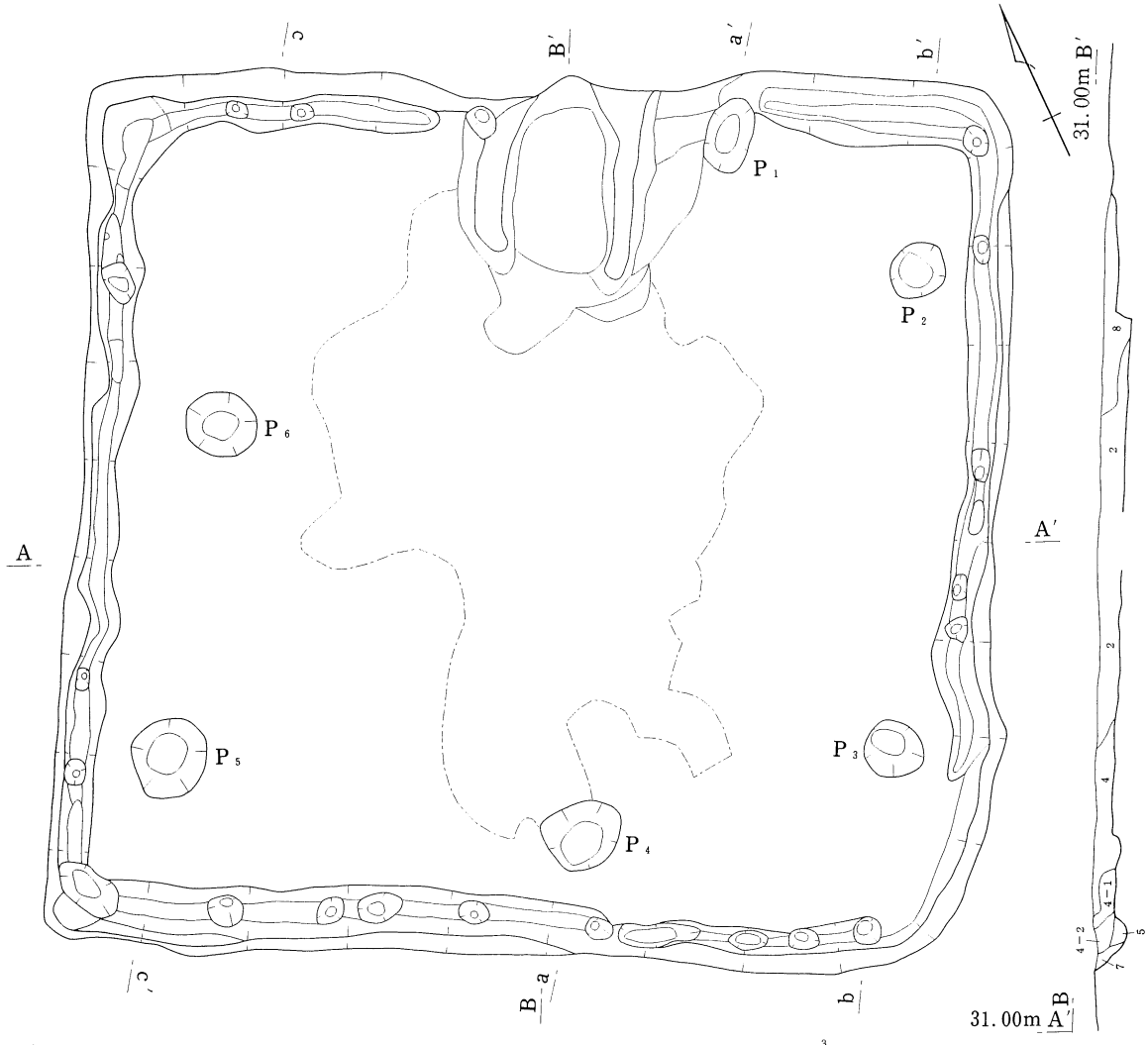
第63図　第106号住居跡出土遺物実測図(1～3)

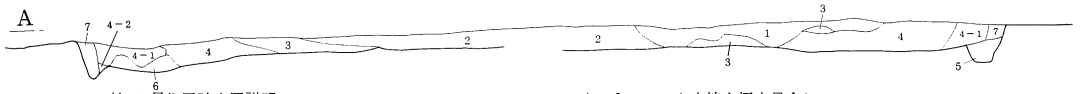
(7) 第107号住居跡



第64図　第107号住居跡遺物等出土状況図

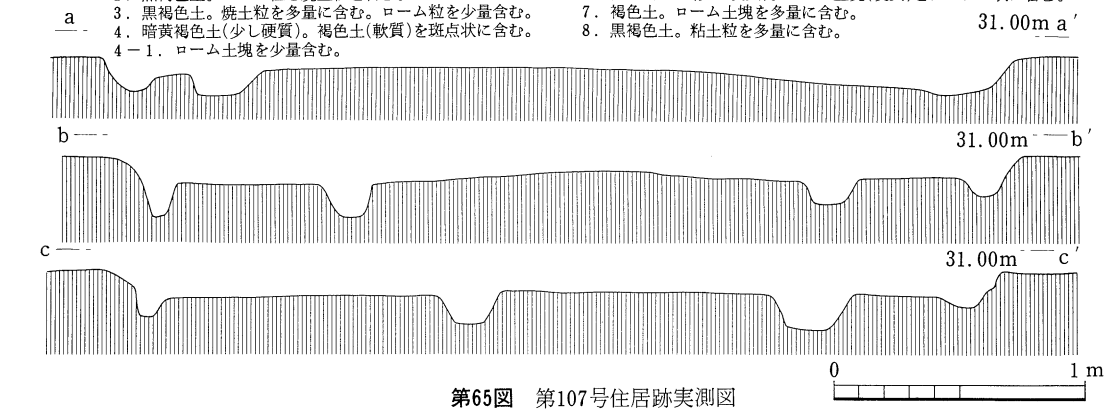
調査地区の南西側に位置し、第102号掘立柱建物跡が東に約１ｍの距離で近接する。平面形体は、不整方形であるが、東南側の隅は、丸みを帯びる。規模は、長軸7.62ｍ、短軸7.28ｍを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、Ｎ－29°－Ｅを示す。壁の立ち上がりは、低く、最大で12cmであり、残存が悪い。床面は、ソフトローム層上面に設置され、中央部は、若干高く、踏み固められた面は、カマド前面からP_4付近までの床面中央部に明確に検出された。床面積は、約11.57㎡である。壁溝は、カマド周辺と南東側隅が途切れており、溝内に小ピットも多く検出されている。壁溝の幅は、３～８cm、深さは、５～20cmである。床面内のピットは、６本存在しているが、各々の用途は、不明である。P_1は、カマド右側に位置し、竪穴壁と接している。P_4は、カマドのほぼ反対側の壁近くの床面、P_2、P_3、P_5、P_6は、各壁近くの床面である。覆土は、下層のみの観察であるが、黒褐色土を主体に、ローム粒と焼土粒を多く含んでいる。カマドは、北側壁の中央やや東寄りに設置され、保存状況は、悪く、袖部残存高は



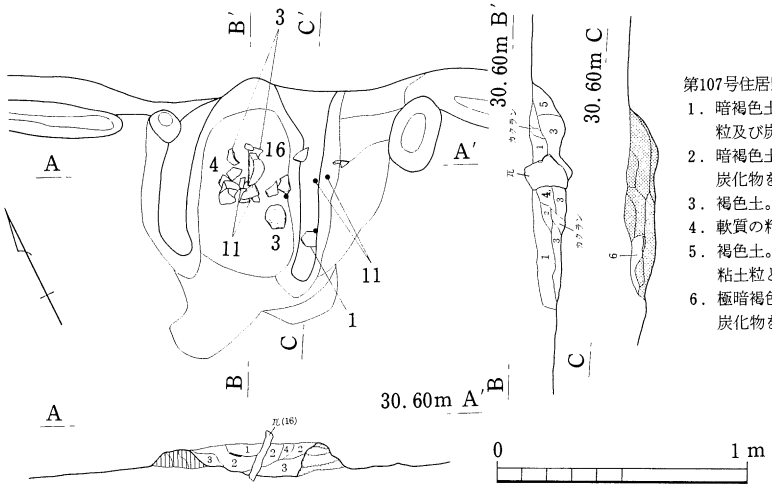


第107号住居跡土層説明

1．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土。ローム粒と焼土粒を含む。
3．黒褐色土。焼土粒を多量に含む。ローム粒を少量含む。
4．暗黄褐色土(少し硬質)。褐色土(軟質)を斑点状に含む。
4－1．ローム土塊を少量含む。
4－2．ローム土塊を極少量含む。
5．明黄褐色土(少し硬質)。ローム土塊をブロック状に含む。
6．明黄褐色土(少し硬質)。ローム土塊(硬質)をブロック状に含む。
7．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
8．黒褐色土。粘土粒を多量に含む。

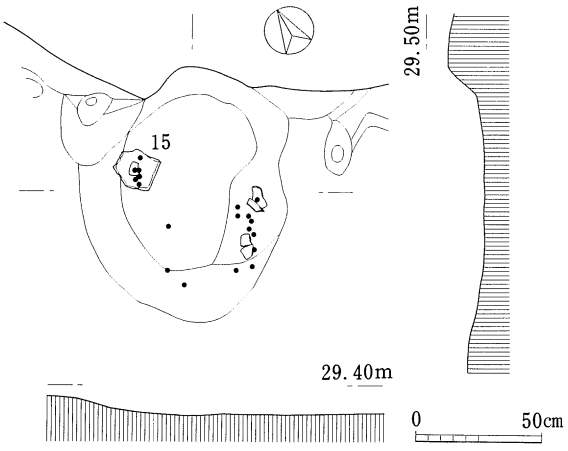


第65図　第107号住居跡実測図



第107号住居跡カマド土層説明
1．暗褐色土。ローム粒と粘土粒と焼土粒及び炭化物を少量含む。
2．暗褐色土(軟質)。粘土と焼土粒及び炭化物を多量に含む。
3．褐色土。粘土と焼土粒を少量含む。
4．軟質の粘土塊
5．褐色土。ローム粒を少量含む。粘土粒と焼土粒を少量含む。
6．極暗褐色土。山砂と粘土を少量含む。炭化物を極少量含む。

第66図　第107号住居跡カマド実測図



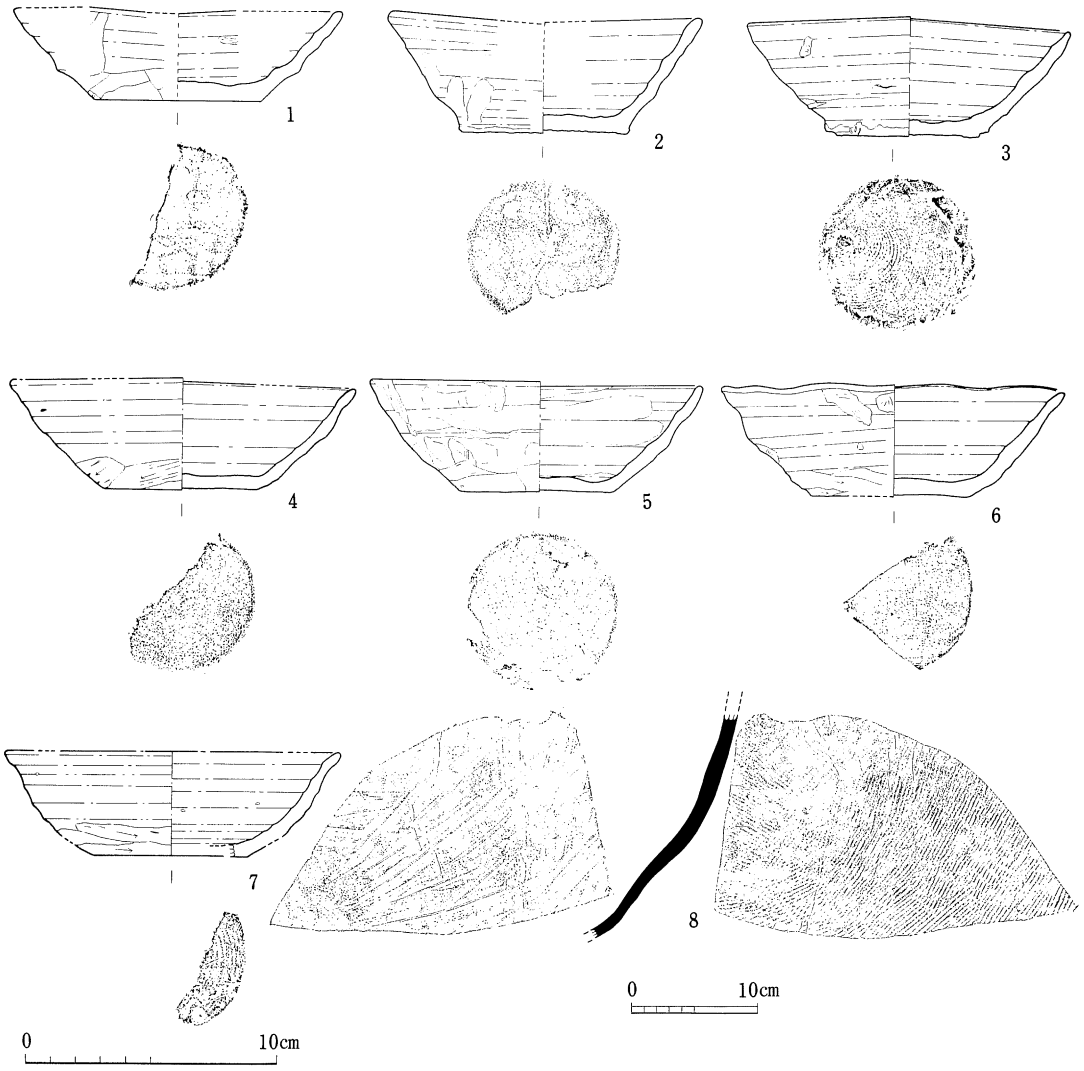
第67図　第107号住居跡カマド掘り方実測図

12cmである。煙道部は、壁を約10cm掘り込んでいる。出土遺物は、比較的多く、ほとんどが、床面直上から覆土下位より検出されている。No.1・3・4・11・15・16がカマド付近より、No.2がカマド前面床面より、No.7・6・9がカマド右側(東側隅付近の床

第29表　第107号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	61×37	33×26	3
P_2	50×43	28×23	19
P_3	48×46	28×19	27
P_4	64×53	38×29	19
P_5	61×58	33×29	30
P_6	59×53	30×24	27

面)より、No.8が北側床面より、No.10・12・13が西側付近床面より、No.5が南側隅付近の床面より出土している。さらに、No.6・7は、南東側床面、No.11は、カマド右前面(東側)床面及び西側床面からもそれぞれ破片として出土している。これら遺物のうち、No.14～16は、瓦片で、No.14は、男瓦、凸面は、平滑となっている。凹面は、布目痕を残し、端部は、ヘラケズリがなされる。色調は、両面とも暗灰色、胎土は、小礫3㎜以下を少量含み、焼成は、良好である。厚さは1.5cm。No.15は、女瓦で、凹面に布目痕、また側縁部にも布の端部痕が残る。凸面は、縄目痕が認められる。色調は、両面とも淡褐色と暗褐色、胎土に砂粒を少量含む。焼成はやや不良、厚さは、1.8cm。No.16も、女瓦で、凹面は、布目痕とみられるが摩耗する。凸面は、縄目、端部はヘラケズリ、色調は、両面とも褐色、胎土は緻密、焼成やや不良、厚さ1.9cm。



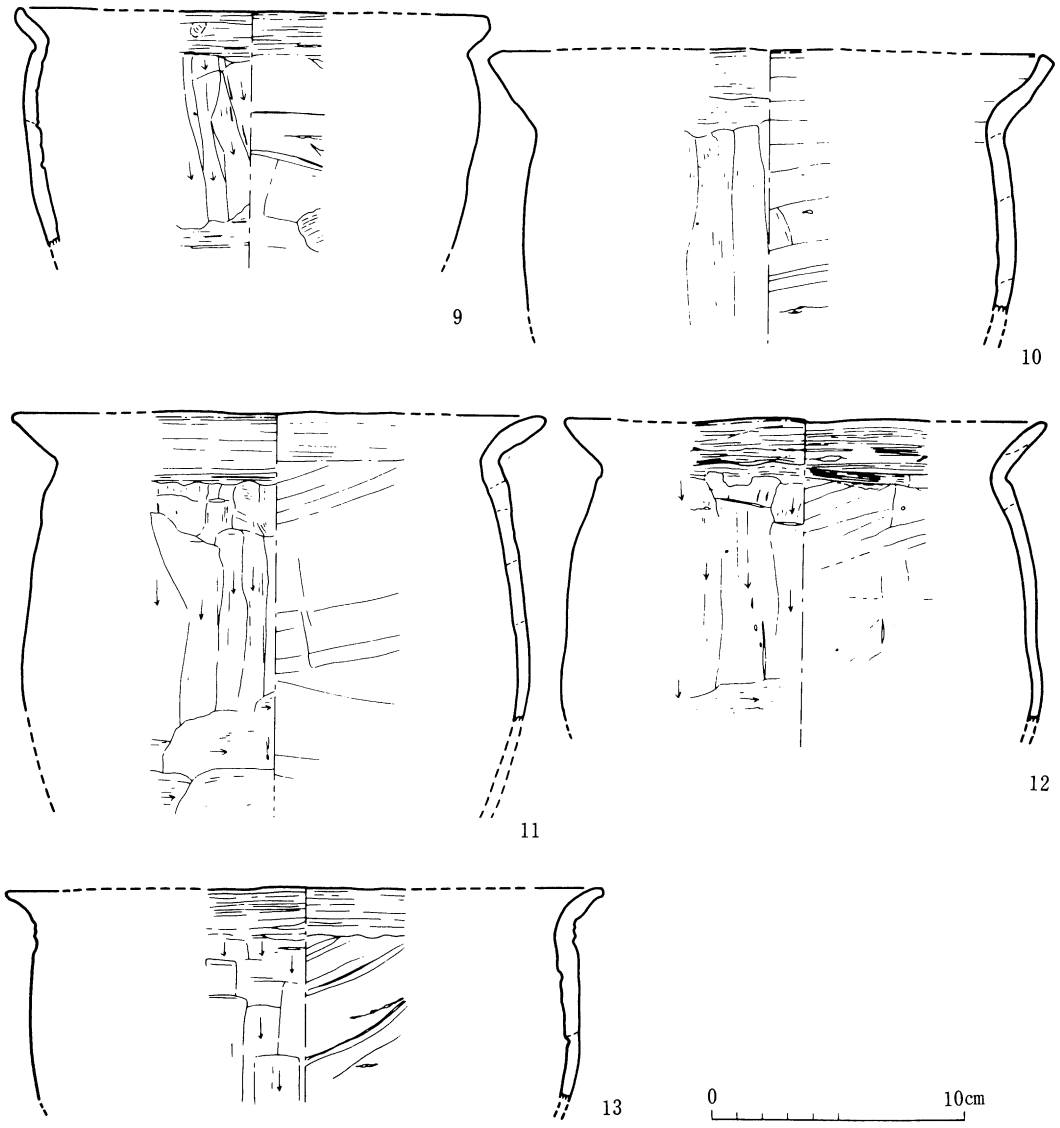
第68図　第107号住居跡出土遺物実測図(１～８)

第30表　第107号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図68 1	a.坏 b.カマド内 全体の 1/8の 残存	口径(13.1) 底径(6.7) 器高(3.6)	d.砂粒を少量 含む e.普通	平底で、やや小型の浅い逆台形状を呈する坏。	底部は、右回転ロクロ糸切り離し後、手持ちヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	ロクロ水挽き成整形(指) 体部下位を手持ちヘラケズリ 〈色調〉淡褐色
図68 2	a.坏 b.カマド内 c.1/4の 残存	口径(12.5) 底径(6.8) 器高(4.4)	d.砂粒を少量 含む e.普通	1と同様	1と同様	1と同様
図68 3	a.坏 b.カマド内 c.全体の 1/2の残存	口径(12.9) 底径(6.1) 器高(4.8)	d.砂粒を少量 含む e.やや良好	1と同様	底部は、右回転ロクロ糸切り離し 〈色調〉両面とも暗褐色と 淡茶褐色	
図68 4	a.坏 b.カマド内 c.全体の 1/3の残存	口径(13.85) 底径(6.1) 器高(4.5)	d.砂粒を少量 含む e.普通	1と同様	底部は、右回転ロクロ糸切り離し後、手持ちヘラケズリ 〈色調〉両面とも黒褐色 暗茶褐色	ロクロ水挽き成整形(指) 体部下位を手持ちヘラケズリ

第31表　第107号住居跡出土遺物観察表（２）

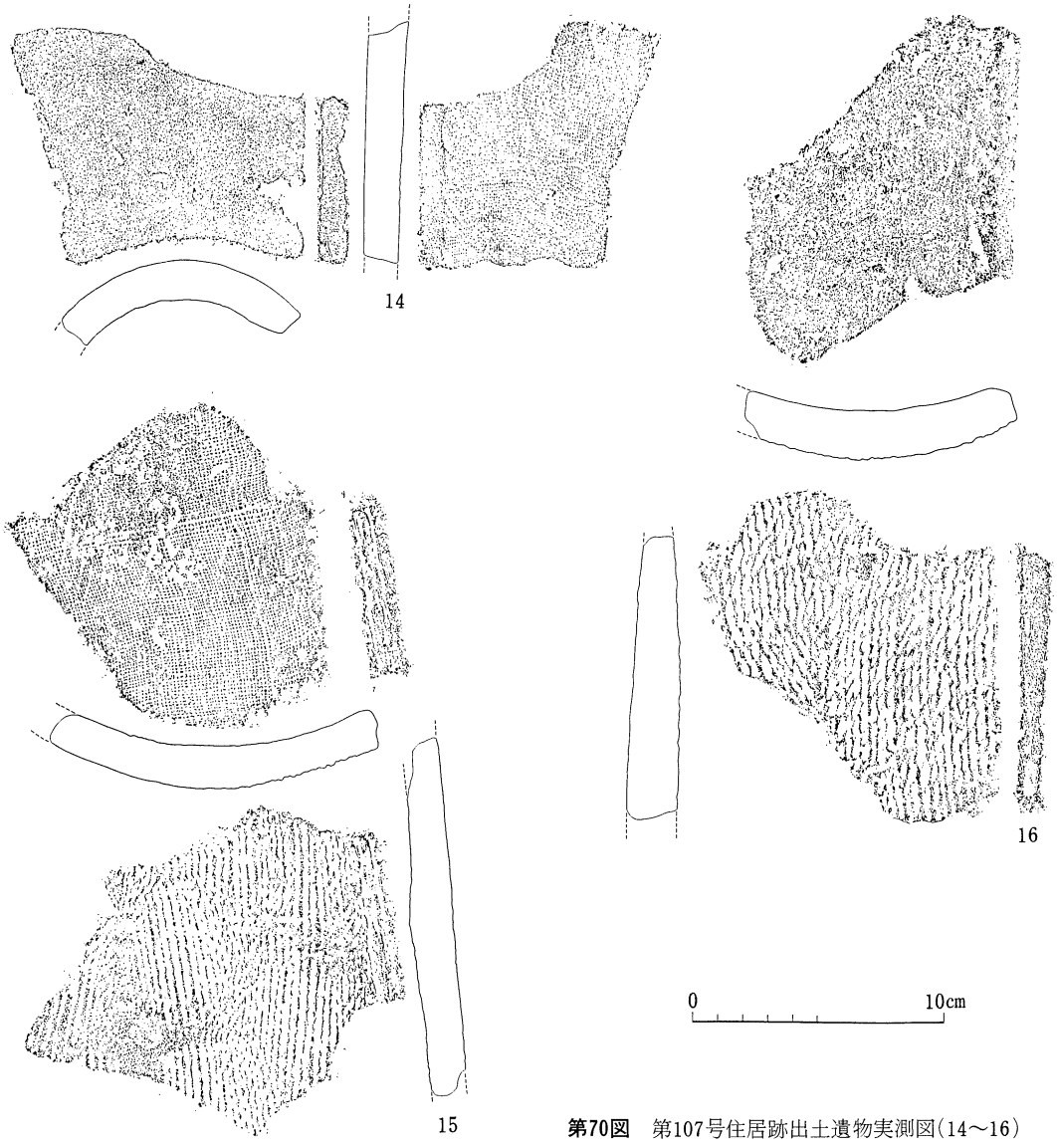
挿図番号	a．器　種 b．出土位置 c．遺存度	法量(cm)	器質 { d．胎土 e．焼成 }	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外　面	内　面
図68 5	a．坏 b．南東側隅 部覆土下位 c．全体の残 存	口径(13.3) 底径(6.1) 器高(4.45)	d．砂粒を少量 含む e．普通	平底で、逆台形状を呈する坏。	底部は、右回転ロクロ糸切り離し 〈色調〉両面とも黒褐色、 暗茶褐色	ロクロ水挽き成整形(指) 体部下位に手持ちヘラケズリ
図68 6	a．坏 b．南東側隅 部覆土下位 c．10%欠損	口径(13.7) 底径(6.2) 器高(9.5)	d．砂粒を少量 含む e．普通	平底で、逆台形状を呈する坏であるが、口唇部は、歪んでいる。	底部は、右回転ロクロ糸切り離しの後、手持ちヘラケズリ 〈色調〉両面とも黒褐色、 暗茶褐色	5と同様
図68 7	a．坏 b．6と同じ c．全体の 1/3残存	口径(13.4) 底径(6.15) 器高(4.2)	d．砂粒を極少 量含む e．少し良好	平底で、体部の立ち上がりは、やや丸みを帯びる。	底部は、右回転ロクロ糸切り離しの後、手持ちヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色、 淡褐色	5と同様



第69図　第107号住居跡出土遺物実測図（９～13）

第32表　第107号住居跡出土遺物観察表(３)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 { d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図68 8	a.須恵器 (甕) b.西側覆土下位 c.胴部破片	器厚 7.5～12.5mm	d.緻密 e.良好		平行タタキ目(単位10本) 〈色調〉両面とも暗灰色	ヘラナデ
図69 9	a.(甕) b.北東側覆土下位 c.胴部～口縁1/4残存	口径(19.0) 胴最大径 (18.5) 頸部(17.6)	d.小礫２mm以下を含む e.普通	底部は欠損する。胴部最大径を上位にもち、口縁部は、くの字状に小さく外反し、口唇部は、丸みを持つ。	胴下半＝横方向のヘラケズリ 胴上半部＝縦方向のヘラケズリ 口縁部＝横ナデ 〈色調〉両面とも暗褐色	胴部＝ヘラナデ 口縁部＝横ナデ



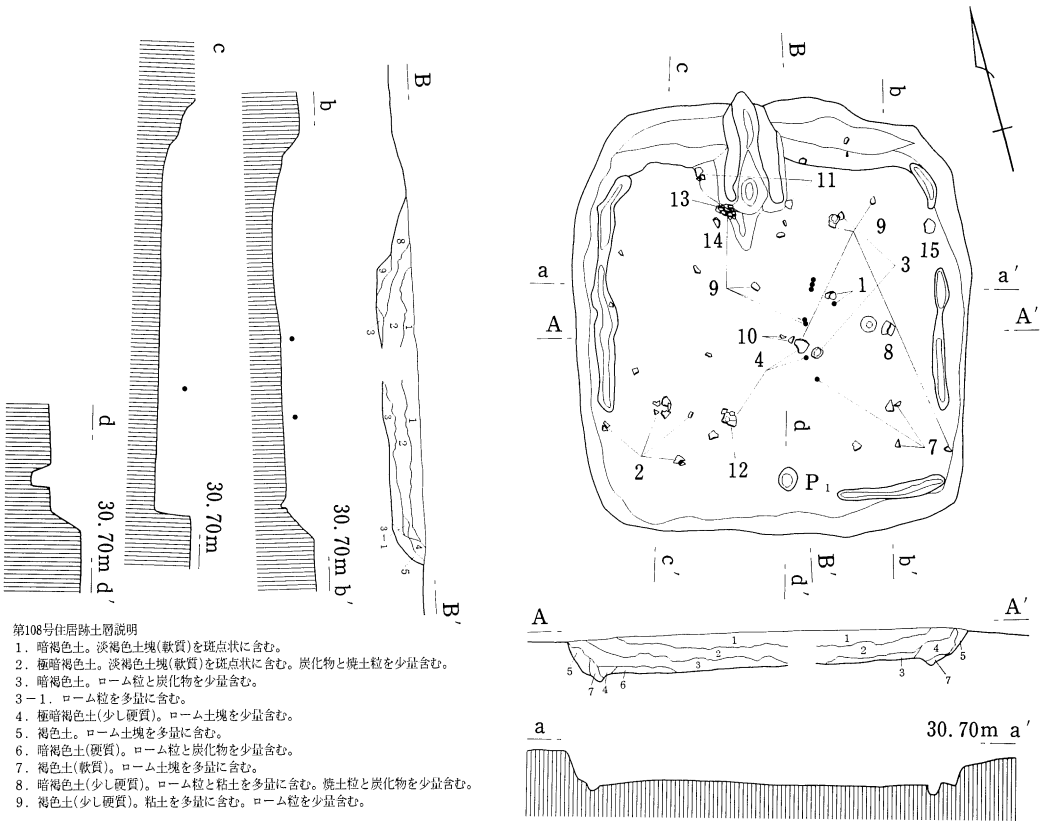
第70図　第107号住居跡出土遺物実測図(14～16)

第33表　第107号住居跡出土遺物観察表(４)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図69 10	a.(甕) b.南西側覆土下位 c.胴部～口縁部1/4の残存	口径(23.0) 胴部最大径(19.5)	d.砂粒を含む e.普通	底部を欠損、胴部最大径を上位にもち、口縁部は、くの字状に外反する。口縁部中位にわずかな稜をもつ。	胴下半部＝横方向のヘラケズリ 胴上半部＝縦方向のヘラケズリ 口縁部＝横ナデ 〈色調〉黒褐色、暗褐色、淡茶褐色	胴部＝ヘラナデ 口縁部＝横ナデ 〈色調〉黒褐色、暗褐色
図69 11	a.(甕) b.南西側覆土下位 c.胴部～口縁部1/5の残存	口径(21.4) 胴部最大径(20.5) 頸部径(17.9)	d.砂粒を含む e.普通	底部を欠損、胴部最大径は、中位に有り、口縁は、くの字状に外反する。	10と同じ	10と同じ
図69 12	a.(甕) b.南西側覆土下位 c.胴部～口縁部1/4の残存	口径(19.6) 胴部最大径(19.45) 頸部径(16.7)	d.小礫2mm以下を含む e.普通	11と同じ	10と同じ	10と同じ
図69 13	a.(甕) b.南西側覆土下位 c.胴部～口縁部1/5の残存	口径(24.0) 胴部最大径(22.0) 頸部径(21.8)	d.小礫3mm以下を極少量含む e.わずかに不良	胴部最大径は、上位に有り、口縁部は、くの字状に小さく外反する。	10と同じ 〈色調〉両面とも暗褐色、淡褐色	胴部＝ヘラナデの後、布状ブキ 口縁部＝横ナデ

(8) 第108号住居跡

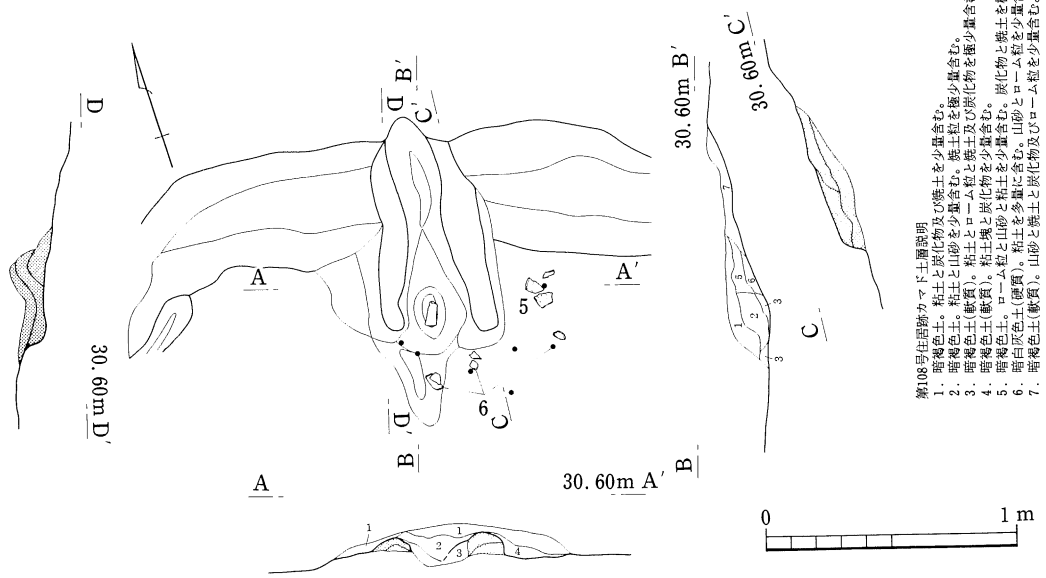
調査地区の南西側、平坦部に位置し、第103号掘立柱建物跡と重複し、掘立柱のピットに、プランの西側一部を切られている。また、第107号住居跡が北東側約10m、第116号住居跡が南東側約20mに各々所在する。平面形体は、胴張りの隅円方形を呈し、規模は、長軸3.50m、短軸3.17mを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－14°－Eを示す。壁の立ち上がりは、残存状況が悪く、浅い。最大で28cmの残存高であり、また、北側壁は、２段の傾斜を呈し、上段部は、胴張りが強く、最長約20cmの平坦面をもつ。床面は、ソフトローム層内のレベルに設置され、やや北東側隅が少し窪んでいる。踏み固められた面は、床面中央部付近にわずかに認められる。床面積は、約8.42㎡である。壁溝は、竪穴壁より少し離れて、床面の内側寄りに位置し、部分的に途切れている。幅は、４～18cm、深さは、５～９cmを測る。床面内のピットは、１本のみで、P_1が、カマドの向かい側床面の壁近くに存在する。大きさは、上端19×15cm、下端10×８cm、深さ14cmである。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体とし、下位の層には、焼土粒や炭粒を含んでいるが、火災住居とは考え難い。また、覆土は、自然堆積である。カマドは、北側壁中央やや西寄りに設置され、保存状況は不良である。煙道部は、やや長く、竪穴壁を約50cm掘り込んでいる。出土遺物は、比較的多く、特に坏類が12点検出されている。本書に取り上げた遺物は、すべて、床面直上か覆土下位のレベル出土である。また、鉄滓が１点出土している。



第108号住居跡土層説明
1．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。
2．極暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。炭化物と焼土粒を少量含む。
3．暗褐色土。ローム粒と炭化物を少量含む。
3－1．ローム粒を多量に含む。
4．極暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を少量含む。
5．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
6．暗褐色土(硬質)。ローム粒と炭化物を少量含む。
7．褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
8．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒と粘土を多量に含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
9．褐色土(少し硬質)。粘土を多量に含む。ローム粒を少量含む。

0　1　2 m

第71図　第108号住居跡実測図

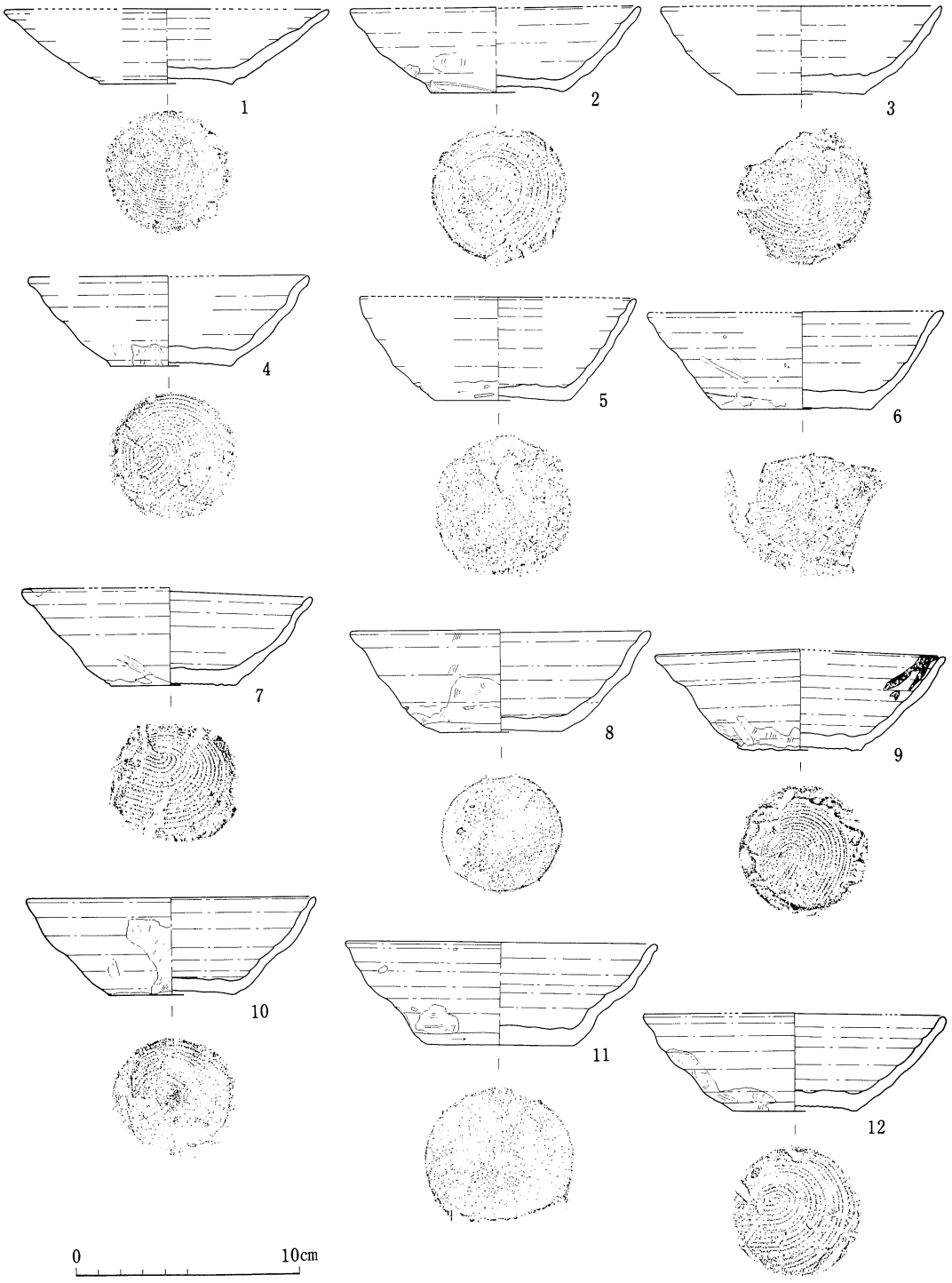


第108号住居跡カマド土層説明
1．暗褐色土。粘土と炭化物及び焼土を少量含む。
2．暗褐色土。粘土と山砂を少量含む。焼土粒を極少量含む。
3．暗褐色土。粘土とローム粒と焼土及び炭化物を極少量含む。
4．暗褐色土(軟質)。粘土塊と炭化物を少量含む。
5．暗褐色土。ローム粒と山砂と粘土を少量含む。炭化物と焼土を極少量含む。
6．暗白灰色土。粘土を多量に含む。山砂とローム粒を少量含む。
7．暗褐色土(軟質)。山砂と焼土と炭化物及びローム粒を少量含む。

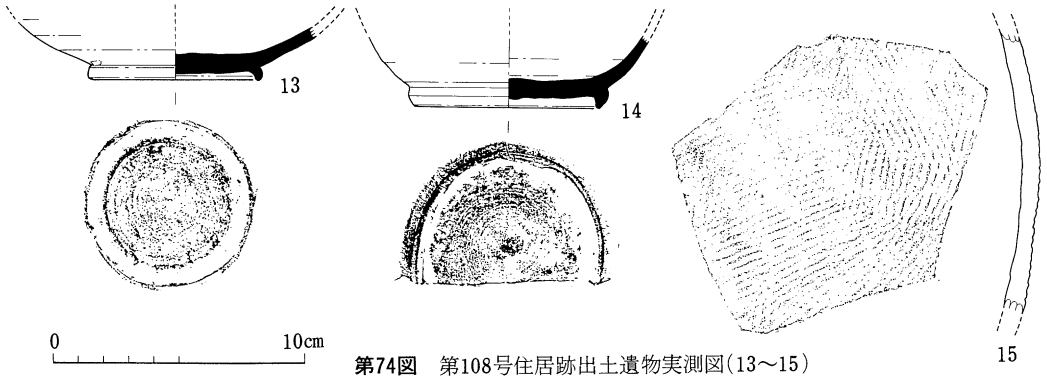
第72図　第108号住居跡カマド実測図

第34表　第108号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器　種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外　面	内　面
図73 1	a.坏 b.床面中央 覆土下位 c.全体の 1/3の残存	口径(14.55) 底径(6.0) 器高(3.4)	d.緻密 e.普通	平坦でやや窪む。体部は、大きく直線状に外反する。浅い感じの坏。	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し。指頭痕有り 〈色調〉両面とも暗褐色、淡褐色、一部黒褐色	ロクロ水挽き成整形(指)
図73 2	a.坏 b.南東側覆 土下位 c.全体の 1/2	口径(13.0) 底径(6.1) 器高(3.85)	d.砂粒を少量含む e.普通	平坦でやや窪む。体部は、少し丸みをもって立ち上がる。	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し。指頭痕有り 指頭痕が体下部に残る	ロクロ水挽き成整形(指) 〈色調〉両面とも淡褐色
図73 3	a.坏 b.北東側覆 土下層 c.全体の 1/8の残存	口径(12.6) 底径5.8 器高4.0	d.緻密 e.普通	2と同様	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し。 〈色調〉両面とも暗褐色、一部黒褐色	ロクロ水挽き成整形(指)
図73 4	a.坏 b.床面中央 付近覆土 下位 c.全体の60 %の残存	口径12.6 底径5.5 器高4.1	d.緻密 e.良好	2と同様	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し。 〈色調〉黒褐色、暗褐色、一部暗茶褐色	3と同じ
図73 5	a.坏 b.カマド右 側床面 c.1/2	口径12.4 底径6.1 器高4.7	d.小礫2㎜以下を含む e.普通	平底でやや窪む。全体に逆台形状を呈する。	底部＝右回転ロクロ糸切り 離しの後、手持ちヘラケズリ、体下位も手持ちヘラケズリ	3と同じ 〈色調〉両面とも淡暗褐色
図73 6	a.坏 b.カマド前 面右側の 床面 c.全体の 1/2の残存	口径(13.4) 底径(6.8) 器高(4.4)	d.砂粒を少量含む e.普通	5と同様	5と同様 体下位に糸痕を残す 〈色調〉両面とも暗褐色、暗茶褐色	3と同じ
図73 7	a.坏 b.南東側覆 土下位 c.全体の 2/3の残存	口径13.0 底径5.7 器高4.4	d.緻密 e.普通	5と同様	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し。 〈色調〉両面とも淡褐色	
図73 8	a.坏 b.東側覆土 下位 c.完形	口径13.5 底径5.5 器高4.75	d.小礫2㎜以下を少量含む e.普通	底部は、やや窪む。体部は、少し丸みをもつ。	底部＝右回転ロクロ糸切り 離しの後、手持ちヘラケズリ、体下位も手持ちヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	両面ともロクロ水挽き成整形(指) 〈色調〉淡暗褐色
図73 9	a.坏 b.床面中央 やや北東寄り c.全体の 1/2以上 の残存	口径13.0 底径5.1 器高4.6	d.緻密 e.普通	8と同様	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し。指頭痕有り 〈色調〉淡暗褐色	8と同様 〈色調〉淡褐色
図73 10	a.坏 b.床面中央 覆土 c.全体の 1/2強の残存	口径13.0 底径5.65 器高4.4	d.緻密 e.普通	8と同様	9と同様 〈色調〉淡茶褐色一部暗褐色	8と同様
図73 11	a.坏 b.カマド両 脇の床面 c.全体の 2/3の残存	口径14.0 底径6.6 器高4.7	d.小礫3㎜以下を少量含む e.普通	8と同様 底部がやや厚手	底部＝右回転ロクロ糸切り 離しの後、手持ちヘラケズリ 体下部＝手持ちヘラケズリ 指頭痕有り	8と同様 〈色調〉暗褐色、一部暗茶褐色
図73 12	a.坏 b.床面中央 付近 c.全体の70 の残存90%	口径13.6 底径5.6 器高4.4	d.緻密 e.普通	8と同様	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し。指頭痕有り 〈色調〉両面とも淡褐色、一部暗茶褐色	8と同様
図74 13	a.灰釉埦 b.カマド左 袖付近 c.底部付近 のみ	底部径6.5 高台高0.6	d.白色粒を多く含む e.良好	四角形の断面をもった高台が付き、体部は、埦状に立ち上がる。	底部＝右回転ロクロ糸切り 離し 〈色調〉暗灰色一部淡灰色	一部に釉が付着。 〈色調〉淡灰色一部淡灰緑色



第73図　第108号住居跡出土遺物実測図（１～12）



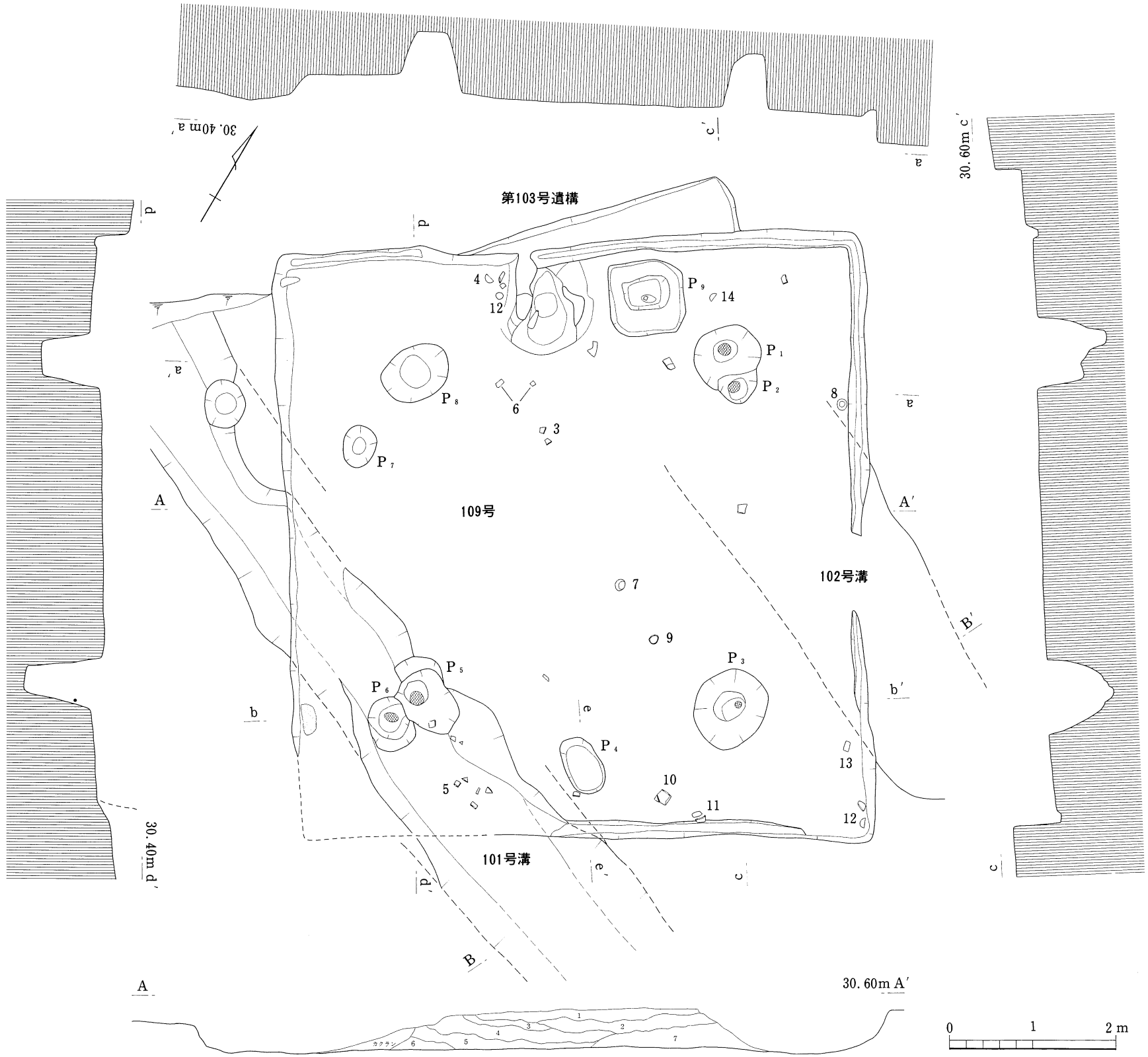
第74図　第108号住居跡出土遺物実測図(13～15)

第35表　第108号住居跡出土遺物観察表(２)

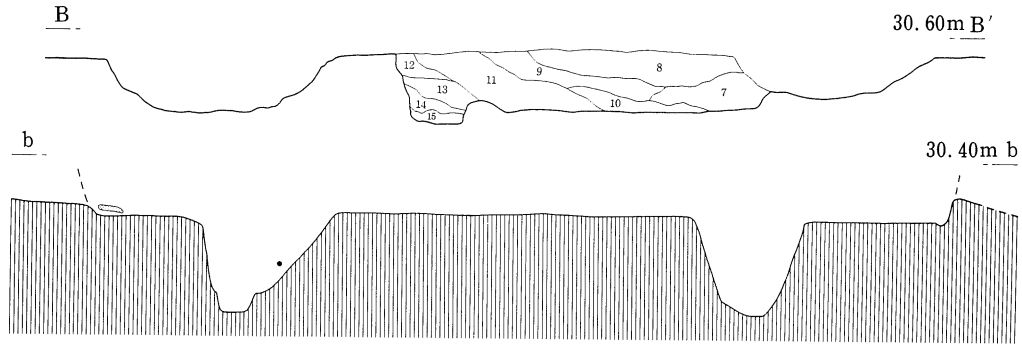
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図74 14	a.長頸壷 b.カマド左袖付近 c.底部付近のみ	底部径7.3 高台高0.8	d.緻密 e.良好	三角形の断面をもった高台が付き、体部は、埦状に立ち上がる。	底部＝右回転ロクロ糸切り離し、指頭痕有り 〈色調〉灰色	13と同じ
図74 15	a.須恵器(甕) b.北東側床面 c.胴部破片	器厚0.6～0.9	d.小礫２㎜を含む e.良好		平行線(９本か?)のタタキ目をもつ 〈色調〉両面暗灰色	

(9) 第109号住居跡

調査地区の南西側に位置し、第101、102号溝によって、北側と南側を切られている。第110号住居跡が、南西約1.5ｍの距離に近接する。平面形体は方形で、長軸7.30ｍ、短軸7.10ｍを測る。主軸方向は、短軸方向をはかり、Ｎ－31°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、直立にちかく、最大で52cmである。床面は、ハードローム層内に設置され、全体にほぼ平坦で、床面積は、約47.23㎡である。壁溝は、北側と東側の一部に認められるが、他は、第101、102号溝に切られている部分も有り、検出されていない。床面内のピットは、８本(P_1～P_8)存在し、P_1とP_2及びP_5とP_6は重複している。また、P_1 P_2 P_3 P_5 P_6は、主柱穴と考えられ、底部にあたり痕跡が認められる。P_4は、カマドの反対側の壁近くに位置し、出入口施設用ピットと考えられる。P_7、P_8は、南側床面に存在する。焼土の流れ込みが、南側より１ケ所認められる。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体とし、中に、ローム土塊を混入することから、人為的な埋めもどしの可能性がある。カマドは、北側壁の中央やや西寄りに設置されているが、保存状況は、悪く、袖部もあまり残っていない。煙道部は、竪穴の壁を掘り込んでいない。また、カマドの右横に方形の大きなピット(P_9)がある。立ち上がりは、２段となり、いわゆる貯蔵穴と考えられる。また、底部付近より、安山岩の大きな石が出土している。この他に出土遺物は、坏、鉢類が多い。No.４・12がカマド左側床面より、No.３・６がカマド前床面より、No.７・９が中央やや東寄り床面より、No.14がP_9の付近の床面、No.８が北東側床面、No.10・11・12・13が東側隅床面、No.５が南側床面等より出土している。



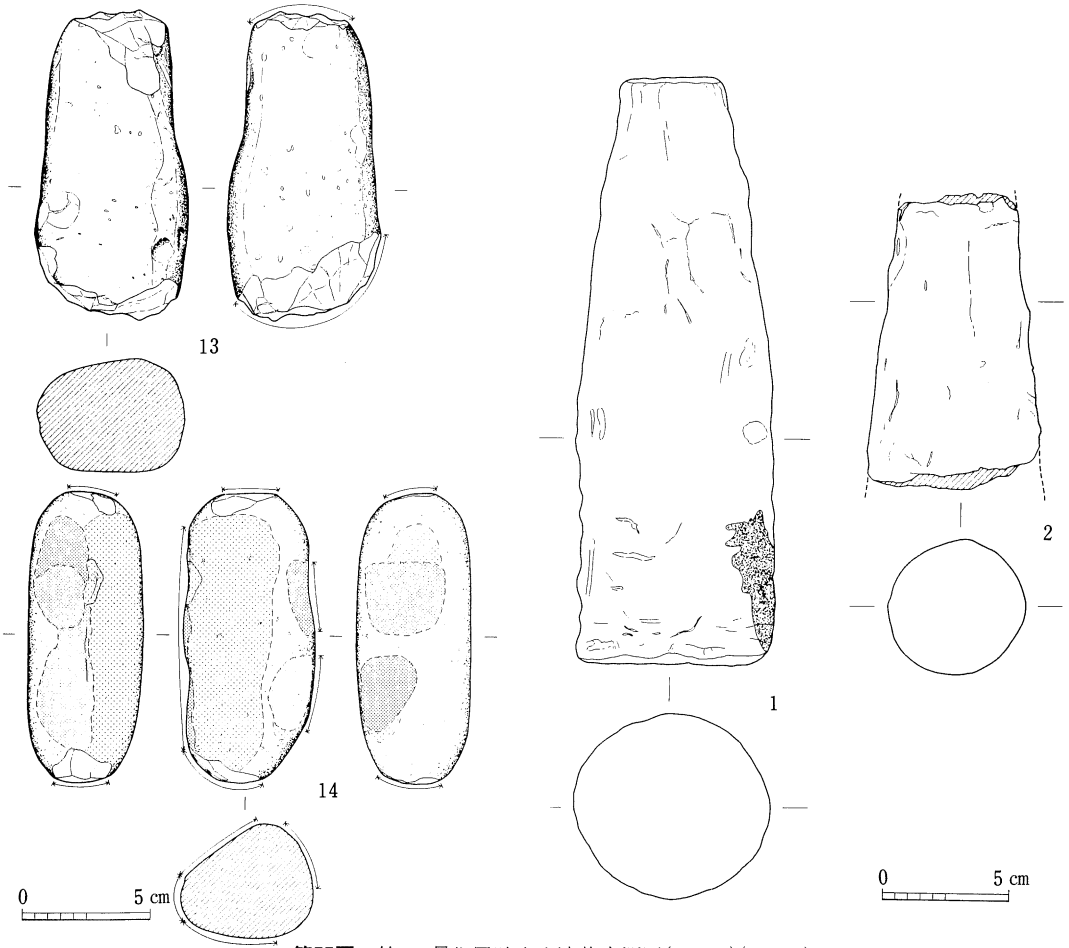
第75図　第109号住居跡実測図



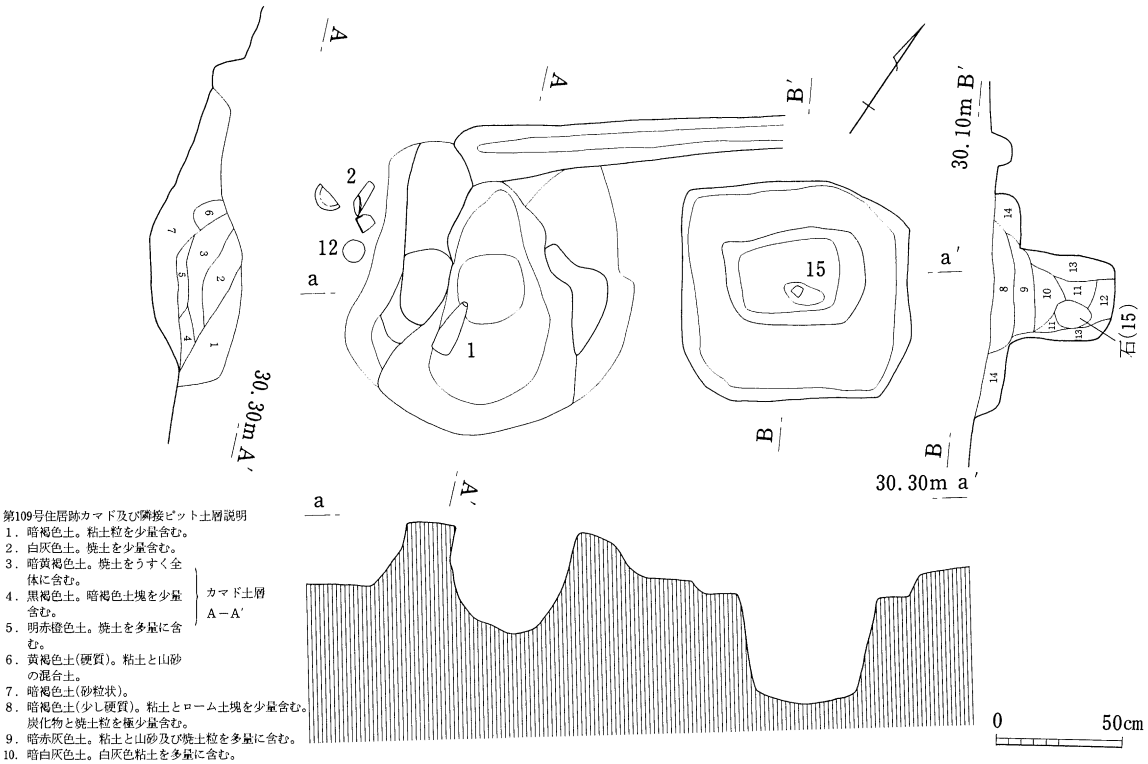
第109号住居跡土層説明

1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。ローム粒を含む。
2．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。ローム土塊を含む。
3．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を含む。
4．暗褐色土。ローム土塊を少量含む。粘土塊を含む。
5．暗褐色土(明るい)。淡褐色土塊とローム土塊を含む。
6．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を含む。
7．暗褐色土(明るい)。ローム土塊を多量に含む。
8．暗褐色土。ローム土塊を含む。
9．暗褐色土。(暗い)。ローム土塊を含む。
10．暗褐色土(少し軟質)。ローム土塊を含む。
11．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。ローム土塊を少量含む。
12．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
13．　6に似る。
14．黒褐色土(やや軟質)。ローム粒を含む。
15．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒と焼土粒を含む。

第76図　第109号住居跡断面図(b－b′，e－e′)及び土層図(B－B′)

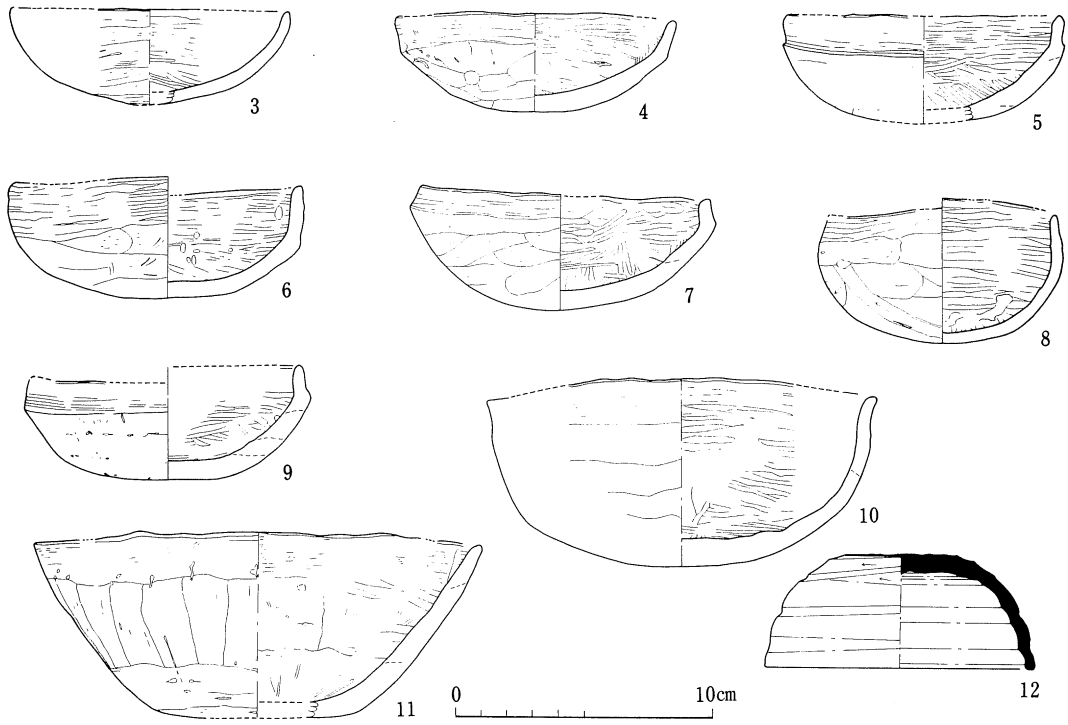


第77図　第109号住居跡出土遺物実測図(1・2)(13・14)



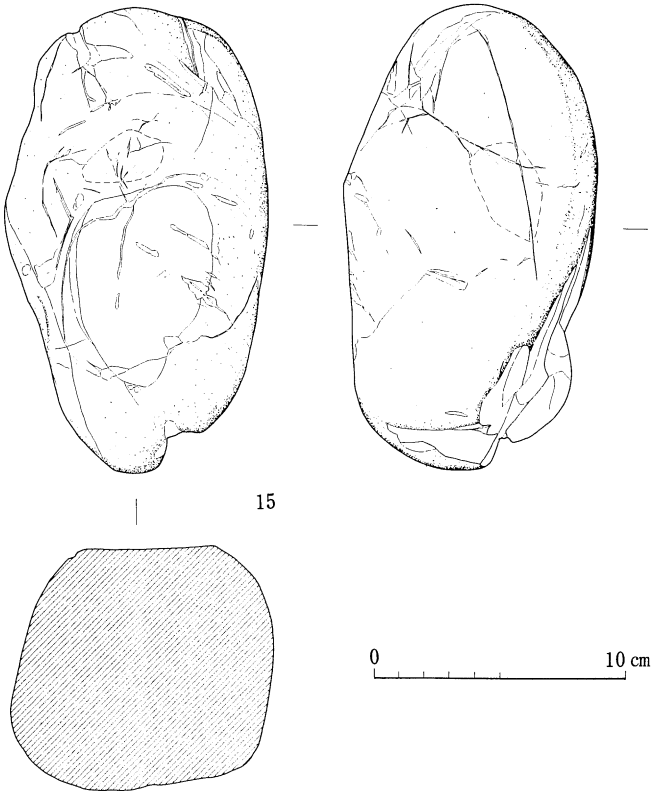
第109号住居跡カマド及び隣接ピット土層説明
1．暗褐色土。粘土粒を少量含む。
2．白灰色土。焼土を少量含む。
3．暗黄褐色土。焼土をうすく全体に含む。
4．黒褐色土。暗褐色土塊を少量含む。
5．明赤褐色土。焼土を多量に含む。
（カマド土層 A－A′）
6．黄褐色土(硬質)。粘土と山砂の混合土。
7．暗褐色土(砂粒状)。
8．暗褐色土(少し硬質)。粘土とローム土塊を少量含む。炭化物と焼土粒を極少量含む。
9．暗赤灰色土。粘土と山砂及び焼土粒を多量に含む。
10．暗白灰色土。白灰色粘土を多量に含む。
11．暗灰色土。灰を多量に含む。山砂と粘土を極少量含む。
12．暗褐色土。ローム土塊と山砂及び灰を少量含む。
13．極暗灰色土(軟質)。炭化物と焼土塊を少量含む。
14．暗褐色土。ローム土塊を少量含む。山砂と焼土と炭化物を極少量含む。

第78図　第109号住居跡カマド及びピット実測図



第79図　第109号住居跡出土遺物実測図(３～12)

No.1は、土製支脚で上端が細くなる円柱状を呈し、ほぼ完形、色調は、暗褐色、上端部径は、3.80cm、下端部径は、7.5cm、高さ23.4cmを計る。No.2は、同じく上端が細くなる円柱状を呈するとみられるが、上端と下端が欠損する。色調は、暗褐色である。No.13は、敲石と考えられ、上部と下部の両端に敲打痕が見られる。長さは、12.3cm、幅は、6.1cm、厚さは、4.5cmで火山岩である。重さは566gを計る。色調は、暗茶褐色。No.14は、磨石とみられ、ほぼ全面に痕跡が有る。長さ11.6cm、幅5.2cm、厚さ4.6cm、砂岩で暗灰褐色、重さは410gである。No.15は、重さ約2.5kg、色調は灰褐色で、一部に削痕と熱を受けた部分が有る。用途は不明である。



第80図　第109号住居跡出土遺物実測図(15)

第36表　第109a・b号
住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	82×(65)	31×25	81
P2	53×(40)	28×23	64
P3	98×84	30×21	78
P4	72×44	57×36	5
P5	82×59	29×27	97
P6	64×52	35×28	(41)
P7	52×38	20×15	10
P8	84×64	38×33	49
P9	90×90	56×40,39×35	9,51

第37表　第109a・b号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図79 3	a.坏 b.カマド前 c.全体の1/8の残存	口径(11.2) 器高3.8	d.緻密 e.やや不良	丸底でやや器高が低い椀状を呈する。器厚は、少し薄手。	体部＝横方向のヘラケズリ 口縁部＝横ナデ 〈色調〉淡茶褐色	全面ヘラミガキ 赤彩 〈色調〉赤褐色
図79 4	a.坏 b.カマド左側床面 c.全体の1/2の残存	口径(11.2) 器高4.0	d.砂粒を極少量含む e.少し不良	丸底で、椀状に立ち上がり、口縁部は、稜をもち、やや直立ぎみに立ち上がる。	体部＝ヘラケズリ、指頭痕有り 口縁部＝横ナデ 両面とも摩耗多し 〈色調〉淡褐色、褐色、一部黒褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉褐色
図79 5	a.坏 b.南側床面 c.底部欠損 1/3の残存	口径(11.2) 器高4.3	d.緻密 e.やや不良	丸底で、椀状に立ち上がり、口縁部は、明確な稜をもち、直立ぎみに立ち上がる。	体部＝ヘラケズリ? 口縁部＝横ナデ 全体に摩耗が激しく不明確 〈色調〉淡褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉褐色
図79 6	a.坏 b.カマド前 c.全体の80%の残存	口径11.7 器高4.9	d.緻密 e.やや不良	丸底で、椀状に立ち上がり、口縁部は直立し、体部との比率は、同じくらい。	体部＝ヘラケズリ 口縁部＝横ナデ 〈色調〉暗褐色	全面ヘラミガキ 少し剝離が有る 〈色調〉暗褐色、一部褐色
図79 7	a.坏 b.中央床面 c.口唇部1/3欠損のみ	口径12.0 器高4.7	d.緻密 e.やや不良	丸底で、椀状に立ち上がり、口縁部は、稜をもち、少し内傾しながら立ち上がる。	6と同様 〈色調〉淡褐色、一部赤褐色	6と同様 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色、一部赤褐色

第38表　第109a・b号住居跡出土遺物観察表(2)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図79 8	a.鉢 b.北東床面 c.口唇部20%欠損	口径9.2 体部最大径9.8 器高5.8	d.小礫5㎜以下を極少量含む e.普通	体部は、球状を呈し、口縁部は、わずかな稜をもち、内傾する。	体部＝ヘラケズリ 口縁部＝横方向のヘラミガキ、摩耗が多い 〈色調〉黒褐色一部淡茶褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色一部淡茶褐色
図79 9	a.坏 b.中央床面 c.全体の70%の残存	口径10.9 器高4.5	d.緻密 e.少し不良	5と同様	体部に粘土紐接合痕を少し認められる。摩耗が激しく不明 口縁部＝ヘラ横ナデ 〈色調〉淡褐色	全面ヘラミガキ 少し摩耗 〈色調〉暗褐色
図79 10	a.(鉢) b.東隅床面 c.全体の1/6～1/8残存	口径(15.5) 器高7.5	d.緻密 e.少し不良	丸底で、椀状に立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反ぎみとなる。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ摩耗が多い 〈色調〉暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉暗茶褐色
図79 11	a.(鉢) b.東隅床面 c.全体の1/3の残存	口径(17.8) 器高7.4	d.小礫3㎜～を少量含む e.少し不良	平底で、体部は、開きぎみに直線的に大きく立ち上がる。	体部下位＝横方向のヘラケズリ 体部上位＝縦方向のヘラケズリ 口縁部＝横ナデ 両面とも摩耗が多い 〈色調〉淡褐色一部淡赤褐色	体部＝横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 口縁部＝横ナデ 〈色調〉淡赤褐色、一部褐色
図79 12	a.須恵器坏蓋 b.東隅床面 c.1/2の残存	口径10.7 器高4.5	d.緻密 e.普通	天井部は、やや平坦で、体部は、椀状を呈する。少し小型の坏蓋である。	天井部＝回転ヘラケズリ 右回転ロクロ 〈色調〉暗灰色	回転によるナデ 〈色調〉灰色

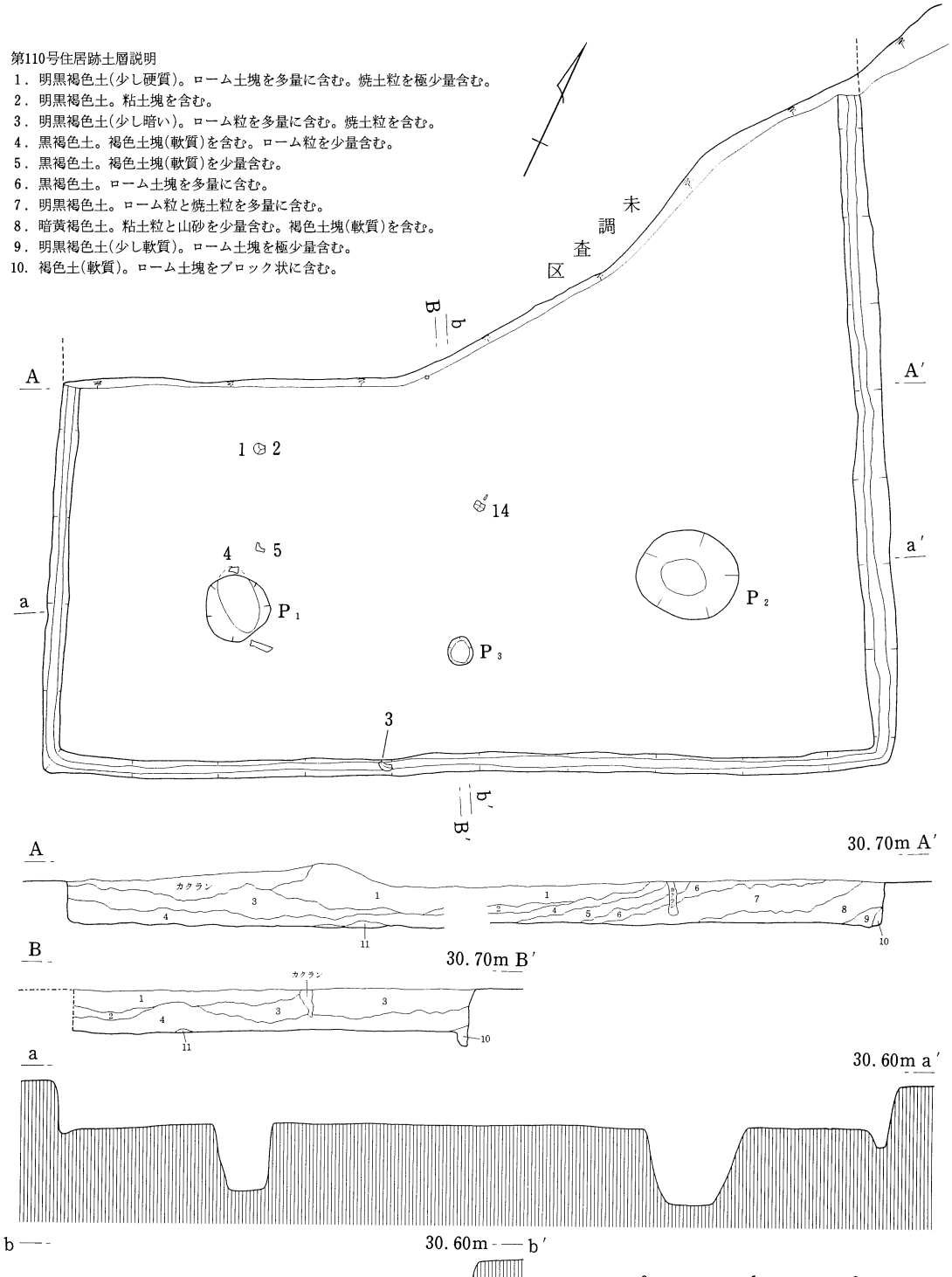
(10) 第110号住居跡

調査地区の南西隅に位置し、北側は、未調査地区である。したがって、およそプランの南側半分の調査であった。北東約3mに第109号住居跡が存在する。平面形体は、方形と推定され、東西の一辺は、7.80mを測る。主軸方位は、東西の一辺の直角方向ではかり、N－26°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で45cmをはかる。床面は、ハードローム層内のレベルに設定され、比較的平坦である。踏み固められた面は、床面中央付近に認められるが、やや不明瞭である。床面積は、不明である。壁溝は、調査した範囲では、全周している。下端幅は、4～12cm、深さは、4～15cmをはかる。床面内のピットは、3本検出され、P_1とP_2は、全体で4本ある内の南側2本と推定される。また、P_3は、出入口相当施設用のピットと考えられる。竪穴の覆土は、黒褐色土を主体とし、ローム土塊を多量に含む層がみられるため、人為的な埋めもどしの可能性がある。カマドは、おそらく、北側壁に設置されているとみられるが未調査である。また、現在の地形的な状況では、既に2～3m先がカットされているため、実在していないと思われる。出土遺物は、小片が多い。No.1・2が、西側床面より、No.3が、南側壁溝内より、No.4・5が、P_1付近床面、No.14が、床面中央やや南寄り、他は、覆土下位からの出土である。

No.19は、磨石とみられ、部分的に使用痕が認められる。材質は、石英片岩で、色調は、暗灰褐色、重さは、280gを計る。No.20は、軽石で、淡褐色を呈し、重さは0.45gである。両者とも、竪穴覆土下位の出土であるが、当住居跡に伴なうかどうかは、不明である。

第110号住居跡土層説明

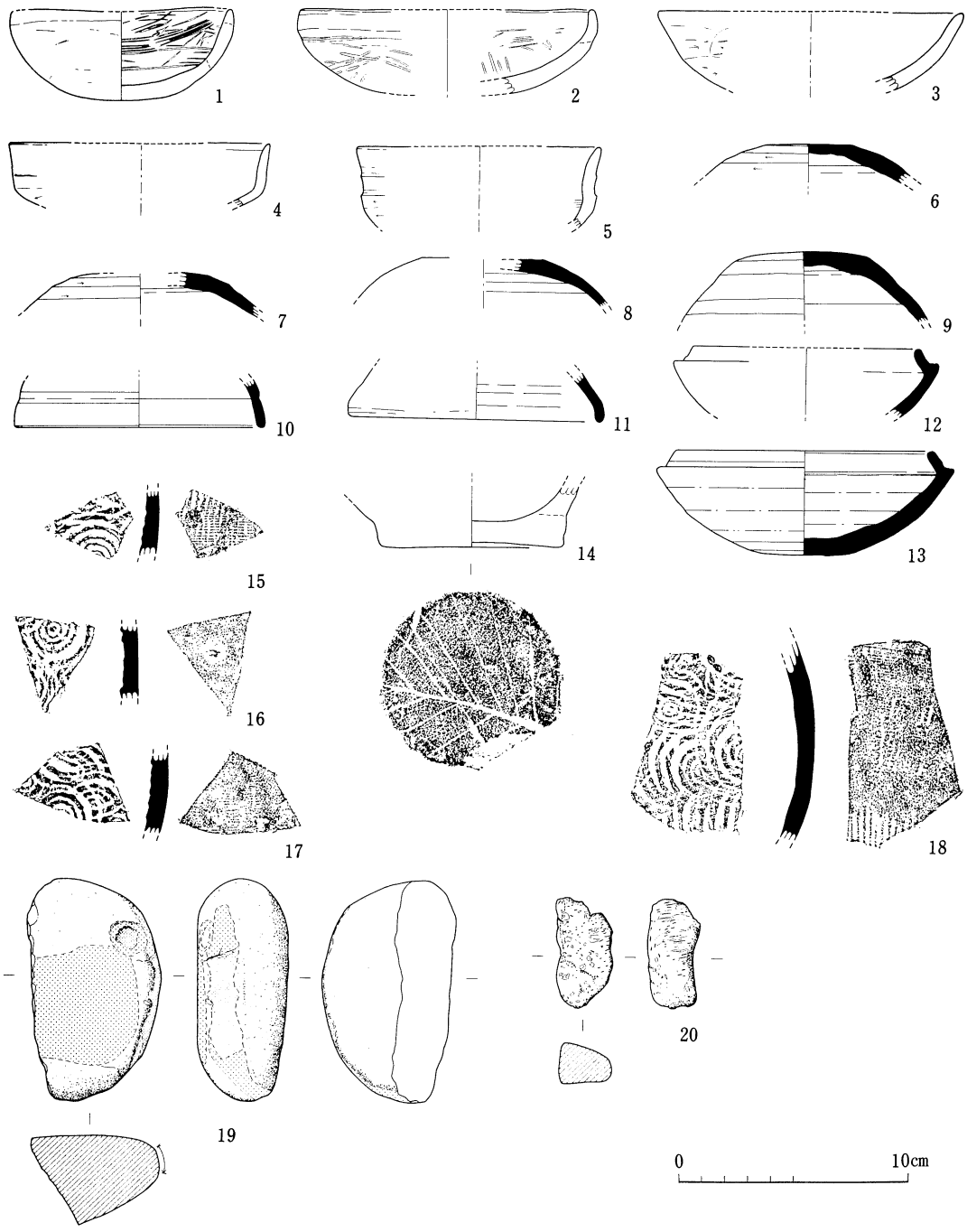
1．明黒褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
2．明黒褐色土。粘土塊を含む。
3．明黒褐色土(少し暗い)。ローム粒を多量に含む。焼土粒を含む。
4．黒褐色土。褐色土塊(軟質)を含む。ローム粒を少量含む。
5．黒褐色土。褐色土塊(軟質)を少量含む。
6．黒褐色土。ローム土塊を多量に含む。
7．明黒褐色土。ローム粒と焼土粒を多量に含む。
8．暗黄褐色土。粘土粒と山砂を少量含む。褐色土塊(軟質)を含む。
9．明黒褐色土(少し軟質)。ローム土塊を極少量含む。
10．褐色土(軟質)。ローム土塊をブロック状に含む。



第81図　第110号住居跡実測図

第39表　第110号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	58×58	63×32	62
P2	91×80	43×34	70
P3	27×24	20×18	28



第82図　第110号住居跡出土遺物実測図

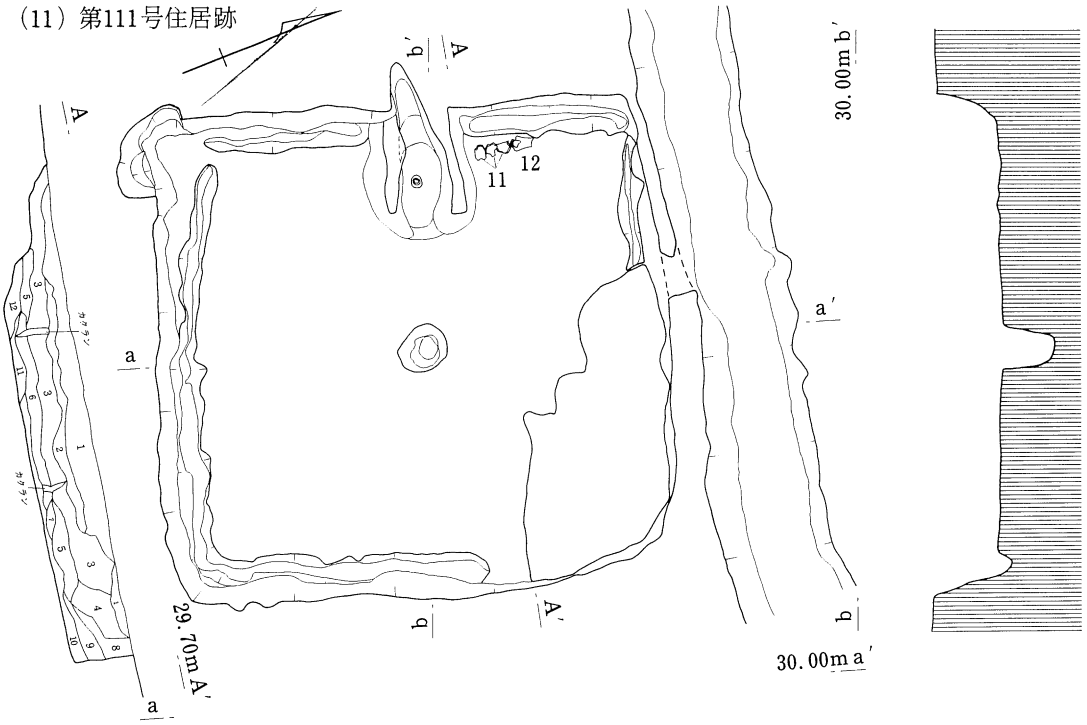
第40表　第110号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 { d.胎土 e.焼成 }	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図82 1	a.坏 b.南西側床面直上 c.70%残存	口径9.7 器高3.9	d.緻密 e.やや不良	小型の椀状を呈する坏。	体部＝横方向のヘラケズリ 口縁部＝横ナデ 摩耗が多い 〈色調〉淡褐色、黒褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図82 2	a.坏 b.南西側床面直上 c.上部1/4有	口径(13.0) 器高(3.8)	d.緻密 e.やや不良	やや偏平な椀形を呈する坏、口縁部は、わずかに内傾する。	体部＝ヘラケズリ後ヘラミガキ 口縁部＝横ナデ 〈色調〉両面とも茶褐色	全面ヘラミガキ
図82 3	a.坏 b.南側壁溝内 c.口縁部のみ1/8残存	口径(13.5)	d.緻密 e.やや不良	底部を欠損するが、体部は、浅い椀状に立ち上がり、口縁部は直線的に外反する。	2と同様 〈色調〉	2と同様
図82 4	a.(坏) b.南西側床面 c.口縁部のみ1/8残存	口径(11.5)	d.緻密 e.やや不良	底部を欠損するが、体部は、開きぎみに立ち上がり、口縁部は直立する。	2と同様 〈色調〉	2と同様
図82 5	a.(坏) b.南西側床面 c.口縁部のみ1/8残存	口径(10.7)	d.緻密 e.やや不良	体部は椀状で、口縁部は、2段の稜をもち、直立する。	2と同様 〈色調〉	2と同様
図82 6～9	a.須恵器(蓋坏) b.覆土下位 c.天井部のみ残存		d.緻密 e.良好	天井部は、ヘラケズリにより平坦である。	天井部＝2段～4段の回転ヘラケズリ 〈色調〉淡灰色、灰色、暗灰色	仕上げナデ
図82 10	a.須恵器蓋坏 b.覆土下位 c.口縁部付近のみ	口径(10.9)	d.緻密 e.良好	口縁部は、やや開きぎみで、外面に浅い沈線が周る。	仕上げナデ 〈色調〉灰色	仕上げナデ 〈色調〉淡灰色
図82 11	a.須恵器蓋付 b.覆土下位 c.口縁部付近のみ	口径(11.3)	d.緻密 e.普通	体部は、開き、口縁部で、短かく垂直となる。	10と同様	10と同様
図82 12	a.須恵器坏身 b.覆土下位 c.底部を欠損する	口径(10.0) 体大径(11.6) かえり高0.65	d.緻密 e.普通	体部は、やや浅い椀状で、口縁部は、稜をもち、かえりをつくって内傾する。	仕上げナデ 〈色調〉暗灰色	仕上げナデ 〈色調〉灰色
図82 13	a.須恵器坏身 b.覆土下位 c.完形	口径11.3 体大径13.1 器高4.65 かえり高0.70	d.緻密 e.やや不良	底部は、平底、体部は、浅い椀状で、口縁部は、稜をもち、かえりをつくり内傾	12と同様	12と同様
図82 14	a.(甕) b.床面中央 c.底部のみ	底径8.1	d.小礫2㎜含む e.やや不良	底部中央は、わずかに上げ底で、底部は約1cmほど直立ぎみで、木の葉底。	横方向を主体とするヘラケズリとみられるが、摩耗が多く不明 〈色調〉暗褐色	ヘラナデ やや摩耗する 〈色調〉暗茶褐色

第41表　第110号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a 器種 b 器厚	器質 { c 胎土 d 焼成 }	形態、成整形、文様等の特徴及び色調	出土位置
図82 15	a.(甕) b.0.7～0.5	c.小礫2㎜を含む d.良好	胴部破片で、外側は、平行線のタタキ目の後、横方向のカキ目、内側は、アテ目の同心円文がのこる。 〈色調〉外面黒灰色、内面灰色	覆土
図82 16	a.(甕) b.0.8～0.7	15と同じ	胴部破片で、外側は、横方向のカキ目、内側は、アテ目の同心円文がのこる。 〈色調〉両面とも灰色	覆土
図82 17	a.(甕) b.0.8～0.75	15と同じ	16と同様	覆土
図82 18	a.(甕) b.0.8～0.7	15と同じ	15と同様	覆土

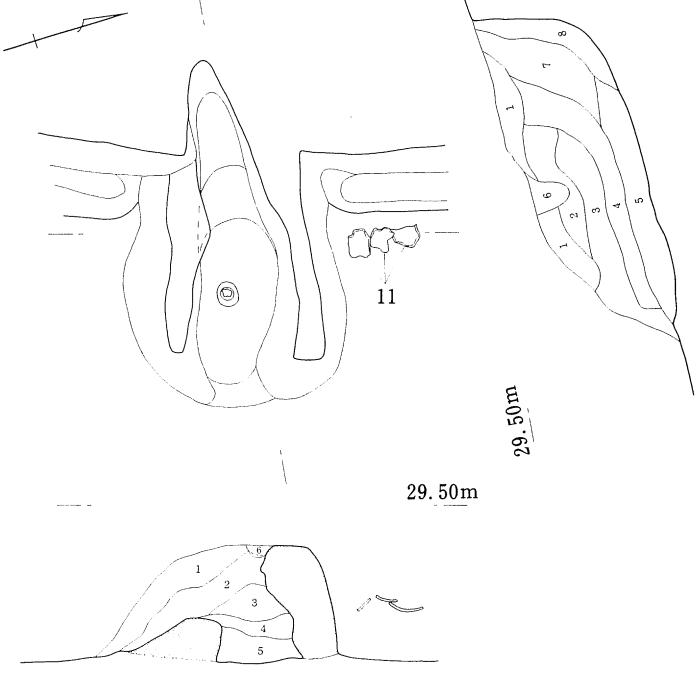
（11）第111号住居跡



第111号住居跡土層説明

1．暗茶褐色土。黄褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
3．明茶褐色土。ローム土塊を少量含む。
4．黒褐色土(少し硬質)。黄褐色土塊(軟質)を含む。
5．暗茶褐色土(少し軟質)。ローム土塊を含む。
6．暗茶褐色土。ローム土塊(軟質で薄い)をブロック状に含む。
7．暗茶褐色土。ローム土塊を含まない。
8．暗茶褐色土。単一の土。
9．暗茶褐色土。黄褐色土塊が大半を占めている。
10．明褐色土。ローム土塊を少量含む。
11．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
12．褐色土。ローム土塊を多量に含む。粘土塊も含む。

第83図　第111号住居跡実測図



第111号住居跡カマド土層説明

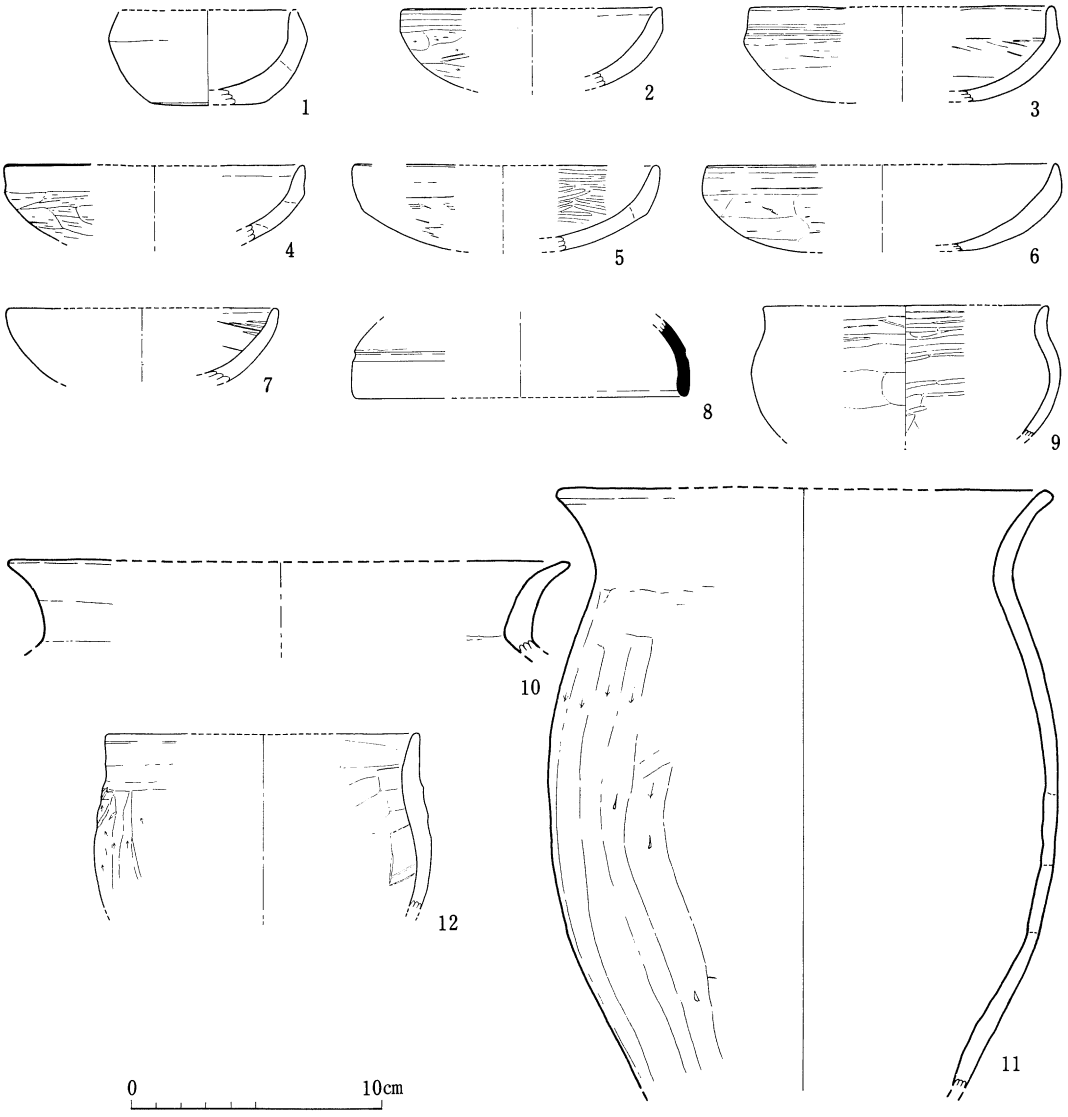
1．茶褐色土。山砂と粘土及び焼土を極少量含む。
2．暗白灰色土。粘土塊と山砂を多量に含む。
3．暗褐色土。山砂と粘土を少量含む。ローム土塊を極少量含む。
4．白灰色土。粘土塊が不規則にブロック状を呈する。
5．暗赤橙色土。焼土と灰及び炭化物を多量に含む。粘土と山砂を極少量含む。
6．黒褐色土(軟質)。山砂と粘土を極少量含む。
7．暗黄灰色土。山砂を多量に含む。炭化物を少量含む。
8．暗白灰色土。粘土を多量に含む。

第84図　第111号住居跡カマド実測図

第111号住居跡は、調査地区の北側に位置し、北側端部では、谷に向かって傾斜している。また、第105号溝によって北端部を、南西隅をピットによりそれぞれ壁が、北東側を風倒木の土坑により、床面までが各々切られている。第145号住居跡は、北西に、約2mの距離にある。平面形体は、不整方形で、長軸は、4.07m、短軸は、3.88mを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、N－19°－Wを示す。壁の立ち上がりは、南側で高く残り、既に傾斜のはじまる北側では、低く、72～45cmをはかる。床面積は、約13.16㎡である。壁溝は、北東と北西及び南側で途切れる。幅は4～12cm、深さは10～14cmである。ピットは、床面の中央部に1本認められ、上端長径40cm、短径34cm、下端長径19cm、短径15cm、深さ42cmを測る。覆土は、自然堆積で、ローム土粒を含む黒褐色土を主体としている。カマドは、西北側壁のほぼ中央に位置し、煙道部がやや南側に片寄った位置にある。また壁を約45cm掘り込んでいる。右袖は、比較的良く残り、燃焼部の内壁は、アーチ型が想定される。出土遺物は、カマドの右側より、No.11・12が、他はすべて覆土内の検出である。定形品は無い。

第42表　第111号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図85 1	a.坏 b.覆土内 c.底部欠損 1/4の残存	口径(7.1) 底径(4.7) 器高(3.8) 体最大径 (7.8)	d.緻密 e.少し不良	平底で、体部は埦状に立ち上がり、口縁部は、内傾する。内側は、直立。小型	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉淡褐色	全面ヘラミガキ? 摩耗が多い 〈色調〉暗褐色、一部淡褐色
図85 2	a.坏 b.覆土内 c.底部欠損 1/4の残存	口径(10.3) 体部最大径 (10.4)	d.緻密 e.普通	埦状に立ち上がり、口縁部は、小さく稜をもち、直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図85 3	a.坏 b.覆土内 c.底部欠損 1/3の残存	口径(12.2) 底径(12.5)	d.小礫有り e.普通	体部は、浅い埦状を呈し、口縁部は、稜をもち、直立する。	2と同様	2と同様
図85 4	a.坏 b.覆土内 c.底部欠損 1/3の残存	口径(11.9)	d.小礫有り e.やや不良	体部は、浅い埦状を呈し、口縁部は、わずかに稜をもち直立する。	2と同様	2と同様
図85 5	a.坏 b.覆土内 c.底部欠損 1/3の残存	口径(12.1) 口縁稜部分 (11.3)	d.緻密 e.普通	体部は、浅い埦状を呈し、口縁部は、わずかに稜をもち、やや外反ぎみに直立する。	2と同様	2と同様
図85 6	a.坏 b.覆土内 c.底部欠損 1/3の残存	口径(13.9) 口縁稜部分 (14.2)	d.小礫有り e.少し不良	体部は、浅い埦状を呈し、口縁部は、やや内傾しながら立ち上がる。	2と同様	2と同様
図85 7	a.坏 b.覆土内 c.底部欠損 1/4の残存	口径(10.6)	d.緻密 e.普通	小型で、やや開きぎみの埦状を呈する。	少し摩耗しているが2と同様とみられる 〈色調〉淡褐色、黒色	2と同様 〈色調〉暗褐色、黒褐色
図85 8	a.須恵器蓋坏 b.覆土内 c.全体の 1/4	口径(13.3)	d.緻密 e.やや不良	天井部を欠損、体部は、埦状を呈し、口縁部は直立する。口縁部下位に沈線有り。	ナデ 〈色調〉両面とも淡灰色	ナデ
図85 9	a.鉢 b.覆土内 c.底部欠損 20%残存	口径(11.4) 体部最大径 (12.2)	d.砂粒を含む e.普通	体部は、球状を呈する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色	全面横方向のヘラミガキ



第85図　第111号住居跡出土遺物実測図

第43表　第111号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図85 10	a.(甕) b.覆土内 c.口縁部のみ	口径22.2	d.小礫3㎜を含む e.良好	くの字状に屈曲し外反する口縁部。	口縁部＝横ナデ 〈色調〉両面淡橙褐色	口縁部＝横ナデ
図85 11	a.(甕) b.カマド右 c.口縁部 1/2 胴部4/5残存 底部残存	口径19.2 胴部最大径 20.0	d.小礫2㎜を含む e.普通	胴部最大径は中位に有り、口縁部は外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部＝横ナデ 〈色調〉淡褐色
図85 12	a.(鉢) b.カマド右 c.口縁部のみ	口径12.4 体部最大径 (13.4)	11と同じ	最大径は、体中位に有り、口縁部は、直立するが、口唇部付近でやや外反する。	口縁部＝横ナデ 体部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ

(12) 第112号住居跡



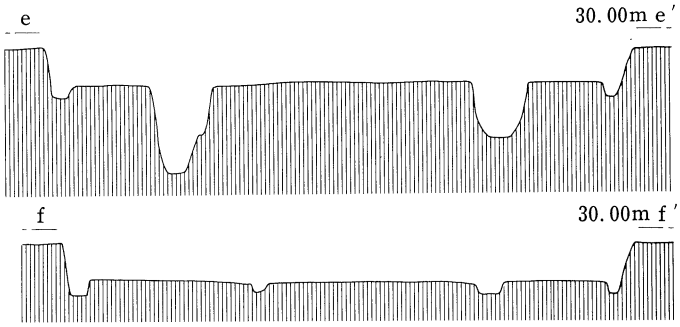
第112号住居跡土層説明

1. 暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。
2. 黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。
3. 明黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。
4. 黒褐色土。粘土粒とローム粒を含む。
5. 黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を極少量含む。
6. 明黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
7. 黒褐色土。ローム土塊を極少量含む。
8. 暗褐色土。ローム粒と粘土塊を多量に含む。
9. 暗褐色土。ローム土塊を含む。
10. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。
11. 褐色土。ローム土塊がブロック状に混入する。

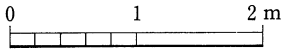
貝ブロック土層説明(g－g′)

1. 貝ブロック(ハマグリ)
2. 極暗褐色土。ローム粒を含む。

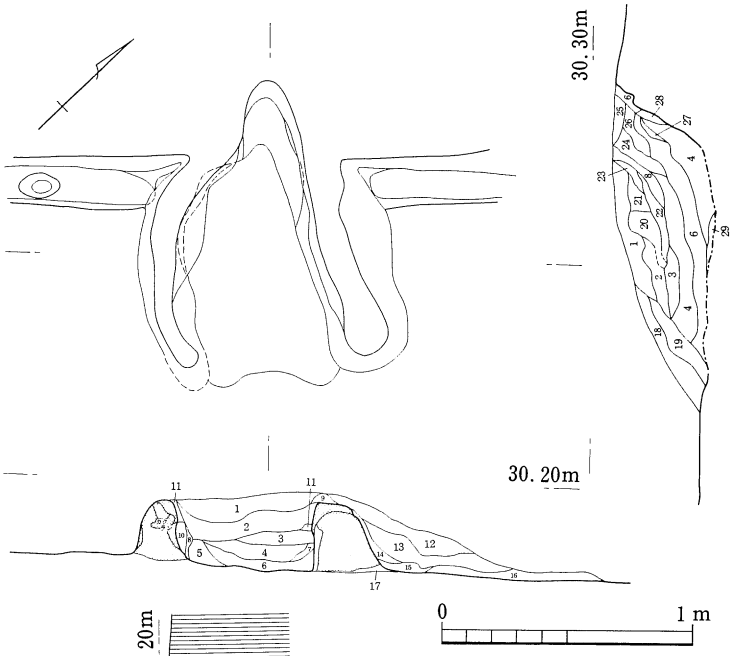
第86図　第112号住居跡実測図



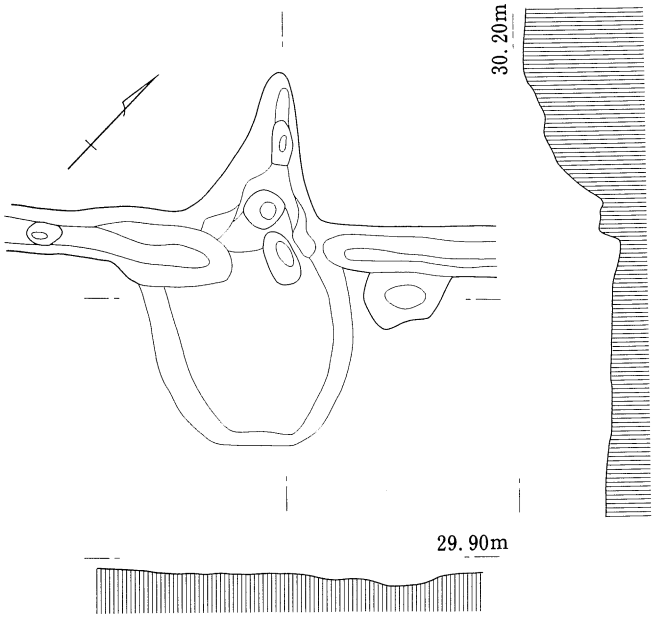
第87図　第112号住居跡断面図（e－e′，f－f′）



第112号住居跡カマド土層説明
1．灰色粘土(硬質)。粘土と山砂の混合土。
2．灰色粘土(少し暗い、硬質)。粘土と山砂の混合土。炭化物を極少量含む。
3．赤橙色粘土(硬質)。焼土化した粘土と山砂。
4．灰色粘土(硬質)。炭化物と焼土粒を極少量含む。
5．暗褐色土(軟質)。焼土粒、炭化物を多量に含む。粘土と山砂を少量含む。
6．暗赤褐色土(少し硬質)。焼土塊と粘土塊を多量に含む。炭化物を極少量含む。
7．暗灰色粘土(硬質)。山砂を多量に含む。粘土塊と焼土粒を少量含む。
8．赤橙粘土(硬質)。焼土化した粘土。
9．白灰色粘土。粘土と山砂を多量に含む。
10．黄灰色粘土(硬質)。山砂と粘土を多量に含む。
11．暗灰色粘土。焼土粒を少量含む。
12．暗灰色粘土(硬質)。焼土粒と炭化物を少量含む。
13．暗白灰色粘土(硬質)。焼土粒と炭化物を極少量含む。
14．暗黄灰色粘土(硬質)。山砂と粘土を多量に含む。
15．暗褐色土(少し硬質)。炭化物を多量に含む。粘土粒と焼土粒を少量含む。
16．暗褐色土(硬質)。ローム粒を多量に含む。粘土と山砂と炭化物及び焼土を極少量含む。
17．暗褐色粘土(硬質)。ローム土塊を少量含む。山砂粒を極少量含む。
18．暗褐色土(少し軟質)。炭化物と山砂を少量含む。
19．暗褐色土(少し軟質)。粘土と炭化物及び粘土粒を少量含む。
20．白灰色粘土(硬質)。
21．暗灰色粘土(硬質)。焼土粒を極少量含む。
22．暗灰色粘土(硬質)。
23．暗灰色粘土(軟質)。粘土粒を極少量含む。
24．明橙色粘土(少し軟質)。焼土化した粘土と山砂を多量に含む。
25．暗褐色土(軟質)。粘土と山砂と焼土粒を少量含む。
26．灰橙色粘土(軟質)。焼土と炭化物と粘土を少量含む。
27．暗灰色土。焼土粒と粘土を少量含む。炭化物を極少量含む。
28．黄灰色粘土(硬質)。
29．灰色粘土(少し軟質)。



第88図　第112号住居跡カマド実測図



第89図　第112号住居跡カマド掘り方実測図
（縮尺は上図第88図と同じ）

第112号住居跡は、調査地区の中央やや西寄りに位置し、第113号住居跡より南西へ約２ｍの距離にある。平面形体は、やや胴張りの隅円方形で、規模は、長軸5.79ｍ、短軸4.68ｍを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、Ｎ－42°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、最大30㎝である。床面は、ソフトローム層下位のレベルに設置され、踏み固められた面は、カマド前面から中央床面を主として、やや不明確ではあるが認められる。

床面積は、約22.04㎡である。壁溝は、全周し、幅6～14cm、深さ5～15cmを測る。床面内のピットは、5本検出され、各々に柱のあたり痕跡が認められる。P_1～P_4は、主柱穴と考えられ、P_3 P_4は、立ち上がりが2段を呈する。P_1～P_2は、2.47m、P_2～P_3は、2.37m、P_3～P_4は、2.63m、P_4～P_1は、2.48mである。また、P_5は、カマド反対側の壁近くの床面に位置し、出入口施設相当の梯子状ピットと推定している。竪穴の覆土は、黒褐色土に淡褐色土塊(軟質)を含む層を主体としており、自然堆積である。カマドは、北西側壁の中央やや北側寄りに設置され、煙道部は、壁への掘り込みが約30cmである。

第44表　第112号住居跡
ピット計測表(cm)

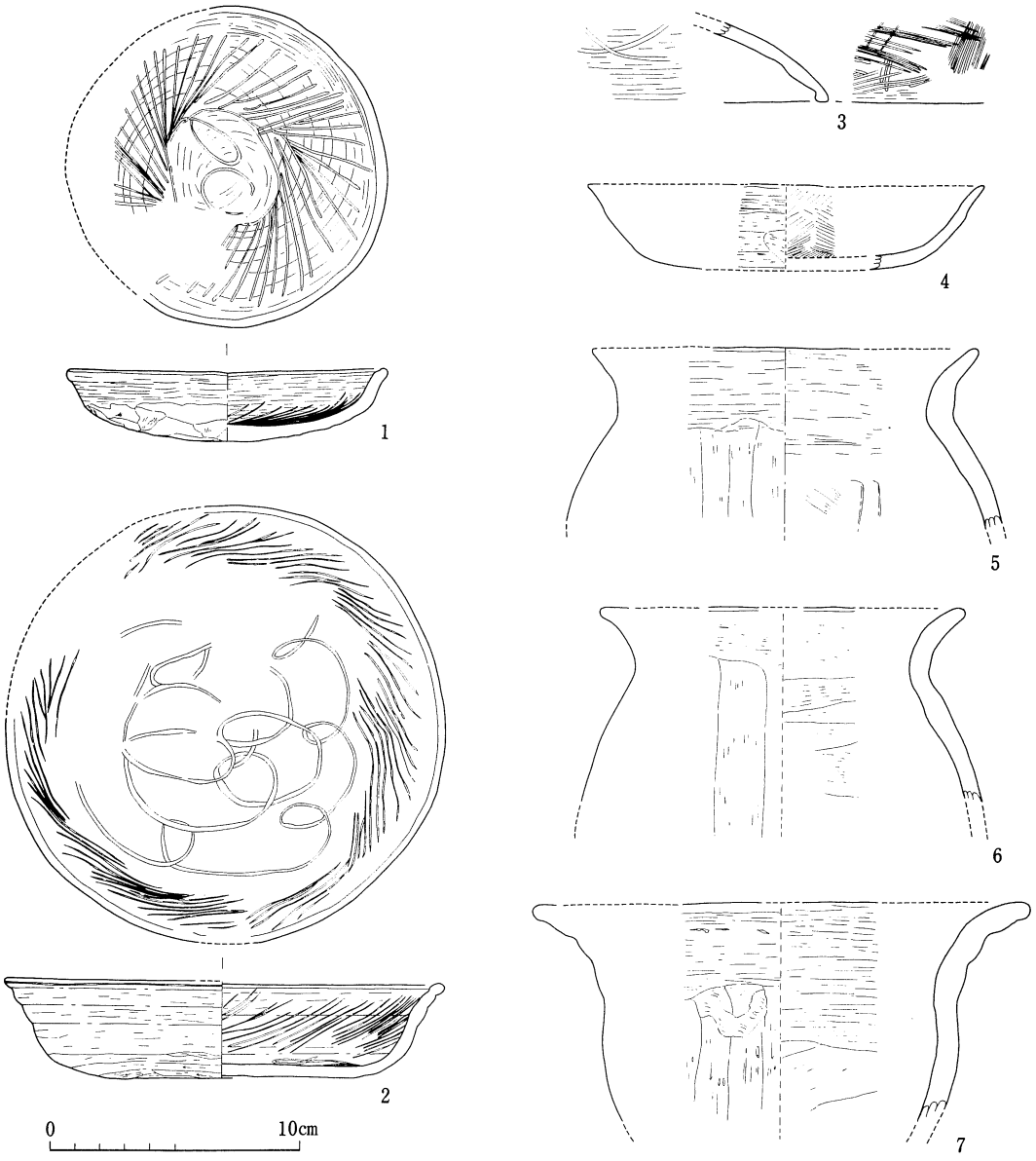
ピット名	上端	下端	深さ
P_1	32×31	22×21	53
P_2	46×42	12× 9	68
P_3	58×47	32×21	45
P_4	71×36	17×16	68
P_5	33×23	10×10	32

出土遺物は、No.2が床面北西側と南側、No.4・7が東側床面、No.5が南側床面、No.6がカマド前面床面、No.8・9がカマド右側より検出している。No.9は、円錘状を呈する土製支脚である。

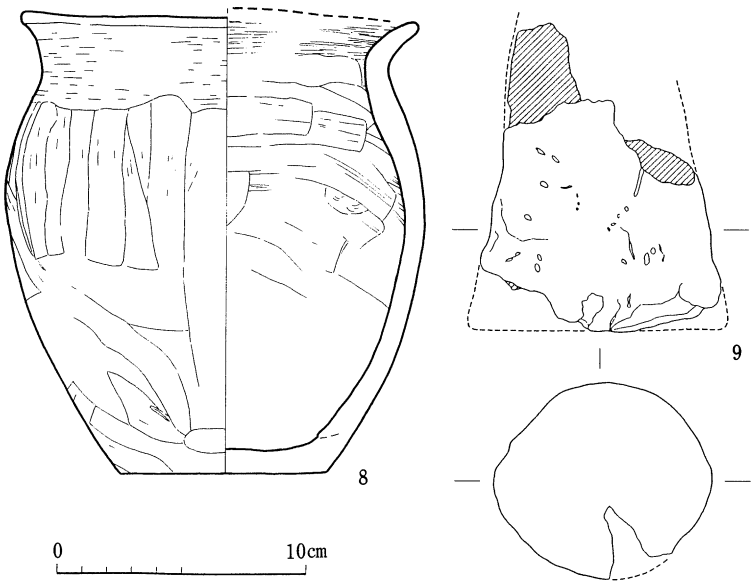
第45表　第112号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図90 1	a.坏 b.覆土下位 c.全体の60%の残存	口径13.1 器高2.8	d.緻密 e.普通	いわゆる盤状坏で、平扁な丸底の坏で体部中程より屈曲して直線的に外反する。口唇部内面に沈線。	回転具による整形(ナデ) 〈色調〉両面とも褐色	放斜状暗文1段 らせん状暗文
図90 2	a.坏 b.西と南側の床面 c.全体の80%の残存	口径18.0	d.砂粒を含む e.良好	いわゆる盤状坏で、平底ぎみで、体部中程より屈曲して直線的に外反する。沈線はみられない。	回転具による整形(ナデ) 〈色調〉淡茶褐色	放斜状暗文1段、らせん状暗文 〈色調〉茶褐色
図90 3	a.坏 b.覆土下位 c.全体の1/6～1/8残存	口径(16.2)	d.緻密 e少し不良	蓋で、やや開きぎみ、口縁部は、上位内面が、沈線状となる。	口縁部＝横ナデ 体中位までヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色一部暗褐色
図90 4	a.(坏)蓋 b.東側床面 c.口縁部片	器厚 0.3～0.55	d.砂粒を少量含む e.やや良好	平底で、皿状を呈し、口縁部は、わずかに稜をもち、外反する。	回転具による整形(ナデ) ヘラミガキ 〈色調〉茶褐色	ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色
図90 5	a.(甕) b.南側床面 P_5付近 c.口縁部のみ残存 1/2	口径(15.8) 頸部径 (13.8)	d.緻密 e.少し不良	胴部は、やや張りが有り、頸部は、少し直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色一部暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉褐色
図90 6	a.(甕) b.カマド前床 c.胴上位から口縁部の1/5残存	口径(14.9)	d.砂粒を少量含む e.少し不良	長胴の甕と思われ、口縁部は、短くわずかに外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝指ナデ 〈色調〉淡褐色
図90 7	a.(鉢か甑) b.胴上位から口縁部付近の1/5	口径(23.0) 頸部径 (14.4)	d.小礫2㎜以下を含む e.普通	やや厚手で、口縁部は、大きく開く。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 粘土紐接合痕、指頭痕有り 〈色調〉黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後布ブキ? 〈色調〉暗褐色、茶褐色
図91 8	a.(壺) b.カマド右床 c.全体の90%の残存	口径15.9 胴部最大径 16.8 器高(18.6)	d.砂粒を含む e.普通	平底で、胴部最大径は、上位に有り、口縁部は、小さく外反、器高は、やや低い。	口縁部＝横ナデ 胴部上位＝縦方向のヘラケズリ 下位＝斜め方向のヘラケズリ	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ横方向 〈色調〉両面とも暗褐色

また、鉄滓が1点出土している。



第90図　第112号住居跡出土遺物実測図（１～７）



第91図　第112号住居跡出土遺物実測図（８・９）

（13）第113号住居跡

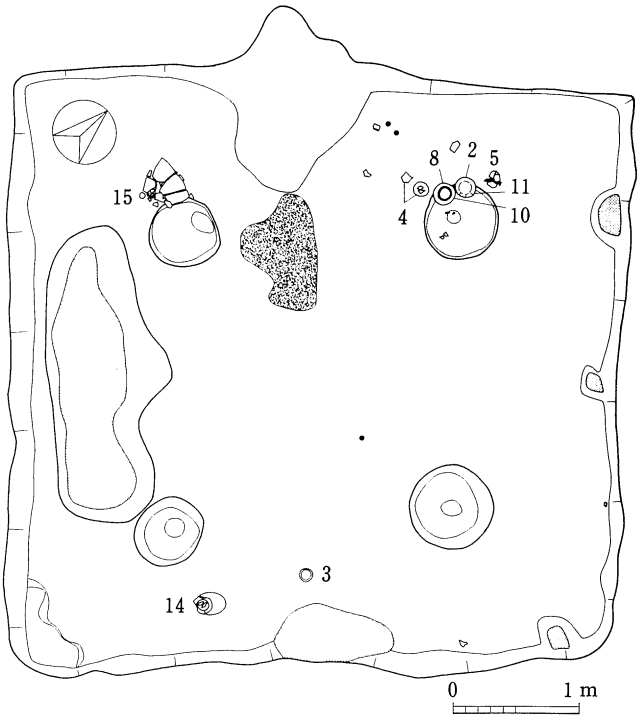
調査地区のほぼ中央に位置し、第114号住居跡より南東へ約４ｍに所在する。平面形体は、方形を呈し、規模は、長軸4.85ｍ、短軸4.76ｍを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、Ｎ－46°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、25～38㎝の高さをもつ。床面は、ほぼ平坦で、カマド前面から床面中央にかけて踏み固められた面が認められるが、やや不確実である。床面積は、約20.72㎡である。壁溝は、全周し、幅は、２～14㎝、深さは、２～８㎝をはかる。床面内のピットは、４本検出され、いずれも、下端に柱のあたり痕跡が認められ、主柱穴と考えられる。各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.18ｍ、P_2～P_3が、2.15ｍ、P_3～P_4が2.35ｍ、P_4～P_1が2.15ｍを測る。また、P_3とP_4は、立ち上がりが２段になっている。竪穴内への焼土の流れ込みが有り、特に南側から多い。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体に、中に、ローム粒と炭粒が混入する層であるが、自然堆積と考えられる。カマドは、北西側壁やや東寄りに位置し、袖部は良く残る。袖部内側壁は、良く焼けており、煙道部は、40㎝程度竪穴壁を掘り込んでい

る。出土遺物のうち、No.17・18は、土製支脚で、No.17はやや方形に近い円柱状で、上端ほど細くなる。下端は欠損し、上端径3.3cm、色調は淡褐色、焼成は普通である。胎土は砂粒を含む。No.18は、上端ほど細くなる円柱状を呈するが、上端と下端の大きさの差が大きい。色調は、淡橙褐色、胎土は緻密で、焼成は、少し不良である。

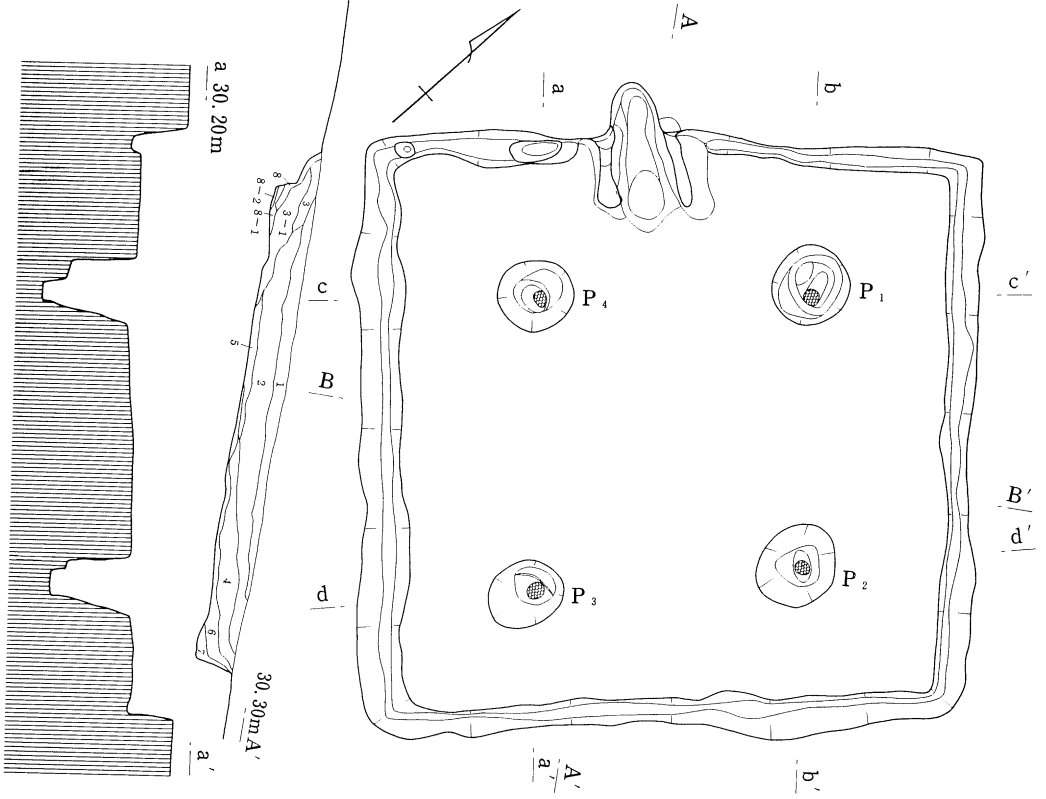
第46表　第113号住居跡

ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	64×60	29×13	56
P2	70×60	26×24	63
P3	62×51	35×31	64
P4	60×57	24×18	69



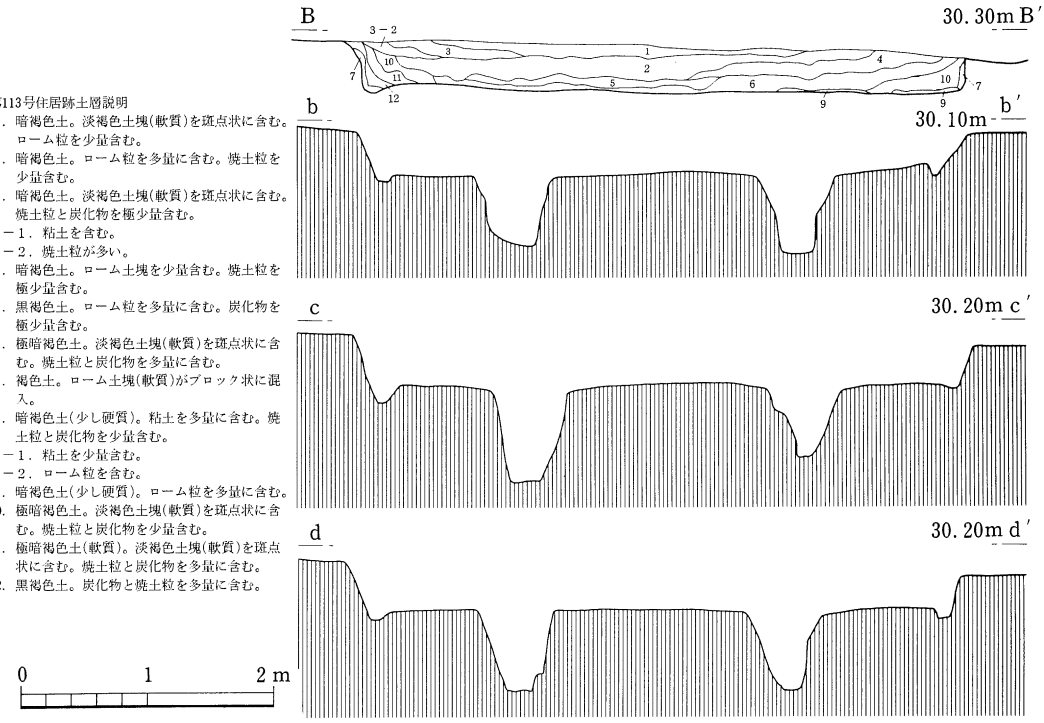
第92図　第113号住居跡遺物出土状況



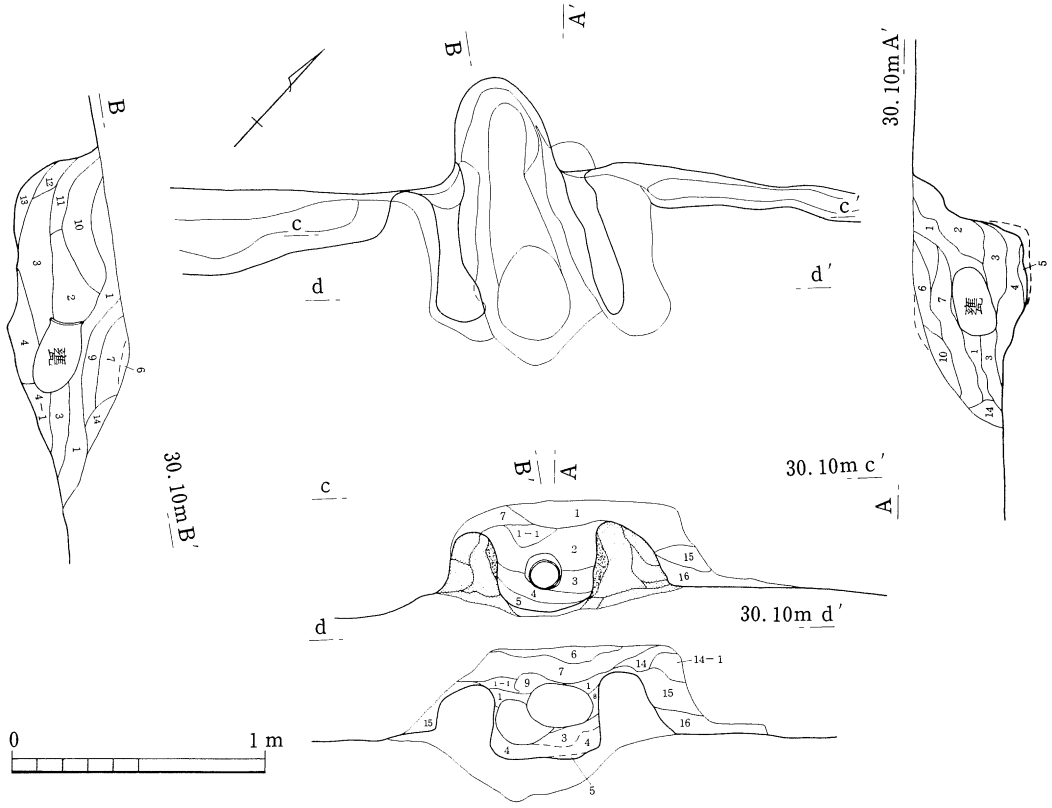
第93図　第113号住居跡実測図

第113号住居跡土層説明

1．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土。ローム粒を多量に含む。焼土粒を少量含む。
3．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
3－1．粘土を含む。
3－2．焼土粒が多い。
4．暗褐色土。ローム土塊を少量含む。焼土粒を極少量含む。
5．黒褐色土。ローム粒を多量に含む。炭化物を極少量含む。
6．極暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。焼土粒と炭化物を多量に含む。
7．褐色土。ローム土塊(軟質)がブロック状に混入。
8．暗褐色土(少し硬質)。粘土を多量に含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
8－1．粘土を少量含む。
8－2．ローム粒を含む。
9．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を多量に含む。
10．極暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
11．極暗褐色土(軟質)。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。焼土粒と炭化物を多量に含む。
12．黒褐色土。炭化物と焼土粒を多量に含む。

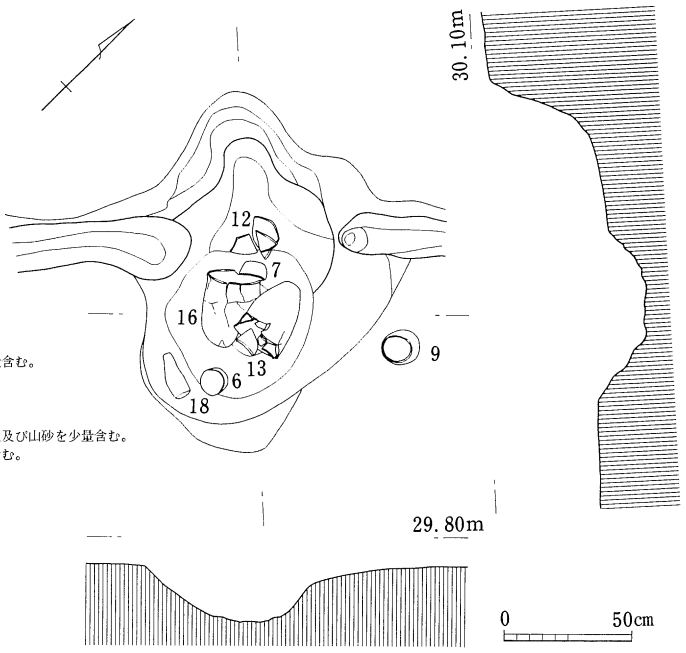


第94図　第113号住居跡土層図(Ｂ－Ｂ′)及び断面図(ｂ－ｂ′，ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′)

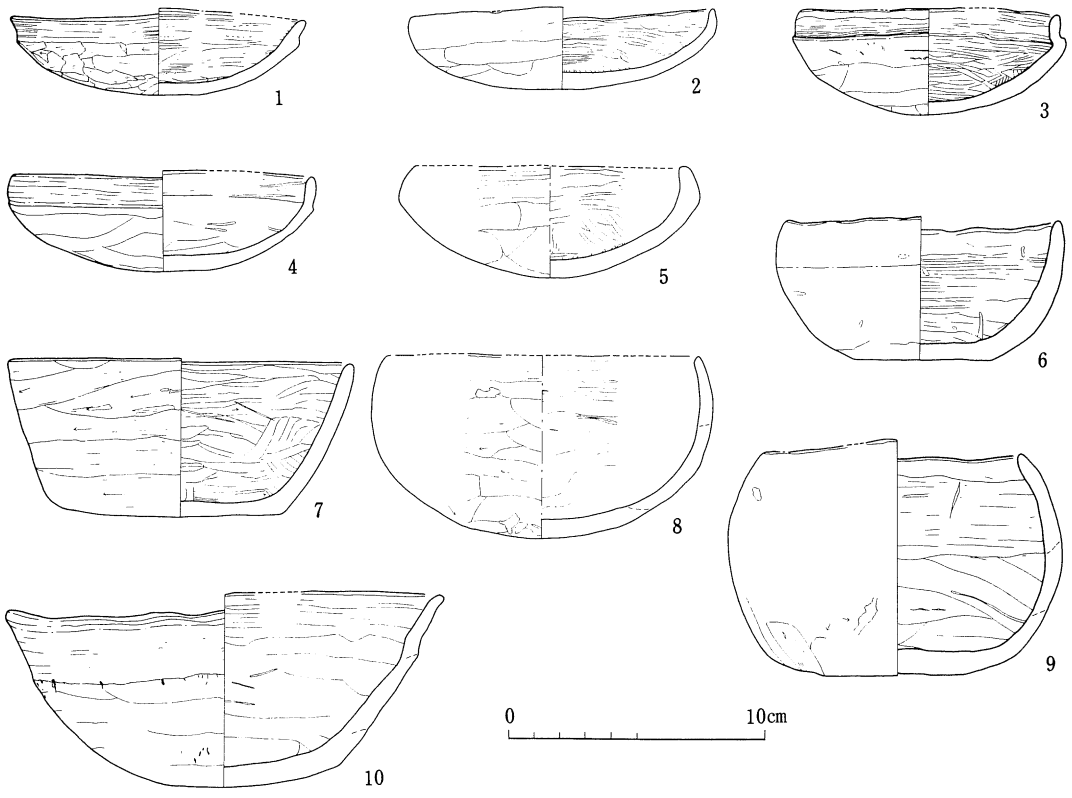


第95図　第113号住居跡カマド実測図

第113号住居跡カマド土層説明
1．暗褐色土。粘土粒と山砂を少量含む。
1－1．粘土と山砂を極少量含む。
2．白灰色土(硬質)。粘土と山砂を多量に含む。焼土塊を少量含む。
3．暗褐色土(軟質)。山砂と焼土粒を少量含む。
4．明赤橙色土(軟質)。焼土を多量に含む。
4－1．粘土塊を少量含む。
5．極暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。炭化物と焼土と粘土及び山砂を少量含む。
6．暗褐色土。山砂を多量に含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
7．暗茶褐色土。山砂と粘土及び焼土粒を多量に含む。
8．明赤橙色土。焼土粒を多量に含む。炭化物と山砂を含む。
9．暗褐色土。粘土と山砂をブロック状に含む。
10．暗白灰色土。山砂を多量に含む。粘土を極少量含む。
11．暗褐色土。山砂を少量含む。焼土粒を極少量含む。
12．暗赤橙色土。山砂が焼土化した土塊を多量に含む。
13．山砂(少し軟質)。
14．粘土塊(少し軟質)。
14－1．暗褐色土を含む。
15．粘土塊と暗褐色土塊がブロック状に混合。
16．暗褐色土。山砂を少量含む。



第96図　第113号住居跡カマド掘り方及び遺物出土状況実測図



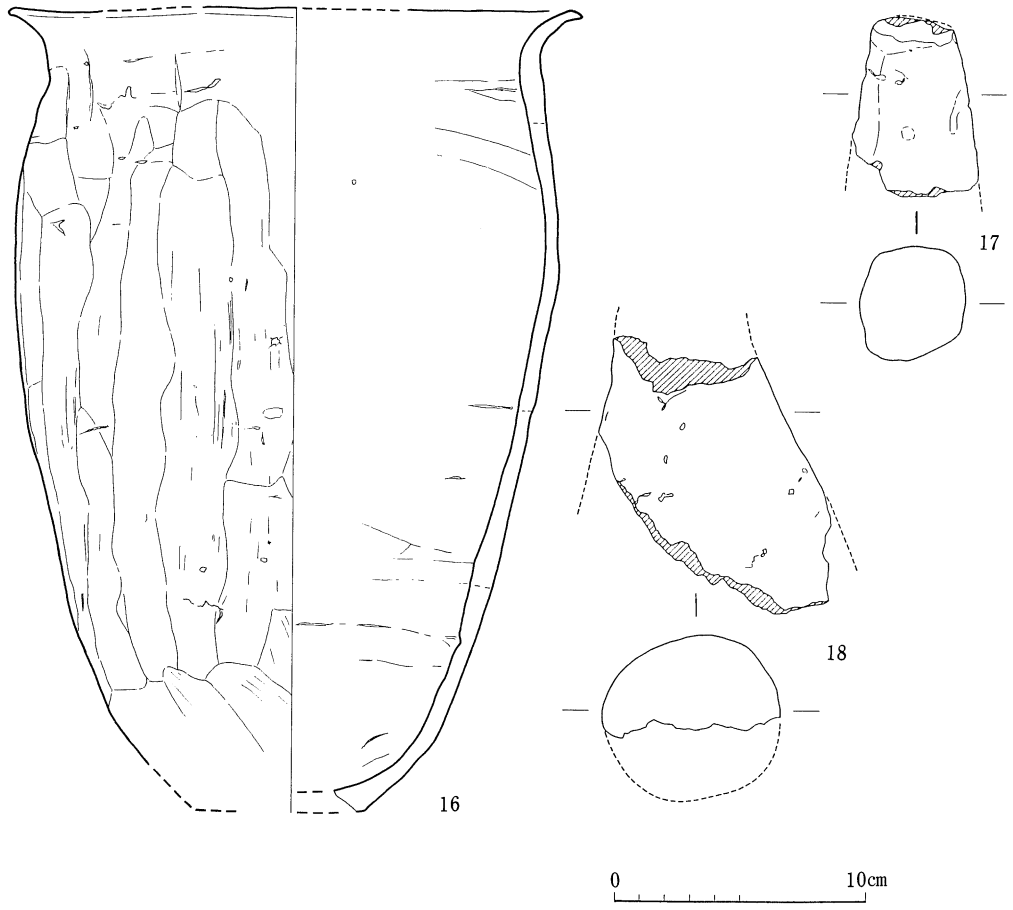
第97図　第113号住居跡出土遺物実測図(１～10)



第98図　第113号住居跡出土遺物実測図(11～15)

第47表　第113号住居跡出土遺物観察表

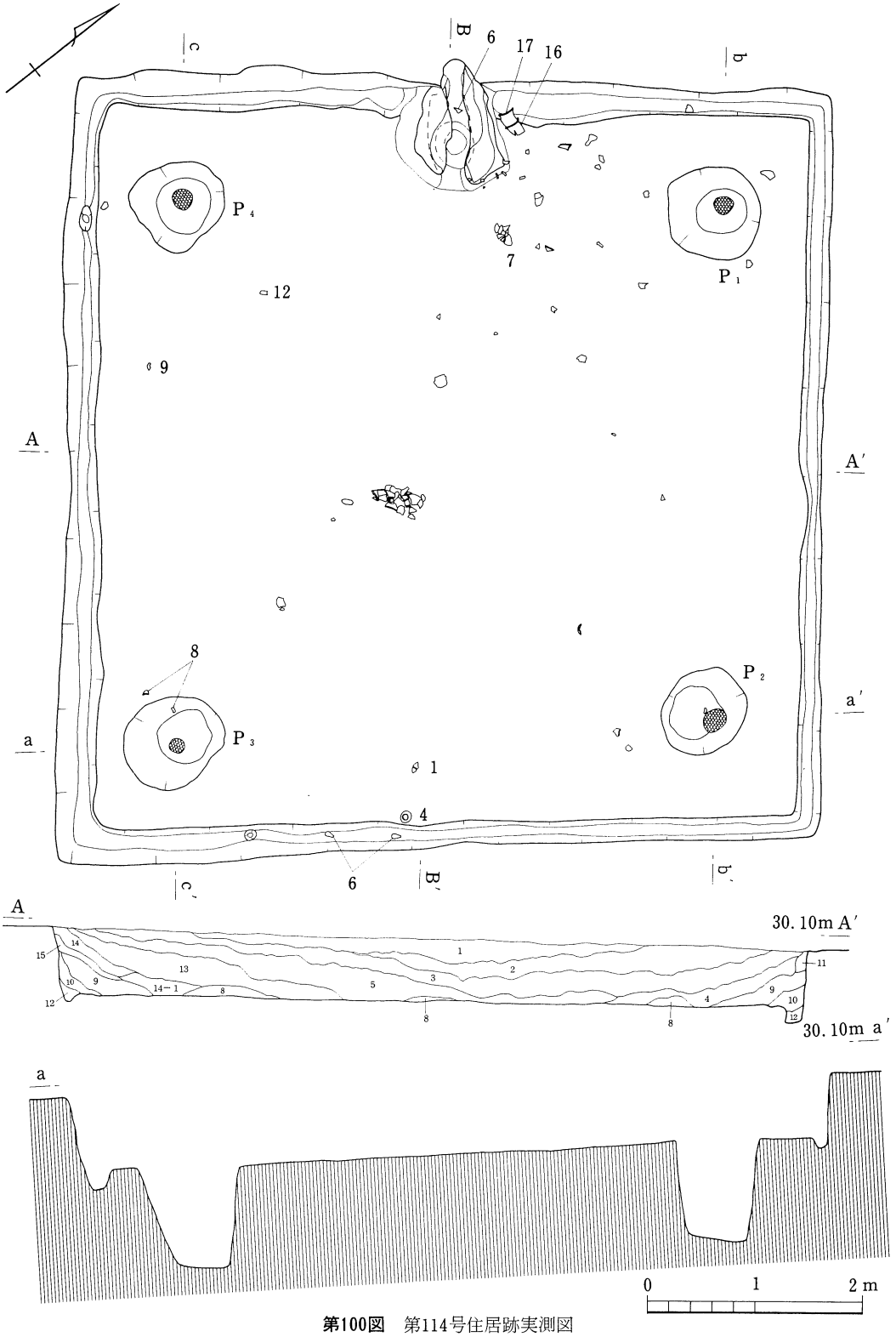
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 { d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図97 1	a.坏 b.覆土内 c.完形	口径11.8 器高3.5	d.緻密 e.普通	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部には、わずかな稜をもち、小さく少し外反する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデの後? 指ナデ 〈色調〉黒褐色
図97 2	a.坏 b.P$_1$北西床面 c.完形	口径12.2 器高3.3	d.緻密 e.少し不良	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、中位からで、やや直立ぎみに立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色一部黒褐色	ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図97 3	a.坏 b.南東側床 c.ほぼ完形	口径10.4 体部最大径10.9 器高4.3	d.緻密 e.少し不良	丸底で椀状を呈し、口縁部は稜をもって直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	ヘラミガキ(横方向) 一部に煤が付着 〈色調〉黒褐色、暗褐色
図97 4	a.坏 b.P$_1$西床 c.全体の80%の残存	口径12.0 体部最大径12.3 器高4.0	d.緻密 e.少し不良	丸底で椀状を呈し、口縁部は稜をもち、直立ぎみに立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 少し摩耗する 〈色調〉淡茶褐色	ヘラミガキ 少し摩耗する 〈色調〉淡茶褐色一部暗褐色
図97 5	a.坏 b.P$_1$の北床 c.全体の1/4の残存	口径11.0 体部最大径18.0 器高4.5	d.砂粒を含む e.少し不良	丸底で少し突がりぎみである。体部は椀状で、口縁部は内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色一部黒褐色	ヘラミガキ 〈色調〉暗茶褐色一部黒褐色
図97 6	a.小鉢 b.覆土内 c.完形	口径11.1 底径5.5 体最大径11.5 器高5.8	d.緻密 e.少し不良	平底で、体部は、椀状を呈し、最大径は上位にもつ、口縁部は内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 全体に摩耗する 〈色調〉淡暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ(横方向) 〈色調〉淡茶褐色
図97 7	a.小鉢 b.覆土内 c.完形	口径13.8 底径8.8 器高6.4	d.砂粒を含む e.普通	平底で、体部は、椀状を呈し、口縁部は、直線的に開いている。	横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡茶褐色一部暗褐色	ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図97 8	a.小鉢 b.P$_1$付近 c.全体の1/2の残存	口径12.4 体部最大径13.6 器高7.4	d.小礫2㎜以下を少量含む e.少し不良	丸底で、球状にちかい体部をもち、口縁部は、少し内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図97 9	a.小鉢 b.覆土内 c.完形	口径10.4 底径5.6 体部最大径13.3	d.砂粒を少量含む e.やや不良	平底で、椀状の体部をもち、口縁部は少し内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図97 10	a.小鉢 b.P$_1$付近 c.ほぼ完形	口径17.5 器高7.7	d.砂粒を少量含む e.やや不良	丸底で、球状を呈するが口縁部にいたって大きく外側に開いている。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉淡褐色一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝少しミガキに近いヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図98 11	a.高坏 b.P$_1$付近 c.ほぼ完形	口径16.95 脚上位径4.9 脚下端径10.6	d.緻密 e.不良	脚裾部は横に開き、中位は柱状、坏部は浅い椀状で口縁部は稜をもち直線的に開く。	坏口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 粘土紐接合痕有り 脚＝縦方向ヘラケズリ 下位＝横ナデ 〈色調〉淡茶褐色一部暗褐色	坏部＝ヘラミガキ 脚部＝ヘラケズリダシ 下位＝横ナデ 〈色調〉暗茶褐色
図98 12	a.(甕) b.覆土内 c.胴下位～底部のみ	底部径5.8	d.砂粒を含む e.やや不良	底部は平底で、胴部は、球状を呈するとみられる。	横方向のヘラケズリ 摩耗が多い。カマド? 粘土と煤が付着する。 〈色調〉暗褐色、淡茶褐色	横方向のヘラナデツケの後指ナデ 剝離が見られる 〈色調〉暗褐色一部淡褐色
図98 13	a.甕 b.覆土内 c.全体の90%の残存	口径21.7 胴部最大径21.0 底部径6.2 器高30.4	d.2㎜以下の小礫を含む e.良好	平底で、最大径は胴上部に有り、口縁部は外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、茶褐色、淡褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、布?ナデ 〈色調〉淡褐色、暗褐色、黒褐色
図98 14	a.甕 b.南側床面 c.全体の70%の残存	口径14.0 胴部最大径17.3 底部径4.6 器高16.2	d.2㎜以下の小礫を少量含む e.普通	平底で、胴部は球状を呈し、口縁部は外反し、口唇部で少し厭厚になる。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 摩耗が有る 〈色調〉黒褐色、淡褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ(横方向)の後、指ナデ 〈色調〉暗褐色
図98 15	a.甑 b.P$_4$付近 c.全体の90%の残存	口径28.1 孔径8.4 器高29.0	d.砂粒を含む e.普通	下端の孔部分は、ヘラにより削られ、わずかな稜をもち、胴部は、斜めに立ち上がり、口縁部は、小さく外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 粘土紐接合痕が残る 下位＝横方向ヘラケズリ 〈色調〉暗赤褐色、赤褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 〈色調〉茶褐色
図99 16	a.甕 b.覆土内 c.底部を欠損	口径22.5 胴部最大径21.3 底径(6.7) 器高31.9	d.砂粒を極少量含む e.普通	底部は、平底で、胴部最大径は、上位に有り、口縁部は外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ(縦方向) 下位＝(斜め方向) 粘土紐接合痕が残る 〈色調〉淡褐色、赤褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 〈色調〉淡褐色、黒褐色、暗褐色



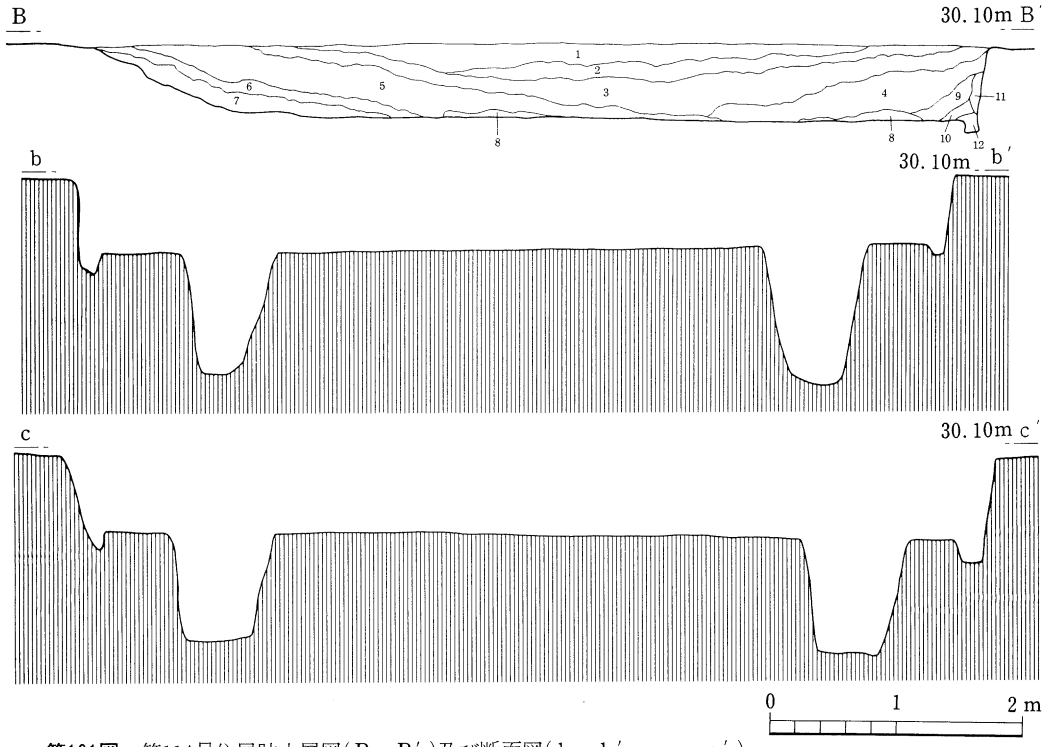
第99図　第113号住居跡出土遺物実測図(16～18)

(14) 第114号住居跡

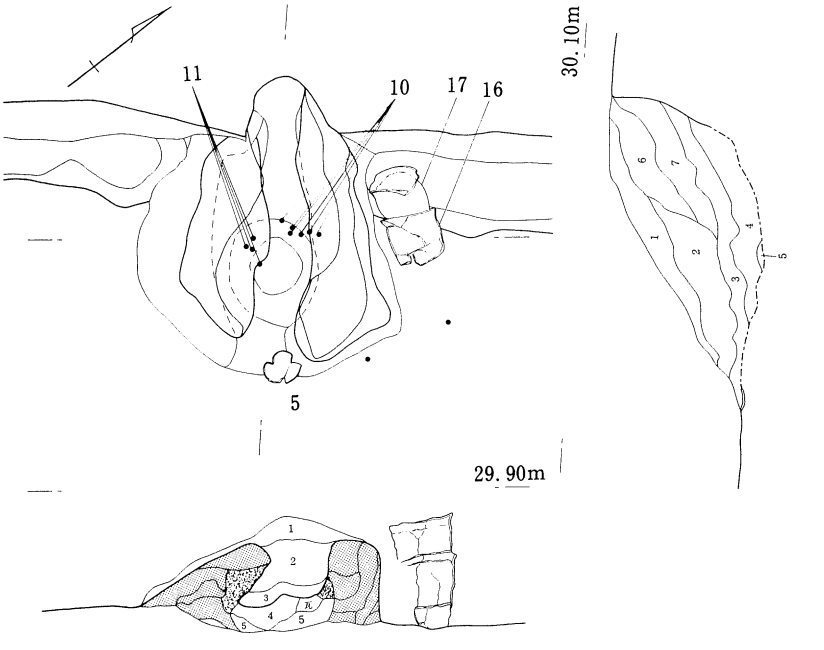
調査地区の中央付近に位置し、第113号住居跡は、北西約２ｍ、第112号住居跡は、西約６ｍに所在する。平面形体は、方形を呈し、やや大型で、規模は、長軸7.40m、短軸7.08mを測る。主軸方位は、長軸をはかり、Ｎ－52°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、急角度で、最大で68cmの高さをもつ。床面は、平坦で、ハードローム層内のレベルに設置され、踏み固められた面は、カマド前面から床中央付近まで存在する。床面積は、約47.66㎡である。壁溝は、全周し、幅は、４～25cm、深さ７～18cmである。床面内のピットは、４本検出され、全体的に壁に寄った位置に有る。４本とも主柱穴と考えられ、下端には、柱のあたり痕跡が認められる。各ピット間の距離は、P_1～P_2が4.85m、P_2～P_3が、5.05m、P_3～P_4が5.15m、P_4～P_1が5.07mを測る。竪穴の覆土は、ローム土塊を多量に含む暗褐色土層を主体としている。おそらく人為的な埋めもどしが想定できる。カマドは、北西側壁のほぼ中央に位置し、保存状況は、比較的良好で、焚口部分は、幅20cmと推測され、袖部は、内壁の焼土化がよく認められる。また、左



第100図　第114号住居跡実測図



第101図　第114号住居跡土層図（B－B′）及び断面図（b－b′，c－c′）



第102図　第114号住居跡カマド実測図

袖は、天井部に近い部分まで残っている。煙道部は、竪穴壁を20cm掘り込み、その立ち上がりは、急傾斜である。また、掘り方は、燃焼部が、横方向に長い長円形で、火床は、40×60cm、煙道部の壁掘り込みの平面形体は三角形である。また、火床から煙道端までは約80cmを測る。出土遺物は、カマド周辺が多く検出されている。遺物のうち、No.12～15は土製支脚である。No.12・13は、上端ほど細くなる不整の円柱形を呈する。No.12は、上端部のみの残存で、上端径3.4cm、色調は淡橙褐色である。No.13は、上端と下端を欠損し、中位の破片であり、色調は淡褐色である。また、No.14は小型で、上端ほど細くなる六角円柱形にちかい形体を呈する。上端を欠損するが、径は推定で2.1cm、下端径は6.2cm、色調は淡橙褐色である。No.15は、少し細長い六角形に近い円柱状で、上端ほど細くなるが、下端を欠損する。上端径は、2.8cm、下端径は推定で7.2cm、長さ(高さ)は25.7cmを測る。色調は淡橙褐色である。No.19・20は、砥石で、4面が使用されており、色調は白褐色と暗褐色を呈し、材質は凝灰岩である。No.19は、長さ11.3cm、幅2.4～6.1cm、厚さ3.6～6.5cm、重さ410g、No.20は、長さ8.1cm、幅2.5～5.5cm、厚さ3.6～6.5cm、重さ232gを各々計る。

第114号住居跡土層説明

1. 暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。ローム粒を多く含む。
2. 暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。ローム土塊を多く含む。
3. 暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多量に含む。
4. 暗褐色土(少し暗い)。ローム土塊を多量に含む。
5. 暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多量に含む。
6. 暗褐色土(少し硬質、やや暗い)。ローム土塊を多量に含む。粘土塊を含む。
7. 暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊と粘土塊を多量に含む。
8. 暗褐色土(硬質)。ローム土塊を多量に含む。
9. 暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。
10. 暗褐色土(少し軟質)。ローム土塊を少量含む。
11. 褐色土(少し軟質)。ローム粒を多量に含む。
12. 褐色土(軟質)。ローム土塊がブロック状を呈する。
13. 暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を多量に含む。
14. 暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多量に含む。

14－1．軟質

15. 暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を含む。

第114号住居跡カマド土層説明

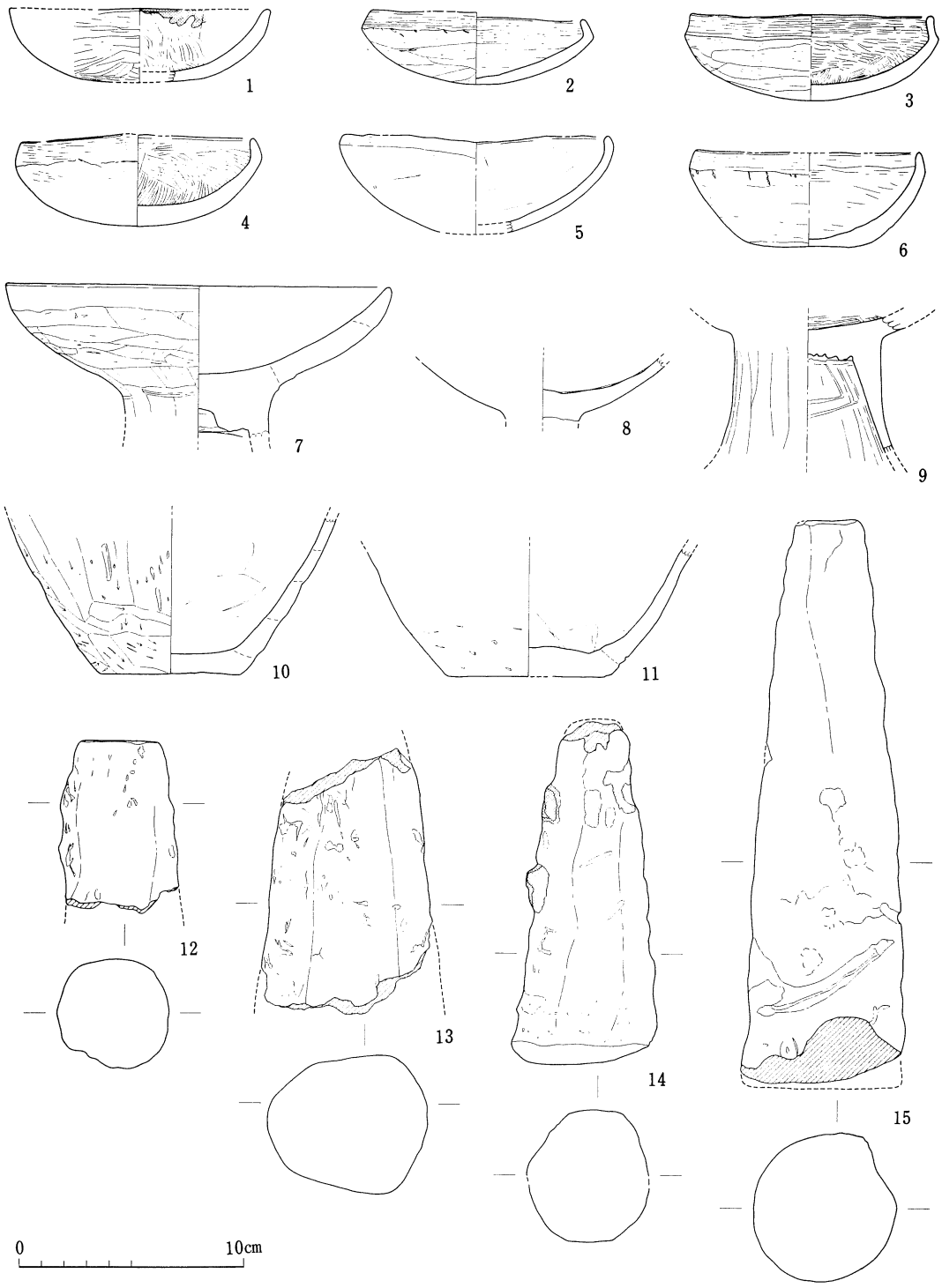
1. 暗褐色土。山砂を多量に含む。粘土を極少量含む。
2. 暗黄灰色土(硬質)。山砂を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
3. 暗赤橙色(硬質)。焼土塊を多量に含む。灰と山砂を極少量含む。
4. 極暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。炭化物と焼土塊を少量含む。
5. 極暗赤褐色土(軟質)。焼土粒と灰と炭化物及び青灰色山砂を多量に含む。
6. 暗褐色土(暗い)。山砂を多量に含む。
7. 暗灰色土(軟質、明るい)。灰を多量に含む。ローム土塊を少量含む。

第48表　第114号住居跡ピット計測表(cm)

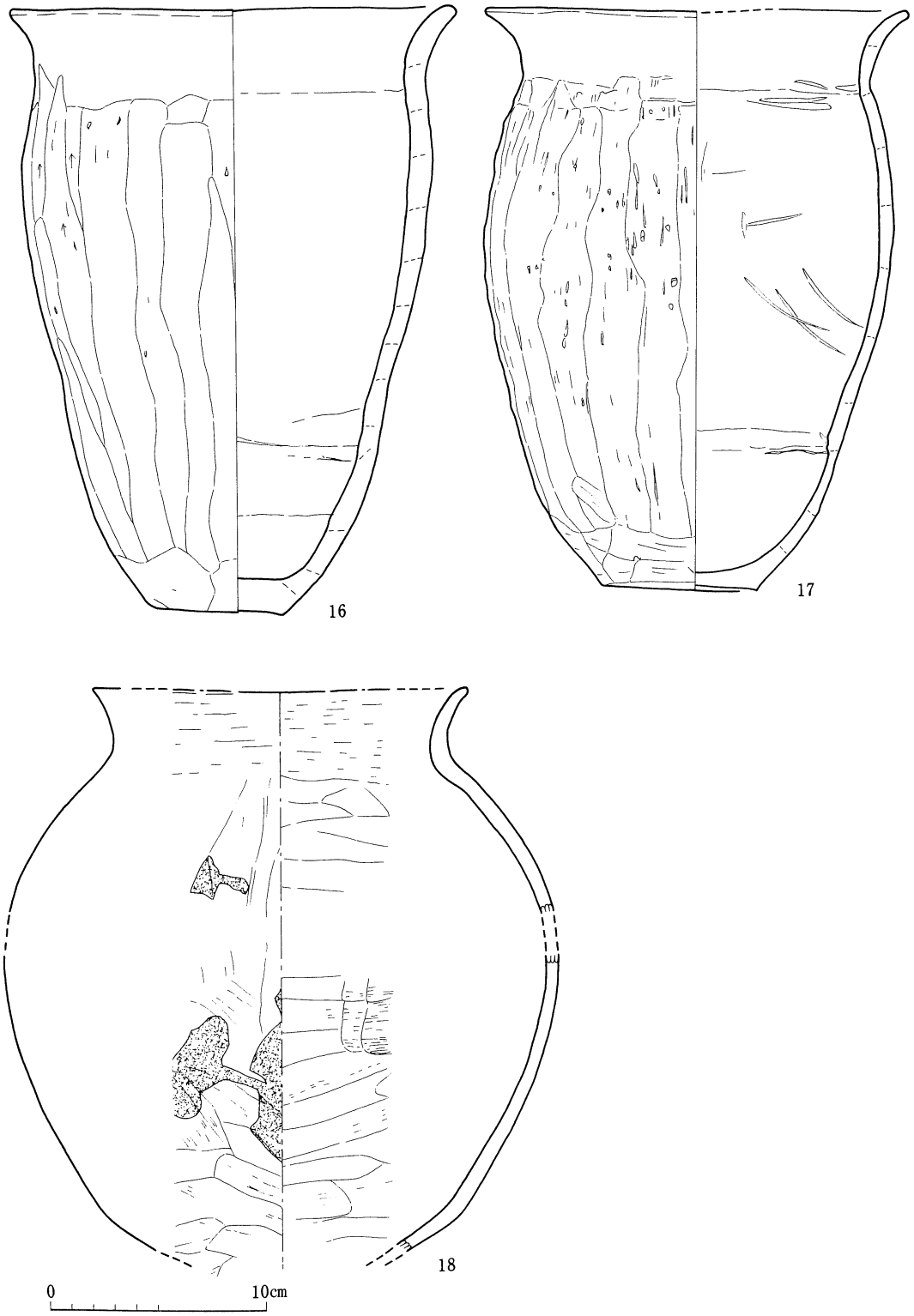
ピット名	上端	下端	深さ
P1	92×88	48×41	96
P2	86×73	53×51	95
P3	97×82	52×50	96
P4	89×82	53×52	85

第49表　第114号住居跡出土遺物観察表(1)

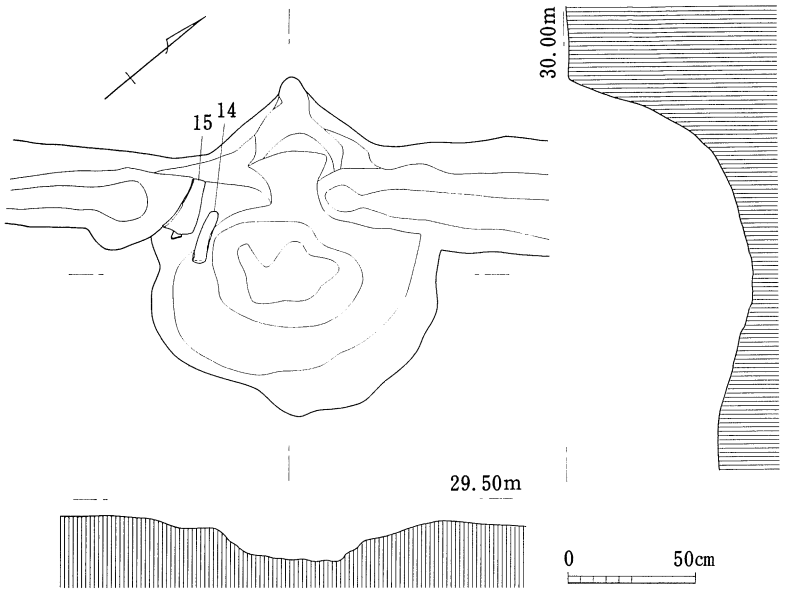
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図1031	a.(坏) b.カマド反対側床面 c.底部を欠損	口径(11.8) 器高(3.3)	d.緻密 e.普通	やや器高が低く小型で丸底の坏である。口縁部は、わずかに直立ぎみである。	ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色	ヘラミガキ 煤が付着する 〈色調〉黒褐色
図1032	a.坏 b.床面中央 c.完形	口径9.6 体部最大径10.5 器高3.3	d.砂粒を含む e.普通	小型で丸底の坏で、口縁部は稜をもち、内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 粘土紐接合痕をわずかに残す。 〈色調〉暗褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図1033	a.坏 b.床面中央 c.全体の1/2の残存	口径11.0 体部最大径11.5 器高3.9	d.緻密 e.良好	丸底を呈し、口縁部は内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗茶褐色	ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色



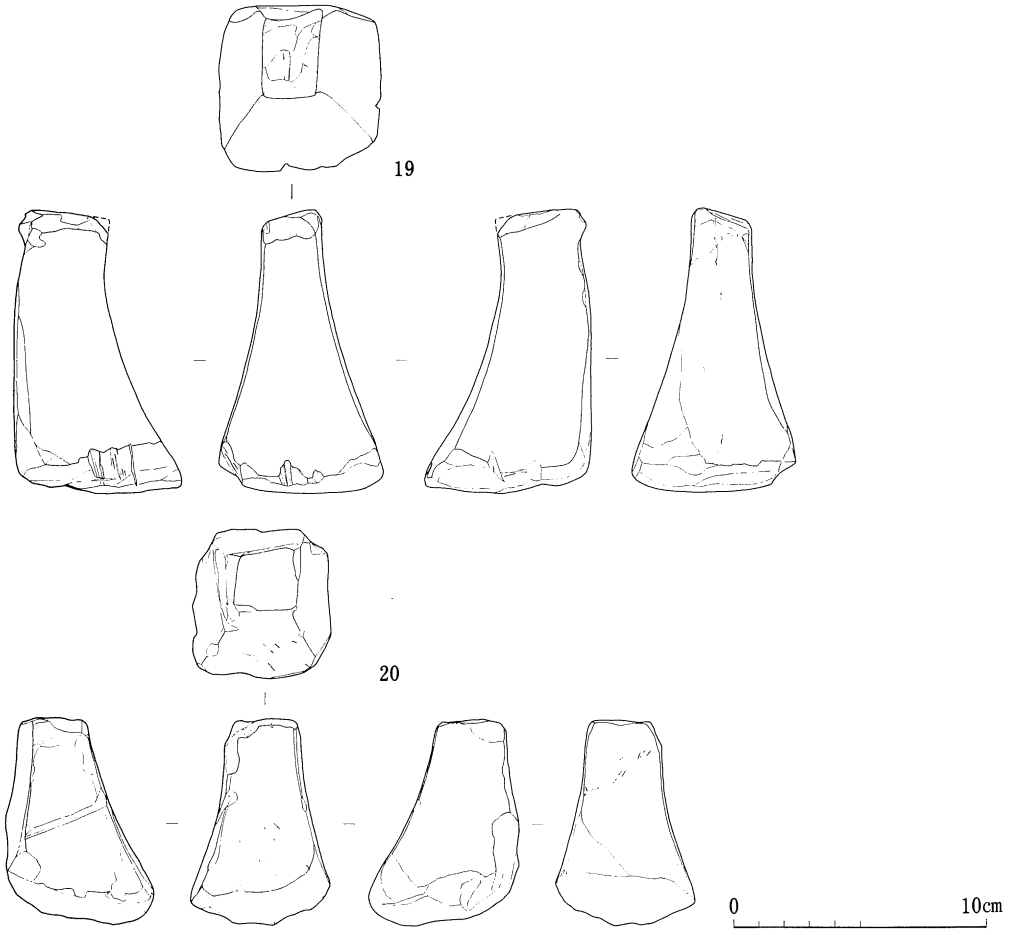
第103図　第114号住居跡出土遺物実測図（１～15）



第104図　第114号住居跡出土遺物実測図(16～18)



第105図　第114号住居跡カマド掘り方実測図



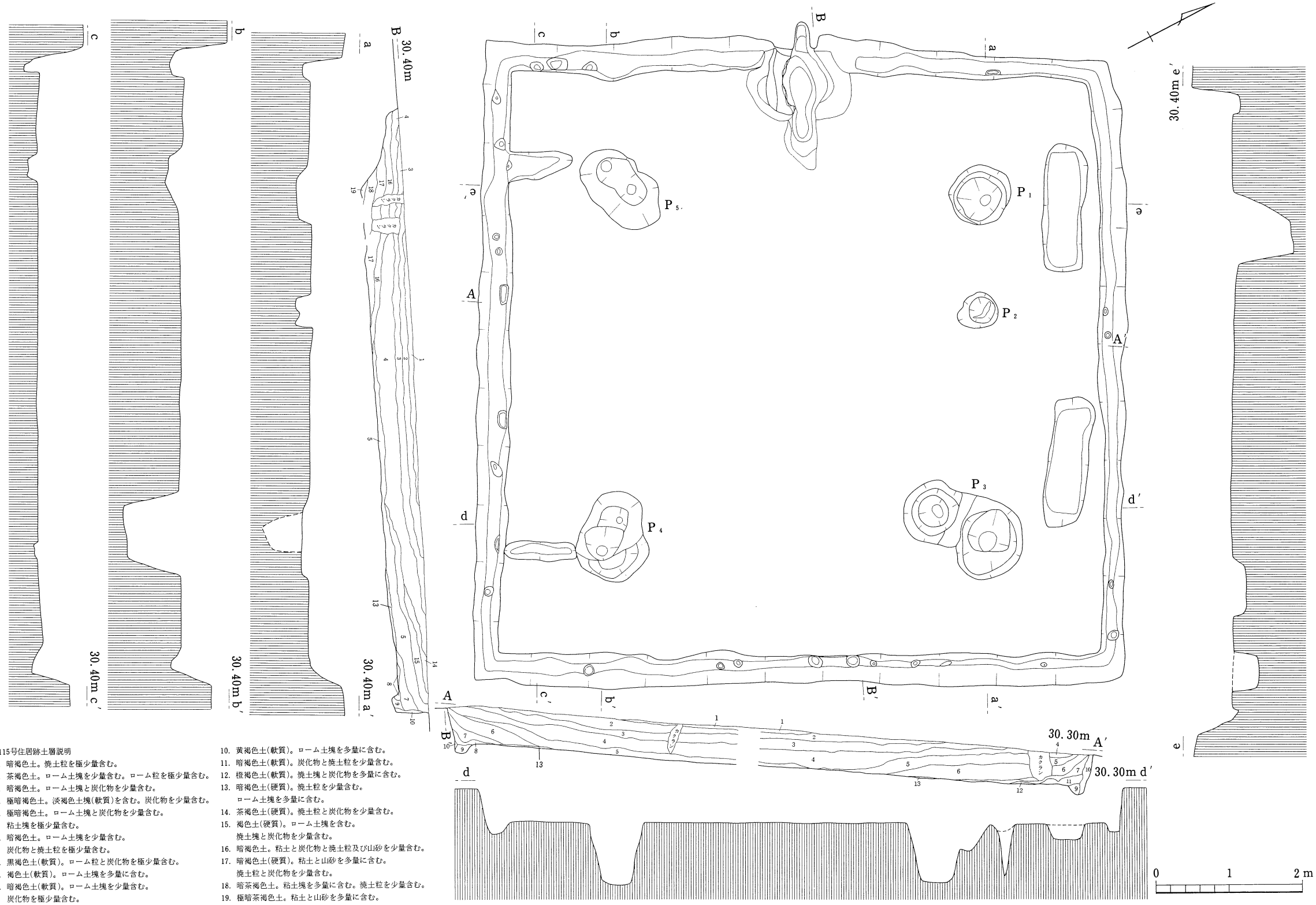
第106図　第114号住居跡出土遺物実測図(19･20)

第50表　第114号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図103 4	a.坏 b.カマド反対側床面全体の90％の残存	口径10.5 体部最大径11.1 器高4.2	d.緻密 e.普通	丸底で、体部は椀状、口縁部は内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉淡褐色	ヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図103 5	a.坏 b.カマド内 c.底部欠損、1/2の残存	口径12.0 体部最大径12.4 器高4.2	d.緻密 e.やや不良	丸底で、体部は椀状に立ち上がり、口縁部は稜をもち、わずかに内傾する。全体に薄手である。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉両面淡褐色	ヘラナデ
図103 6	a.坏 b.カマド内 c.1/2の残存	口径10.1 体部最大径10.7 底径3.9 器高4.3	d.緻密 e.普通	平底で、体部は椀状を呈し、口縁部は稜をもち、内傾する。	口縁部=横ナデ 稜部分に粘土紐接合痕がわずかに残る 体部=ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色	ヘラナデ
図103 7	a.高坏 b.カマド右前面 c.坏体中位～脚上位	口径(17.3) 脚最小径6.5	d.砂粒を含む e.少し良好	脚部は、太く安定している。坏部は、やや偏平で広く開き、口縁部でわずかに立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 脚部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	坏部=ヘラミガキ 脚部=ヘラケズリダシ 〈色調〉淡褐色
図103 8	a.高坏 b.南側床面、P_3付近 c.脚上位～坏下位	脚上位小径3.3	d.緻密 e.少し不良	細い脚部をもち、坏部は、椀状を呈する。器厚は、少し薄手。	ヘラケズリ 両面とも摩耗多し 〈色調〉両面とも褐色	ヘラミガキ?
図103 9	a.高坏 b.南西側床面 c.脚上位～坏下位	脚上位小径6.6	d.緻密 e.良好	太くがっしりとした脚部をもつ。	縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗茶褐色	坏部下位=ヘラミガキ 脚部=ヘラケズリダシ 〈色調〉暗褐色
図103 10	a.(甕) b.カマド内 c.底部付近の2/3残存	底径6.3	d.砂粒を含む e.普通	長胴甕の底部と考えられる。	胴下部=縦方向のヘラケズリ 胴下位=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	横方向のヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図103 11	a.(甕) b.カマド内 c.底部付近の2/3残存	底径7.1	d.小礫2㎜以下を含む e.少し不良	長胴甕の底部と考えられる。	胴下部=縦方向のヘラケズリ 胴下位=横方向のヘラケズリ 摩耗多し 〈色調〉褐色	横方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図104 16	a.甕 b.カマド右側床面 c.全体の90％の残存	口径20.9 胴部最大径19.3 底径6.0 器高28.2	d.小礫2㎜以下を多量に含む e.不良	長胴甕で、胴部最大径を上位にもち、口縁部は、軽く外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 胴下位=横方向のヘラケズリ 両面とも少し摩耗している 〈色調〉淡黄褐色、黒褐色	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラナデ 〈色調〉暗赤褐色，黒褐色
図104 17	a.甕 b.カマド右側床面 c.全体の90％の残存	口径19.8 胴部最大径19.1 底径7.3 器高27.1	d.小礫5㎜以下を多量に含む e.普通	長胴甕で、胴部最大径を上部にもち、口縁部は外反する。	16と同様 〈色調〉暗赤褐色、黒褐色	16と同様 〈色調〉暗黄褐色、黒褐色
図104 18	a.(甕) b.覆土 c.底部を欠損全体の1/4残存	口径17.5 胴部最大径25.9	d.砂粒を含む e.普通	胴部最大径を中位にもち、球状を呈する口縁部は、外反する。	口縁部=横ナデ 胴上位=縦方向のヘラケズリ 下位=斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色・黒褐色	口縁部=横ナデ 胴部=横方向のヘラナデの後、ユビナデ 〈色調〉暗褐色

(15) 第115号住居跡

調査地区の中央、やや南寄りに位置し、東側に約20mで傾斜面となる。また、第118号住居跡が東約２mに存在する。平面形体は、方形を呈し、規模は、長軸8.93m、短軸8.90mを測り、今回の調査で、古墳時代では最大の規模をもつ。主軸方位は、短軸をはかり、N－63°－Wを示す。竪穴壁の立ち上がりは、36～60cmの高さがある。床面の踏み固められた面は、カマド前面から中央付近に広がっている。床面積は、約46.94㎡である。壁溝は全周し、幅は６～35cm、



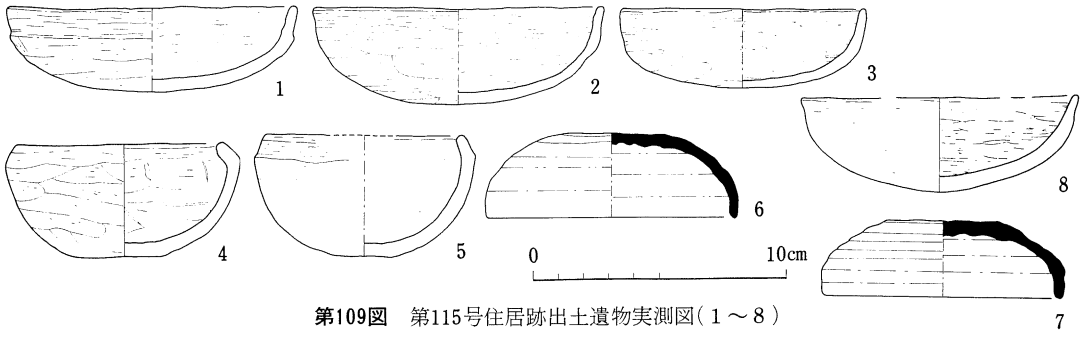
第115号住居跡土層説明

1. 暗褐色土。焼土粒を極少量含む。
2. 茶褐色土。ローム土塊を少量含む。ローム粒を極少量含む。
3. 暗褐色土。ローム土塊と炭化物を少量含む。
4. 極暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。炭化物を少量含む。
5. 極暗褐色土。ローム土塊と炭化物を少量含む。
   粘土塊を極少量含む。
6. 暗褐色土。ローム土塊を少量含む。
   炭化物と焼土粒を極少量含む。
7. 黒褐色土(軟質)。ローム粒と炭化物を極少量含む。
8. 褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
9. 暗褐色土(軟質)。ローム土塊を少量含む。
   炭化物を極少量含む。
10. 黄褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
11. 暗褐色土(軟質)。炭化物と焼土粒を少量含む。
12. 橙褐色土(軟質)。焼土塊と炭化物を多量に含む。
13. 暗褐色土(硬質)。焼土粒を少量含む。
    ローム土塊を多量に含む。
14. 茶褐色土(硬質)。焼土粒と炭化物を少量含む。
15. 褐色土(硬質)。ローム土塊を含む。
    焼土塊と炭化物を少量含む。
16. 暗褐色土。粘土と炭化物と焼土粒及び山砂を少量含む。
17. 暗褐色土(硬質)。粘土と山砂を多量に含む。
    焼土粒と炭化物を少量含む。
18. 暗茶褐色土。粘土塊を多量に含む。焼土粒を少量含む。
19. 極暗茶褐色土。粘土と山砂を多量に含む。

第107図　第115号住居跡実測図



第108図　第115号住居跡遺物焼土等出土状況図



第109図　第115号住居跡出土遺物実測図（１～８）

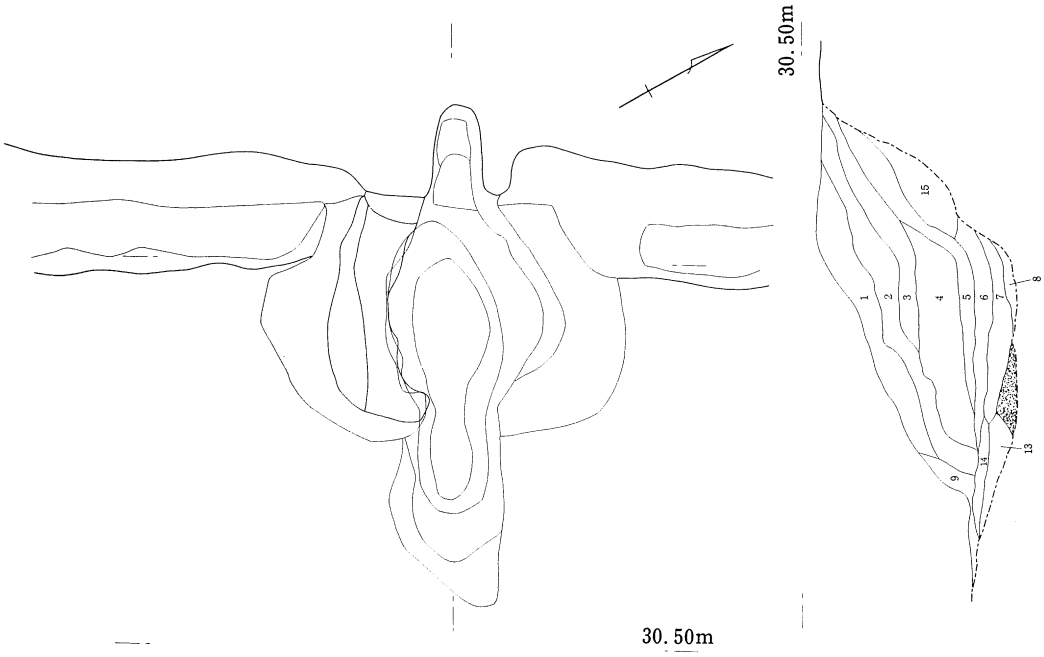
深さは10～21cmをはかる。また、壁溝内のピットも比較的多く存在する。床面内のピットは5本検出され、P_1 P_3 P_4 P_5が主柱穴と考えられる。P_3 P_4 P_5は、下端が2ヶ所有る。P_2は、北東側床面に有り、P_1とP_3の間やややP_1寄りに存在する。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体とし、中にローム土塊や炭化物を多く含んでいるため、人為的な埋めもどしの可能性が有る。カマドは、北西側壁のほぼ中央に設置され、煙道部は、壁を約20cm掘り込んでいる。出土遺物のうち、No.12～15は土製支脚で、いずれも上端ほど細くなる円柱状を呈する。No.12は、下部を欠損し、下端径3.1cm、No.13は、上端部を欠損し、下端径3.6cm、No.14・15は、上下端を欠損し、残存最大径6.9cm(No.14)、5.1cm(No.15)を計る。No.16は、磨石で、不正円形状を呈し、3面に使用痕が認められ、長さ11.6cm、幅5.8cm、厚さ5.7cm、淡褐色である。No.17も磨石で、不正円形を呈し、長さ8.1cm、幅6.6cm、厚さ4.9cm、側面に使用痕が認められる。色調は、淡褐色である。石質は、No.16、No.17とも石英斑岩である。

第51表　第115号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	87×78	16×12	20
P_2	56×49	31× 7	23
P_3	109×(90)	29×24	53
	87×83	18×13	82
P_4	124×101	9 × 7	85
		14×14	78
P_5	130×79	15×14	22
		14×14	74

第52表　第115号住居跡出土遺物観察表

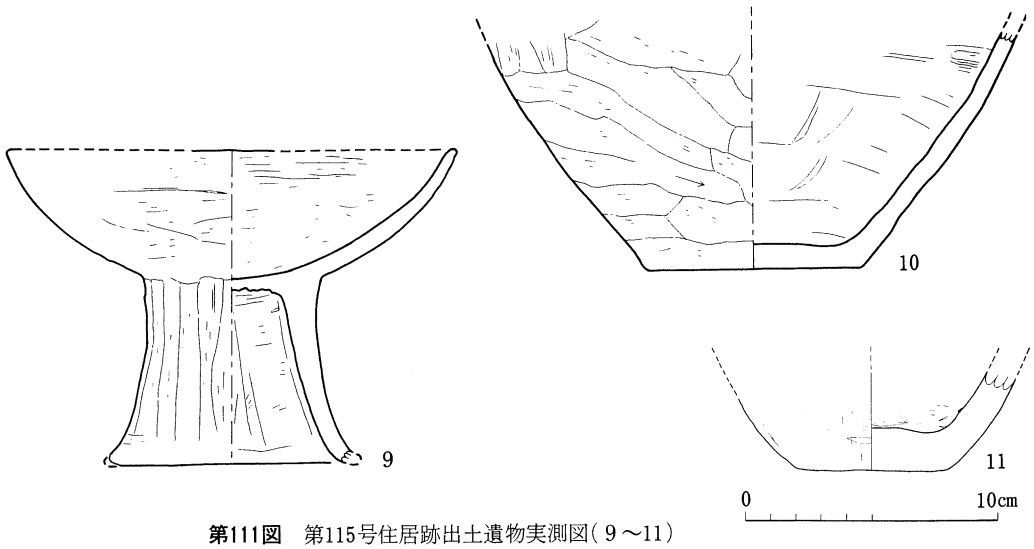
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図109 1	a.坏 b.東側隅覆土下位 c.全体の80%	口径(11.5) 稜部径11.25 器高3.35	d.砂粒を含む e.少し良好	浅くやや小型で、口縁部は稜をもち、わずかに開きぎみに立ち上がる。丸底。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	全面=横方向のヘラナデ 〈色調〉褐色
図109 2	a.坏 b.東側隅覆土下位 c.40%	口径(11.5) 器高3.8	1と同じ	浅くやや小型で、口縁部はやや開きぎみに立ち上がり、底部は丸底である。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗橙褐色	全面=横方向のヘラナデ 〈色調〉褐色
図109 3	a.坏 b.東側隅覆土下位 c.60%	口径(9.75) 器高3.15	1と同じ	丸底で、体部は浅く小型で、口縁部はやや開きぎみに立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	全面=横方向のミガキにちかいヘラナデ 〈色調〉褐色
図109 4	a.鉢 b.中央床面 c.ほぼ完形	口径8.2 器高4.45 体最大径9.3	d.砂粒を多く含む e.普通	小さな底をもち、体部は埦状で、口縁部は内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色・黒褐色	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図109 5	a.鉢 b.東側床面 c.60%	口径(7.8) 器高4.8 体最大径(8.75)	d.砂粒を含む e.普通	4に似る。4より体部に丸みをもつ。	4と同様	4と同様
図109 6	a.須恵器蓋坏 b.カマド右側床面 c.40%	口径(9.9) 器高3.35	d.緻密 e.普通	小型で、天井部は少し平坦で、口縁部はやや直立する。	天井部=2段の回転ヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡灰色	
図109 7	a.須恵器蓋坏 b.カマド右側床面 c.40%	口径9.3 器高3.0	d.緻密 e.普通	6と似る。	天井部～体上部=5段の回転ヘラケズリ 〈色調〉暗灰色	〈色調〉淡灰色
図109 8	a.坏 b.覆土内 c.90%	口径11.1 器高3.7	d.砂粒を含む e. 普通	丸底で、やや浅く、口縁部は、少し外反する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラナデ(横方向) 〈色調〉褐色	口縁部=横ナデ 体部=横方向ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図111 9	a.高坏 b.床面中央 c.40%	口径18.0 器高12.5 脚下端径(10.3)	d.砂粒を少量含む e.やや不良	脚裾部は、広がらず太い脚部で、坏部は少し浅い埦状を呈する。	脚裾部=横ナデ 脚部=縦方向のヘラケズリ 坏部=横方向のヘラナデ 〈色調〉褐色	脚裾部=横ナデ 脚部=ヘラケズリダシ 坏部=横方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図111 10	a.(甕) b.南東床面 c.底部～胴下位	底径8.5	d.小礫2㎜含む e.少し不良	平底で、少し丸みをもつ大型の甕とみられる。	胴下位=横及び斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	胴下位=ヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図111 11	a.(甕) b.南東床面 c.底部のみ	底径6.1	d.小礫3㎜を含む e.やや不良	平底で、長胴甕の底部で考えられる。	胴下位=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	胴下位=横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色



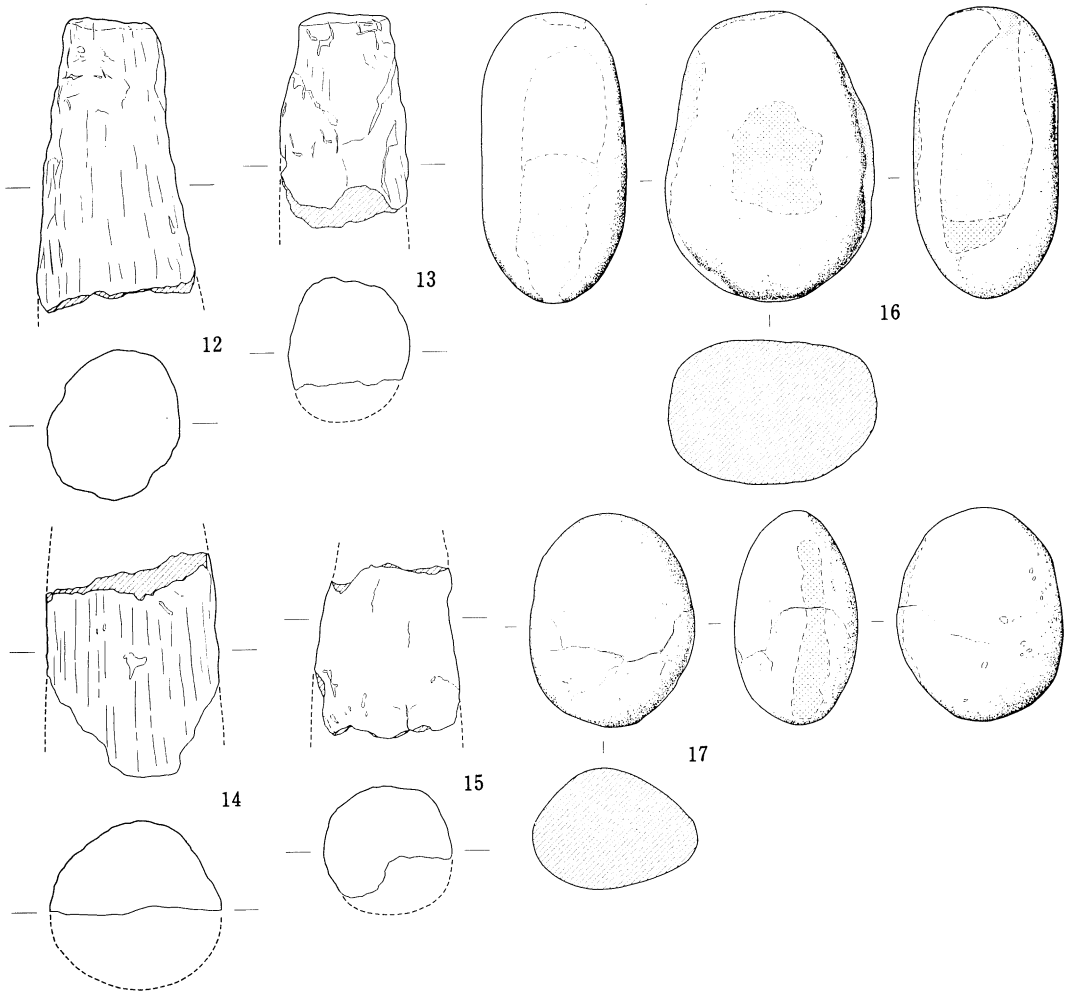
第115号住居跡カマド土層説明

1．暗茶褐色土。粘土塊と山砂を少量含む。炭化物と焼土を極少量含む。
2．暗茶褐色土(少し暗い)。粘土と山砂を多量に含む。
3．暗茶褐色土(やや軟質。暗い)。粘土と山砂を多量に含む。
4．暗褐色土。粘土と山砂を少量含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
5．暗黄灰色土(硬質)。山砂と粘土をブロック状に含む。焼土と炭化物を少量含む。
6．暗赤橙色土。焼土粒と粘土粒を多量に含む。粘土塊と山砂を極少量含む。
7．暗褐色土。粘土と山砂と灰を多量に含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
8．暗灰色土(硬質)。粘土に少量の山砂を含む。
9．暗褐色土。粘土粒を少量含む。
10．暗灰色土。粘土を多量に含む。山砂粒と焼土粒を極少量含む。
11．暗褐色土(硬質)。山砂粒と焼土粒を少量含む。
12．褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
13．極暗褐色土。灰と山砂と焼土及び粘土を少量含む。
14．黒褐色土(軟質)。灰と炭化物を多量に含む。粘土と山砂を少量含む。
15．明赤橙色土(軟質)。山砂の焼土化した土。

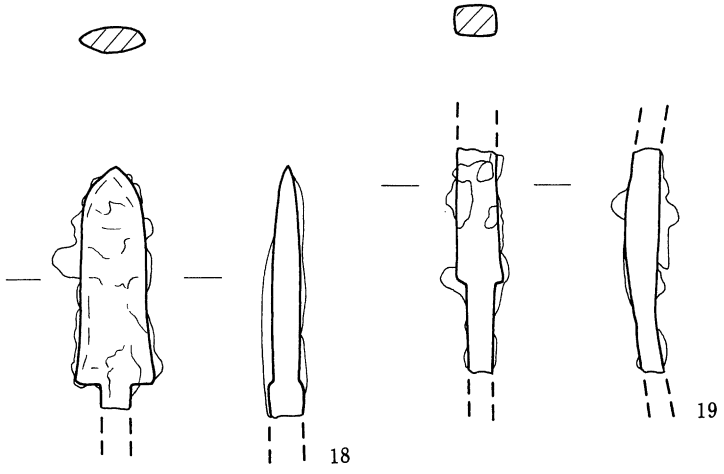
第110図　第115号住居跡カマド実測図



第111図　第115号住居跡出土遺物実測図(９～11)

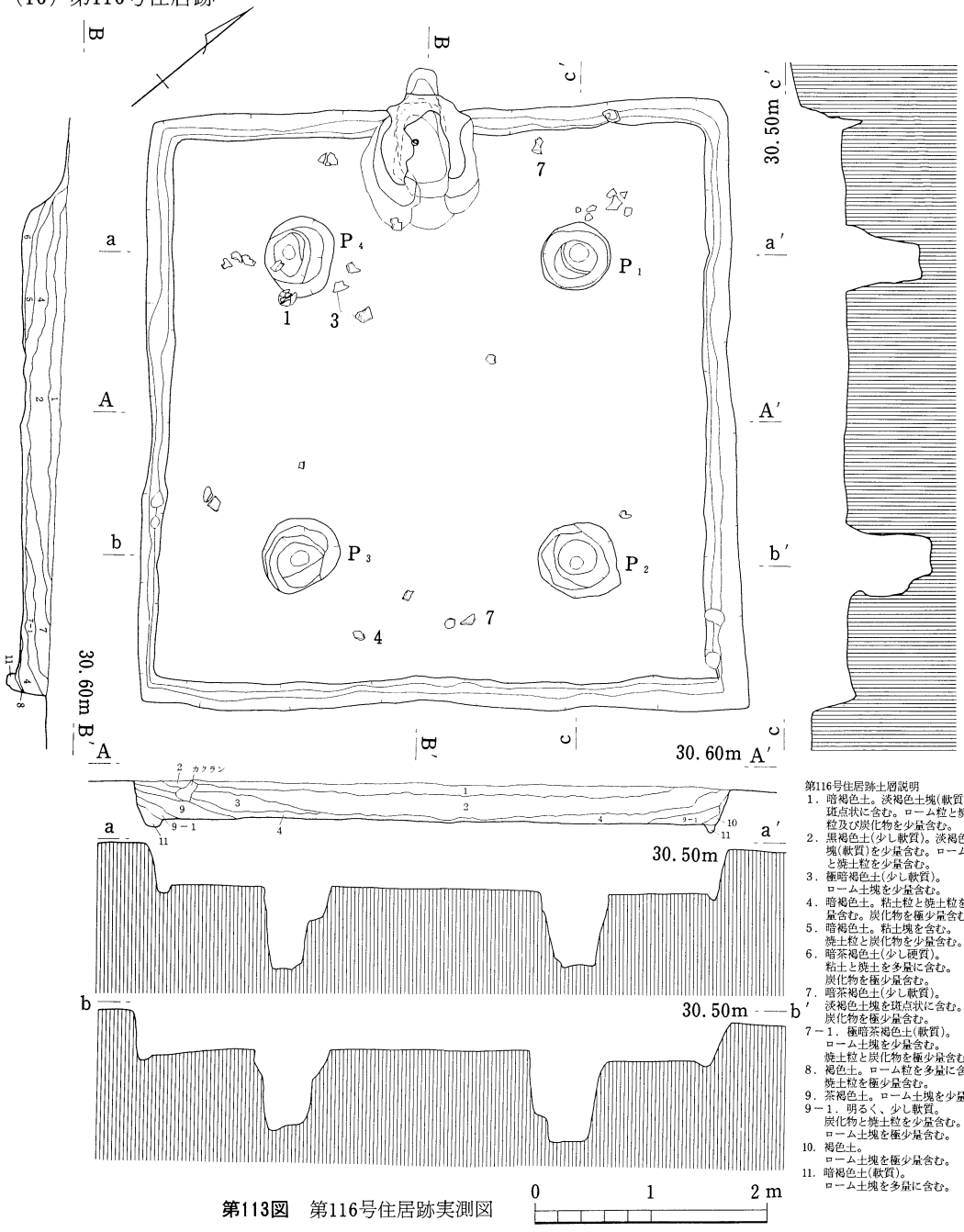


18·19は、鉄鏃である。
また、鉄滓が3点出土している。



第112図　第115号住居跡出土遺物実測図(12～19)

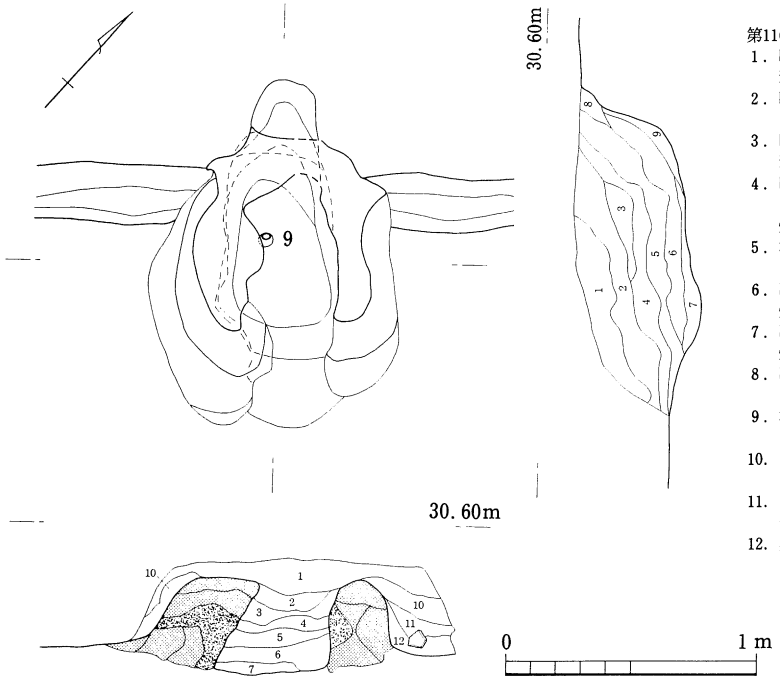
（16）第116号住居跡



第116号住居跡土層説明
1．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。ローム粒と焼土粒及び炭化物を少量含む。
2．黒褐色土(少し軟質)。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。ローム粒と焼土粒を少量含む。
3．極暗褐色土(少し軟質)。ローム土塊を少量含む。
4．暗褐色土。粘土粒と焼土粒を少量含む。炭化物を極少量含む。
5．暗褐色土。粘土塊を含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
6．暗茶褐色土(少し硬質)。粘土と焼土を多量に含む。炭化物を極少量含む。
7．暗茶褐色土(少し軟質)。淡褐色土塊を斑点状に含む。炭化物を極少量含む。
7－1．極暗茶褐色土(軟質)。ローム土塊を少量含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
8．褐色土。ローム粒を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
9．茶褐色土。ローム土塊を少量含む。
9－1．明るく、少し軟質。炭化物と焼土粒を少量含む。ローム土塊を極少量含む。
10．褐色土。ローム土塊を極少量含む。
11．暗褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。

第113図　第116号住居跡実測図

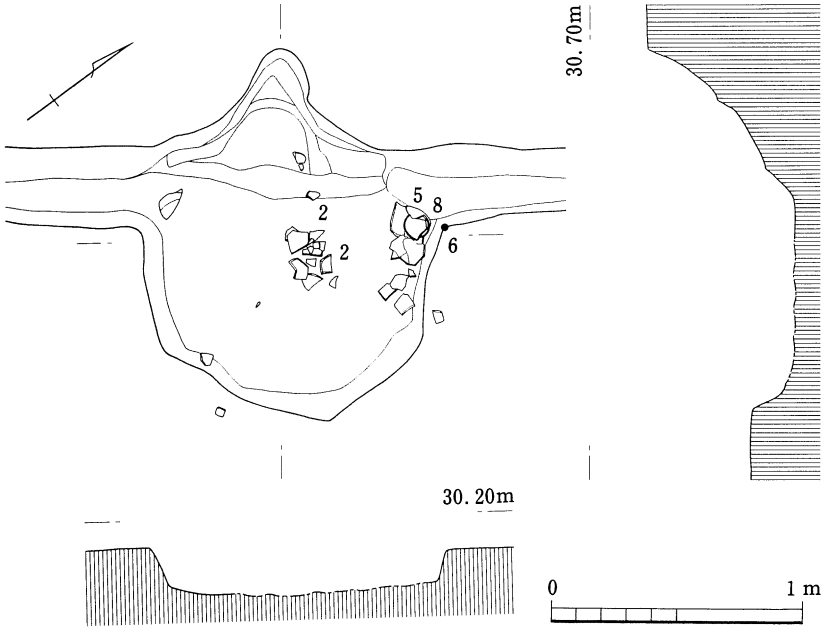
調査地区の南側、やや西寄りに位置する。第117号住居跡が南東約３ｍに存在する。平面形体は、方形を呈し、規模は、長軸5.25ｍ、短軸5.21ｍを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、Ｎ－51°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、38㎝の高さがある。床面は比較的平坦で、踏み固められた面は、カマド前面から床面中央付近に広がる。床面積は、24.35㎡である。壁溝は全周



第116号住居跡カマド土層説明

1．暗茶褐色土。山砂を多量に含む。
粘土を極少量含む。
2．暗白灰色土(硬質)。粘土を多量に含む。
山砂を極少量含む。
3．暗褐色土。山砂と焼土粒を少量含む。
粘土塊を含む。
4．暗灰色土(軟質)。粘土塊をブロック状
に含む。灰を多量に含む。
焼土塊と山砂を少量含む。
5．極暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。
山砂と炭化物及び焼土粒を極少量含む。
6．暗赤灰色土(軟質)。灰を多量に含む。
焼土塊と山砂を少量含む。
7．暗赤橙色土(少し硬質)。
焼土塊を多量に含む。
8．暗褐色土(軟質)。焼土粒を少量含む。
山砂を極少量含む。
9．極暗褐色土(軟質)。炭化物とローム粒
を少量含む。焼土粒を極少量含む。
10．暗褐色土。山砂を多量に含む。粘土塊
と焼土粒を極少量含む。
11．暗灰色土(少し硬質)。粘土塊を多量に
含む。ローム粒を極少量含む。
12．黒色土(少し軟質)。炭化物と灰を多量
に含む。ローム粒を極少量含む。

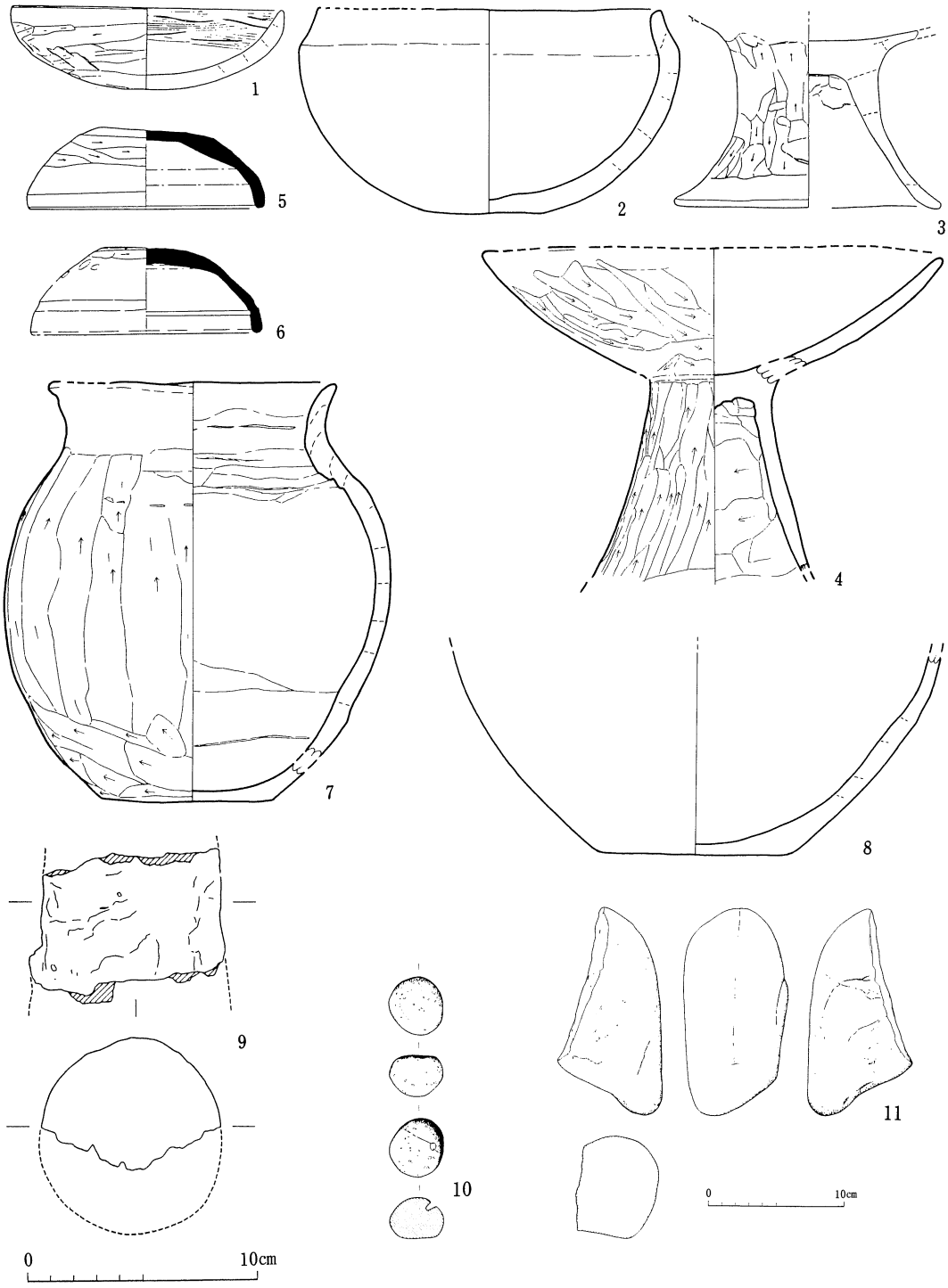
第114図　第116号住居跡カマド実測図



第115図　第116号住居跡カマド掘り方実測図

第53表　第116号
住居跡ピット計測表
(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	60×60	17×16	66
P2	75×68	12×11	73
P3	69×61	16×12	72
P4	70×62	12×11	73



第116図　第116号住居跡出土遺物実測図

し、幅3～16cm、深さ4～16cmを測る。床面内のピットは、4本検出され、主柱穴とみられる。各ピット間の間隔は、P_1～P_2が2.70m、P_3～P_4が2.40m、P_3～P_4が2.65m、P_4～P_1が2.53mを測る。覆土は暗褐色土が主体で、中に焼土粒と炭粒を少量含んでおり、自然堆積と考えられる。カマドは、北西側壁の中央やや南寄りに設置され、煙道部は竪穴壁を約40cm掘り込んでいる。出土遺物は、床面より多く出土している。No.1・3はP_4付近、No.4は南側床面、No.7は北側と南側床面、No.2・5・6・8はカマド内より検出された。また、No.10・11は、覆土中位付近の出土である。

No.9土製支脚は、上端ほど細くなる円柱形を呈する。上端と下端は欠損する。色調は淡橙褐色で、胎土は緻密である。残存最大径は8.8cm、カマド内よりの出土である。

No.10は小さな摩耗した石で、長さ4.4cm、幅4.0cm、厚さ3.1cmを計り、小穴が1ヶ所有るが、自然の所産とみられる。石質は安山岩で、重さは675g、色調は暗褐色を呈する。

No.11は磨石で、長さ12cm、幅7.3cm、厚さ5.3cmを計り、1面のみに使用痕が認められる。石質は石英斑岩で、重さは676g、色調は淡褐色を呈する。

第54表　第116号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図116 1	a.坏 b.P_3付近 床面 c.完形	口径12.0 器高37.0	d.緻密 e.不良	丸底で、浅い椀状を呈する坏。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉褐色、暗褐色
図116 2	a.鉢 b.カマド内 c.全体の 1/3の残存	口径(15.0) 体部最大径 (16.7) 底径(15.1) 器高(9.0)	d.砂粒を含む e.少し不良	やや平底ぎみで、体部は椀状を呈し、口縁部は稜をもち、内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ? 全体に摩耗している 〈色調〉両面とも黄褐色、 橙褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラミガキ
図116 3	a.(高坏) b.P_4付近床面 c.脚部のみ	脚部最小径 6.2 脚端部径 11.75	d.砂粒を含む e.普通	脚部最小径は、中位に有り、柱状を呈する裾部は、あまり横に広がらない。	脚上部=縦方向のヘラケズリ 脚下位=横ナデ 〈色調〉両面とも淡褐色	坏下位=ヘラミガキ 脚上部=ヘラケズリダシ 脚下位=横ナデ
図116 4	a.高坏 b.南側床面 c.脚裾部を 欠損、全 体の2/3	口径20.1 脚部最小径 5.3	d.砂粒を含む e.普通	脚部は、柱状を呈し、やや高い坏部は浅い椀状で、脚部に比して小さい。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉赤褐色、暗赤褐色、 一部暗褐色	坏部=ヘラミガキ 脚部=ヘラケズリダシ 〈色調〉黒褐色、黒色
図116 5	a.須恵器、 蓋坏 b.カマド右 袖内 c.全体の 3/4	口径10.7 器高3.45	d.砂粒を含む e.良好	天井部はヘラケズリにより平坦で、口縁部は直立ぎみ。	天井部～体中部=ヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡黄灰色、 一部黒灰色	全面ナデ
図116 6	a.須恵器、 蓋坏 b.カマド右 袖内 c.全体の 2/3	口径10.5 器高3.8	d.砂粒を含む e.良好	5と同様 口縁部内面に沈線有り。	天井部=ヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡褐色、灰色	全面ナデ
図116 7	a.壺 b.南側、北 側床面 c.全体の80 %の残存	口径12.65 頸部径11.4 胴部最大径 16.9 底径7.6 器高18.6	d.砂粒を含む e.良好	やや大きめの平底を有し、胴部最大径を中位にもつ球状の壺で、口縁部は外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 胴下位=斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部=ヘラナデの後、指横ナデ 頸部内面=ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色
図116 8	a.(壺) b.カマド右 袖 c.胴下位～ 底部のみ	底径8.3	d.少し緻密 e.少し不良	平底で、胴部は丸みをもって立ち上がる。	胴下位=横方向のヘラケズリ 煤が付着する 全体に摩耗が激しい 〈色調〉褐色、一部黒色	胴下位～底部=横方向のヘラナデ 〈色調〉褐色

(17) 第117号住居跡

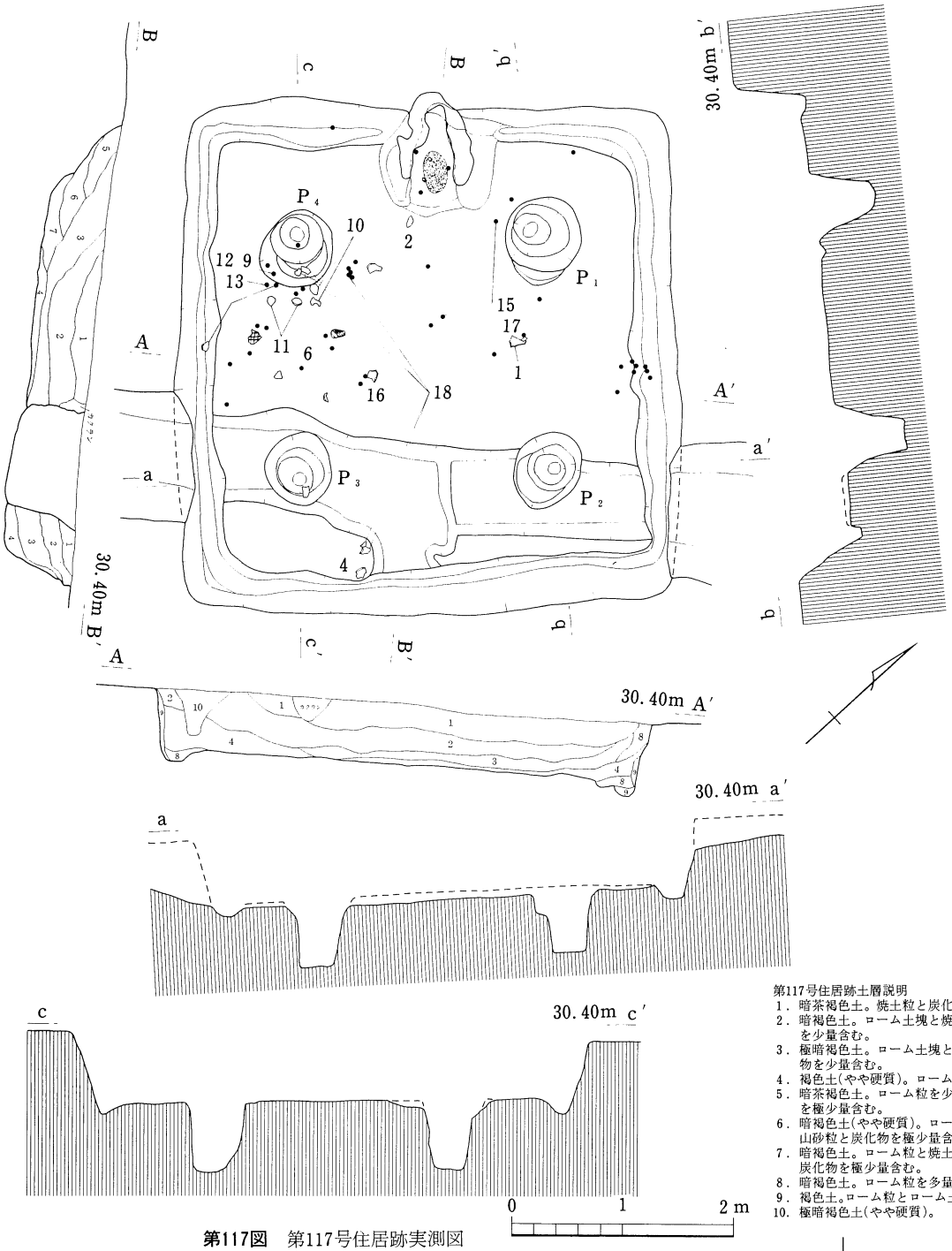
調査地区の南側に位置し、第103号方形周溝状遺構の溝に南側を切られている。平面形体は隅円方形を呈し、規模は、長軸4.65m、短軸4.57mを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－49°－Wを示す。壁の立ち上がりは、深さ47～67cmである。床面は、方形周溝状遺構の溝によって、約8cm南側が掘り込まれている。床面積は、約16.76㎡である。壁溝は四周し、幅は3～17cm、深さ6～17cmを測る。床面内のピットは4本検出され、主柱穴と考えられる。各ピット間の間隔は、P_1～P_2が2.20m、P_2～P_3が2.30m、P_3～P_4が2.25m、P_4～P_1が2.10mである。竪穴の覆土は暗褐色土が主体で、ローム土塊、焼土粒、炭粒を少量含んでいるため、人為的な埋めもどしの可能性が有る。カマドは、北西側壁のほぼ中央に設置され、燃焼部には、灰が多く堆積している。煙道部は、竪穴壁を約20cm掘り込んでいる。遺物は、床面付近より多く出土し、No.1・17は床面中央やや東寄り、No.2がカマド前面、No.4が南側床面、No.9・10・11・12・13がP_4付近より、No.6・16が床面中央やや西寄り、No.15はカマド右前面など。

No.19は、土製支脚で、上端ほど細くなる円柱状を呈する。上端部分のみの残存であり、上端径は8.6cm、色調は褐色で、胎土は緻密である。No.20も土製支脚で、No.19と同様の形体で、上端部のみの残存で、上端径は推定で6cmを計る。色調は橙褐色で、胎土は緻密。

第55表　第117号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図122 1	a.坏 b.北側床面 c.全体の 2/3の残存	口径4.7 器高4.6	d.緻密 e.やや不良	丸底でやや浅い椀状を呈する。口縁部は直立ぎみである。器厚は少し厚手。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉黄褐色、黒色	体部=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色、黒色
図122 2	a.坏 b.カマド前面床 c.全体の 1/2弱の残存	口径(11.5) 器高(4.0)	d.砂粒を含む e.やや不良	丸底で、やや浅い椀状を呈する。口縁部は、短く直立する。器厚は少し薄手。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉褐色	体部=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図122 3	a.(坏) b.覆土 c.全体の 1/3の残存	口径(11.9) 器高(3.6)	d.砂粒を含む e.普通	丸底を呈し、口縁部はやや内傾して立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉褐色・暗褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図122 4	a.(鉢) b.南側床面 c.全体の 1/4の残存	口径(9.2) 器高(4.8)	d.砂粒を含む e.少し不良	丸底で、体部は球状を呈し、口縁部は稜をもち、短く直立する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉褐色	体部=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図122 5	a.(鉢) b.覆土 c.全体の 1/4の残存	口径(13.1)	d.緻密 e.少し不良	丸底で、体部は椀状を呈し、口縁部は内傾ぎみに短く立ち上がる。	内外面とも赤彩がなされる 口縁部=横ナデ 体部=ヘラナデ 〈色調〉暗赤褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラミガキ 〈色調〉暗赤褐色
図122 6	a.(坏) b.西側床面 c.全体の 1/4の残存	口径(11.2)	d.砂粒を多く含む e.やや不良	丸底ぎみで、体部は椀状、口縁部は、やや内傾してして直立。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉黄褐色、灰色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラミガキ 〈色調〉灰褐色、黒色
図122 7	a.(坏) b.覆土 c.全体の 1/4の残存	口径(12.0)	d.緻密 e.少し不良	厚手で浅い椀状を呈する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図122 8	a.(坏) b.覆土 c.全体の 1/4の残存	口径(14.8)	d.緻密 e.普通	やや大型の坏で、口縁部は直立する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	体部=ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色

また、鉄製の刀子片が出土している。関部に鎹がみられるものと考えられる。



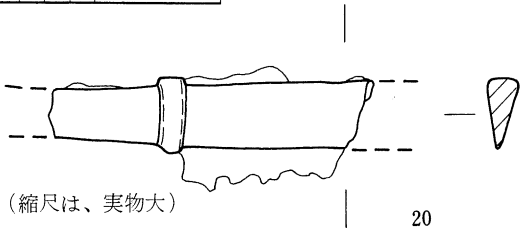
第117号住居跡土層説明

1. 暗茶褐色土。焼土粒と炭化物を極少量含む。
2. 暗褐色土。ローム土塊と焼土粒及び炭化物を少量含む。
3. 極暗褐色土。ローム土塊と焼土粒及び炭化物を少量含む。
4. 褐色土(やや硬質)。ローム粒を多量に含む。
5. 暗茶褐色土。ローム粒を少量含む。山砂粒を極少量含む。
6. 暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を少量含む。山砂粒と炭化物を極少量含む。
7. 暗褐色土。ローム粒と焼土粒と山砂粒及び炭化物を極少量含む。
8. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。
9. 褐色土。ローム粒とローム土塊を多量に含む。
10. 極暗褐色土(やや硬質)。

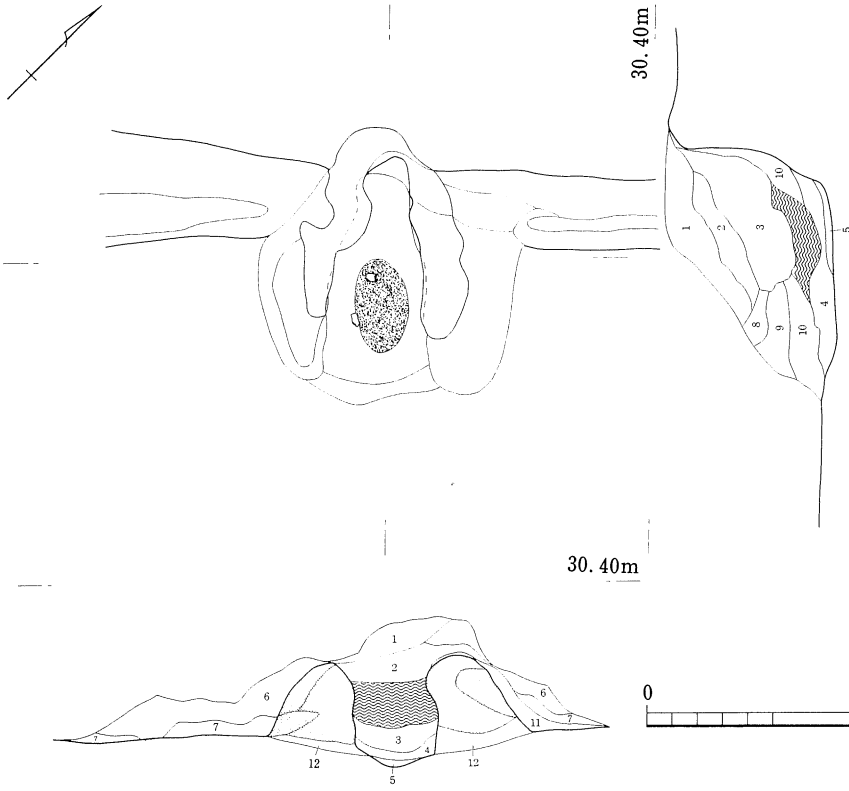
第117図　第117号住居跡実測図

第56表　第117号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上　端	下　端	深　さ
P1	80×68	16×12	55
P2	73×60	12×11	60
P3	67×59	12×12	53
P4	72×69	14×12	61



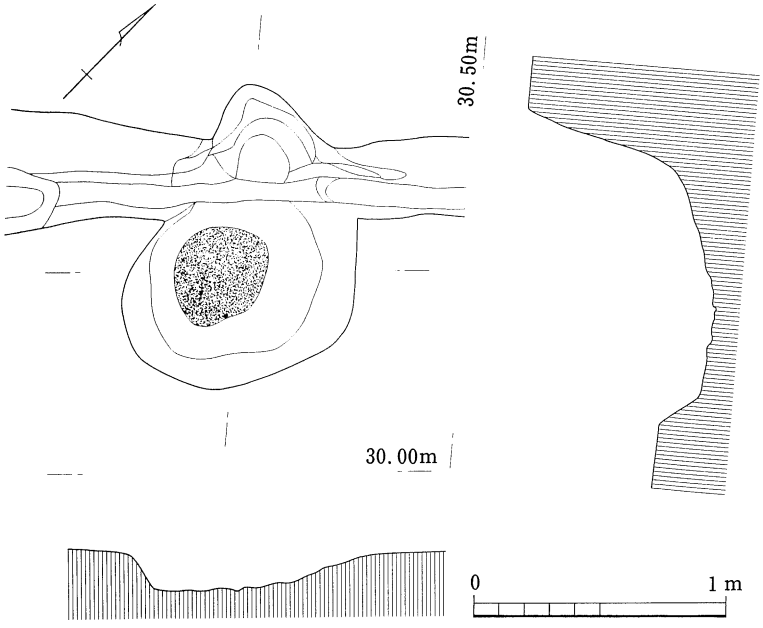
第118図　第117号住居跡出土遺物実測図(20)



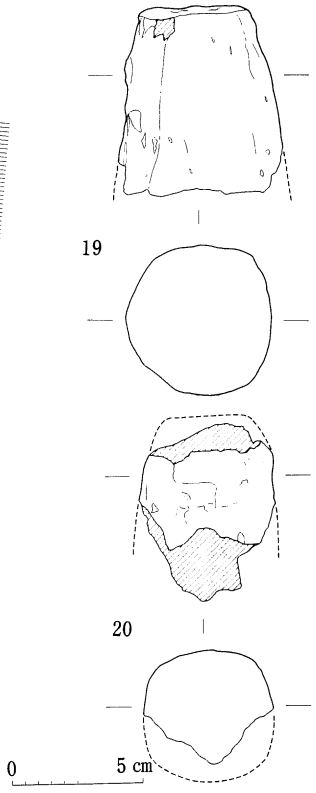
第117号住居跡土層説明

1．白灰色土(硬質)。暗褐色土を不規則に含む。
2．暗白灰色土(少し硬質)。白灰色粘土と山砂を少量含む。
3．暗灰色土(軟質)。灰と粘土をブロック状に多量に含む。
4．褐色土(少し硬質)。ローム土塊がブロック状に混入。粘土粒と焼土粒を少量含む。
5．褐色土(硬質)。ローム土塊のブロック。
6．暗褐色土(軟質)。粘土と山砂を多量に含む。
7．暗白灰色土(硬質)。粘土と焼土を多量に含む。
8．白灰色粘土がブロック状を呈する。
9．暗褐色土。山砂を少量含む。
10．暗褐色土(軟質)。焼土塊と粘土塊を少量含む。
11．褐色土。ローム土塊と粘土粒と焼土粒を少量含む。
12．暗褐色土(少し硬質)。山砂を含む。ローム土塊を少量含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。

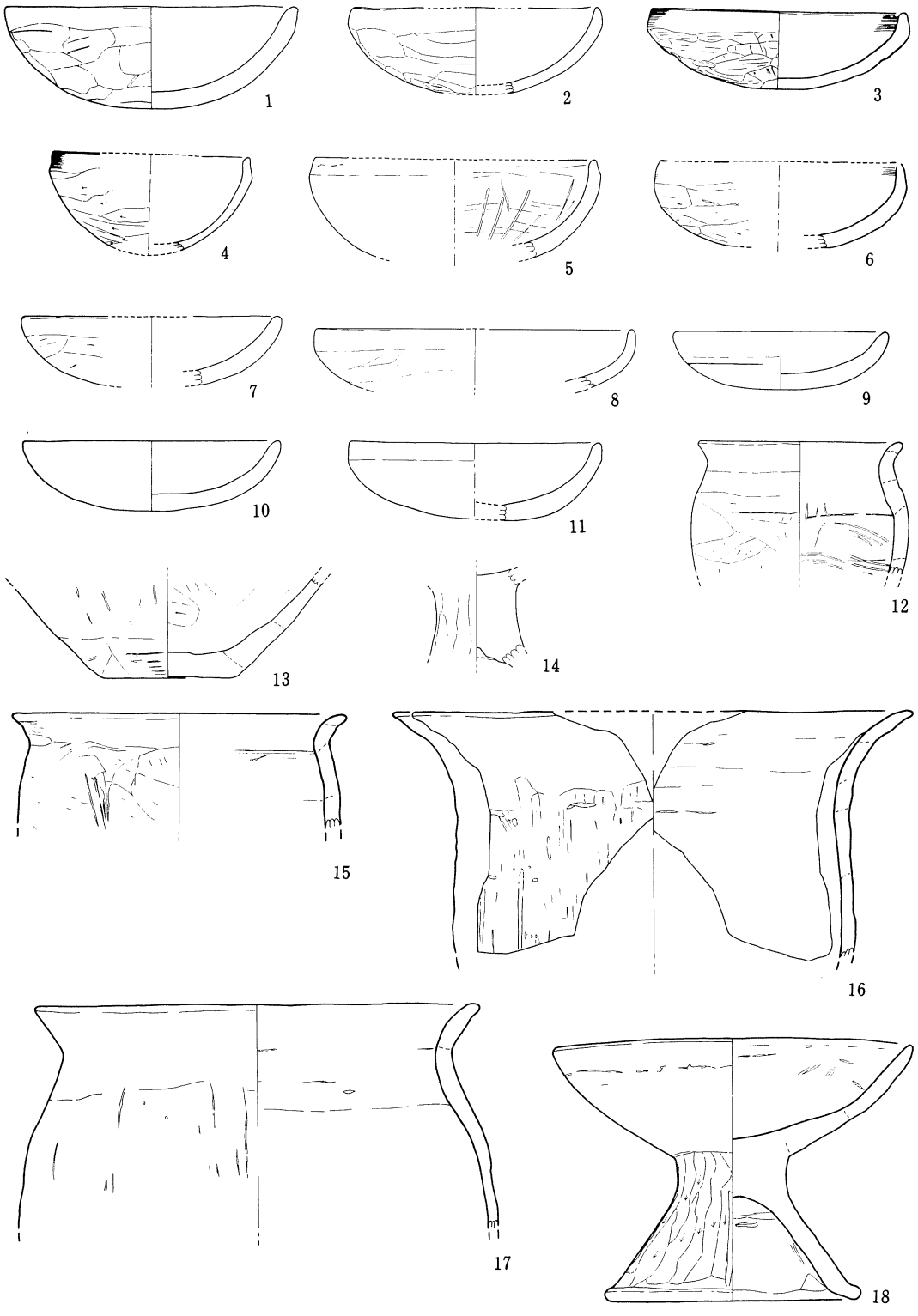
第119図　第117号住居跡カマド実測図



第120図　第117号住居跡カマド掘り方実測図



第121図　第117号住居跡出土支脚実測図



第122図　第117号住居跡出土遺物実測図（１～18）

第57表　第117号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図122 9	a.坏 b.P4南側床 c.完形	口径9.8 器高2.7	d.砂粒を含む e.少し不良	小型で、浅い椀状を呈する。やや厚手。	摩耗が多く不明 〈色調〉両面黒褐色	摩耗が多く不明
図122 10	a.坏 b.P4南側床 c.完形	口径12.0 器高3.25	9と同じ	9に似るが少し大型	摩耗が多く不明 〈色調〉両面黒褐色	体部=ヘラミガキか。
図122 11	a.坏 b.P4南側床 c.全体の2/3	口径11.75 器高3.6	9と同じ	10に似るが口縁部が直立する。	口縁部=横ナデ 〈色調〉両面黒褐色	摩耗が多く不明
図122 12	a.壺 b.北側床面 c.全体の1/4	口径9.4	d.小礫2㎜を含む e.普通	小型で、球状の体部をもち、口縁部は小さく外反する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図122 13	a.(甕) b.P4南側床 c.底部のみ	底径6.1	d.小礫3㎜を含む e.少し不良	平底	胴下位=横方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡褐色	胴下位～底部=ヘラナデ
図122 14	a.(高坏) b.覆土 c.脚中位	脚最小径3.7	d.砂粒を含む e.良好	脚部は細い。	脚部=縦方向のヘラケズリ、赤彩が施される。 〈色調〉両面とも暗赤褐色	脚部=ヘラケズリダシ後、ヘラナデ 赤彩が施される。
図122 15	a.(甕) b.北側床面 c.口縁の1/3	口径15.2 頸部径13.7	d.小礫2㎜を含む e.普通	最大径は胴上位で、口縁部は小さく外反。全体に小型である。	口縁部=横ナデ 胴上位=縦方向ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色	口縁部=横ナデ 胴上位=縦方向のヘラナデの後、指ナデ
図122 16	a.(甕) b.床面中央 c.口縁～胴上位残存	口径23.6 胴部最大径18.3	d.小礫3㎜を多く含む e.少し良好	胴部最大径を中位やや上にもち、口縁部は丸みをもって大きく外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラケズリ(縦方向) 摩耗が多い 〈色調〉淡橙褐色	口縁部=横ナデ 胴部=横方向のヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉褐色
図122 17	a.(甕) b.P4南側床 c.口縁部の1/4を残存	口径20.1 頸部径17.6	d.小礫を含む e.普通	胴部は球状と思われ、口縁部はくの字状を呈する。	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉褐色	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉暗褐色
図122 18	a.高坏 b.覆土 c.坏部2/3欠損	口径16.7 脚最小径5.0 脚裾部径11.9 器高12.9	d.緻密 e.良好	脚端部は丸く、脚部はハの字状に立ち上がり、坏部は大きく開き中位でやや屈曲する。	坏部=縦方向のヘラナデの後、横方向のヘラミガキ 脚部=縦方向のヘラケズリ 脚端部=横ナデ 〈色調〉淡橙褐色	坏部=横方向のヘラミガキ 脚部=ヘラケズリダシ 脚端部=横ナデ 〈色調〉黒色

(18) 第118号住居跡

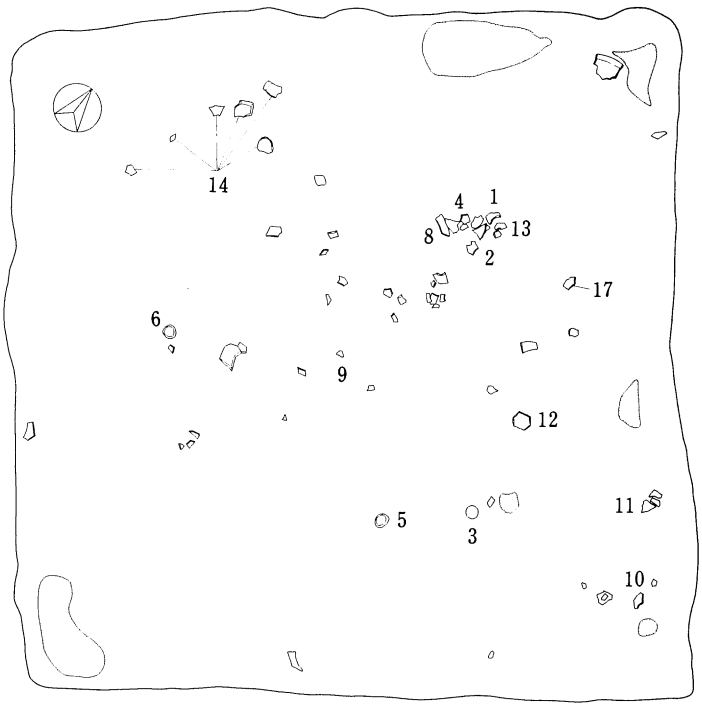
調査地区の南東側に位置し、東に約10mで傾斜し、谷に降りる地点である。第115号住居跡が北西約２m、第119a号住居跡が東に約２mに存在する。平面形体は隅円方形で、東側隅がやや突出する。規模は、長軸5.50m、短軸5.35mを測る。主軸方位は長軸方向をはかり、N－36°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で55cmである。床面はほぼ平坦で、踏み固められた面が、カマド前面から床面中央及びP5まで認められる。床面積は、約25.96㎡である。壁溝は四周し、幅は４～23cm、深さは３～12cmである。床面内のピットは５本検出され、P1～P4は、主柱穴とみられ、各ピット間の距離は、P1～P2が2.65m、P2～P3が2.40m、P3～P4が2.65m、P4～P1が2.50mを測る。P5は、カマド向い側の壁近くに位置し、出入口相当施設用のピットと推定される。床面内には、P1と壁を結ぶ様に、方形に区画する間仕切り溝が存在する。１本は東側から壁溝と接してP1方向に延び、長さ65cm、最大幅21cm、深さ７cm、もう１本は北側から壁溝とは接せずにP1方向に延びてP1と接し、長さ65cm、最大幅26cm、深さ10cmである。竪穴の覆土は、ローム土塊を多量に含む暗褐色土が主体で、人為的な埋めもどしの様相を呈している。カマドは、北西側壁のほぼ中央に設置され、袖部は弧状に囲むように存在し、残存する焚口部は30cmの幅を有する。煙道部は、竪穴壁を35cm掘り込み、立ち上が

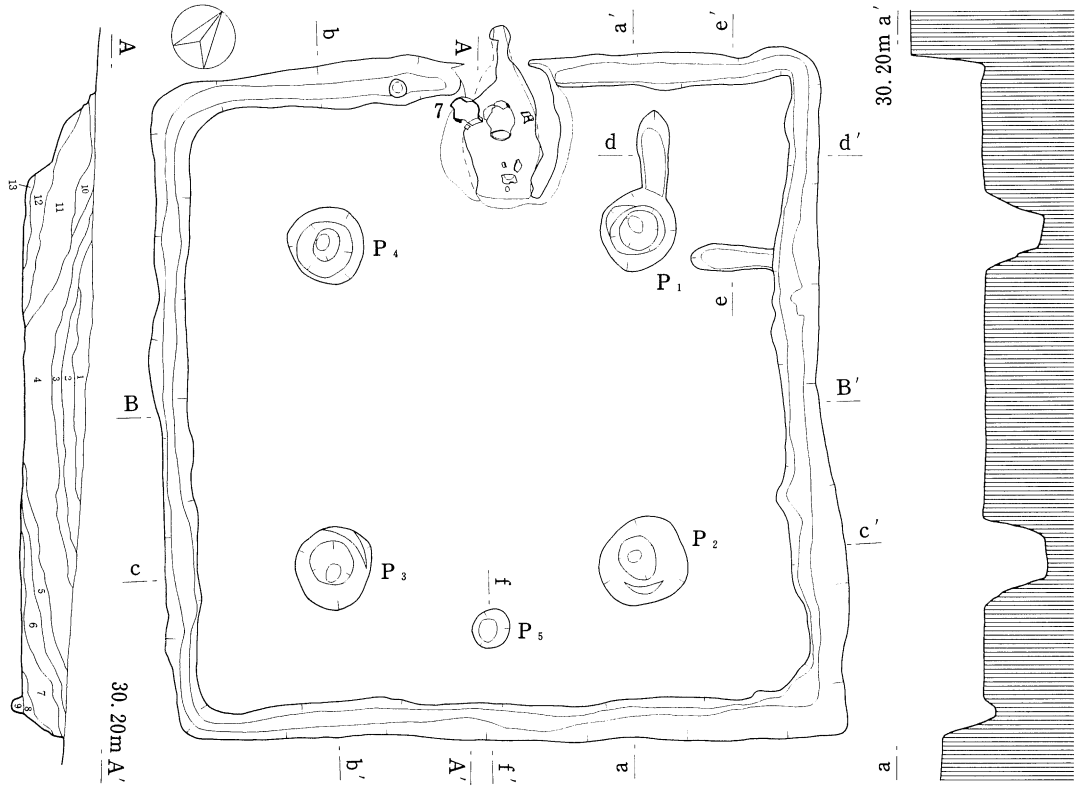
りは急傾斜である。出土遺物は、覆土中及び床面より多く検出されている。カマド内からは、No.7の甕、No.15の鉢、No.16・19の土製支脚が出土している。

また、焼土の流れ込みが、北側、南側、東側よりわずかに認められる。

第58表　第118号住居跡
ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	68×61	16×11	46
P2	75×70	12×9	50
P3	66×61	16×11	44
P4	64×59	14×10	41
P5	33×28	19×15	29



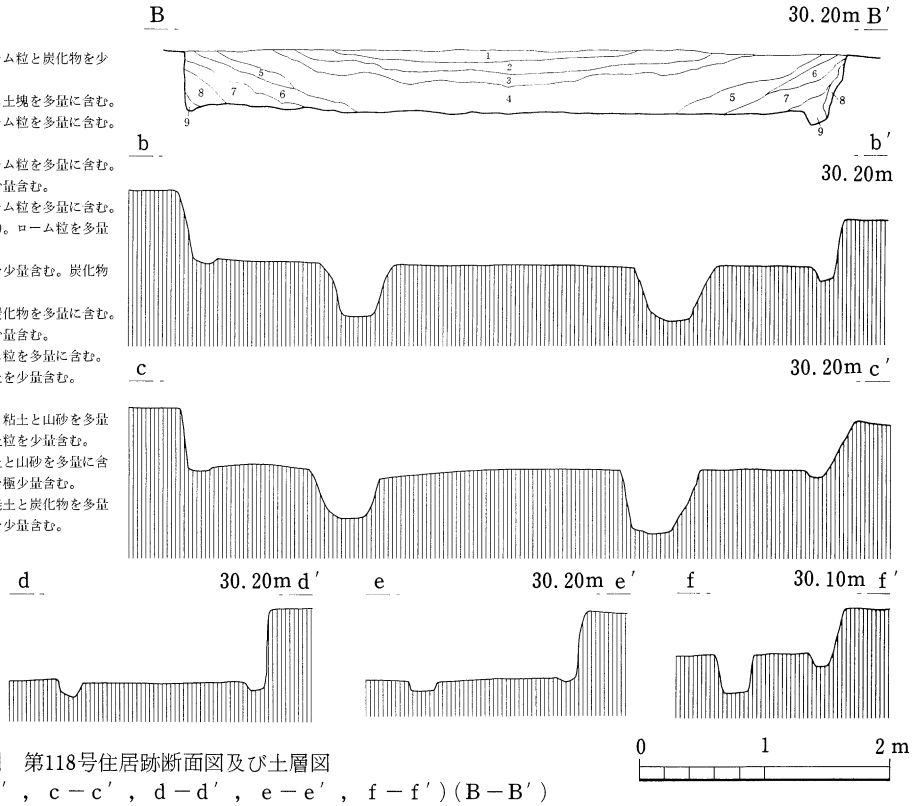


0　1　2 m
(上図も同縮尺)

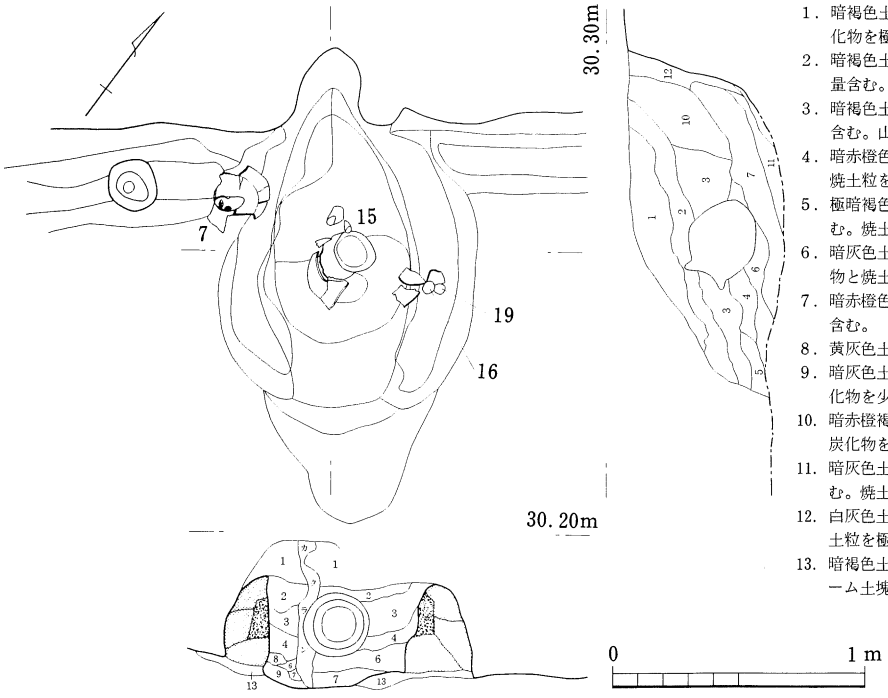
第123図　第118号住居跡遺物出土状況(上図)
第124図　第118号住居跡実測図(下図)

第118号住居跡土層説明

1．暗褐色土(軟質)。ローム粒と炭化物を少量含む。
2．褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
3．暗褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。炭化物を極少量含む。
4．暗褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。炭化物と焼土粒を極少量含む。
5．暗褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
6．極暗褐色土(やや軟質)。ローム粒を多量に含む。
7．暗褐色土。ローム粒を少量含む。炭化物を極少量含む。
8．極暗褐色土(軟質)。炭化物を多量に含む。ローム粒と焼土粒を少量含む。
9．褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
10．褐色土。炭化物と粘土を少量含む。焼土粒を極少量含む。
11．暗褐色土(やや硬質)。粘土と山砂を多量に含む。炭化物と焼土粒を少量含む。
12．暗褐色土(硬質)。粘土と山砂を多量に含む。炭化物と焼土粒を極少量含む。
13．極暗褐色土(硬質)。焼土と炭化物を多量に含む。粘土と山砂を少量含む。



第125図　第118号住居跡断面図及び土層図
(b－b′，c－c′，d－d′，e－e′，f－f′)(B－B′)

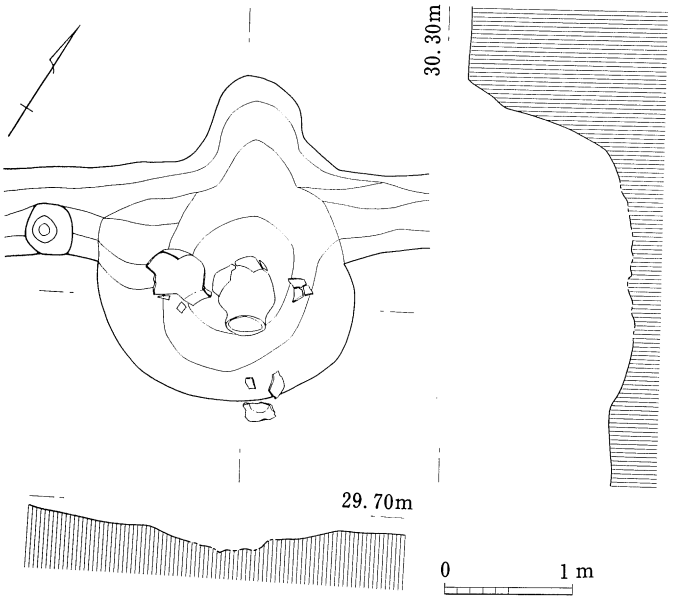


第118号住居跡カマド土層説明

1．暗褐色土。山砂を少量含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
2．暗褐色土(少し硬質)。粘土と焼土粒を少量含む。山砂と炭化物を極少量含む。
3．暗褐色土(硬質)。粘土と焼土粒を多量に含む。山砂を少量含む。
4．暗赤橙色土(少し硬質)。山砂と粘土及び焼土粒を多量に含む。
5．極暗褐色土(少し硬質)。山砂を多量に含む。焼土粒を少量含む。
6．暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。炭化物と焼土粒及び山砂を少量含む。
7．暗赤橙色土(軟質)。焼土と山砂を多量に含む。
8．黄灰色土(硬質)。(粘土)
9．暗灰色土(軟質)。粘土塊と焼土塊及び炭化物を少量含む。
10．暗赤橙褐色土。焼土粒と粘土と山砂及び炭化物を多量に含む。
11．暗灰色土(軟質)。灰と炭化物を多量に含む。焼土粒を少量含む。
12．白灰色土(硬質)。粘土を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
13．暗褐色土(硬質)。山砂を多量に含む。ローム土塊を少量含む。

第126図　第118号住居跡カマド実測図

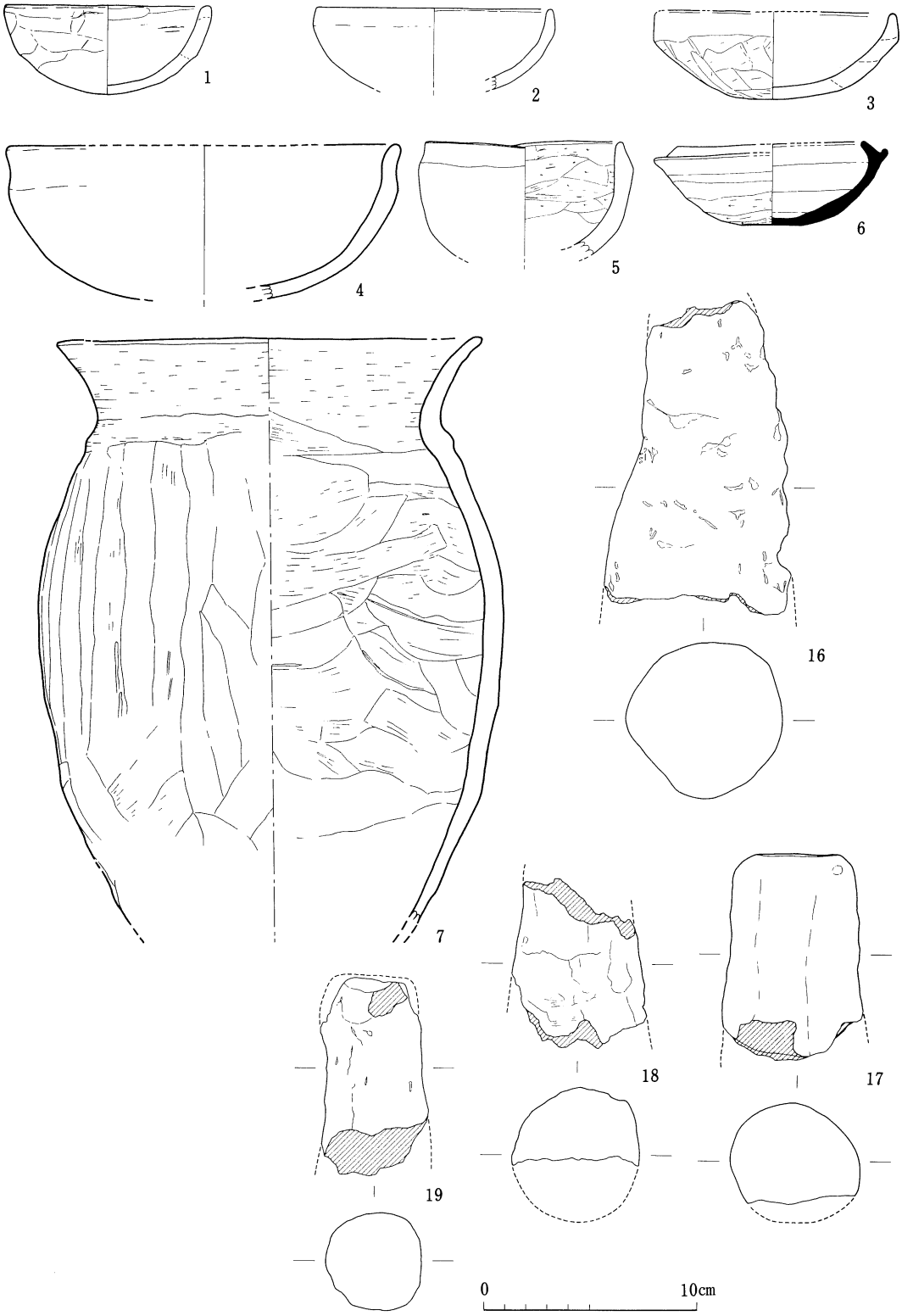
No.16～19は、土製支脚である。No.16は、上端ほど細くなる円柱状を呈し、指による成整形痕が残り、やや凹凸が多い。残存最大径は8.7cm。色調は淡橙褐色を呈する。No.17は、上端部付近のみの残存で、全体的にがっしりとした形体で、円柱状を呈する。上端径は4cm、色調は褐色。No.18は、中程の破片で、円柱状を呈し、色調は暗褐色。No.19は、上端部のみの破片で、上端径3.5cm。色調は、暗褐色。



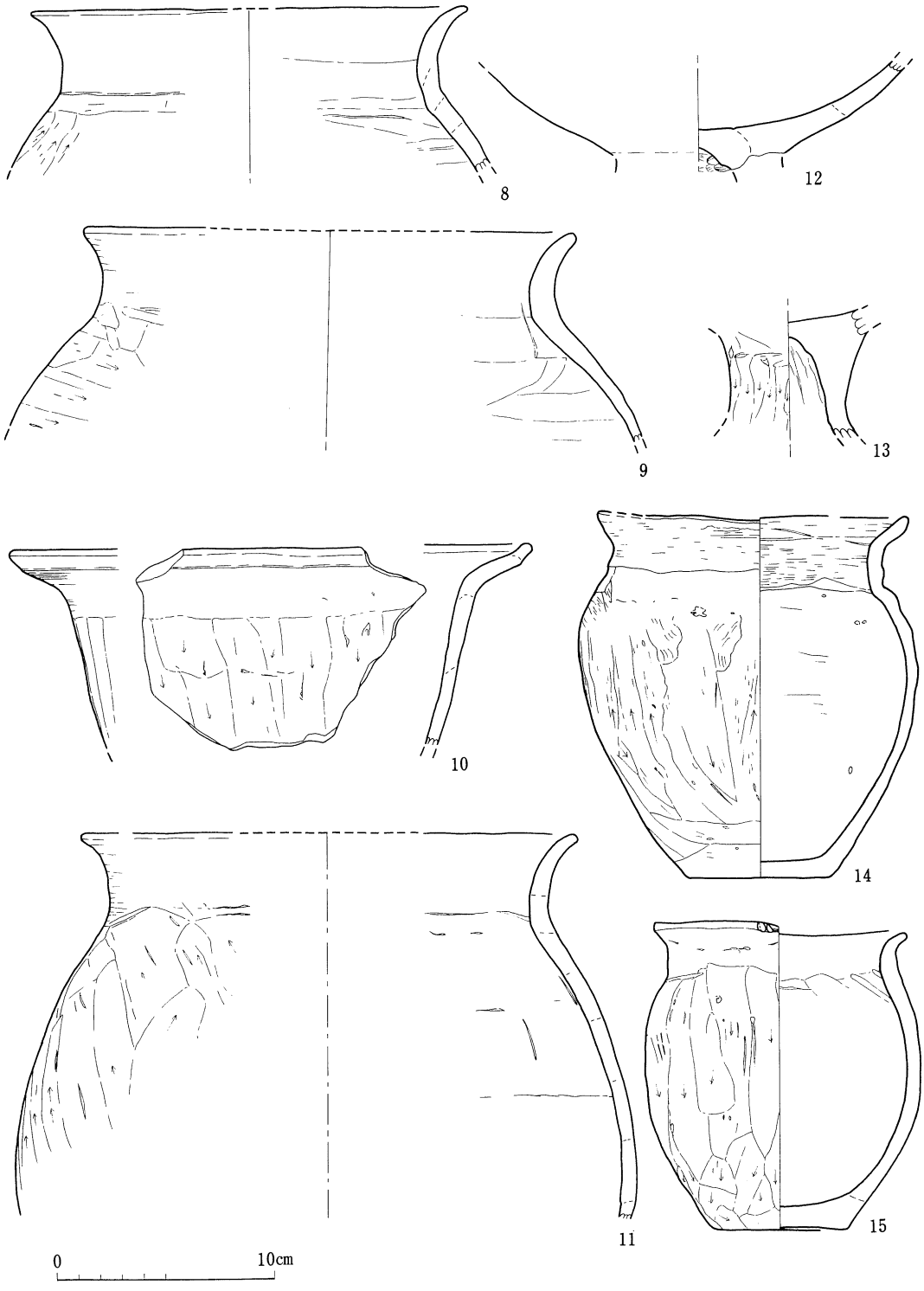
第127図　第118号住居跡カマド掘り方実測図

第59表　第118号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図128 1	a.坏 b.覆土中位 c.全体の90%の残存	口径9.7 器高4.2	d.緻密 e.やや不良	小型で体部は球状である。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉褐色	体部=ヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図128 2	a.(坏) b.覆土中位 c.底部欠損、他は1/3	口径(11.1)	d.砂粒を含む e.少し不良	椀状を呈し、口縁部は直立する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 摩耗が多い	全面=ヘラミガキ 〈色調〉両面とも赤褐色、一部黒色、黒褐色
図128 3	a.坏 b.床面直上 c.全体の4/5	口径11.3 器高4.1	d.砂粒を含む e.普通	丸底で、口縁部は直立する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図128 4	a.(鉢) b.覆土中位 c.底部欠損、他は1/4	口径(18.6)	d.緻密 e.少し不良	体部は椀状に立ち上がり、口縁部は内傾ぎみに直立する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 摩耗多し 〈色調〉褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図128 5	a.鉢 b.覆土中位 c.底部欠損、他は80%	口径9.4 体部最大径10.1	d.砂粒を含む e.不良	体部は球状に立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 両面ともかなり摩耗している	全面=横方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色
図128 6	a.須恵器、坏身 b.床面直上 c.完形	口径8.8 体部最大径11.0 器高3.8	d.砂粒を含む e.良好	小型で、底部は丸底口縁部は稜をもち、かえりを有する。かえり高は5mm。	体下半=手持ちヘラケズリ、回転指ナデ 〈色調〉両面とも暗青灰色	回転指ナデ
図128 7	a.(甕) b.カマド左床面 c.胴下半～底部欠損	口径19.6 頸部15.8 胴部最大径21.4	d.砂粒を少量含む e.少し不良	長胴で、胴部最大径を上位にもち、口縁部はやや大きく外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉褐色、淡褐色、一部暗褐色	口縁部=横ナデ 胴部=横方向のヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色
図129 8	a.(甕) b.覆土中位 c.口縁部のみ1/4残存	口径20.0 頸部径17.4	7と同様	やや胴部に丸みをもち、口縁部は少し直立して外反する。	口縁部=横ナデ 胴上位=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉赤褐色	口縁部=横ナデ 胴上位=横方向のヘラナデ 〈色調〉黄褐色
図129 9	a.(甕) b.覆土中位 c.口縁部のみ1/4残存	口径22.4 頸部径20.6	7と同様	8と同様であるが、やや大型である。	8と同様	8と同様



第128図　第118号住居跡出土遺物実測図（1～7,16～19）



第129図　第118号住居跡出土遺物実測図（８～15）

第60表　第118号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図129 10	a.(甕) b.覆土下位 c.口縁部付近のみ	口径(12.0)	d.砂粒を多く含む e.良好	胴部は開きぎみに立ち上がり、口唇部はつまみ上げた様な形。	口縁部=横ナデ 胴上位=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色	口縁部=横ナデ 胴上位=ヘラヨコナデ
図129 11	a.(甕) b.覆土下位 c.上半部残存	口径22.7 頸部径20.0	d.小礫3㎜含む e.普通	胴部はわずかに丸みをもち、口頸部はやや直立し、上部で外反する。	10と同様	10と同様
図129 12	a.高坏 b.床面直上 c.坏部上位を欠損		d.緻密 e.少し良好		坏部=横及び斜め方向のヘラミガキ 脚部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色	坏部=ヘラミガキ 脚部=ヘラケズリダシ
図129 13	a.(高坏) b.覆土中位 c.脚部のみ残存	脚最小径5.2	12と同じ	やや弧状を描いて立ち上がる脚部。	脚部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色と褐色	脚部=ヘラナデツケ
図129 14	a.(甕) b.覆土下位 c.全体の80%の残存	口径14.0 頸部径12.2 胴最大径15.2 底径6.6 器高16.7	d.小礫3㎜以下を含む e.やや不良	平底で、最大径は胴上位に有り、口頸部は直立し、口縁部は丸みをもってわずかに外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 指頭痕有り 〈色調〉両面とも淡褐色、一部黒褐色	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラナデ
図129 15	a.(甕) b.カマド内 c.完形	口径11.4 頸部径10.35 胴最大径12.3 底径6.1 器高14.0	d.小礫3㎜～を多く含む e.普通	平底で、最大径は胴中位に有り、口縁部はわずかに外反。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色、一部暗褐色	口縁部=横ナデ 胴部=横方向のヘラナデ

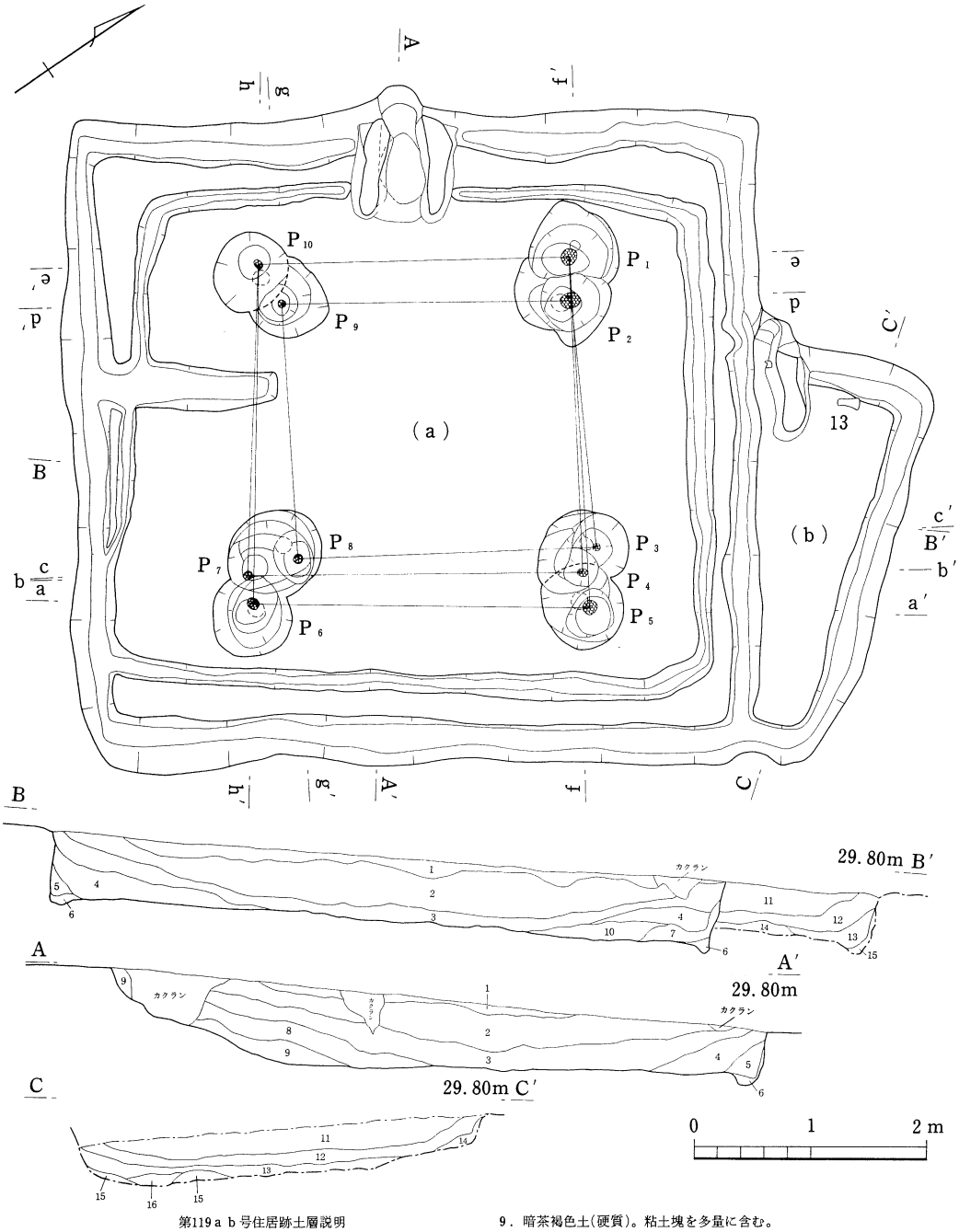
(19) 第119a号住居跡

調査地区の南東側で、小谷に向かって東側へ傾斜を開始する地点に位置する。第118号住居跡が北西に約1.5m、第130号住居跡が北東約７mに所在する。また、第119b号住居跡をプランの西側約半分程切っている。平面形体は方形を呈し、規模は、長軸5.95m、短軸5.68mを測る。主軸方位は短軸方向をはかり、N－57°－Wである。壁の立ち上がりは、30～82cmをはかる。床面は、ハードローム層内のレベルに設置され、床面積は約21.21(拡張後28.94)㎡である。壁溝は四周し、幅５～25cm、深さ５～11cmを測る。また、床面の精査により、壁溝がもう１本内側より検出されている。幅は12～26cm(上端)、深さ３～25cmである。これは、古い竪穴が内側に１軒存在していたと思われ、その規模は、長軸5.18m、短軸4.47mを測る。主軸方位は同じである。床面内のピットは10本検出され、P_1とP_2、P_3とP_4とP_5、P_6とP_7とP_8、P_9とP_{10}の各々が重複している。主柱穴は、４本ずつで、推定３通り考えられる。$P_2P_3P_8P_9$と$P_1P_4P_7P_{10}$及び$P_1P_5P_6P_{10}$である。それぞれ、柱のあたり痕跡が認められ、各々の間隔はP_2～P_3が2.15m、P_3～P_8が2.60m、P_8～P_9が2.20m、P_9～P_2が2.50m、また、P_1～P_4が2.73m、P_4～P_7が2.90m、P_7～P_{10}が2.70m、P_{10}～P_1が2.70m、さらに、P_1～P_5が3.05m、P_5～P_6が2.90m、P_6～P_{10}が2.95m、P_{10}～P_1が2.70mを測る。竪穴の覆土は、ローム粒を含む暗褐色土を主として、自然堆積である。カマドは、北西側壁の中央に設置され、煙道部は、立ち上がりが急傾斜で、竪穴壁を約15cm掘り込んでいる。

第61表　第119a号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	77×(75)	41×28	64
P_2	84×(80)	32×27	53
P_3	74×(55)	32×(30)	62
P_4	(82)×(70)	35×29	65
P_5	74×69	33×29	47
P_6	75×69	26×23	54
P_7	75×?	24×22	59
P_8	(70)×?	30×23	56
P_9	(70)×65	(21)×16	66
P_{10}	70×(63)	30×28	37

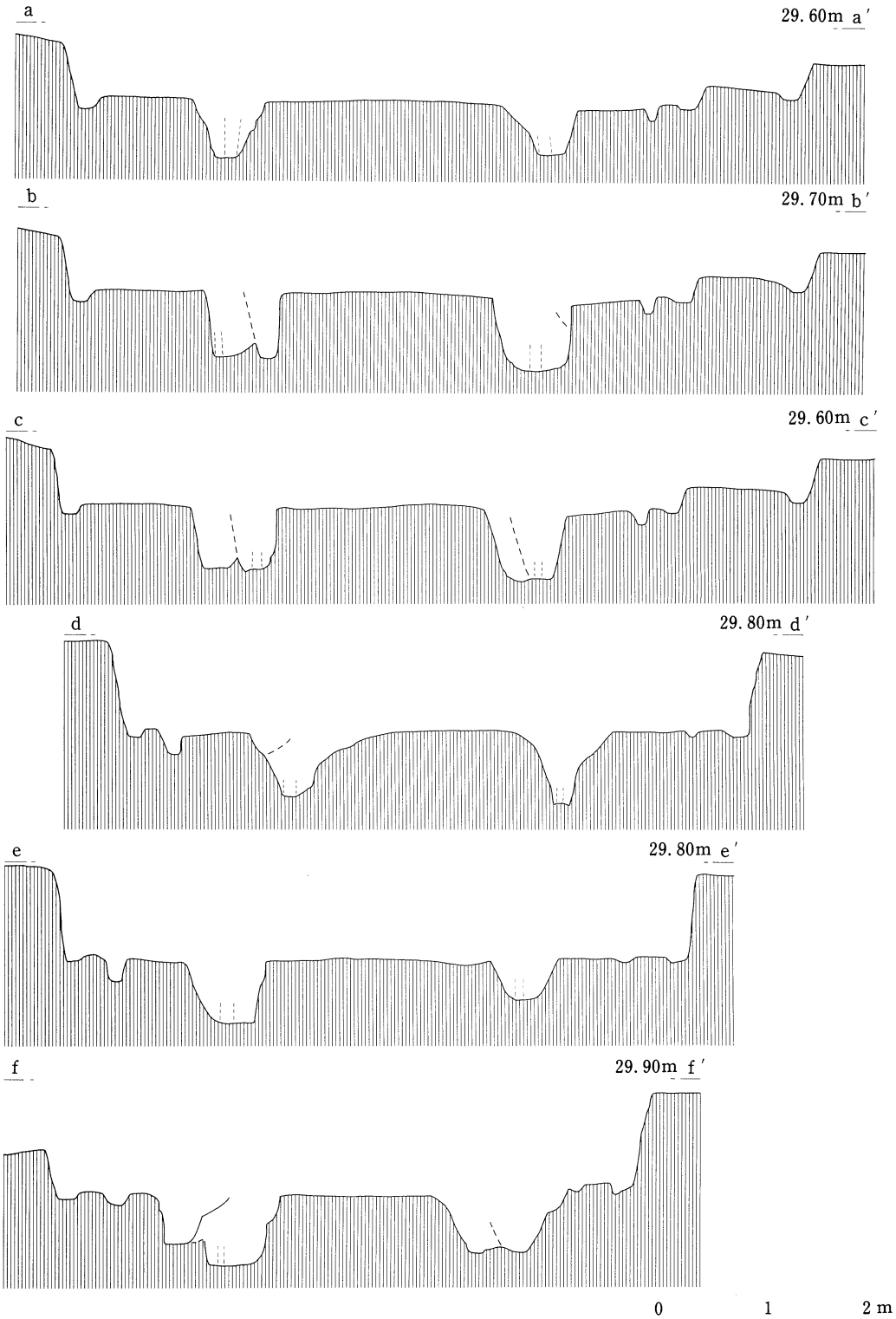
(　)は推定



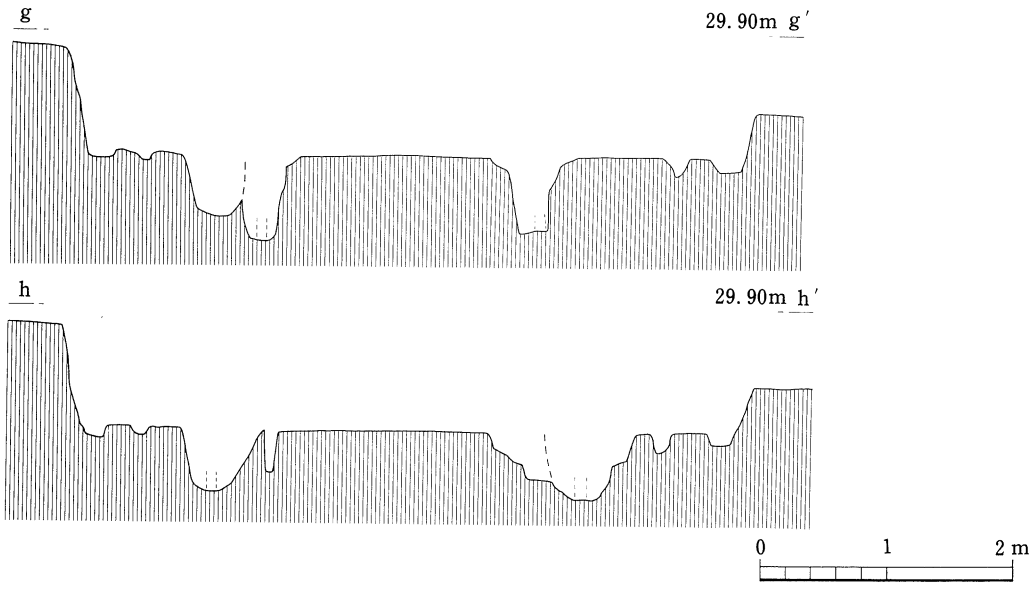
第119a b号住居跡土層説明

1. 暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。
2. 茶褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を極少量含む。
3. 暗茶褐色土。ローム粒を含む。
4. 暗褐色土。ローム土塊を少量含む。
5. 暗褐色土。ローム土塊を含む。
6. 褐色土。ローム土塊を多量に含む。
7. 暗褐色土。粘土粒を少量含む。
8. 暗褐色土(少し硬質)。粘土塊，ローム土塊，焼土粒，炭粒を少量含む。
9. 暗茶褐色土(硬質)。粘土塊を多量に含む。ローム土塊，焼土粒，炭粒を含む。
10. 暗赤褐色土(少し軟質)。焼土塊，炭粒，ローム土塊を少量含む。
11. 茶褐色土。ローム土塊を少量含む。
12. 暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を少量含む。
13. 茶褐色土。12に似る。ローム粒を多く含む。
14. 白灰色土(硬質)。白灰色粘土を多量に含む。炭粒を少量含む。
15. 褐色土。ローム土塊を多量に含む。
16. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。

第130図　第119a・b号住居跡実測図



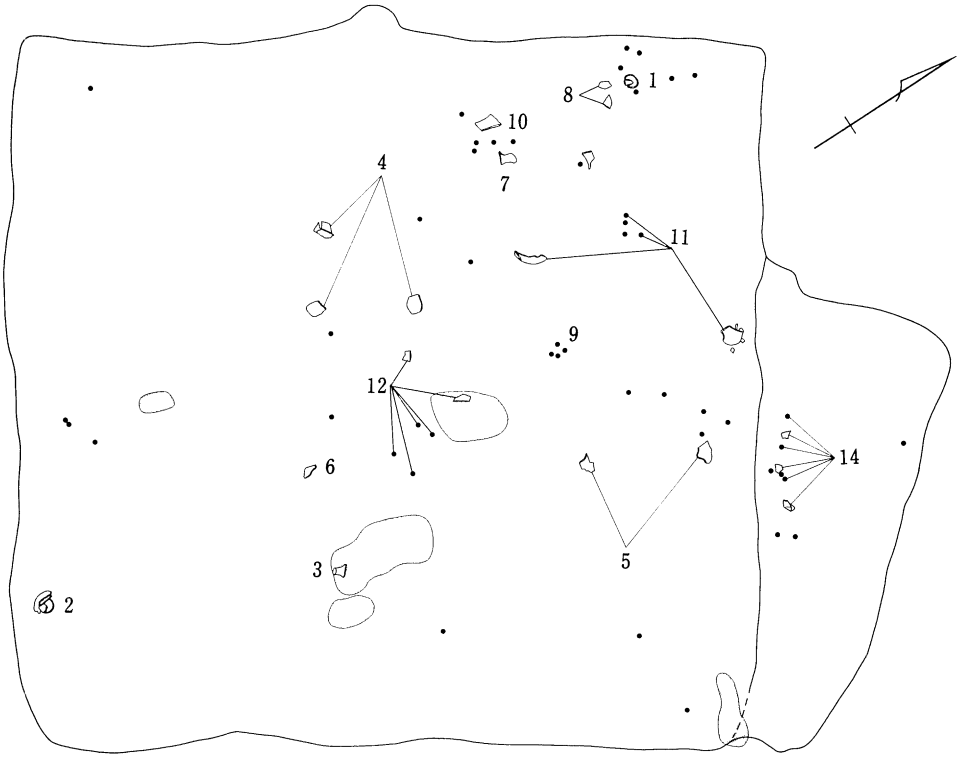
第131図　第119a・b号住居跡断面図



第132図　第119a・b号住居跡断面図(g－g′，h－h′)

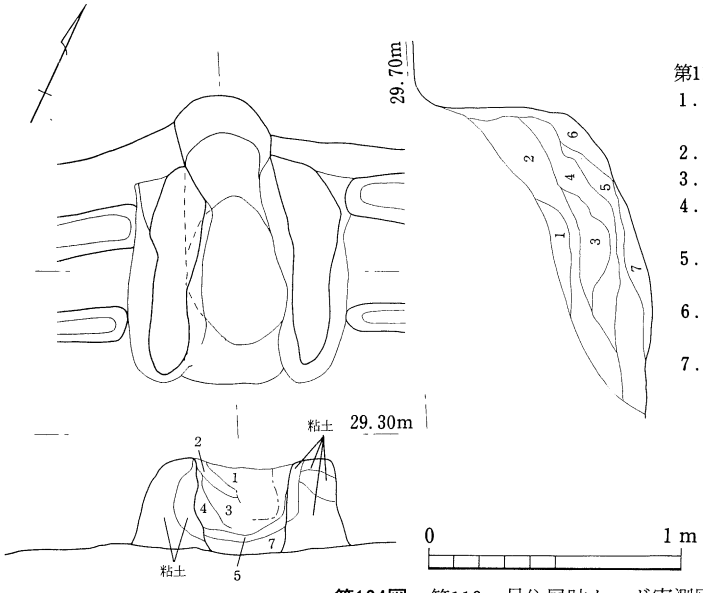
(20) 第119b号住居跡

本址は、第119a号住居跡にプランの西側半分が切られているため、東側およそ半分のみの調査であった。形体は、隅円方形と推定され、規模は、カマドに対する方向で、3.57mを測る。主軸方位も同方向をはかり、N－37°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で30cmである。床面は、大半を第119a号に切られているが、119a号より約18～20cm高いレベルである。踏み固められた面は、カマド前面に認められる。残存床面積は約1.80㎡、推定の元面積は約3.48㎡と考えられる。壁溝は存在し、幅は10～18cm、深さは6～14cmを測り、おそらく四周していたとみられる。床面内のピットは、確認できなかった。竪穴の覆土は、茶褐色土を主体に、自然堆積の様相を呈している。カマドは、北西側壁中央に設置されるが、左側半分を第119a号に切られている。袖部は、平面形がハの字状に開いて残存する。煙道部は、立ち上がりが緩やかな2段を呈し、竪穴の壁を15cm程掘り込んでいる。出土遺物は、No.13の土製支脚がカマド右側床面、No.14の甕形土器片がカマド前面床直上より検出されている。土製支脚は、上端ほど細くなる円柱状を呈し、ほぼ完形である。高さは17.6cm、上端径3.3cm、下端径11.3cm(推定)を計る。色調は暗褐色で、胎土は、砂粒を少量含んでいる。



第133図　第119ａ・ｂ号住居跡遺物出土状況図

0　1　2 m



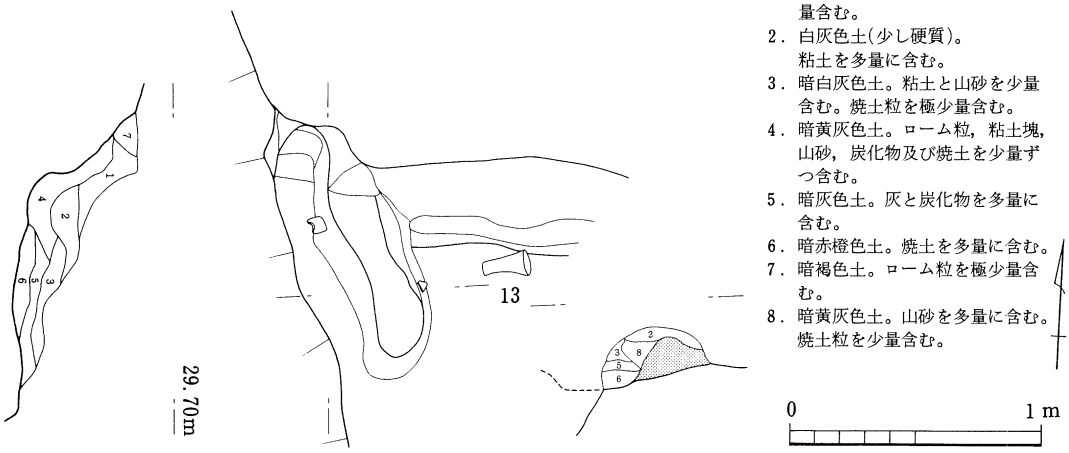
第119ａ号住居跡カマド土層説明

1．茶褐色土(硬質)。粘土と山砂を多量に含む。
2．暗黄灰色土。山砂を多量に含む。
3．暗灰色土(軟質)。山砂を多量に含む。
4．暗褐色土(少し硬質)。粘土と山砂を多量に含む。炭化物と焼土を少量含む。
5．暗赤橙色土(少し硬質)。焼土粒と炭化物を多量に含む。
6．暗褐色土。焼土粒とローム土塊を少量含む。
7．暗灰色土(軟質)。焼土粒と灰を多量に含む。炭化物を少量含む。

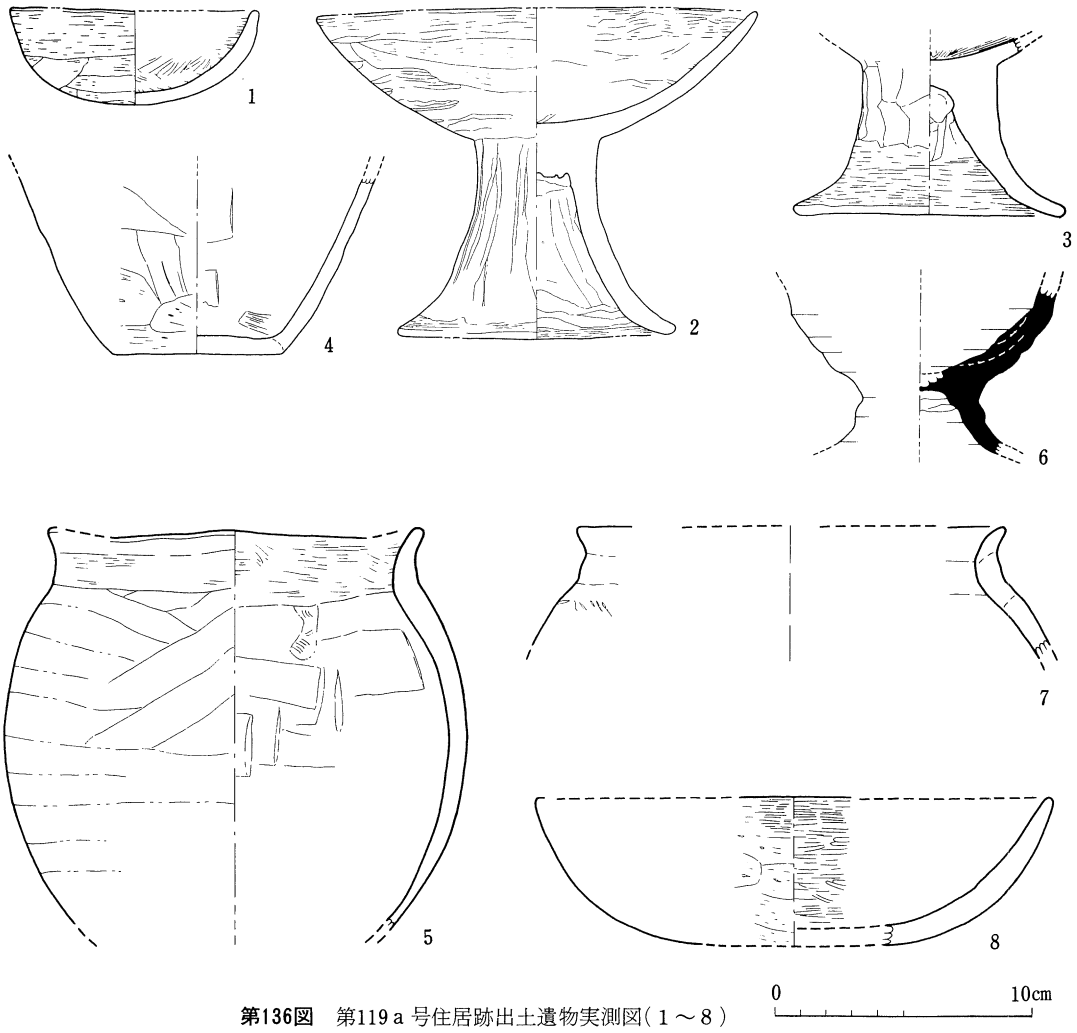
第134図　第119ａ号住居跡カマド実測図

第119ｂ号住居跡カマド土層説明

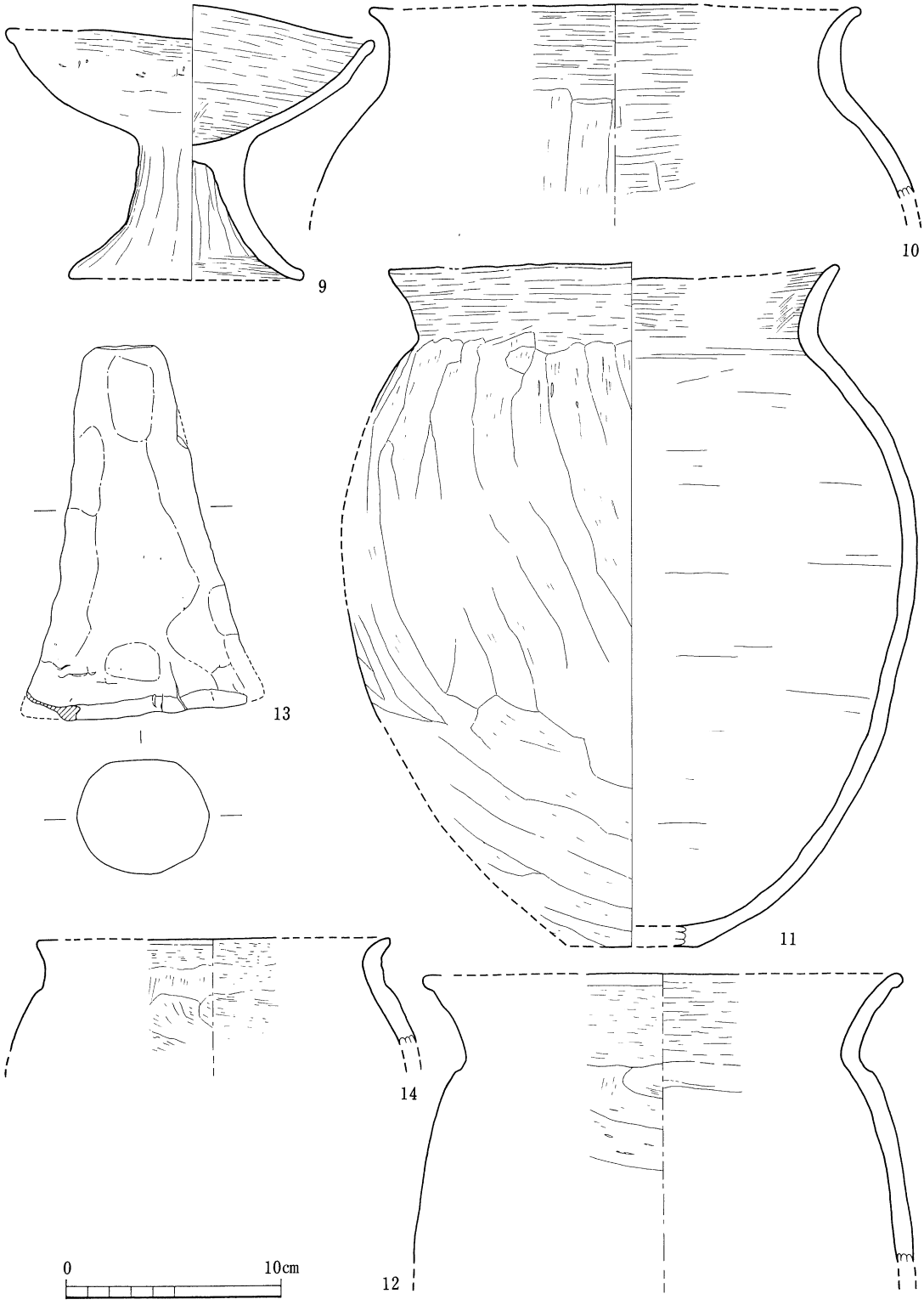
1．茶褐色土。ローム粒と山砂を少量含む。
2．白灰色土(少し硬質)。粘土を多量に含む。
3．暗白灰色土。粘土と山砂を少量含む。焼土粒を極少量含む。
4．暗黄灰色土。ローム粒，粘土塊，山砂，炭化物及び焼土を少量ずつ含む。
5．暗灰色土。灰と炭化物を多量に含む。
6．暗赤橙色土。焼土を多量に含む。
7．暗褐色土。ローム粒を極少量含む。
8．暗黄灰色土。山砂を多量に含む。焼土粒を少量含む。



第135図　第119ｂ号住居跡カマド実測図



第136図　第119ａ号住居跡出土遺物実測図(１～８)



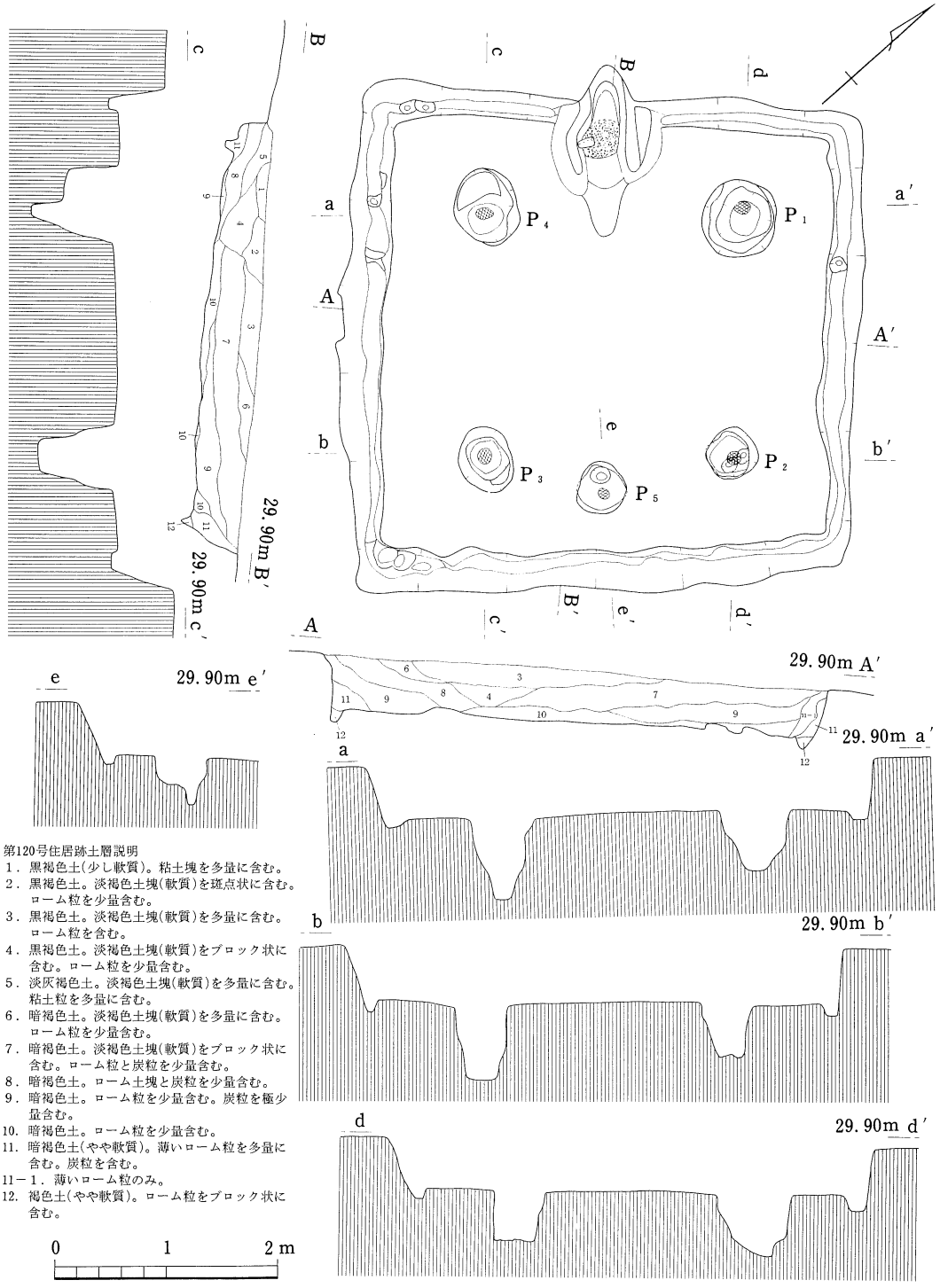
第137図　第119a・b号住居跡出土遺物実測図（9～14）

第62表　第119a・b号住居跡(No.13・14のみ第119b住居跡)出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図136 1	a.坏 b.北側隅床面直上 c.全体の70%残存	口径9.9 器高3.75	d.緻密 e.やや不良	小型で丸底を呈し、体部は浅い椀状を呈する。	口縁部～体中位=横ナデ 体部下半=ヘラケズリ 〈色調〉両面暗褐色	全面ヘラミガキ
図136 2	a.高坏 b.南側隅床面直上 c.全体の60%の残存	口径17.5 脚小径4.7 脚端部径11.1 器高13.25	1と同様	脚裾部より弧状を呈して立ち上がり、坏部は椀状に立ち上がる。	脚裾部=横ナデ 脚部=縦方向のヘラケズリの後、同方向のヘラミガキ 坏部口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ後ミガキ	脚部=ヘラケズリダシ 脚裾部=横ナデ 坏部=ヘラナデ 〈色調〉両面とも暗褐色、一部褐色
図136 3	a.高坏 b.覆土下位 c.脚部のみ	脚裾部径10.8 脚小径5.35	1と同様	脚部のみであるが、2より器高は低い。	脚裾部=横ナデ 脚上部=ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	脚裾部=横ナデ 脚上部=ヘラケズリダシ 〈色調〉褐色
図136 4	a.(甕) b.カマド前面床直 c.底部付近	底径6.7	d.小礫3㎜以下を含む e.良好	平底で、長胴と思われる。	胴下位=横方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色、一部淡褐色	底部付近=ヘラナデの後、指ナデ
図136 5	a.(甕) b.東側床面 c.全体の40%の残存	口径(15.1) 胴部最大径(18.5)	4と同様	底部を欠損、胴部最大径は中位で、口縁部は直立し、上部で小さく外反。	口縁部=横ナデ 胴部=横方向を主とするヘラケズリ 〈色調〉褐色	口縁部=横ナデ 胴部=横方向のヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉淡褐色
図136 6	a.須恵器、台付椀? b.中央ややや南床面 c.1/4残存	台基部径9.2	d.緻密、黒い粒1㎜前後を少量含む e.良好		〈色調〉暗灰色、一部灰褐色	〈色調〉灰褐色
図136 7	a.(甕) b.カマド前面床面 c.口縁部のみ1/4残存	口径(19.2)	d.砂粒を含む e.少し不良	胴部最大径は中位とみられ、口縁部はやや丸みをもって直立し、上部で細く小さく外反する。	口縁部=横ナデ 〈色調〉両面とも褐色	口縁部=横ナデ
図136 8	a.(皿) b.北側床面 c.底部欠損他は1/4の残存	口径(20.6) 器高6.0	d.砂粒を少し含む e.普通	底部は平底と考えられ、浅い椀状に立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図137 9	a.高坏 b.東側床面 c.80%残存	口径17.3 下端径10.1 器高13.0	d.緻密 e.少し良好	脚裾部はあまり開かず、上部は柱状を呈し、坏部は椀状で、口唇部は少し厚い。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 脚部=ヘラケズリ 〈色調〉褐色	坏全面=ヘラナデ 脚部=ヘラケズリダシ 脚裾部=横ナデ 〈色調〉暗褐色・褐色
図137 10	a.(甕) b.カマド右前床面 c.口縁部付近1/4残存	口径23.2 口縁部径21.4	d.砂粒を含む e.良好	大型で、胴部は球状を呈し、口縁部は直立ぎみで、口唇部はわずかに外反。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉暗褐色
図137 11	a.甕 b.東側床面 c.60%残存	口径20.85 胴大径26.55 底径(6.0) 器高32.2	d.砂粒を少し含む e.やや不良	小さめの底部で、胴部は球状にちかく、最大径は胴部やや上位、口縁部は、くの字状に外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 下位=斜め方向 〈色調〉黒色、淡褐色	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉暗褐色、淡褐色、一部黒褐色
図137 12	a.(甕) b.床面中央 c.1/3の残存	口径(22.6) 口頸部径(18.6)	d.砂粒を含む e.少し良好	長胴を呈すると考えられ、口縁部は外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部=横ナデ 胴部=指ナデ 〈色調〉褐色
図137 14	a.(甕) b.床面中央付近 c.1/4残存	口径(16.5)	d.砂粒を含む e.普通	口縁部付近の破片で、短く直立した後に、小さく外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、淡茶褐色	口縁部=横ナデ 胴部=指ナデ 〈色調〉淡褐色

(21) 第120号住居跡

調査地区の北側で、北に約15mで小谷に傾斜する地点に位置する。第122号住居跡が北東約13mに所在する。また、覆土内に黒褐色土を主体として、粘土塊とローム粒を含む土坑状の落ち込みが切り込んでいる。竪穴の平面形体は、不整方形で、南西と南東側の壁は、わずかに胴張りである。規模は、長軸4.70m、短軸4.60mを測る。主軸方位は短軸方向をはかり、N－46°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で49cmである。床面はほぼ平坦で、踏み固められた面



第120号住居跡土層説明

1．黒褐色土(少し軟質)。粘土塊を多量に含む。
2．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。ローム粒を少量含む。
3．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を含む。
4．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を少量含む。
5．淡灰褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。粘土粒を多量に含む。
6．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を少量含む。
7．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒と炭粒を少量含む。
8．暗褐色土。ローム土塊と炭粒を少量含む。
9．暗褐色土。ローム粒を少量含む。炭粒を極少量含む。
10．暗褐色土。ローム粒を少量含む。
11．暗褐色土(やや軟質)。薄いローム粒を多量に含む。炭粒を含む。
11－1．薄いローム粒のみ。
12．褐色土(やや軟質)。ローム粒をブロック状に含む。

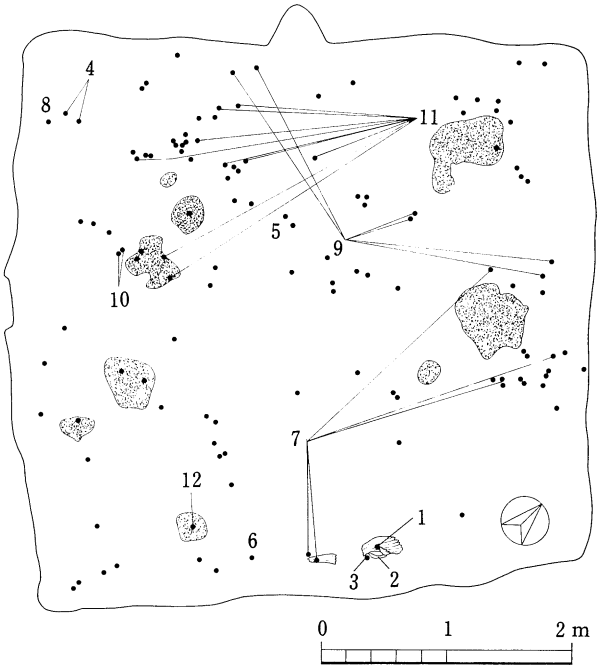
第138図　第120号住居跡実測図

は、カマド前面から床面中央及びP_5付近まで広がっている。床面積は約17.45㎡である。壁溝は四周し、幅2～20㎝、深さ6～15㎝を測る。壁溝内のピットは、若干認められる。床面内のピットは5本存在し、P_1～P_4は主柱穴と考えられ、それぞれ柱のあたり痕跡が認められる。各々の間隔は、P_1～P_2が2.27m、P_2～P_3が2.25m、P_3～P_4が2.20m、P_4～P_1が2.32mである。

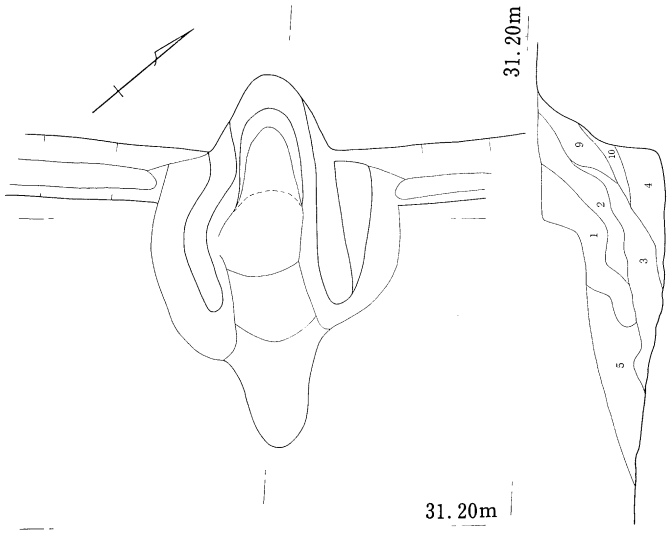
また、P_4は、立ち上がりが2段になっている。P_5は、カマド反対側

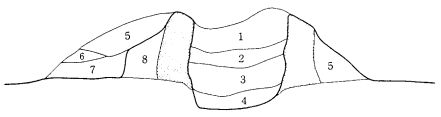
第63表　第120号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	70×66	31×27	45
P_2	47×47	35×33	55
P_3	61×48	28×26	69
P_4	71×58	32×27	77
P_5	48×45	48×45 18×15 10×7	24 42



第139図　第120号住居跡遺物出土状況

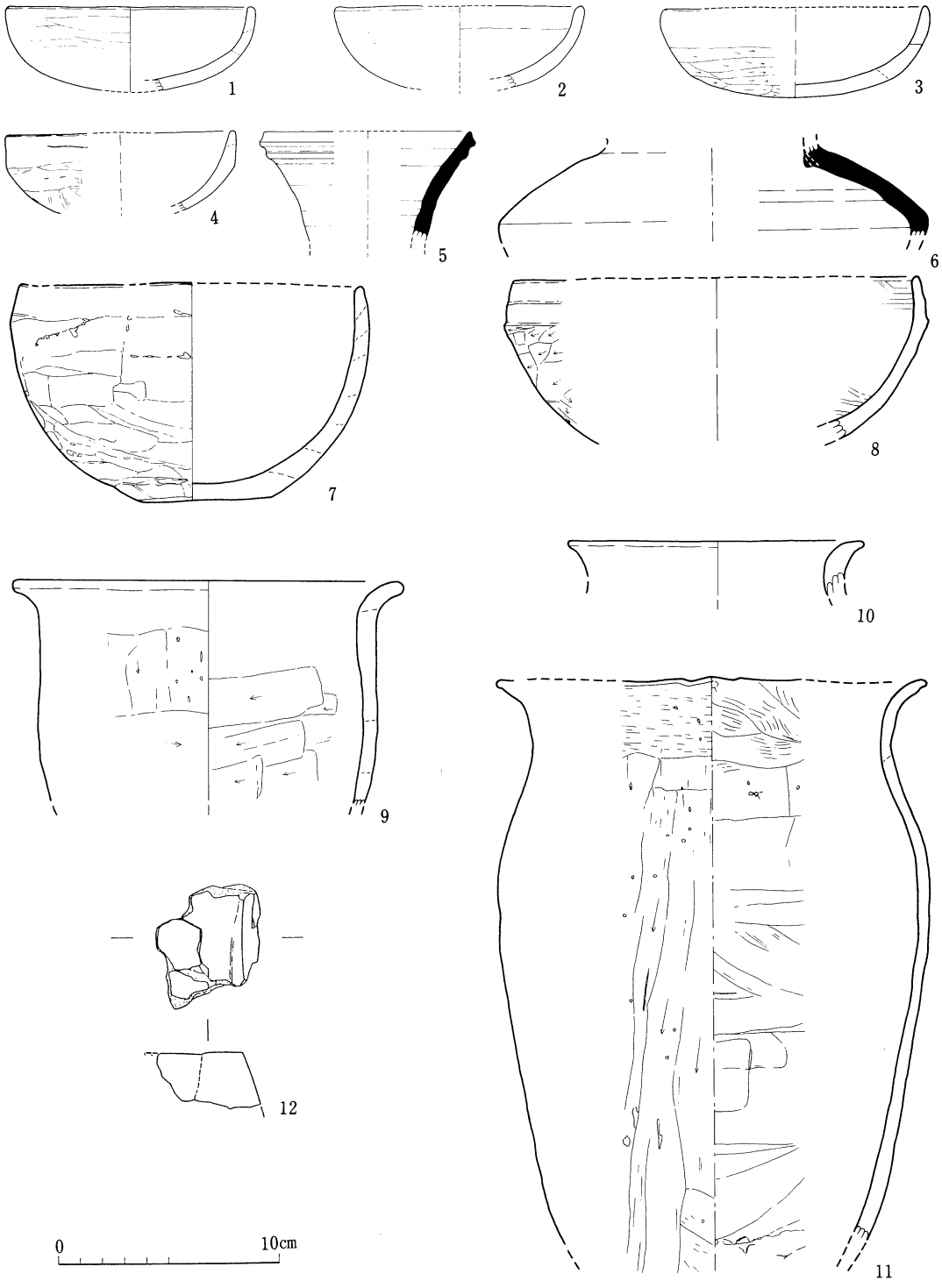




第120号住居跡カマド土層説明

1．暗黄灰色土(少し軟質)。山砂を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
2．暗赤橙色土(少し軟質)。焼土塊と山砂を多量に含む。
3．暗灰色土(少し軟質)。灰と炭化物を多量に含む。焼土粒と暗灰色土及び山砂を少量含む。
4．暗赤褐色土。焼土と炭化物と山砂及び粘土を多量に含む。
5．暗褐色土(少し軟質)。山砂を少量含む。
6．明赤橙色土。山砂が焼土化。
7．黄灰色土(やや軟質)。山砂。
8．暗灰色土(やや軟質)。山砂を多量に含む。
9．暗黄灰色土。山砂を多量に含む。炭化物と焼土粒を極少量含む。
10．白灰色土。粘土と山砂を多量に含む。

第140図　第120号住居跡カマド実測図



第141図　第120号住居跡出土遺物実測図

の壁近くに位置し、立ち上がりが2段で、床面中央寄りが深くなっている。竪穴の覆土は、上部が土坑状の落ち込みにより切られているが、自然堆積と考えられる。カマドは、北西側壁の中央に設置され、煙道部は、竪穴の壁を約30cm掘り込み、立ち上がりは2段を呈する。出土遺物は、覆土中より多く検出され、また、下位には、焼土の流れ込みが認められる。

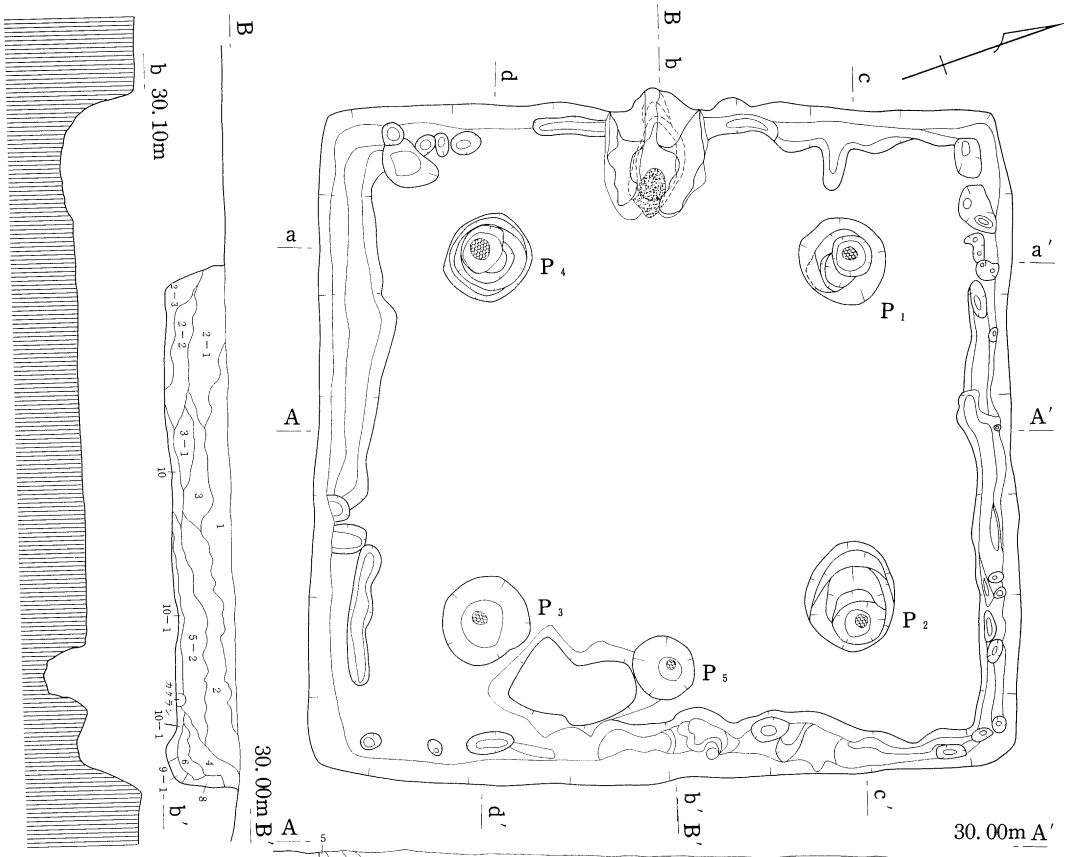
第64表　第120号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図141 1	a.坏 b.覆土中位 c.全体の3/4残存	口径11.3 器高(3.9)	d.緻密 e.やや不良	丸底で、浅い椀状を呈する。	全面=横方向を主とするヘラケズリ後ヘラナデ 〈色調〉褐色	全面=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図141 2	a.(坏) b.覆土中位 c.底部欠損50%残存	口径(11.3)	d.砂粒を少量含む e.良好	丸底と考えられ、体部は浅い椀状を呈する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉黒色、褐色、暗褐色	全面=ヘラミガキ 〈色調〉黒色、黒褐色
図141 3	a.(坏) b.覆土中位 c.全体の1/3残存	口径(11.9) 器高4.1	2と同様	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、暗褐色	全面=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図141 4	a.(坏) b.覆土中位 c.全体の1/4残存	口径(10.4)	2と同様	3に似るが、口縁部にわずかに稜がみられる。	3と同様	3と同様
図141 5	a.須恵器、長頸壺 b.覆土下位 c.口縁～頸部片1/3残存	口径(9.4)	d.砂粒を少し含む e.良好	ゆるやかな弧を描いて、開きぎみに立ち上がり、口縁部は沈線が入り、口唇部は三角形状を呈する。	〈色調〉黒色、黄褐色、緑色	自然釉がかかる 〈色調〉灰色
図141 6	a.須恵器、長頸壺 b.床面直上 c.体部付近1/2強残存	体最大径19.5	d.緻密 e.良好	球状に強く張った体部をもち、体部最大径は、上位と考えられる。	自然釉がかかる 〈色調〉黄緑色	〈色調〉灰色
図141 7	a.鉢 b.覆土下位 c.完形	口径15.05 器高9.6	d.砂粒を少量含む e.普通	平底で、体部は球状を呈し、口縁部は内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色、黒褐色	全面=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色、黒褐色
図141 8	a.(鉢) b.覆土下位 c.全体の1/6残存	口径(18.35)	d.砂粒を含む e.良好	体部は球状に立ち上がり、口縁部は直立し、稜を2段もつ。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、赤褐色	口縁部=横ナデ 〈色調〉淡褐色、黒色
図141 9	a.(甕) b.床面直上 c.全体の1/2残存	口径(17.8) 胴部最大径(15.5)	d.小礫3mm以下を含む e.普通	最大径を胴上部にもち、胴上位はやや直立し、口縁は外反。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図141 10	a.(甕) b.覆土中位 c.全体の1/4残存	口径(13.4)	d.砂粒を含む e.普通	小さく外反する口縁部の破片で、口唇部を細くつまんでいる。	口縁部=横ナデ 〈色調〉両面とも暗褐色	口縁部=横ナデ
図141 11	a.(甕) b.床面直上 c.底部欠損全体の1/4残存	口径(19.3) 胴部最大径(19.4)	d.小礫2mm以下を多く含む e.普通	胴部最大径は上位に有り、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色、一部黒褐色、淡褐色	口縁部=斜め方向指ナデ 胴部=横方向のヘラナデの後、指ナデ

No.12は砥石で、残存幅3.8cm、長さ5.0cm、厚さ2.6cmを計り、わずかしか残っていない。中央が細く摩りこまれた方柱形で、色調は白灰褐色を呈し、石質は凝灰質砂岩である。検出時は、3点に分かれていた。

(22) 第121号住居跡

調査地区のほぼ中央に位置し、第126号住居跡が南東約7mに所在する。平面形体は、隅円

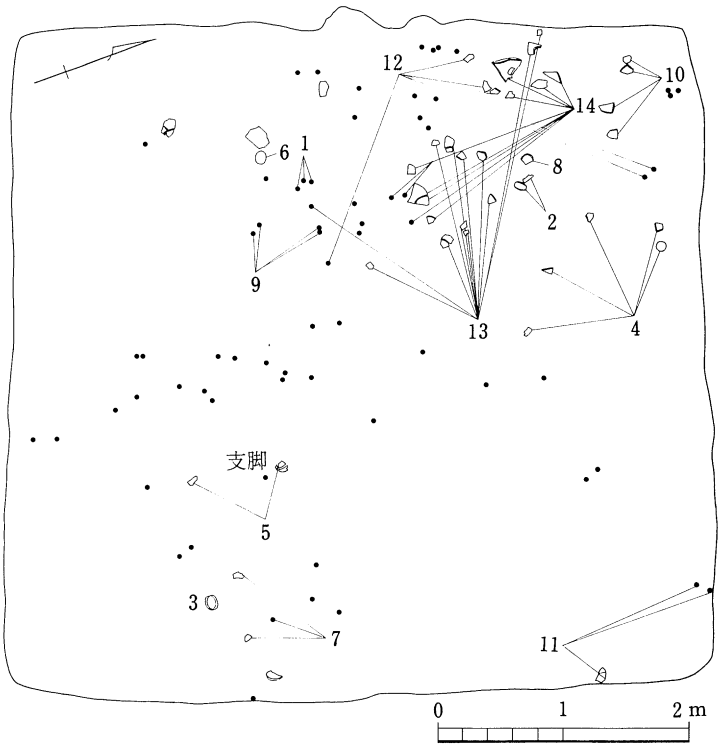


第121号住居跡土層説明

1．暗褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊を少量含む。粘土塊を極少量含む。
2．暗褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を少量含む。
2－1．粘土粒を少量含む。
2－2．暗く、粘土粒を含む。
2－3．少し明るく硬質で、粘土粒を含む。
3．暗褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊と粘土塊を少量含む。
3－1．淡褐色土塊が少量。暗い。
4．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)とローム粒及び粘土粒を少量含む。
4－1．少し軟質。
5．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を含む。
5－1．少し硬質。
5－2．ローム粒を極少量含む。
6．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を極少量含む。
7．暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多量に含む。粘土塊を含む。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。
8．褐色土(少し軟質)。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を含む。
9．褐色土(少し軟質)。ローム粒を含む。
9－1．ローム粒を多量に含む。少し暗い。
10．褐色土(硬質)。ローム土塊を含む。
10－1．ローム土塊を少量含む。

第142図　第121号住居跡実測図

方形で、東側壁がわずかに胴張りぎみである。規模は、長軸5.62m、短軸5.42mを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、N－72°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で56cmである。床面は、少し凹凸がみられ、南東側床面のP_5とP_2の間に、2～7cmの高い部分が認められる。特に踏み固められてはいない。床面積は約26.42㎡である。壁溝は、部分的に途切れており、小ピットも存在する。最大幅は、33cm、最深部は14cmを測る。



第143図　第121号住居跡遺物出土状況

床面内のピットは5本検出され、P_1～P_4は、主柱穴と考えられる。各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.94m、P_2～P_3が3.05m、P_3～P_4が2.95m、P_4～P_1が2.95mである。5本とも下端に柱のあたり痕跡が認められる。P_5は、カマドの反対側床面の壁近くに存在し、出入口相当施設用のピットと考えられる。竪穴の覆土は、自然堆積である。カマドは、西側壁のほぼ中央に位置し、燃焼部の下位最大幅は、約39cmと考えられ、煙道部は2段の立ち上がりで、竪穴の壁を約20cm掘り込んでいる。出土遺物は、覆土中及び床面より多く検出されている。特に、北側床面とカマド付近より多い。No.15は、覆土内、No.16は、南側床面からの出土である。

No.15は砥石で、残存長さ7.5cm、最大幅6.6cm、厚さ7.5cmを計る。石質は、凝灰質砂岩で、色調は白灰褐色を呈し、各面とも使用痕が認められる。

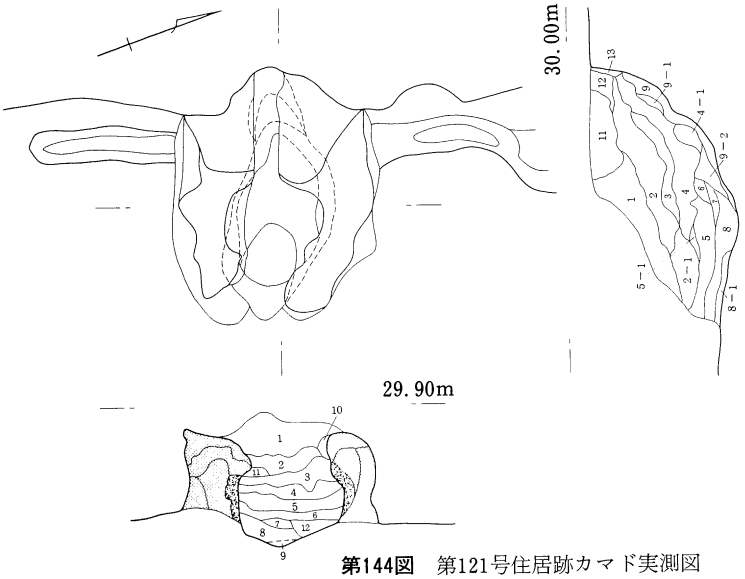
No.16は、土製支脚で、上端ほど細くなる円柱状を呈し、上部の破片と考えられる。色調は、暗褐色を呈する。

第65表　第121号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	71×65	24×24	60
P_2	89×72	22×21	58
P_3	73×71	38×35	53
P_4	71×65	33×28	57
P_5	51×49	20×18	33

第66表　第121号住居跡出土遺物観察表(1)

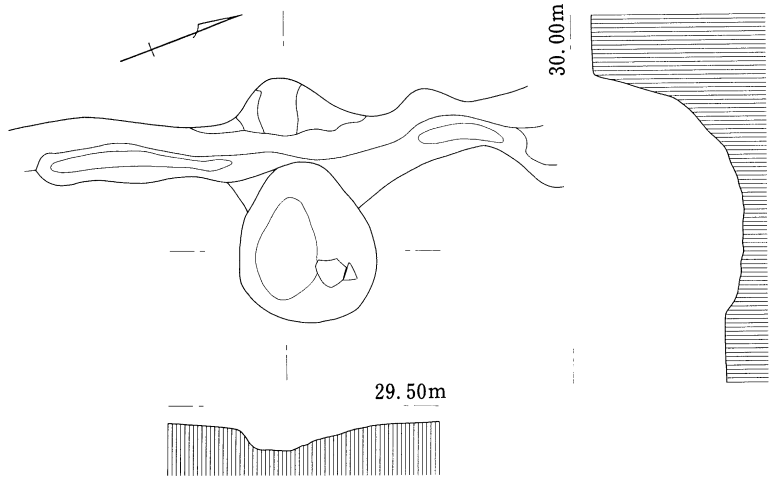
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図146 1	a.坏 b.カマド前面床直 c.全体の1/8の残存	口径(12.0) 体最大径(3.8)	d.緻密 e.少し不良	少し浅い椀状を呈する体部をもち、口縁部は明確な稜を有し、直立する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	全面=ヘラミガキ(横方向) 口縁部に横方向の沈線をもつ 〈色調〉暗褐色



第121号住居跡カマド土層説明

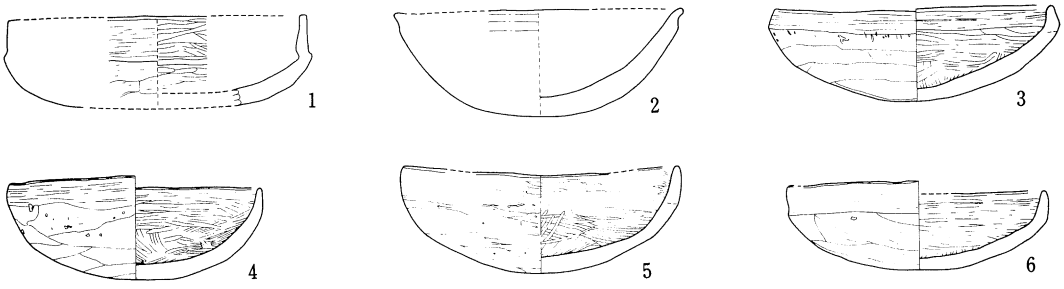
1．暗黄褐色土(硬質)。粘土塊とローム土塊を多量に含む。
2．暗黄褐色土。粘土塊と山砂塊をブロック状に含む。
2－1．山砂塊の量が少ない。
3．明黒褐色土。粘土塊と山砂塊を多量に含む。焼土塊を含む。
4．明黒褐色土。粘土塊と山砂塊と焼土粒を多量に含む。
4－1．山砂塊の量が少ない。
5．黒褐色土(少し軟質)。焼土粒と粘土塊及びローム土塊を多量に含む。
5－1．焼土粒が多い。
6．黒褐色土(少し軟質)。焼土粒とローム土塊を多量に含む。粘土塊を少量含む。
7．焼土化した粘土塊。
8．黒褐色土(軟質)。ローム粒と焼土粒を少量含む。
8－1．焼土粒の量が多い。
9．暗赤褐色土。焼土とローム土塊がブロック状に混入する。
9－1．粘土を少量含む。
9－2．明るい。
10．暗く、少し焼土化したローム土塊。
11．白色粘土。山砂を少量含む。
12．暗黄褐色土。粘土塊と山砂塊を多量に含む。焼土化した粘土塊を含む。
13．軟質のローム土で、少し焼土化している。

第144図　第121号住居跡カマド実測図

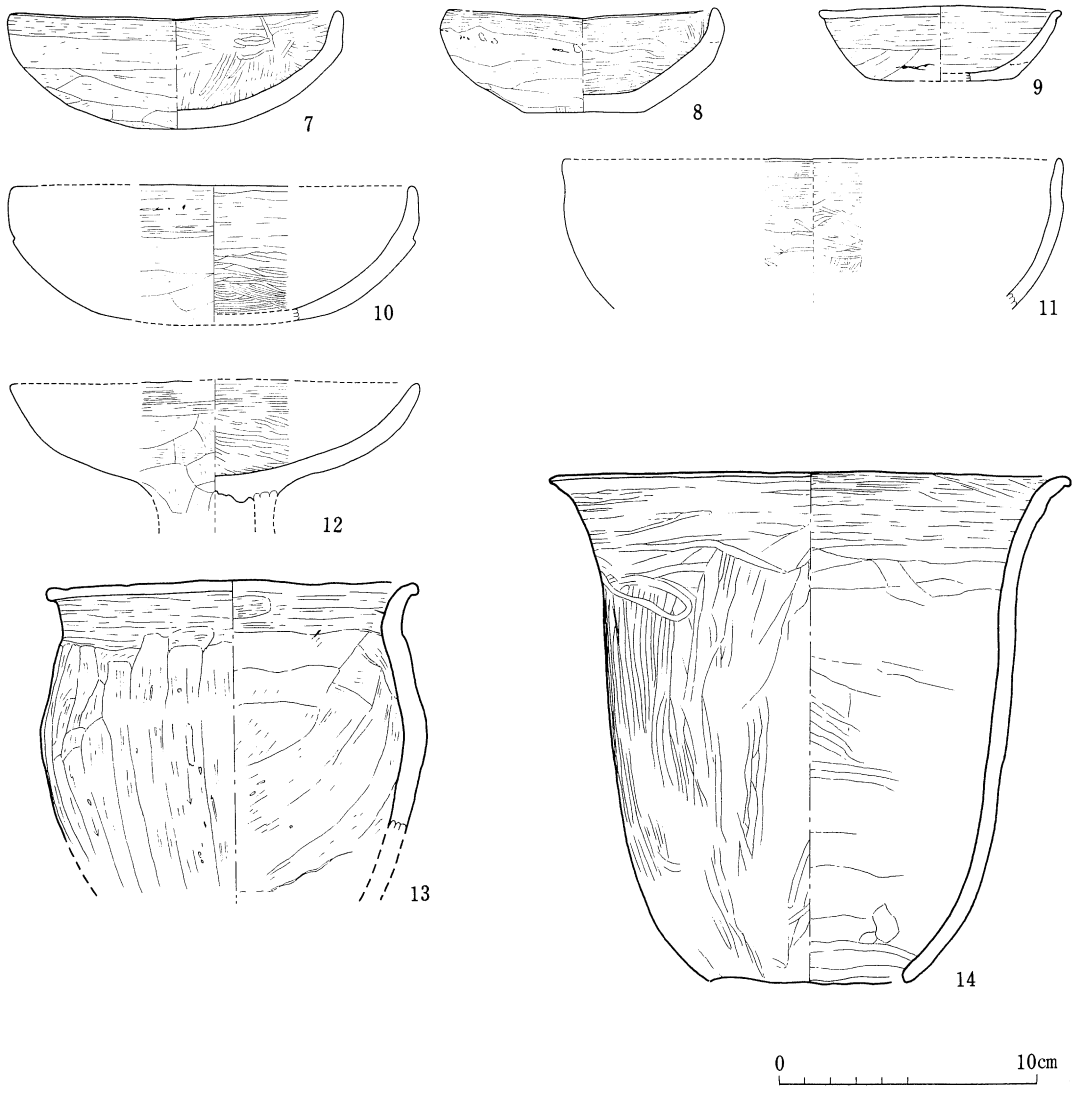


（上第144図も同縮尺）

第145図　第121号住居跡カマド掘り方実測図



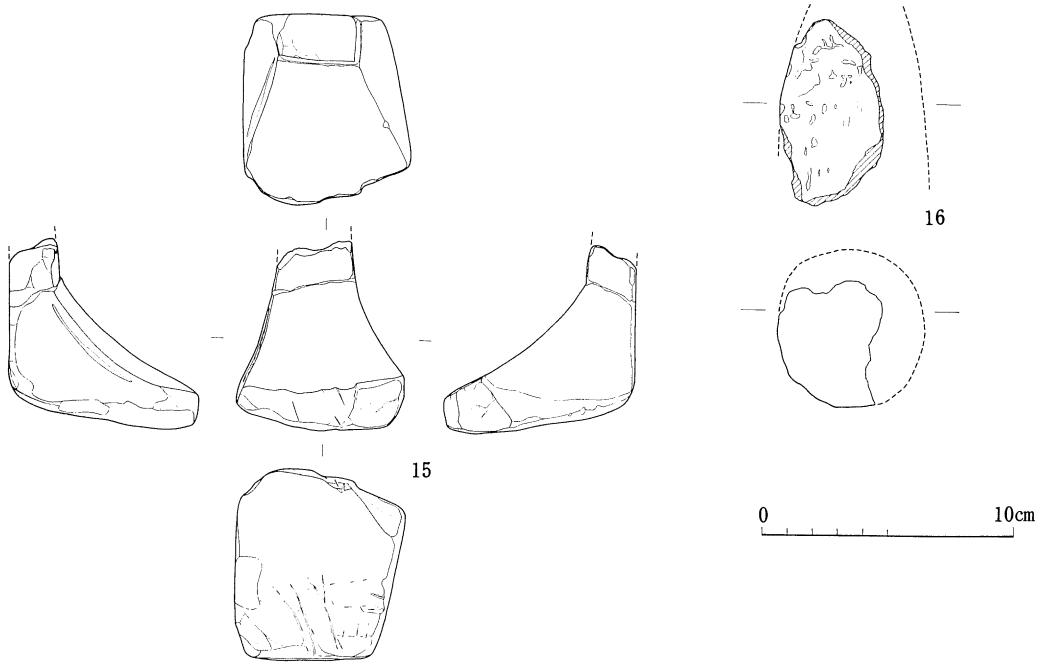
第146図　第121号住居跡出土遺物実測図(１～６)



第147図　第121号住居跡出土遺物実測図（７～14）

第67表　第121号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図146 2	a.(坏) b.カマド前 面床面直上 c.全体の10 %の残存	口径(11.55) 器高(4.3)	d.緻密 e.不良	丸底で、椀状を呈し、口縁部付近はわずかに外反する。	口縁部=横ナデ 両面とも摩耗多く不明 〈色調〉両面とも褐色	
図146 3	a.坏 b.東側床面 c.完形	口径11.1 口縁部径11.6 器高3.7	d.緻密 e.少し不良	丸底で、椀状を呈し、口縁部は小さく内椀ぎみに立ち上がる。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	全面=横方向のヘラミガキ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色
図146 4	a.坏 b.北側床面 c.ほぼ完形	口径10.1 器高4.1	d.緻密 e.少し不良	丸底で、浅い椀状を呈し、口縁部は小さく丸みをもって直立する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡褐色	全面=横方向のヘラミガキ
図146 5	a.坏 b.東側床面 c.全体の 1/3	口径(11.1) 器高3.9	d.小礫２mm以下を含む e.普通	丸底で、浅い椀状を呈し、口縁部は丸みをもって直立する。	口縁部=横ナデ 体部=横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、一部淡褐色	全面=ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図146 6	a.坏 b.カマド前 面床直 c.完形	口径10.35 器高3.5	d.緻密 e.少し不良	5と同様	5と同様 〈色調〉両面とも淡褐色、一部黒褐色	5と同様
図147 7	a.坏 b.東側床面 c.全体の 2/3	口径13.3 器高4.35	d.砂粒を含む e.やや不良	5と同様	5と同様 〈色調〉褐色、一部黒褐色	5と同様 〈色調〉黒褐色、一部褐色



第148図　第121号住居跡出土遺物実測図(15･16)

第68表　第121号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	72×68	24×24	48
P2	88×72	22×19	55
P3	73×70	38×33	50
P4	70×65	33×25	57
P5	51×48	20×18	33

第69表　第121号住居跡出土遺物観察表(３)

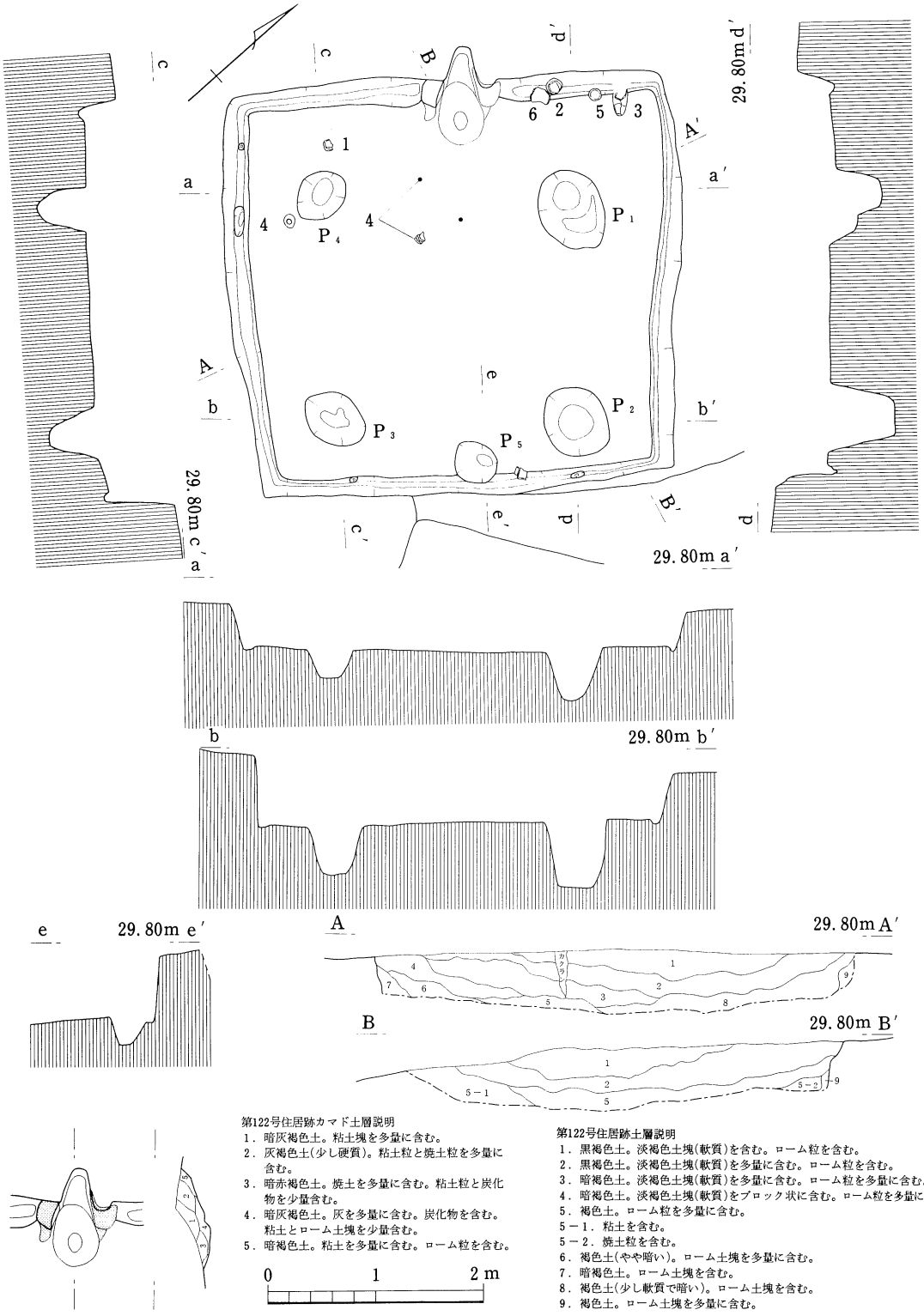
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図147 8	a.坏 b.カマド前面床直 c.全体の1/2	口径(10.8) 器高3.7 底径4.85	d.緻密 e.少し不良	平底で小型を呈し、体部は椀状で、口縁部はやや内傾する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	5と同様 〈色調〉淡褐色
図147 9	a.坏 b.カマド前面床直 c.全体の1/3	口径(9.7) 底径8.9 器高2.95	d.緻密 e.普通	平底で小型を呈し、直線的に開いて立ち上がり、口唇部はつまみ上げられる。	口縁部～体中位=横ナデ 体下半=ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗橙褐色 一部暗褐色	全面=ナデ
図147 10	a.鉢 b.カマド右側床面 c.底部欠損 全体の1/4	口径(16.15) 器高5.6	d.緻密 e.やや不良	椀状に立ち上がり、口縁部は稜をもち、丸みをもって直立する。	口縁部=横ナデ、粘土接合痕一部有り 体部=ヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡褐色	口縁部=横ナデ 体部=ヘラミガキ
図147 11	a.(鉢) b.北東隅床面直上 c.全体の1/6	口径(19.9)	d.緻密 e.普通	椀状に立ち上がり、口縁部は直立する。底部を欠損する。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ、一部ミガキ 〈色調〉暗褐色、一部黒褐色、一部褐色	10と同様 〈色調〉暗褐色、一部褐色
図147 12	a.(高坏) b.カマド右側床面 c.坏部のみ1/2残存	口径(16.3)	d.砂粒を少量含む e.少し不良	浅い椀状を呈する高坏の坏部。	口縁部=横ナデ 体部=ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色	10と同様 〈色調〉暗褐色、一部褐色
図147 13	a.(甕) b.カマド右側床面 c.胴下半～底部欠損	口径(15.0) 体部最大径(14.7)	d.小礫2mm以下を含む e.普通	やや小型で、胴部は球状で、胴部最大径は上位に有り、口縁部は小さく外反し、口唇部は微厚。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ、摩耗が多い 〈色調〉暗茶褐色、一部黒褐色	口縁部=横ナデ 胴部=横方向のヘラナデ 〈色調〉淡茶褐色、一部暗褐色
図147 14	a.(甑) b.カマド右側床面 c.全体の70%の残存	口径20.4 器高20.3 孔径7.9	d.緻密 e.普通	小型で、胴部は下位が弧状、上位は直線的に開く、口縁部はゆるやかに外反し、口唇部はつまみ上げている。	口縁部=横方向のヘラミガキ 胴部=縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡褐色、一部黒褐色	口縁部=横方向のヘラナデ 胴部=横方向のヘラナデ

(23) 第122住居跡

調査地区の北側に位置し、北西に約３ｍで北側の小谷に傾斜する地点である。第123号住居跡が南東側で接する。また、第103号炉穴を北東側で切っている。平面形体は、不整方形を呈し、南西壁がやや胴張りぎみである。規模は、長軸4.25m、短軸3.89mを測り、主軸方位は、短軸をはかり、Ｎ－52°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、最大で60cmである。床面の踏み固められた面は、カマド前面から床面中央およびP_5付近まで広がる。床面積は、約14.06㎡である。壁溝は、四周し、幅は、３～12cm、深さは、５～10cmを測る。床面内のピットは、５本検出され、P_1～P_4は、主柱穴と考えられる。各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.10m、P_2～P_3が2.23m、P_3～P_4が2.13m、P_4～P_1が2.25mである。４本とも位置が少し壁に寄っている。P_1は、立ち上がりが２段を呈する。また、下端の柱のあたり痕跡は不明である。P_5は、カマド反対側の壁寄りの床面に位置し、出入口相当施設用のピットと考えられる。竪穴の覆土は、黒褐色土と暗褐色土が主体で、下層は、特にローム土塊を多く含み、人為的に埋めもどされた可能性が有る。カマドは、北西側壁中央やや北寄りに設置され、やや保存状況が悪い。煙道部は、竪穴の壁を約30cm掘り込み、立ち上がりは、緩やかである。

第70表　第122号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	78×59	27×25	42
P_2	69×57	32×31	62
P_3	63×47	28×19	46
P_4	53×42	26×17	45
P_5	44×38	16×10	26



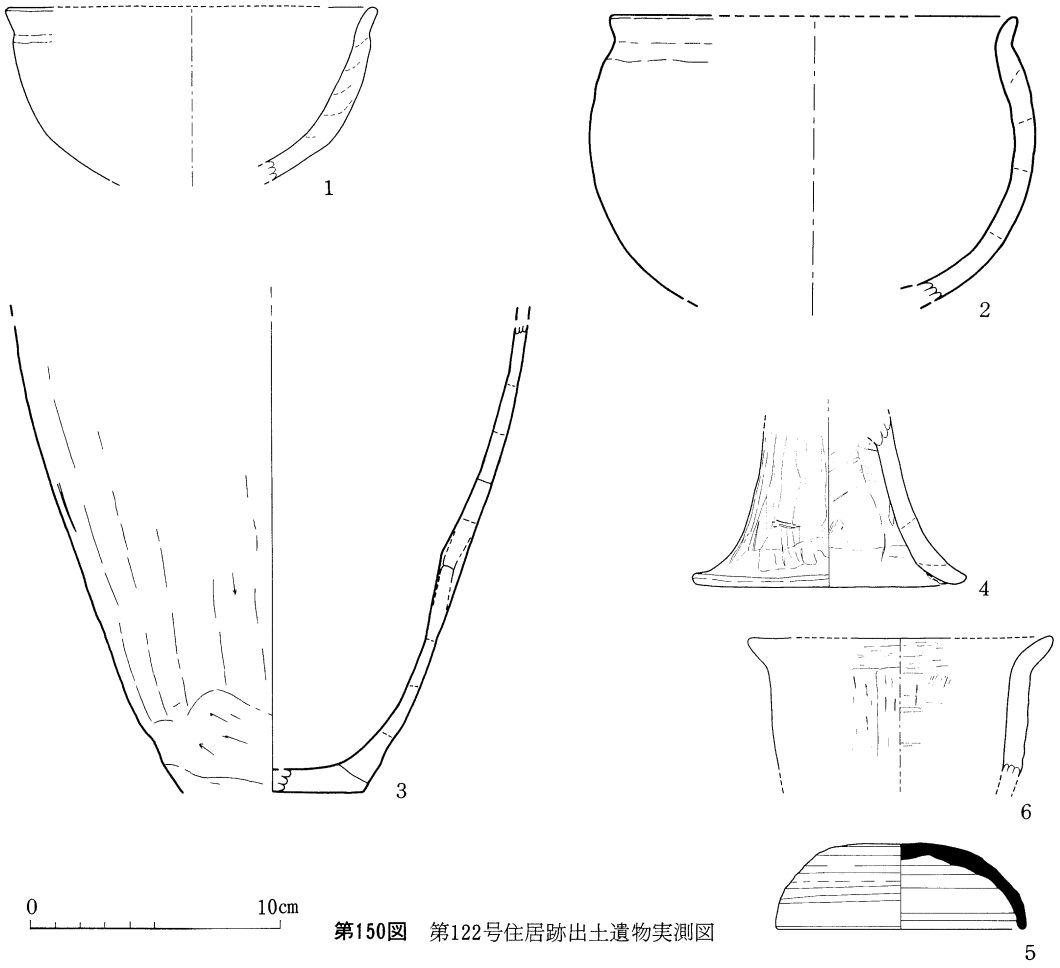
第122号住居跡カマド土層説明

1．暗灰褐色土。粘土塊を多量に含む。
2．灰褐色土(少し硬質)。粘土粒と焼土粒を多量に含む。
3．暗赤褐色土。焼土を多量に含む。粘土粒と炭化物を少量含む。
4．暗灰褐色土。灰を多量に含む。炭化物を含む。粘土とローム土塊を少量含む。
5．暗褐色土。粘土を多量に含む。ローム粒を含む。

第122号住居跡土層説明

1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。ローム粒を含む。
2．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を含む。
3．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を多量に含む。
4．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を多量に含む。
5．褐色土。ローム粒を多量に含む。
5－1．粘土を含む。
5－2．焼土粒を含む。
6．褐色土(やや暗い)。ローム土塊を多量に含む。
7．暗褐色土。ローム土塊を含む。
8．褐色土(少し軟質で暗い)。ローム土塊を含む。
9．褐色土。ローム土塊を多量に含む。

第149図　第122号住居跡実測図及びカマド実測図



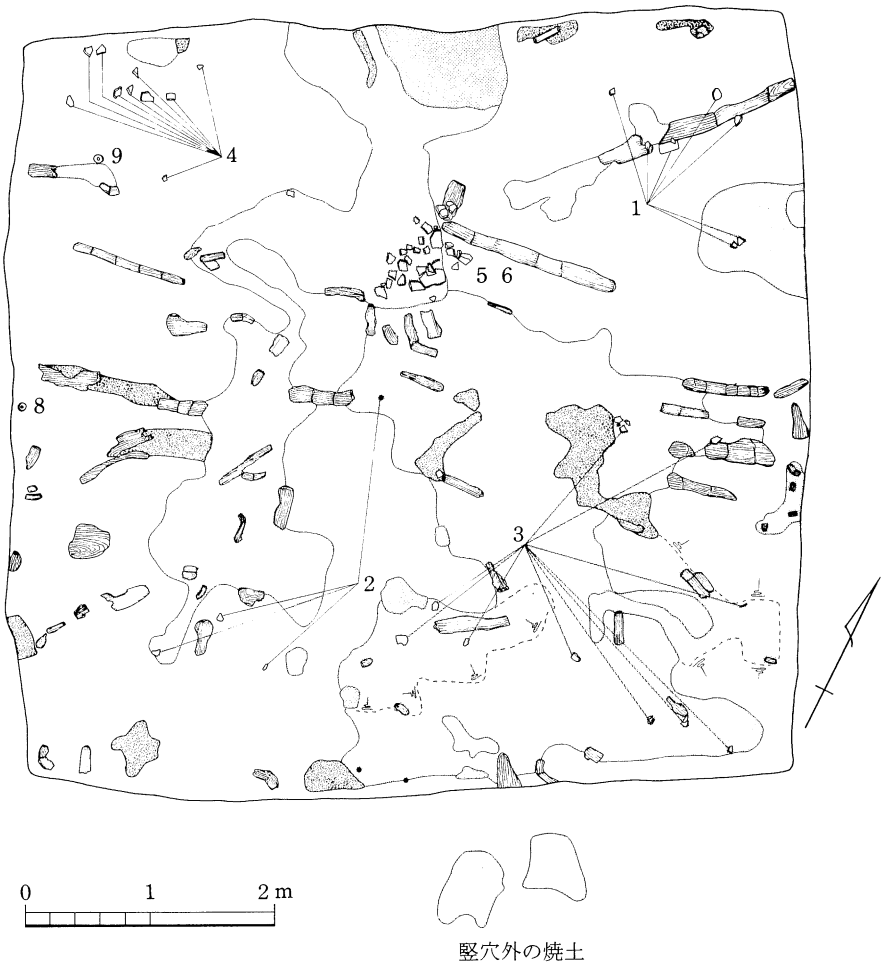
第150図　第122号住居跡出土遺物実測図

第71表　第122号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図150 1	a.(鉢) b.カマド左 c.底部欠損 全体の1/4	口径(14.9)	d.緻密 e.普通	大型の椀状を呈し、口縁部は、少し屈曲して、小さく外反する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラミガキ 摩耗が多い。 〈色調〉暗褐色一部黒色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ(横及び斜め方向) 〈色調〉黒色
図150 2	a.(鉢) b.カマド右 c.底部欠損 全体の1/4	口径(16.1) 体部最大径(17.6)	d.砂粒を含む e.普通	体部は、球状を呈し、口縁部は、屈曲してわずかに外反する。	口縁部＝横ナデ 体部上半＝縦方向ヘラケズリ 下半＝横方向ヘラケズリ 〈色調〉赤褐色、黒斑	体部＝ヘラミガキ? 〈色調〉黒色、黄褐色
図150 3	a.(甕) b.カマド右 c.底部～胴下位の3/4	底径(7.0)	d.砂粒を多く含む e.普通	長胴甕と考えられ、直線的に立ち上がる。	胴下位＝縦及び斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉黄褐色、黒色	胴下位＝ヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉黄褐色、淡赤褐色
図150 4	a.(高坏) b.P_4付近 c.脚部のみ	裾部径11.0	d.砂粒を含む e.良好	ハの字状で、やや孤状をもって立ち上がり、裾部は開かない。	裾部＝横ナデ 脚中位＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも橙褐色	裾部＝横ナデ 脚中位＝ヘラケズリダシ 〈色調〉一部黒色
図150 5	a.須恵器 蓋坏 b.カマド右 c.全体の3/5	口径10.0 器高3.45	d.砂粒含む e.少し不良	天井部は、平坦で、口縁部まで椀状を呈し、口縁部の内側に沈線が1本囲る。	天井部上部＝回転ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	〈色調〉暗青灰色
図150 6	a.(甑) b.カマド右 c.全体の1/3	口径14.2	d.砂粒を含む e.少し不良	厚手で、小型の甑と考えられ、直線的な胴部より、口縁部は小さく外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 〈色調〉黒褐色

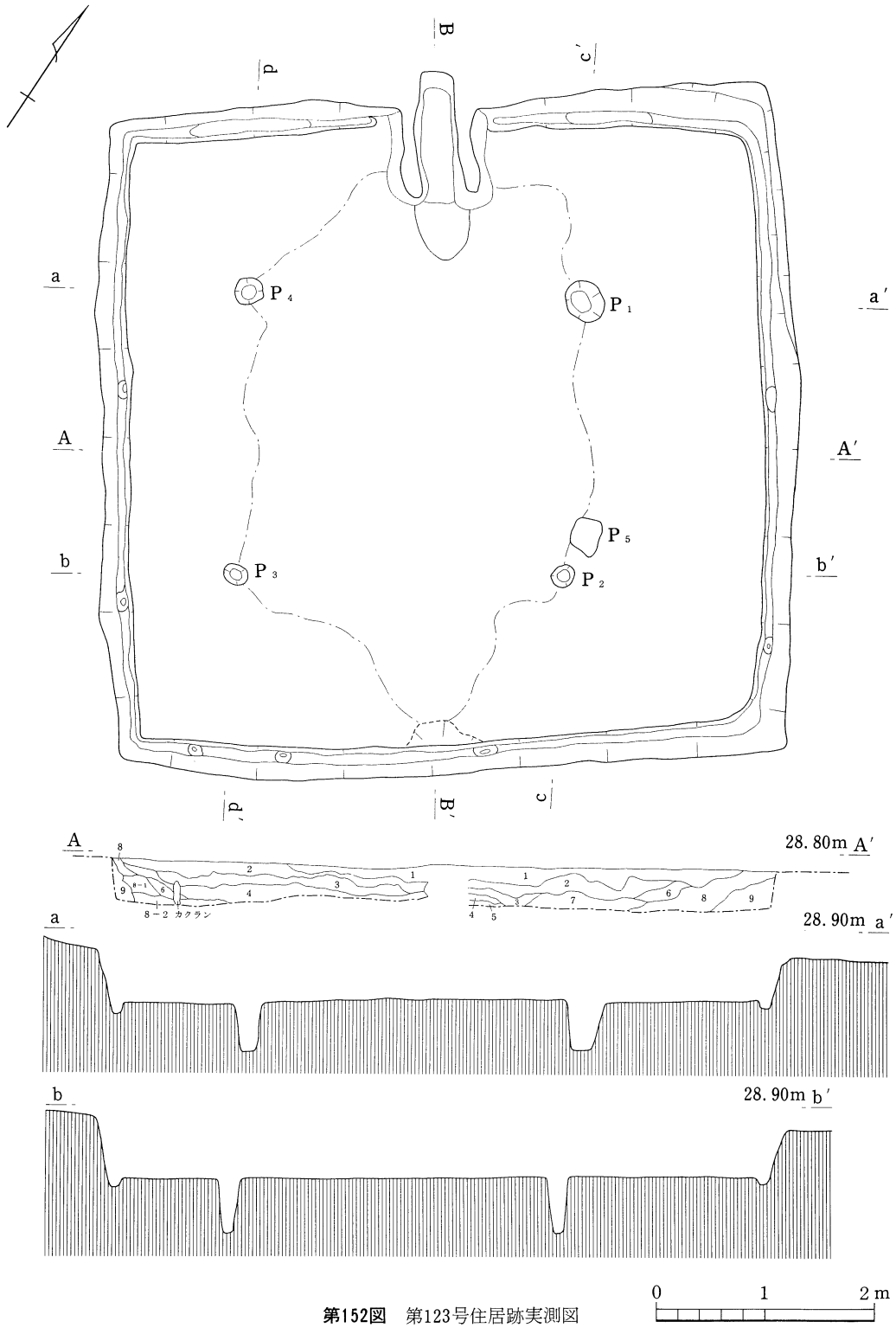
(24) 第123号住居跡

調査地区の北側に位置し、北西に約8mで北側の小谷に傾斜する地点である。第122号住居跡の南東側に接し、第101号方形周溝状遺構が、東北東約8mに存在する。平面形体は、胴張りの方形を呈し、北西側壁

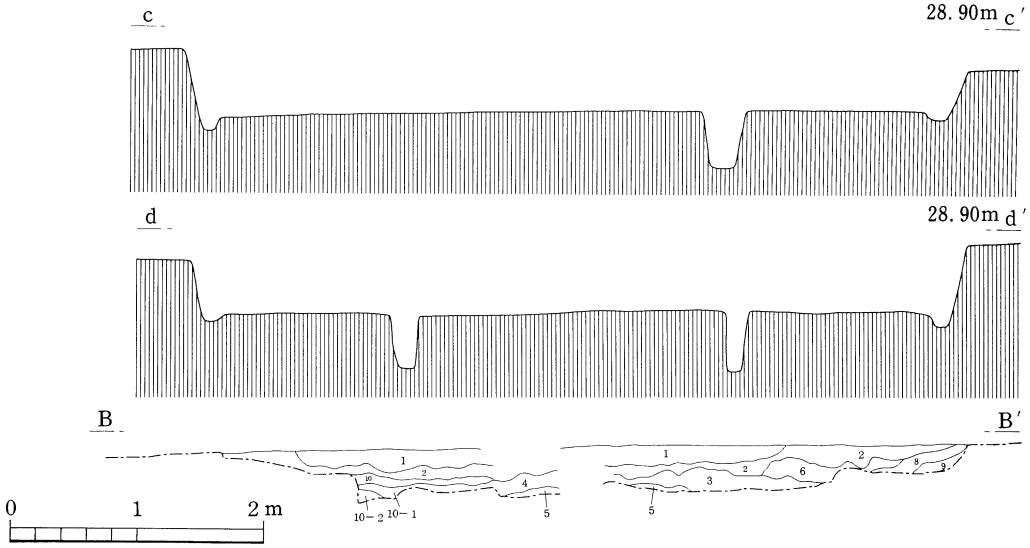


第151図 第123号住居跡焼土、炭化物、土器等出土状況図

(カマド設置壁)は、あまり張っていない。規模は、長軸6.37m、短軸6.20mを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、N－33° －Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で58cmである。床面は、ハードローム層内のレベルに設定され、踏み固められた面は、カマド前面を主として認められる。床面積は約34.86㎡である。壁溝は、四周し、幅は、3～11cm、深さは、6～10cmを測る。床面内のピットは、5本検出され、P_1～P_4は、主柱穴とみられ、各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.15m、P_2～P_3が、3.00m、P_3～P_4が2.60m、P_4～P_1が3.06mである。4本とも径が小さく、掘り方用の大きな掘り込みは認められない。P_5は、カマド反対側の壁近くの床面に存在する。出入口相当施設用のピットと考えられる。床のほぼ全面に、焼土と炭化物が大量に検出されている。また、カマド反対側の竪穴外に、焼土が2ケ所近接して出土し、出入口施設が焼けたための焼土の可能性も考えられるが、焼土以外には、他のピットや出土遺物等は、検出できなかった。竪穴の覆土は、黒褐色を主体とし、中にローム土塊を多量に含んでい



第152図　第123号住居跡実測図



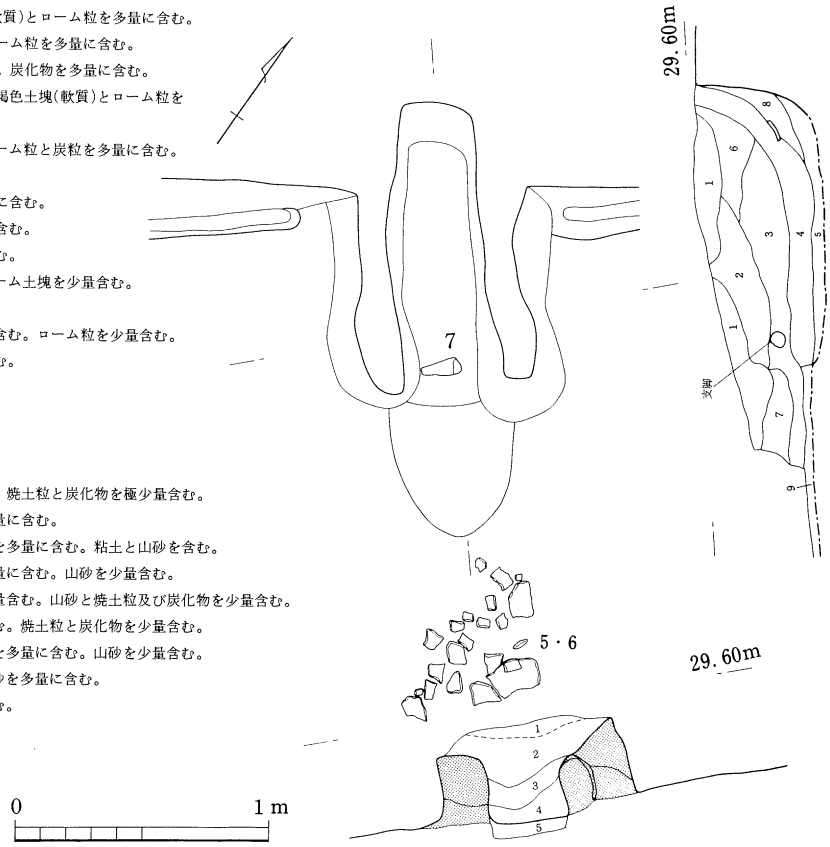
第153図　第123号住居跡断面図(ｃ－ｃ′，ｄ－ｄ′)及び土層セクション図(Ｂ－Ｂ′)

第123号住居跡土層説明

1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。
2．黒褐色土(少し明るい)。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。
3．暗黄褐色土。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を多量に含む。
4．黒褐色土(やや明るい)。ローム粒を多量に含む。
5．黒褐色土。ローム粒を含む。炭化物を多量に含む。
6．暗黄褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を多量に含む。
7．黒褐色土(やや明るい)。ローム粒と炭粒を多量に含む。焼土粒を含む。
8．明褐色土。ローム粒を多量に含む。
8－1　少し硬質。ローム粒を含む。
8－2　ローム土塊を多量に含む。
9．暗黄褐色土(やや軟質)。ローム土塊を少量含む。焼土粒と炭粒を含む。
10．暗褐色土。焼土粒を多量に含む。ローム粒を少量含む。
10－1　ローム土塊を多量に含む。
10－2　炭化物を含む。

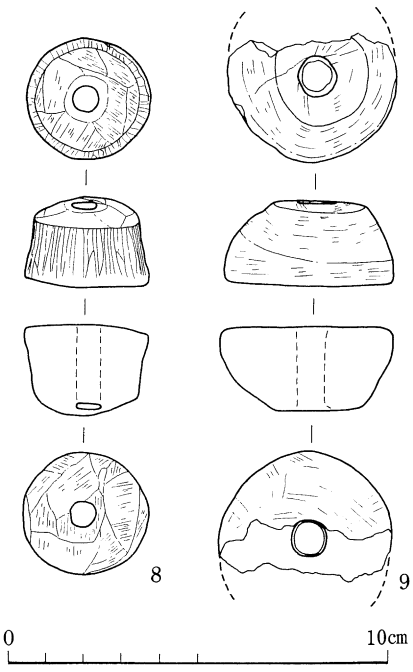
第123号住居跡カマド土層説明

1．暗褐色土。山砂を少量含む。焼土粒と炭化物を極少量含む。
2．白灰色土。粘土と山砂を多量に含む。
3．暗赤橙色土。焼土と炭化物を多量に含む。粘土と山砂を含む。
4．暗灰色土。灰と炭化物を多量に含む。山砂を少量含む。
5．暗褐色土。ローム土塊を少量含む。山砂と焼土粒及び炭化物を少量含む。
6．暗褐色土。山砂を多量に含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
7．暗赤橙色土。焼土と炭化物を多量に含む。山砂を少量含む。
8．白灰色土(軟質)。粘土と山砂を多量に含む。
9．黒色土。炭化物を多量に含む。



第154図　第123号住居跡カマド実測図

るため、人為的な埋めもどしの可能性が考えられる。カマドは、北西側壁中央に設置されるが、保存状況は悪い。袖部分は、平面形が細長く、両袖が平行する様な形で残存する。煙道部は、立ち上がりが急傾斜で、竪穴壁を約35cm掘り込んでいる。出土遺物は、ほとんどが、床面付近より検出されている。No.1は、カマド右側の北東側床面、No.2・3は、カマドの向かい側の南東側床面、No.4が西側隅床面、No.5・6が、カマド前面床面、No.10・11が南東側壁下付近床面より、また、No.7の土製支脚は、カマド内より、紡錘車のNo.8は、南西側壁下床面、No.9は、西側床面から、それぞれ出土している。No.7の土製支脚は、上端ほど細くなる円柱形で、下部を欠損。上端径は、3.0cmをはかる。胎土は、緻密で、色調は淡褐色を呈する。No.8の紡錘車は、やや小型で厚い。色調は、暗緑褐色を呈する。径は3.3cm、厚さは、2.4cm、孔径は、0.65cm、重さは、338gである。No.9は、立ち上がりは、少し丸みを帯びる。色調は、灰緑褐色を呈する。また、約1／3を欠損する。径は、4.5cm、厚さ2.25cm、孔径は、0.75cmをはかる。重さは387g。



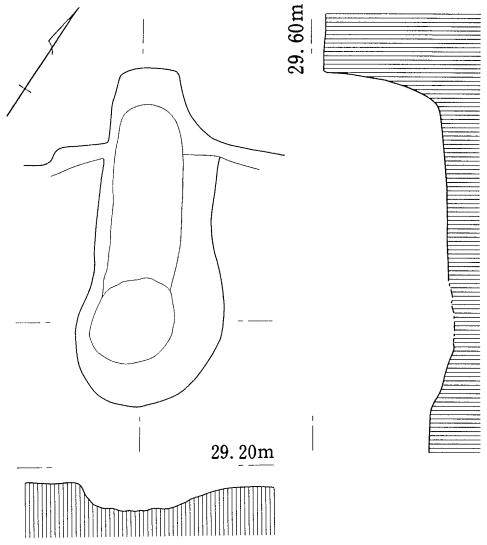
第155図　第123号住居跡出土遺物実測図(8・9)

第72表　第123号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	40×35	22×15	48
P2	22×19	11×11	45
P3	23×19	11×9	50
P4	26×24	14×13	52
P5	37×26	22×19	5

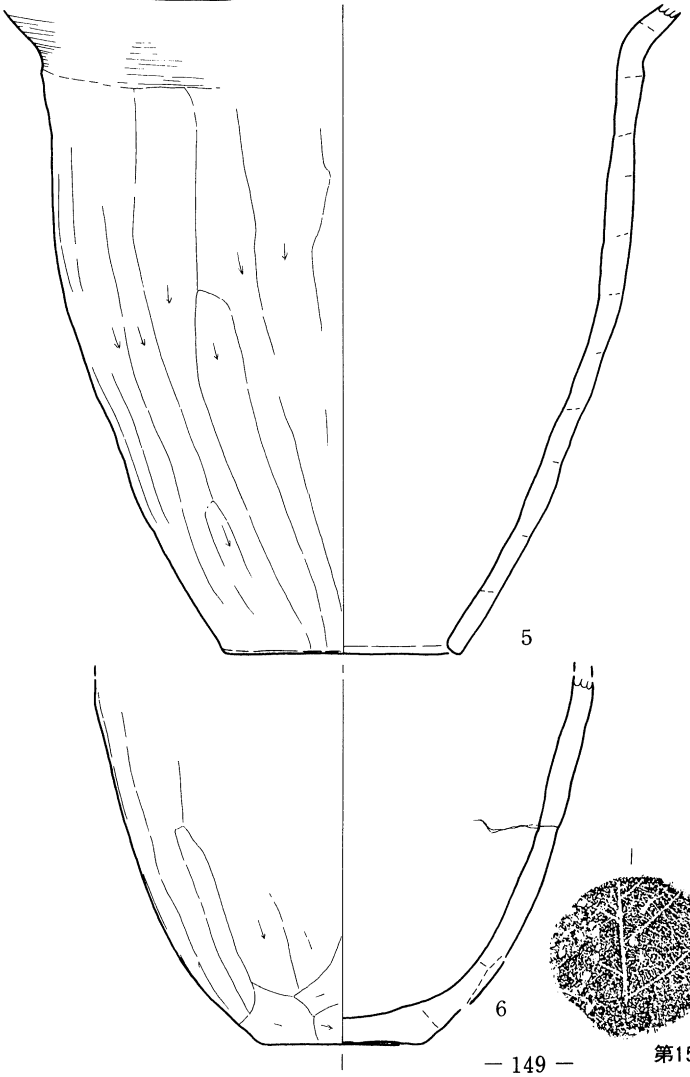
第73表　第123号住居跡出土遺物観察表

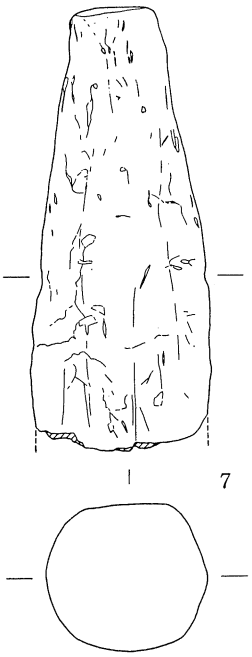
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図157 1	a.坏 b.北側床面 c.全体の3/4	口径(13.0) 器高(3.75)	d.砂粒を含む e.普通	丸底で浅い椀状を呈する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図157 2	a.坏 b.南側床面 c.全体の1/3	口径(12.9) 器高(3.75)	d.緻密 e.普通	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、短く直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色・淡褐色	横方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図157 3	a.坏 b.東側床面 c.全体の2/3	口径(13.3) 器高(3.65)	d.緻密 e.少し不良	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、短く内傾ぎみである。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色	横方向のヘラナデ 両面とも少し摩耗する。 〈色調〉暗褐色
図157 4	a.鉢 b.西隅床面 c.完形	口径13.6 底径8.5 器高9.5	d.砂粒を含む e.普通	わずかに丸みをもつ平底で、体上位に最大径をもつ。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ
図157 5	a.甕 b.カマド前面床面 c.口縁部を欠損する	口頸部径24.0 孔径9.4	d.砂粒を含む e.少し不良	少し広めの孔をもち、最大径は、口唇部とみられる。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、ヘラミガキ やや摩耗と剝離有り。
図157 6	a.甕 b.カマド前面床面 c.胴下部～底部のみ	底径6.4	d.砂粒を含む e.少し不良	やや小さめの底部をもち、胴部は、長胴を呈するとみられる。胴上部から口縁部を欠損する。	胴下部＝縦方向のヘラケズリ 胴下端＝横及び斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	胴下部＝ヘラナデの後、指ナデ やや摩耗が有る。 〈色調〉淡褐色

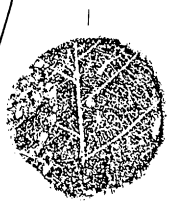


0 1m

第156図　第123号住居跡カマド掘り方実測図



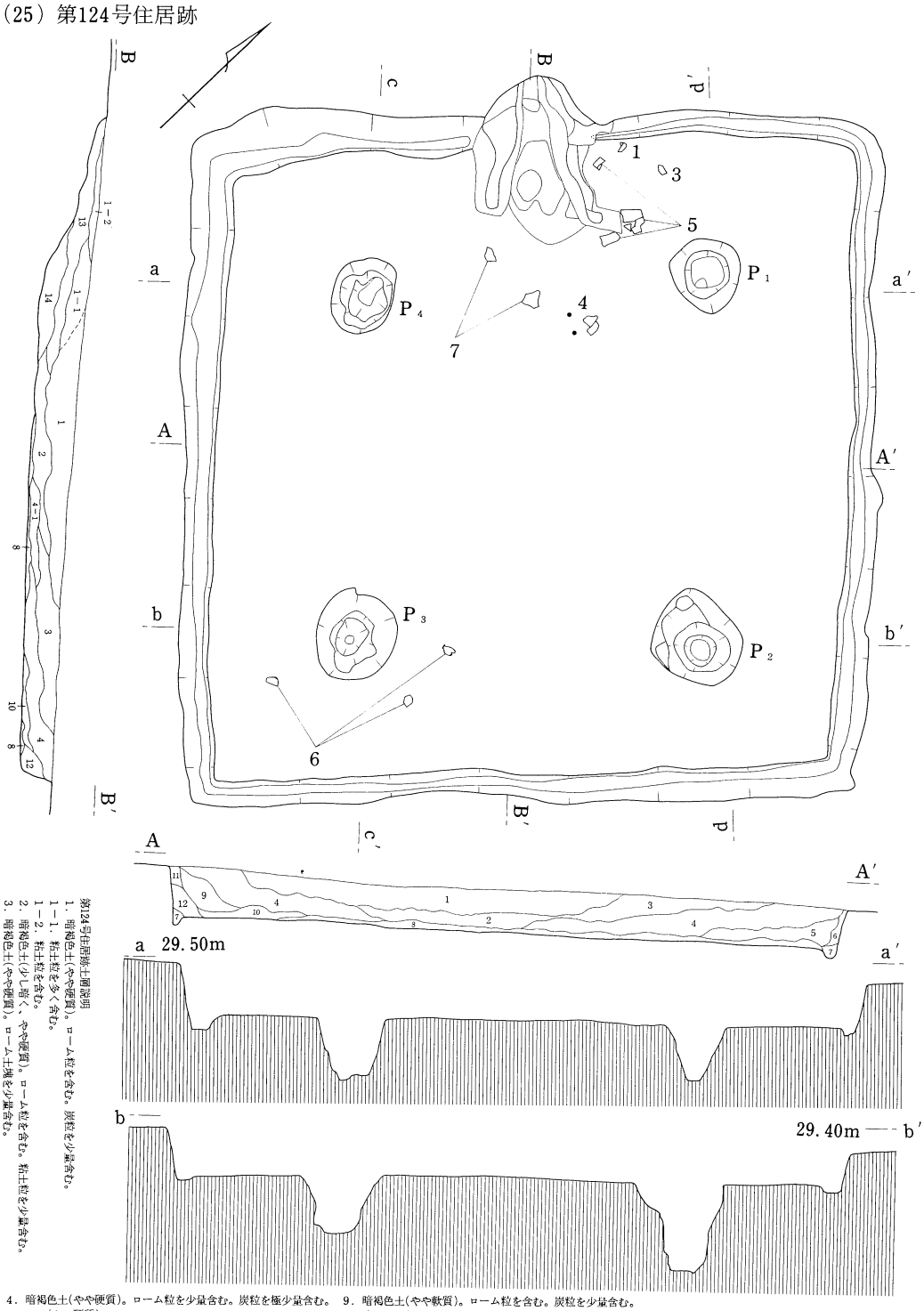




0 10cm

第157図　第123号住居跡出土遺物実測図（1～7）

（25）第124号住居跡

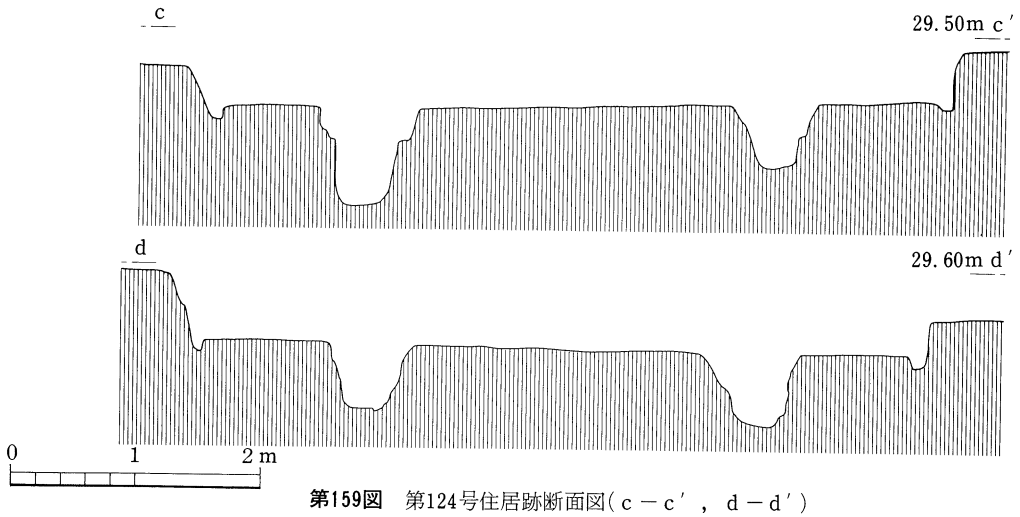


第124号住居跡土層説明

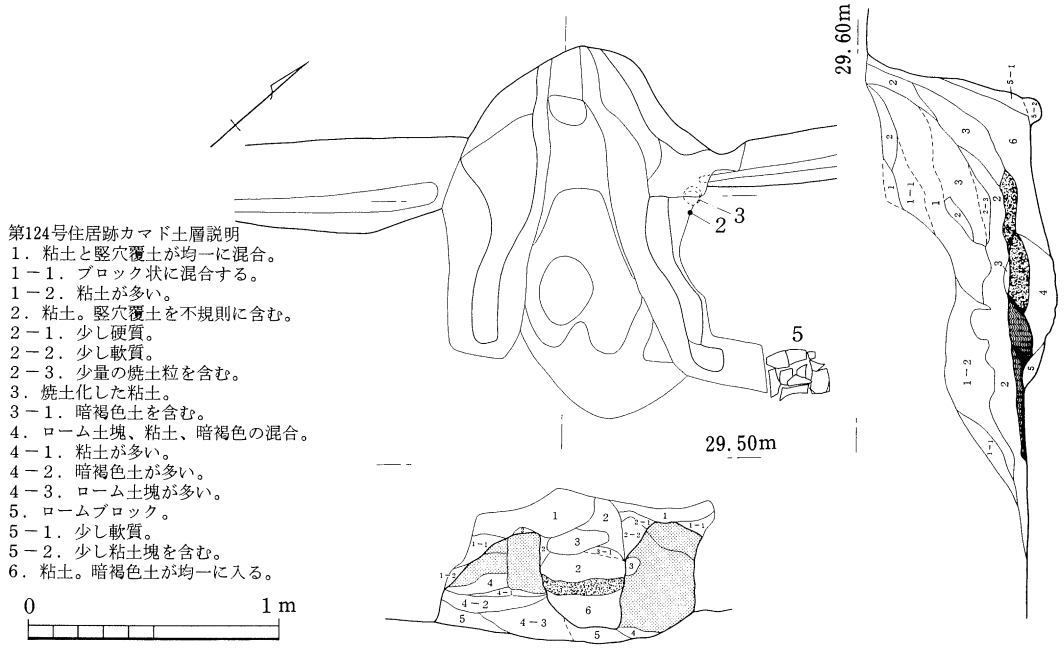
1．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を含む。炭粒を少量含む。
1－1．粘土粒を多く含む。
1－2．粘土粒を含む。
2．暗褐色土(少し暗く、やや硬質)。ローム粒を含む。粘土粒を少量含む。
3．暗褐色土(やや硬質)。ローム土塊を少量含む。
4．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を少量含む。炭粒を極少量含む。
4－1．(より硬質)。
5．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を少量含む。
6．褐色土(やや軟質)。ローム粒を含む。
7．褐色土(やや軟質)。ローム土塊をブロック状に含む。
8．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
9．暗褐色土(やや軟質)。ローム粒を含む。炭粒を少量含む。
10．暗褐色土(少し明るく、やや硬質)。ローム粒を少量含む。
11．暗褐色土(やや軟質)。ローム粒を極少量含む。
12．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を少量含む。
13．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を含む。粘土塊を少量含む。
14．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を少量含む。粘土塊を多く含む。

第158図　第124号住居跡実測図

0　1　2m



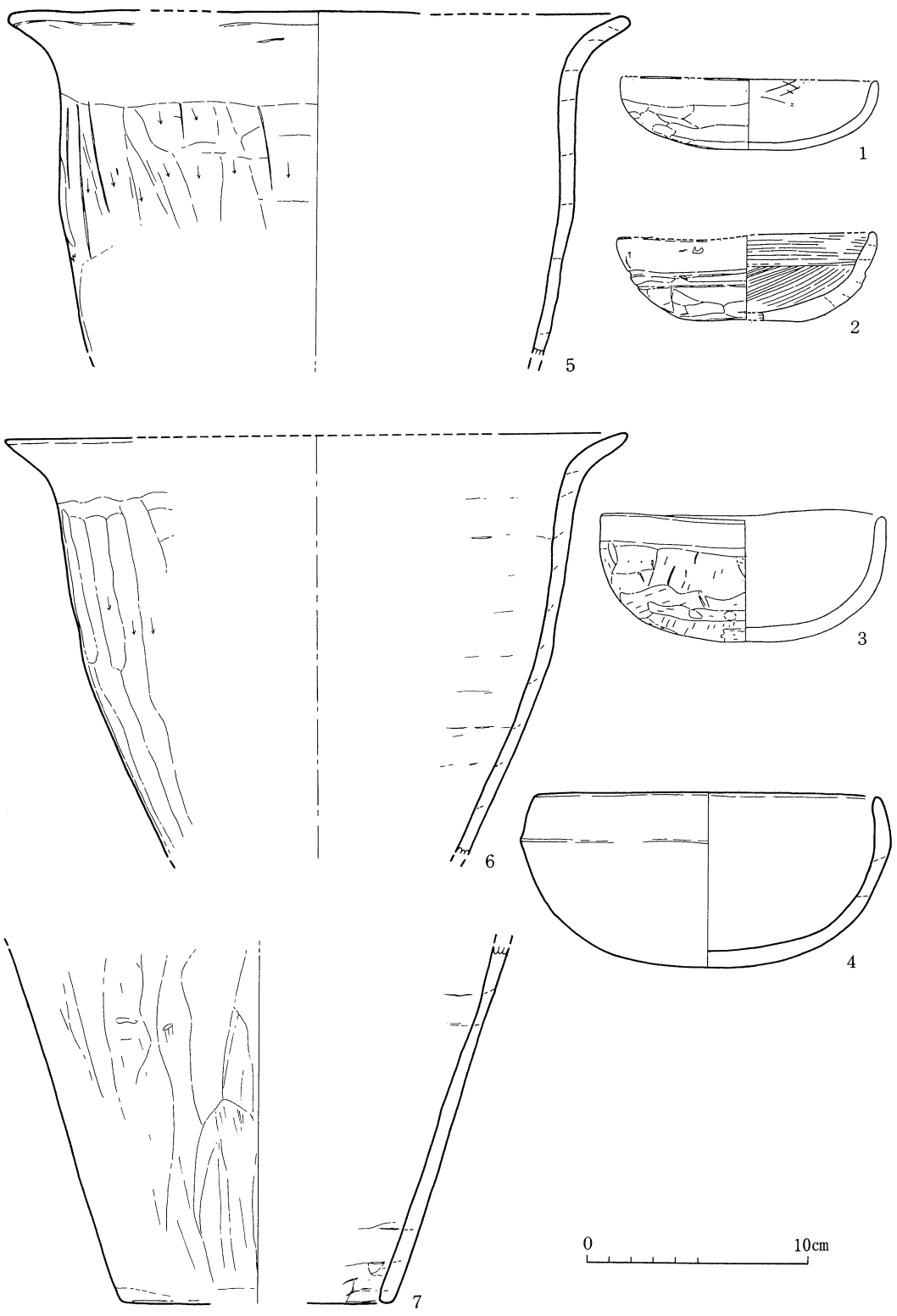
第159図　第124号住居跡断面図（c－c′，d－d′）



第124号住居跡カマド土層説明
1．粘土と竪穴覆土が均一に混合。
1－1．ブロック状に混合する。
1－2．粘土が多い。
2．粘土。竪穴覆土を不規則に含む。
2－1．少し硬質。
2－2．少し軟質。
2－3．少量の焼土粒を含む。
3．焼土化した粘土。
3－1．暗褐色土を含む。
4．ローム土塊、粘土、暗褐色の混合。
4－1．粘土が多い。
4－2．暗褐色土が多い。
4－3．ローム土塊が多い。
5．ロームブロック。
5－1．少し軟質。
5－2．少し粘土塊を含む。
6．粘土。暗褐色土が均一に入る。

第160図　第124号住居跡カマド実測図

第124号住居跡は、調査地区の北東側の少し中央寄りに位置し、第125ａ号住居跡が南東約４ｍ、第131号住居跡（弥生時代）が北東約５ｍに存在する。平面形体は、隅円方形を呈し、わずかに胴張りぎみである。規模は、長軸6.21ｍ、短軸6.15ｍを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、Ｎ－46°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、最大で46㎝である。床面は、平坦で、ハードローム層内のレベルに設定され、床面積は、約34.21㎡である。壁溝は、四周し、幅は、４～26㎝、深さ５～12㎝を測る。床面内のピットは、４本検出され、主柱穴と考えられる。各ピッ



第161図　第124号住居跡出土遺物実測図

ト間の距離は、P_1～P_2が3.38m、P_2～P_3が3.13m、P_3～P_4が3.12m、P_4～P_1が3.00mである。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積である。カマドは、北西側壁ほぼ中央に設置され、煙道部は、竪穴の壁を約40cm掘り込み、高さは60cmで立ち上がりは、急傾斜である。出土遺物は、No.1・2・3・5がカマド右横床面、No.4・7がカマド前面床面、No.6が南側床面よりそれぞれ検出されている。

第74表　第124号住居跡ピット計測表(cm)

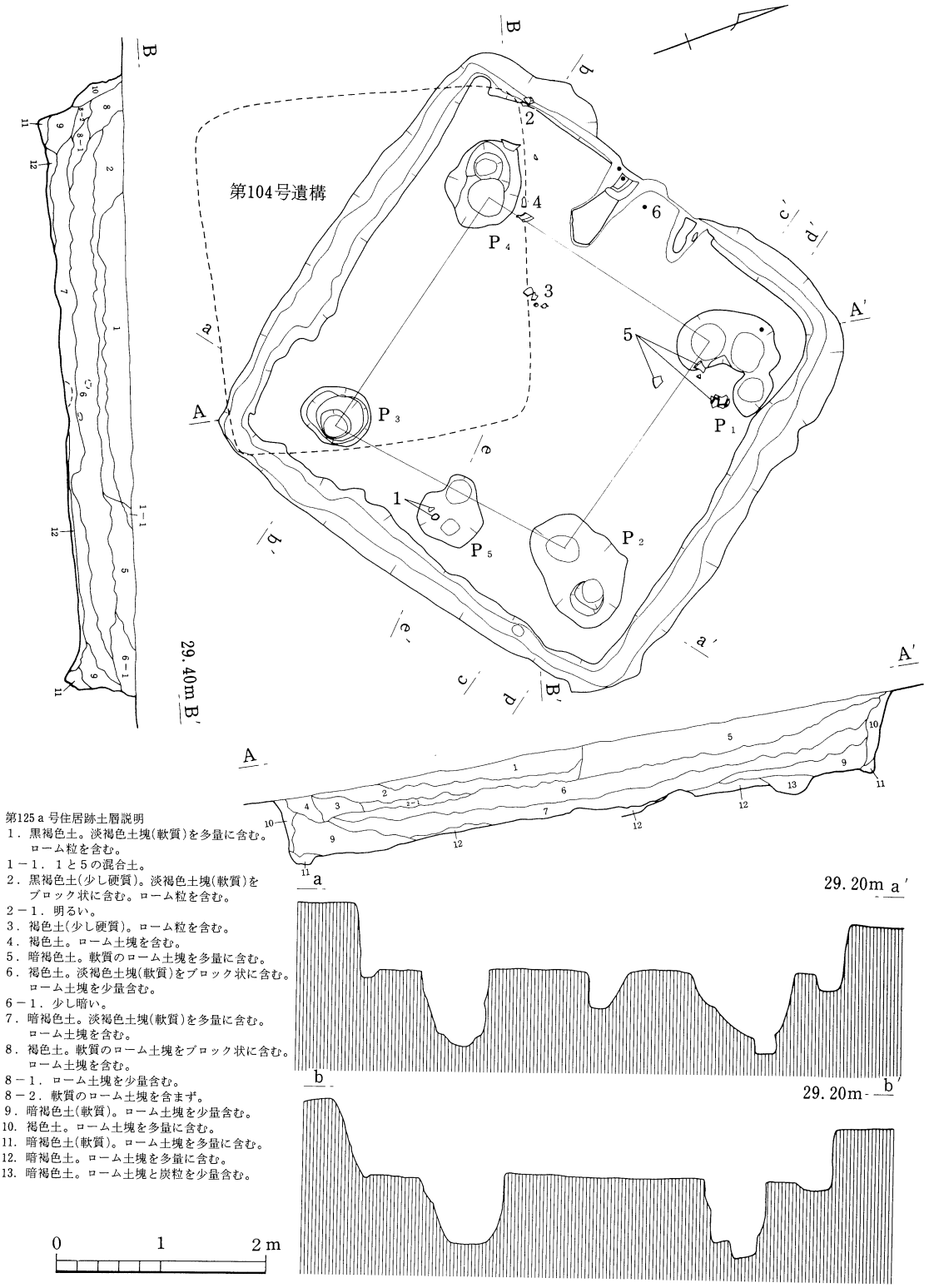
ピット名	上端	下端	深さ
P_1	68×63	29×27	60
P_2	90×73	21×17	55
P_3	81×71	8×7	52
P_4	71×55	27×14	79

第75表　第124号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図161 1	a.坏 b.カマド右横床面 c.1/4を欠損	口径(11.7) 器高(2.4)	d.緻密 e.少し良好	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、直立ぎみである。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも赤橙色	摩耗多い。交差する斜行状暗文がわずかに残る。
図161 2	a.坏 b.カマド右横床面 1/4を欠損	口径(11.7) 器高(2.4)	d.緻密 e.やや不良	やや上げ底ぎみの平底で、浅い椀状の体部をもち、口縁部は開いて立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部黒色	口縁部＝横方向のヘラミガキ 体部＝縦方向のヘラミガキ 〈色調〉褐色
図161 3	a.鉢 b.カマド右横床面 c.5%欠損	口径(13.35) 器高(6.0)	d.砂粒を少量含む e.普通	丸底でやや深い椀状に立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部＝横ナデ 体上部＝縦方向のヘラケズリ 体下部＝横方向のヘラケズリ	全面とも横方向のヘラミガキ 両面とも摩耗多し。 〈色調〉両面とも黄褐色 黒色、茶褐色
図161 4	a.鉢 b.カマド前床面直上 c.1/4を欠損	口径(15.8) 口縁部最大径(16.95) 器高(8.2)	d.緻密 e.不良	丸底で深い椀状に立ち上がり、口縁部は少し内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 両面とも摩耗多し。	全面とも横方向のヘラミガキ 〈色調〉両面とも黄褐色 一部黒色
図161 5	a.(甕) b.カマド右横床面 c.胴下位以下を欠損	口径(29.0)	d.砂粒を含む e.良好	胴部は、やや丸みをもって直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉黄褐色、橙褐色 一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデ 〈色調〉黄褐色、橙褐色 赤褐色
図161 6	a.(甕) b.南側床面 c.胴下位を欠損	口径(29.0)	d.砂粒を多く含む e.やや不良	5に似るが、やや胴下位が細くなる。	5と同様	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 〈色調〉黄褐色
図161 7	a.(甕) b.カマド前面床面 c.胴下部のみ残存	孔径(12.8)	d.砂粒を少し含む e.良好	広めの孔をもち、胴部は、直線的に開いて立ち上がる。	胴下部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉赤褐色、一部黒色	胴部＝ヘラナデの後縦方向のヘラミガキ 〈色調〉黄褐色

(26) 第125a号住居跡

第125a号住居跡は、調査地区の中央やや北東寄りに位置し、南東へ約10mで小谷に傾斜する地点である。第125b号住居跡の北側を切り、第104号遺構に西側の覆土内を切られている。平面形体は、隅円方形を呈し、規模は、長軸4.88m、短軸4.79mを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－34°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で71cmである。床面は、わずかに凹凸が有り、ハードローム層内のやや深いレベルに設定されている。床面積は、約19.50㎡を測る。壁溝は、四周し、少し不整形で、幅が広い。幅は、3～24cm、深さは、3～15cmである。床面内のピットは、5ケ所存在し、P_3以外は、下端が数ケ所有り、重複している。P_1は3ケ所、P_2、P_3、P_4は、2ケ所である。P_1～P_4は、主柱穴とみられ、土層観察で、最も新

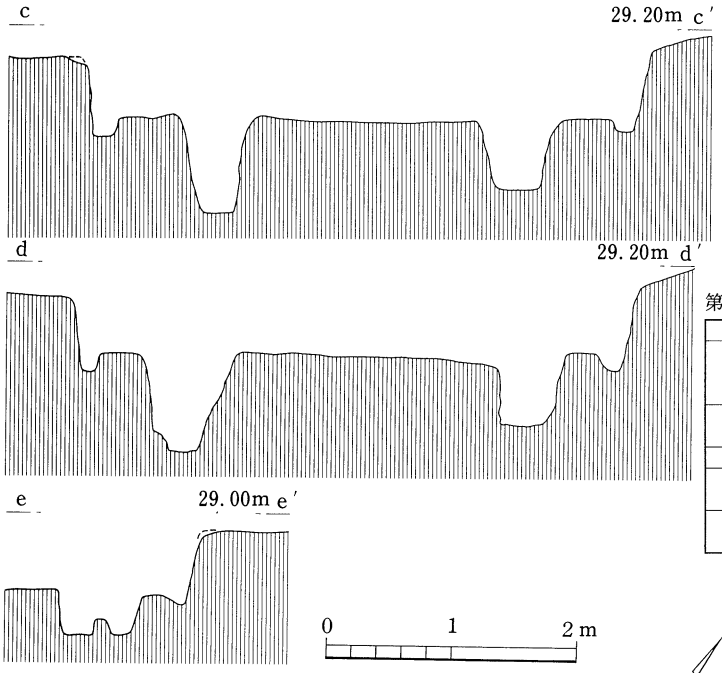


第125 a 号住居跡土層説明

1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を含む。
1－1．1と5の混合土。
2．黒褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を含む。
2－1．明るい。
3．褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
4．褐色土。ローム土塊を含む。
5．暗褐色土。軟質のローム土塊を多量に含む。
6．褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム土塊を少量含む。
6－1．少し暗い。
7．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊を含む。
8．褐色土。軟質のローム土塊をブロック状に含む。ローム土塊を含む。
8－1．ローム土塊を少量含む。
8－2．軟質のローム土塊を含まず。
9．暗褐色土(軟質)。ローム土塊を少量含む。
10．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
11．暗褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
12．暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。
13．暗褐色土。ローム土塊と炭粒を少量含む。

第162図　第125 a 号住居跡及び第104号遺構実測図

しいピットが、第162図のように組み合わされ、各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.42m、P_2～P_3が2.47m、P_3～P_4が2.63m、P_4～P_1が2.50mを測る。竪穴の覆土は、壁近くには、

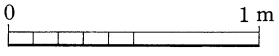


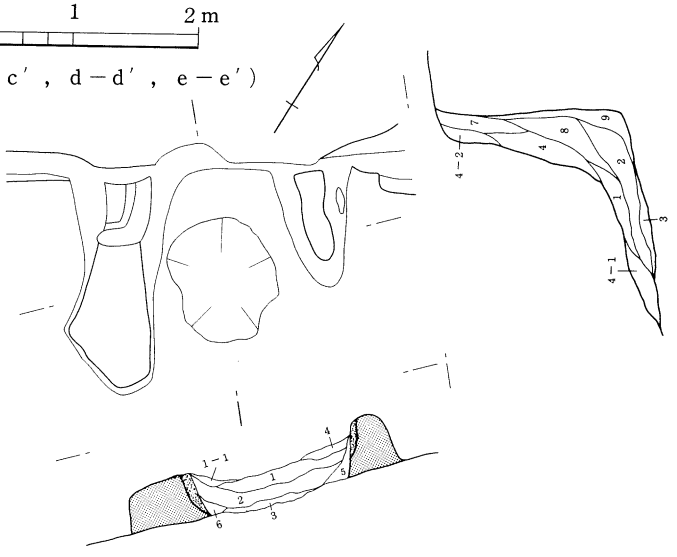
第76表　第125a号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	53×(－)	34×32	57
	54×(－)	35×30	58
	33×(－)	24×22	45
P_2		33×24	78
		22×21	80
P_3	68×56	22×21	72
P_4		36×36	68
		20×15	65
P_5		25×22	35
		17×15	30

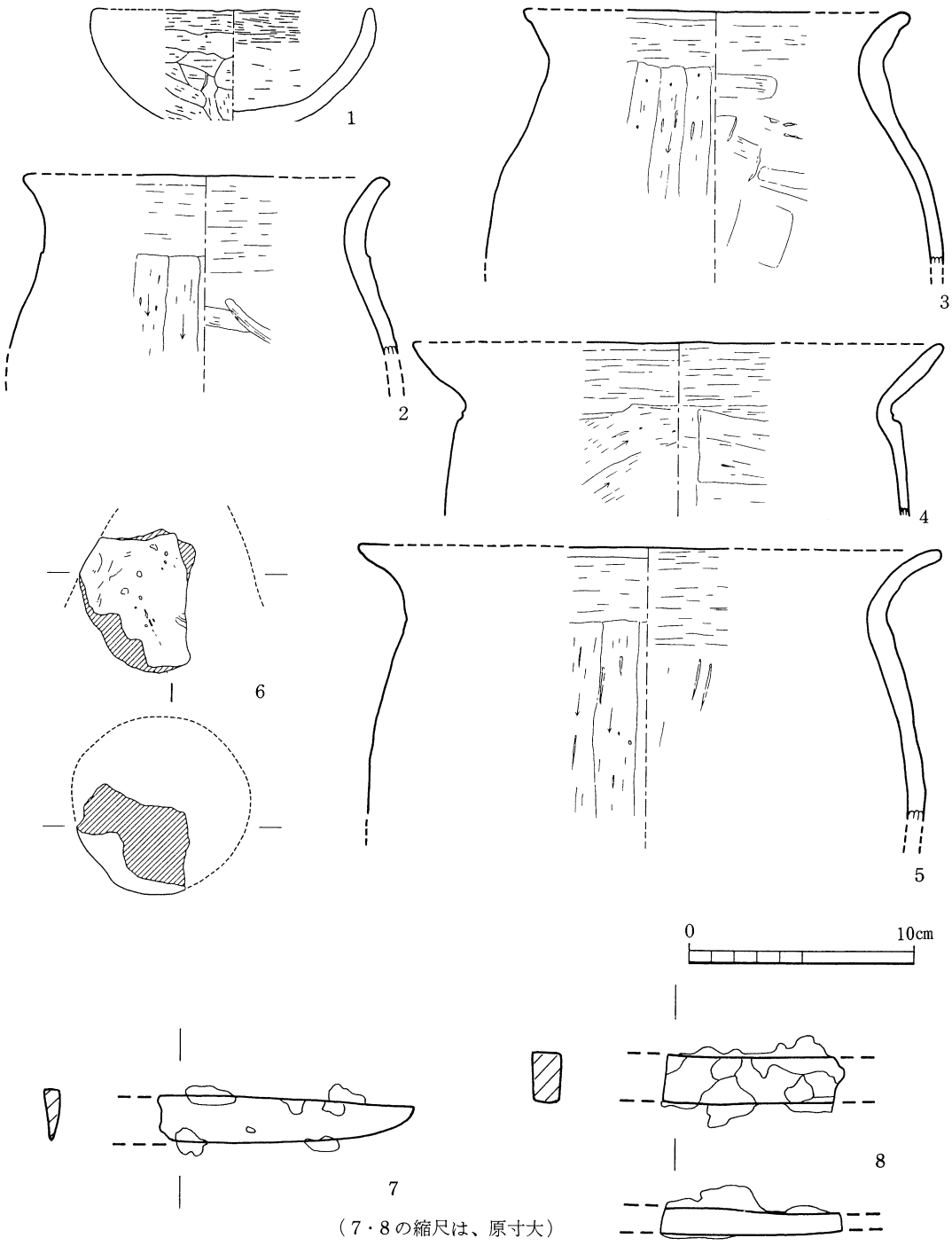
第163図　第125a号住居跡断面図(c－c′，d－d′，e－e′)

第125a号住居跡カマド土層説明
1．暗灰褐色土。粘土塊と焼土粒を含む。
1－1．粘土塊を多く含む。
2．暗赤褐色土。灰と焼土を多量に含む。
粘土粒を少量含む。
3．暗赤橙色土。焼土粒を多量に含む。
ローム粒を少量含む。
4．暗褐色土。粘土粒と焼土粒を少量含む。
4－1．粘土粒を多量に含む。
4－2．焼土粒を極少量含む。
5．暗赤褐色土。粘土塊を含む。
焼土粒と灰を少量含む。
6．焼土と灰の混合土。
7．暗赤褐色土。ローム粒と焼土粒及び粘土粒を含む。
8．暗灰褐色土。焼土塊と粘土塊をブロック状に含む。炭粒を少量含む。
9．粘土にローム土塊が含まれる。





第164図　第125a号住居跡カマド実測図



第165図　第125a号住居跡出土遺物実測図

ローム土塊を多く含む層もみられるが、大半は、自然堆積と考えられる。カマドは、北西側壁の中央に設置され、保存状況は、悪い。煙道部は、竪穴壁をわずかに5cm程度掘り込んでいるのみで、立ち上がりは、75cmと急傾斜である。出土遺物は、No.1が鉢で、カマドの向かい側（南側P_5内）、No.2～5は、甕と考えられ、No.2が北西側壁下、No.3がカマド左前面床面、No.4が北西側床面のP_4付近、No.5が北東側床面のP_1付近より、No.6の土製支脚片は、カマド内より検出されている。

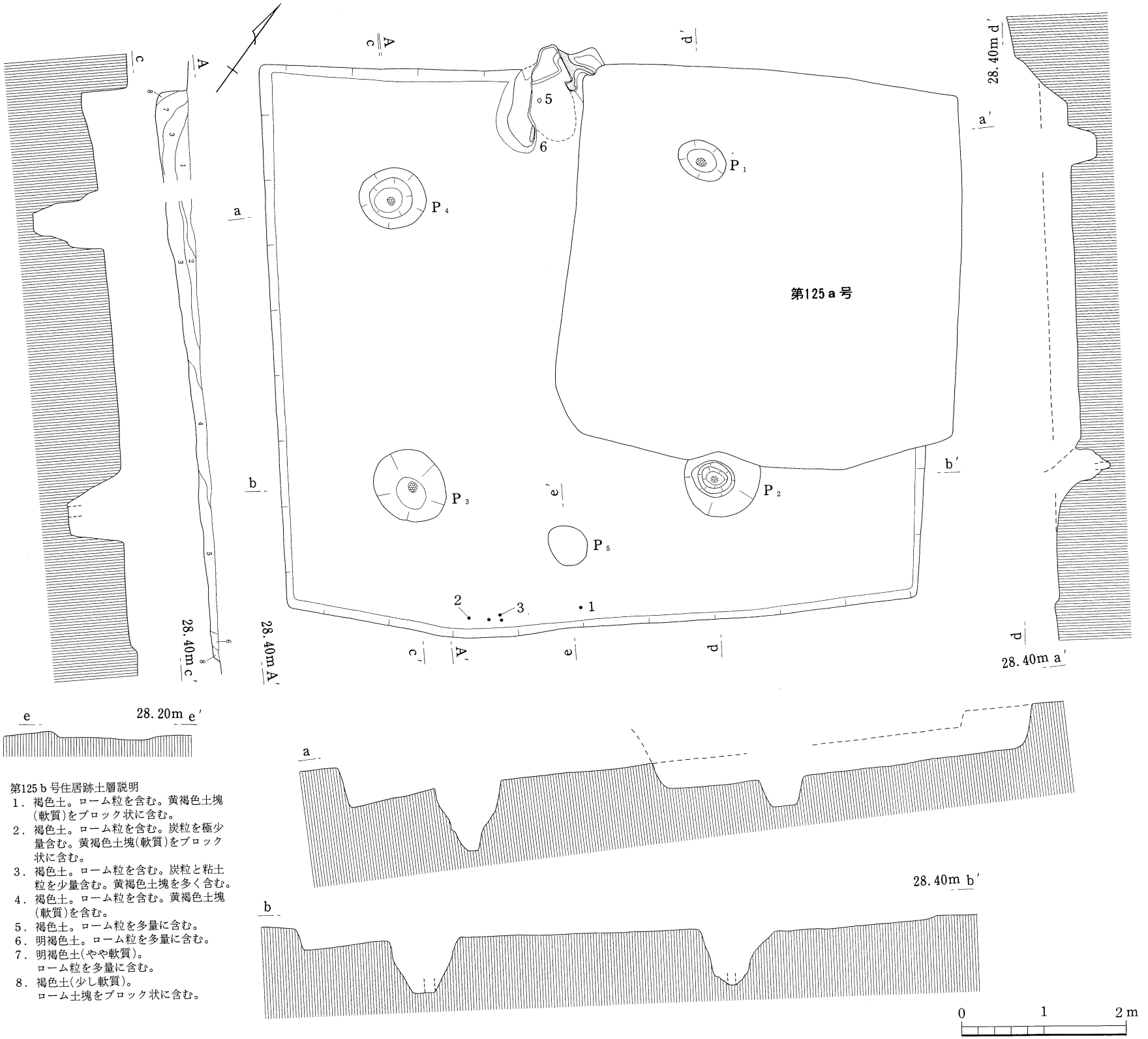
第77表　第125a号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図165 1	a.鉢 b.P_5内出土 c.1/3の残存	口径(12.6) 器高(5.5)	d.砂粒を含む e.普通	丸底で埦状に立ち上がり、口縁部は、直立ぎみである。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図165 2	a.(甕) b.北西側壁付近床面 1/4の残存	口径(16.4) 口頸部径 (14.5)	d.砂粒を多く含む e.少し不良	長胴の甕と考えられ、胴上位から口縁部のみ残存。口縁部は、外反する。小型。	口縁部＝横ナデ 胴上位＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	口縁部＝横ナデ 胴上位＝ヘラナデ 〈色調〉黒褐色
図165 3	a.(甕) b.カマド左前面床面 c.1/3の残存	口径(17.5) 口頸部径 (15.0)	d.小礫2mm以下を少量含む e.普通	長胴の甕と考えられ、胴上位から口縁部のみの破片で、口縁部は、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴上位＝縦方向のヘラケズリ 擦過痕多し。 〈色調〉明褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図165 4	a.(甕) b.北西側P_4付近床面 c.1/4の残存 口縁部付近のみ	口径(23.8) 口頸部径 (19.2)	d.砂粒を多く含む e.良好	長胴の甕と考えられ、薄手である。口頸部に整形ヘラによる断が残る。口縁部はわずかに丸みをもって外反する。	口縁部＝横ナデ 胴上位＝少し幅広いヘラによる斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉淡橙褐色	口縁部＝横ナデ 胴上位＝横方向のヘラナデ 〈色調〉褐色
図165 5	a.(甕) b.北東側のP_1付近床面 c.1/4の残存	口径(26.2) 口頸部径 (21.6)	d.小礫2mm以下を多く含む e.少し不良	長胴の甕と考えられ、胴上部から口縁部の破片で、胴部最大径は、上位とみられる。口縁部は、外反。	口縁部＝横ナデ 胴上部＝縦方向のヘラケズリ 擦過痕多し。 〈色調〉褐色	口縁部＝横ナデ 胴上部＝横方向のヘラナデの後、ユビナデ 〈色調〉暗褐色

No.6は、土製支脚で、茶褐色を呈し、かなり摩耗している。形体は、上端ほど細くなる円柱形でかなり円錐状にちかい。また、小片の残存のため不明な点が多い。胎土は緻密で、残存径は、8.1cmをはかる。7は、鉄製の刀子片、8は、不明鉄片である。

（27）第125b号住居跡

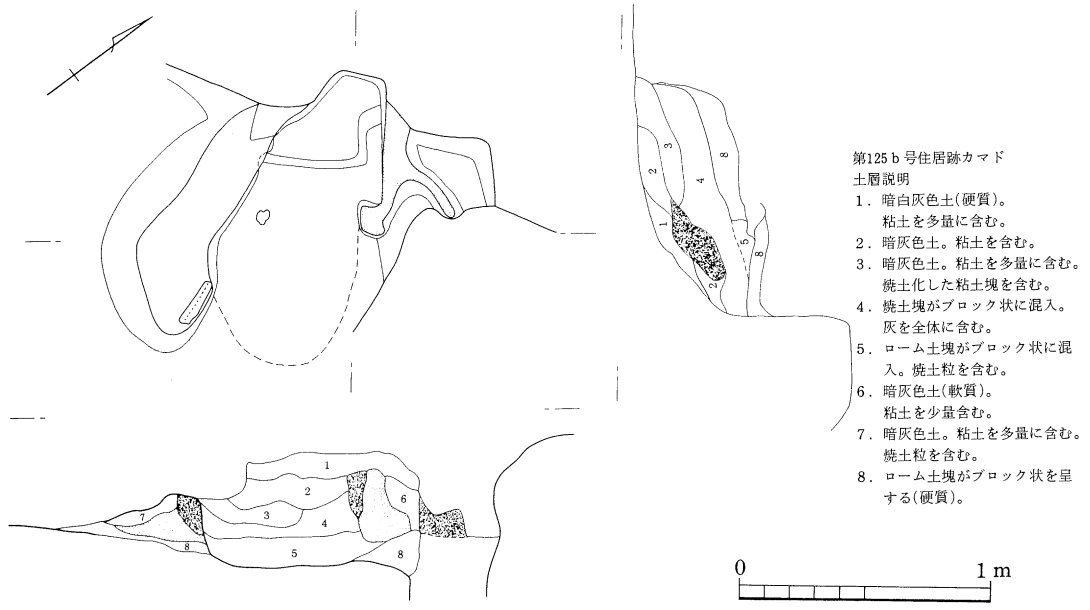
調査地区の中央やや北東寄りに位置し、第125a住居跡により北側の一部を切られている。平面形体は、やや大型の長方形で、南東側壁がやや胴張りぎみである。規模は、長軸7.81m、短軸6.92mを測り、主軸方位は、短軸方向をはかり、N－37°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で、54cmである。やや南東側に傾斜をはじめる地点であるため、北西側壁の方が高く残っている。床面は、北側と南側の壁近くが、少し窪んでいる。踏み固められた面は、不明確である。床面積は、約49.80㎡である。壁溝は、認められなかった。床面内のピットは、5本検出され、P_1～P_4は、主柱穴と考えられる。下端は、それぞれ、柱のあたり痕跡が認められ、各ピット間の距離は、P_1～P_2が3.87m、P_2～P_3が3.68m、P_3～P_4が、3.50m、P_4～



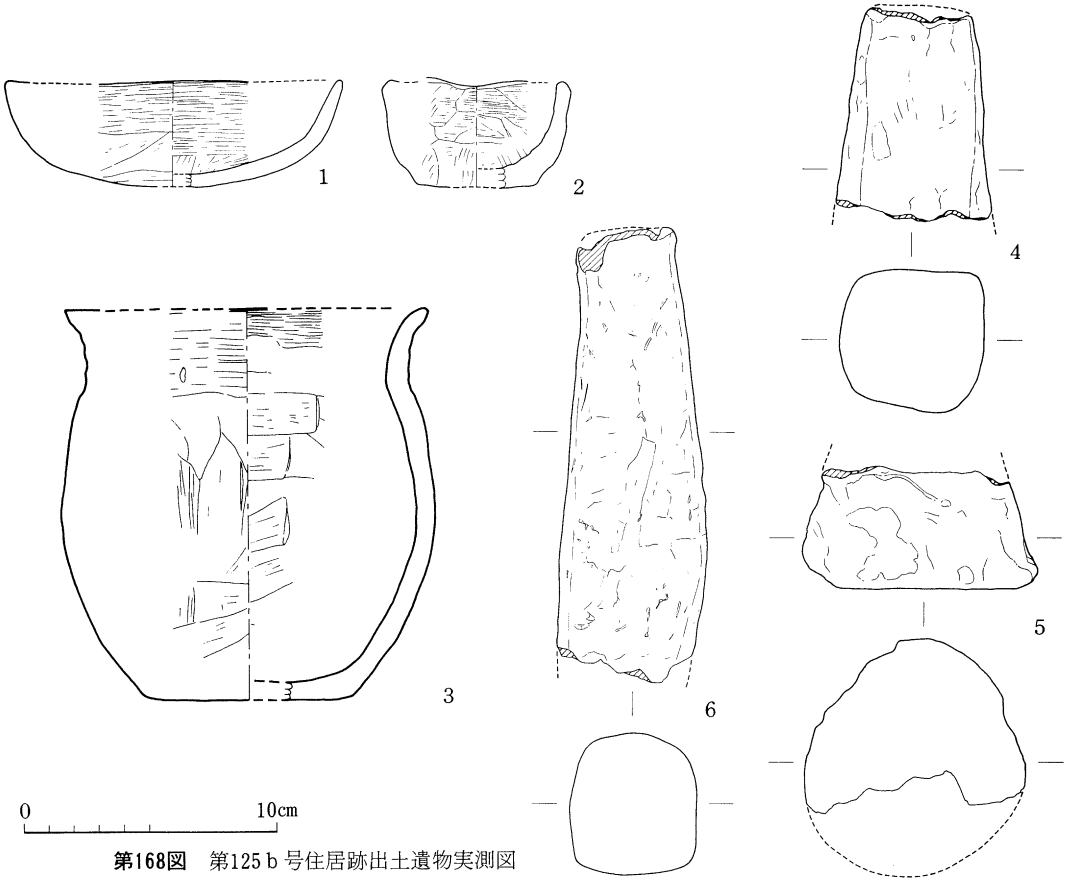
第125b号住居跡土層説明

1．褐色土。ローム粒を含む。黄褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。
2．褐色土。ローム粒を含む。炭粒を極少量含む。黄褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。
3．褐色土。ローム粒を含む。炭粒と粘土粒を少量含む。黄褐色土塊を多く含む。
4．褐色土。ローム粒を含む。黄褐色土塊(軟質)を含む。
5．褐色土。ローム粒を多量に含む。
6．明褐色土。ローム粒を多量に含む。
7．明褐色土(やや軟質)。
ローム粒を多量に含む。
8．褐色土(少し軟質)。
ローム土塊をブロック状に含む。

第166図　第125b号住居跡実測図



第167図　第125ｂ号住居跡カマド実測図



第168図　第125ｂ号住居跡出土遺物実測図

第78表　第125ｂ号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	62×46	37×27	32 (66)
P2	92×(－)	22×15	42 (67)
P3	96×81	42×32	65
P4	78×75	35×29	82
P5	53×45		3

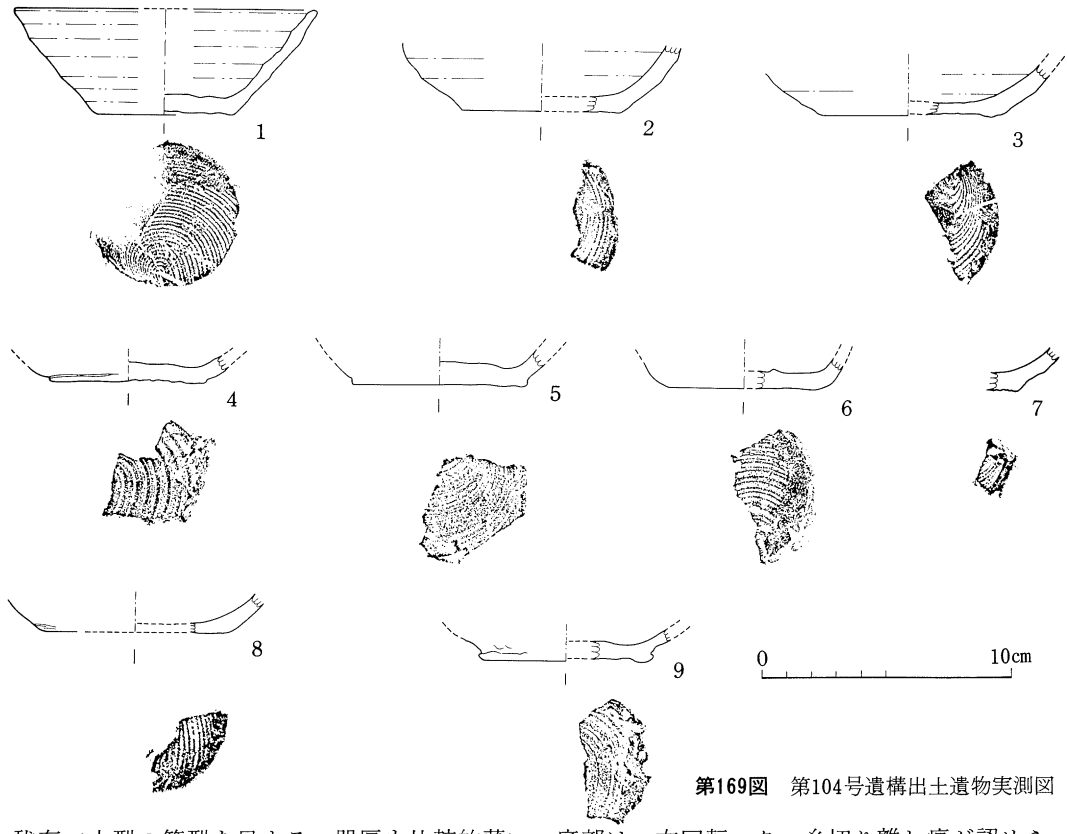
P1が3.81mを測る。P5は、カマド反対側の壁近くに位置し、出入口相当施設用のピットとみられるが、かなり浅く、深さは、3cm程度である。竪穴の覆土は、褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。カマドは、北西側壁の中央やや西寄りに設置され、右側の一部を第125ａ号住居跡に切られている。したがって保存状況は悪い。煙道部は、壁を約20cm掘り込んでおり立ち上がりは、急傾斜で50cmの高さをもつ。出土遺物は、No.1・2・3が南側壁付近(カマド向かい側)床面、No.4は、覆土下位、No.5・6がカマド内より、それぞれ検出された。No.4・5・6は、土製支脚で、No.4は、方柱形で上端ほど細くなる形体を呈する。上部のみの破片で、上端幅は推定4cmを計る。胎土は、緻密で、色調は、暗褐色である。No.5は、円柱形で、下部のみの破片である。下端径は、8.75×(9.45)cmを計る。胎土は、緻密で、色調は、暗褐色を呈する。No.6は、方柱形で、上端ほど細くなるが、あまり差が認められない形体である。残存は、上端の一部と下部を欠損する。上端幅は、推定で3.4cmを計る。色調は、暗褐色、胎土は、緻密である。長端部は、わずかにふくらみが認められる。

第79表　第125ｂ号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図168 1	a.坏 b.東南側壁付近床面 c.全体の1/2	口径(13.4) 器高(4.2)	d.緻密 e.わずかに不良	丸底で平扁である。体部は、浅い椀状で口縁部は、やや屈曲し、直線的である。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 摩耗している。 〈色調〉淡褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色一部暗褐色
図168 2	a.手づくね土器 b.東南側壁付近床面 c.全体の1/3	口径(7.9) 底径(5.7) 器高(4.2)	d.緻密 e.普通	平底で、小さな椀状を呈する。	指による(手づくね)成形の後、上位は、横ナデ、下位は、指オサエ 〈色調〉暗褐色	ヘラケズリトリの後ヘラヨコナデ、下位は、指ナデ 〈色調〉黒褐色
図168 3	a.(甕) b.東南側壁付近床面 c.全体の1/3の残存	口径(14.2) 頸部径(12.7) 胴部最大径(14.6) 底径(8.2) 器高(15.7)	d.緻密 e.わずかに不良	少し大きめの平底をもち、胴部は、球状で、最大径は、中位に有る。口縁部は、少し直立し、口唇部で小さく外反。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、一部淡褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉暗褐色、淡褐色

(28) 第104号遺構

調査地区の中央やや北東寄りに位置し、第125ａ号住居跡の北西側の覆土上部を切っている。当遺構は、第125ａ号住居跡の調査において、覆土上部での土層観察及び出土遺物により、確認された。平面形体は、長方形と推定される。規模は、長軸3.85m　短軸2.93mで、主軸方位は、長軸方向をはかり、N－76°－Wを示す。壁の立ち上がりは、やや緩やかで、深さは、最大で31cmである。底部は、やや不安定で、わずかに凹凸が有り、特に硬くはない。覆土は、自然堆積である。出土遺物は、ロクロ水挽きで底部回転糸切り離しの土師器坏が9点覆土中より出土している。完形品は無い。また、焼土や炭化物は検出されていない。本遺溝の性格は、不明。出土遺物は、土師器坏が底部付近の破片を主として検出している。No.1は、1／3程度の



第169図　第104号遺構出土遺物実測図

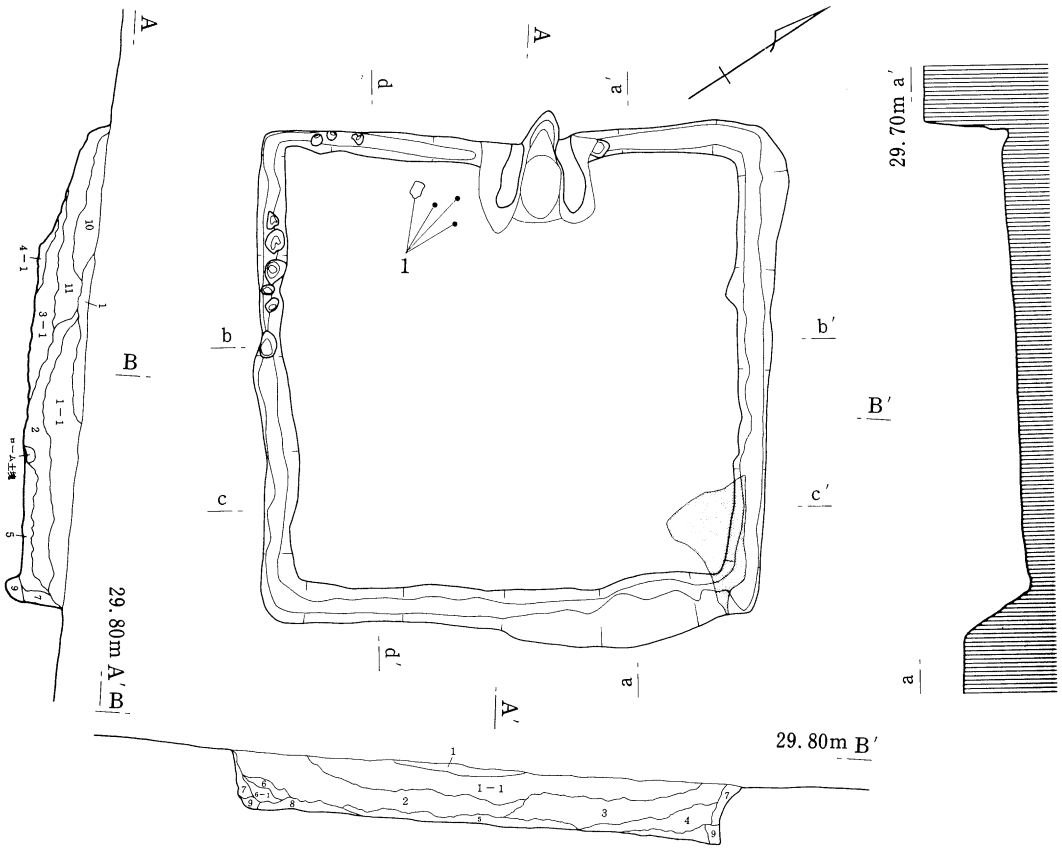
残存で小型の箱型を呈する。器厚も比較的薄い。底部は、右回転ロクロ糸切り離し痕が認められる。他の破片も、ほとんどが右回転ロクロの糸切り離し痕をもつ。焼成は、普通で、特に摩耗していない。

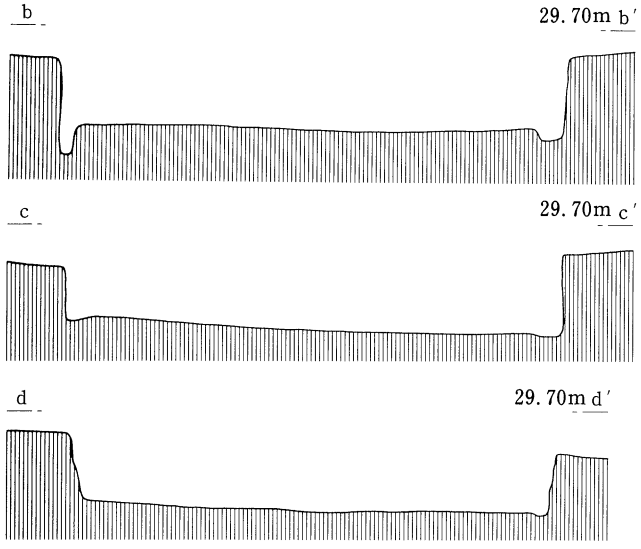
(29) 第126号住居跡

第126号住居跡は、調査地区の中央付近、やや東寄りに位置する。平面形体は、やや隅円の方形を呈し、規模は、長軸4.13m、短軸4.12mである。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－55°－Wを示す、壁の立ち上がりは、最大で56cmである。床面は、南東側の床面が、約10cm低い。床面積は、約14.58㎡である。壁溝は、四周し、幅は、2～17cm、深さは、3～23cmを測る。ピットは、西側隅に多く存在している。床面内の主柱穴相当などのピットは、検出されていない。焼土の流れ込みは、東側の隅に認められる。竪穴の覆土は、黒褐色土と暗褐色土を主体に、一部にローム土塊も含んでいるが、全体的には、自然堆積とみられる。カマドは、北西側壁のやや東寄りに設置され、保存状況は、悪い。煙道部は、急斜面で、竪穴壁を約25cm掘り込んでいる。No.2は、甕の底部と考えられる。底径5.8cm、No.3は、甕の胴上位部片である。覆土出土。

第80表　第126号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図173 1	a.(高坏) b.カマド左側床面 c.脚端部欠損、全体の1/3残存	坏口径(17.5) 脚小径(8.0) 脚裾部径(10.5) 器高(11.2)	d.緻密 e.少し不良	脚部は、径が広く、高さは低い。坏部は、やや大きく開く体部をもつ。	口縁部＝横ナデ 坏体部＝横方向ヘラミガキ 脚部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色一部淡褐色	口縁部＝横ナデ 坏部＝ヘラミガキ 脚部＝指ナデと押圧 脚裾部＝横ナデ 〈色調〉褐色



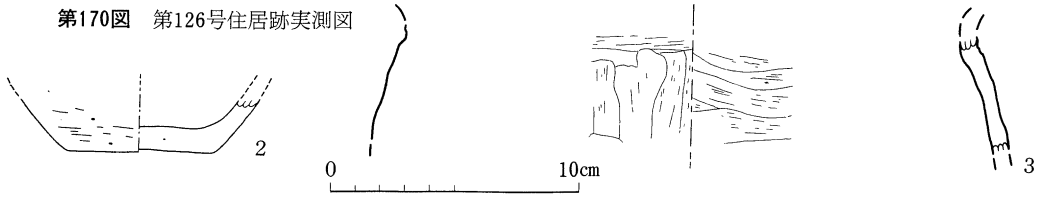


第126号住居跡土層説明

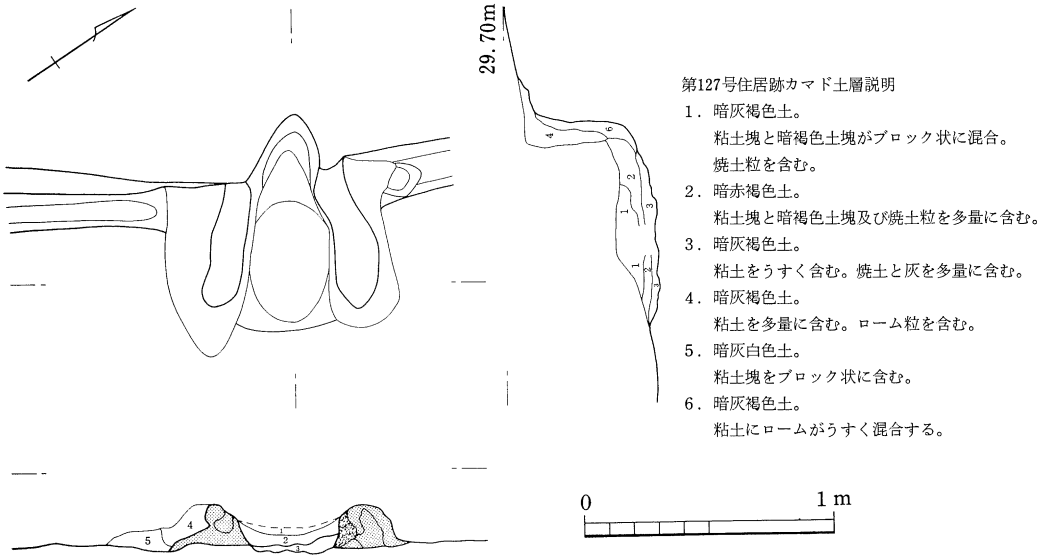
1．黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
1－1．明るく、ローム土塊を少量含む。
2．暗褐色土。ローム土塊を含む。
3．黒褐色土。ローム土塊を含む。
3－1．炭粒を極少量含む。
4．黒褐色土。褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を少量含む。
4－1．粘土塊を多量に含む。
5．暗褐色土。褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を少量含む。炭粒を極少量含む。
6．黒褐色土(軟質)。ローム粒を多量に含む。
6－1．明るく、ローム土塊を多量に含む。
7．褐色土(やや軟質)。ローム粒を多量に含む。
8．暗褐色土(硬質)。硬質のローム土塊を多量に含む。
9．褐色土(少し軟質)。ローム粒を多量に含む。
10．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を少量含む。
11．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。ローム粒と粘土粒を含む。

0　1　2 m

第170図　第126号住居跡実測図



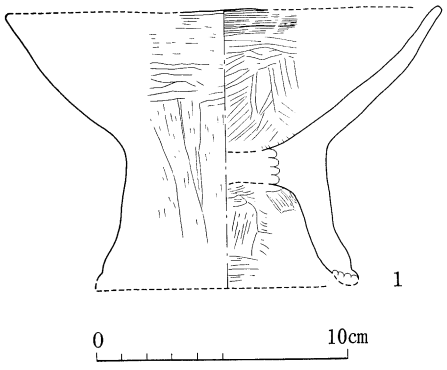
第171図　第126号住居跡出土遺物実測図(２・３)



第127号住居跡カマド土層説明

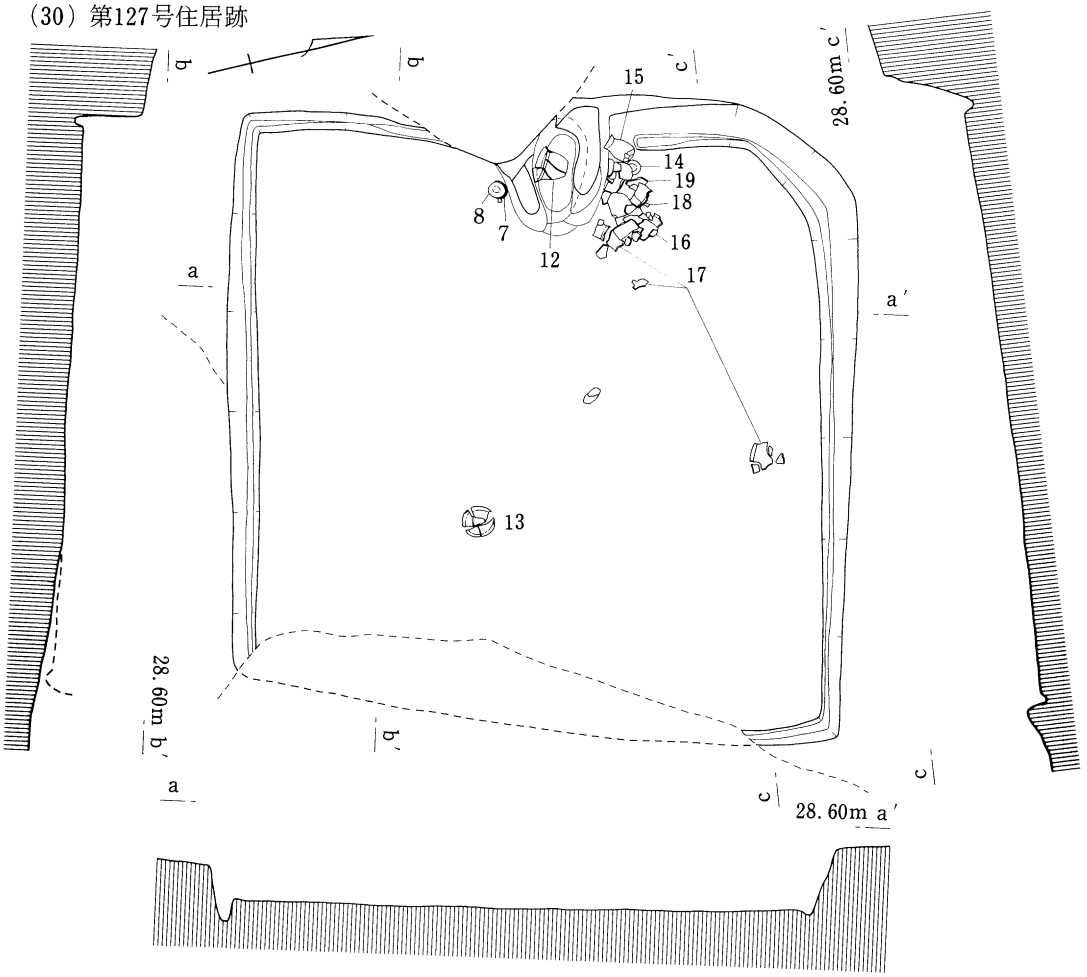
1．暗灰褐色土。
　粘土塊と暗褐色土塊がブロック状に混合。
　焼土粒を含む。
2．暗赤褐色土。
　粘土塊と暗褐色土塊及び焼土粒を多量に含む。
3．暗灰褐色土。
　粘土をうすく含む。焼土と灰を多量に含む。
4．暗灰褐色土。
　粘土を多量に含む。ローム粒を含む。
5．暗灰白色土。
　粘土塊をブロック状に含む。
6．暗灰褐色土。
　粘土にロームがうすく混合する。

第172図　第126号住居跡カマド実測図

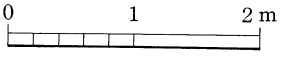


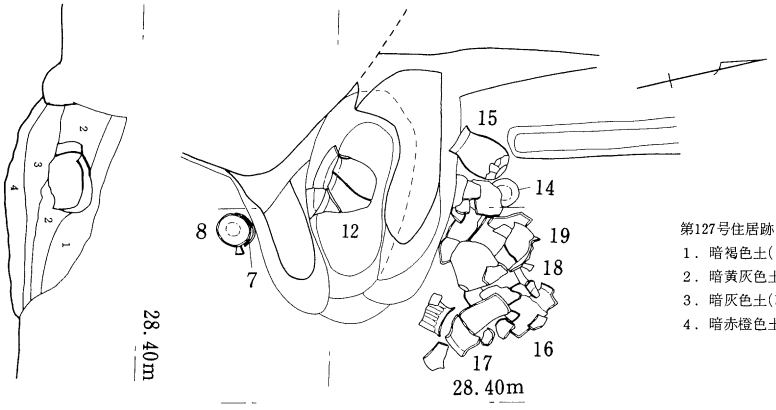
第173図　第126号住居跡出土遺物実測図（１）

（30）第127号住居跡



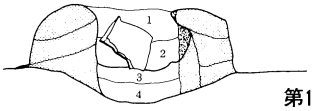
第174図　第127号住居跡実測図

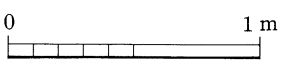




第127号住居跡カマド土層説明

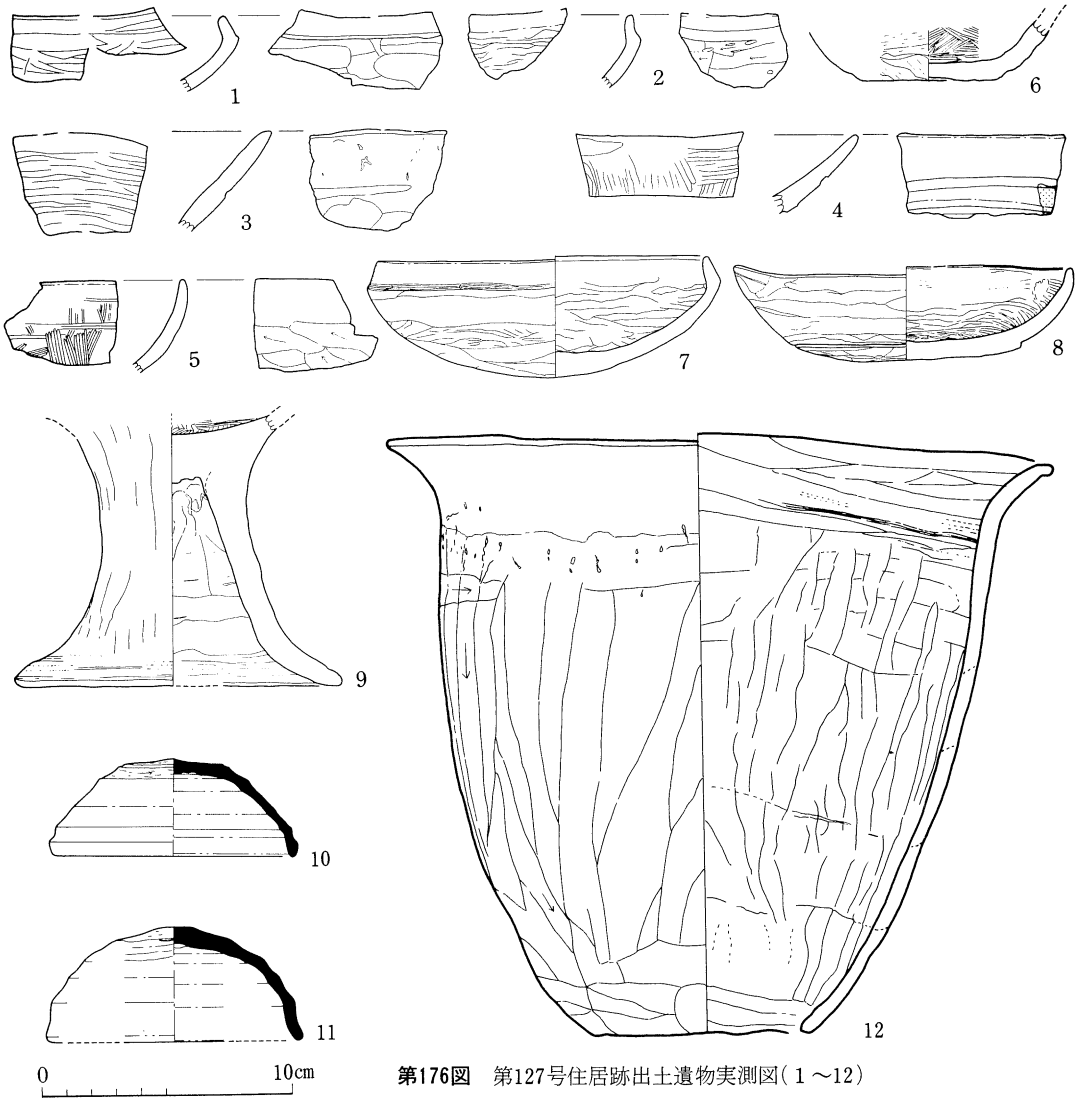
1．暗褐色土(少し硬い)。粘土と山砂を少量含む。
2．暗黄灰色土(硬い)。粘土を多量に含む。
3．暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。
4．暗赤橙色土(軟質)。焼土と炭化物を多量に含む。



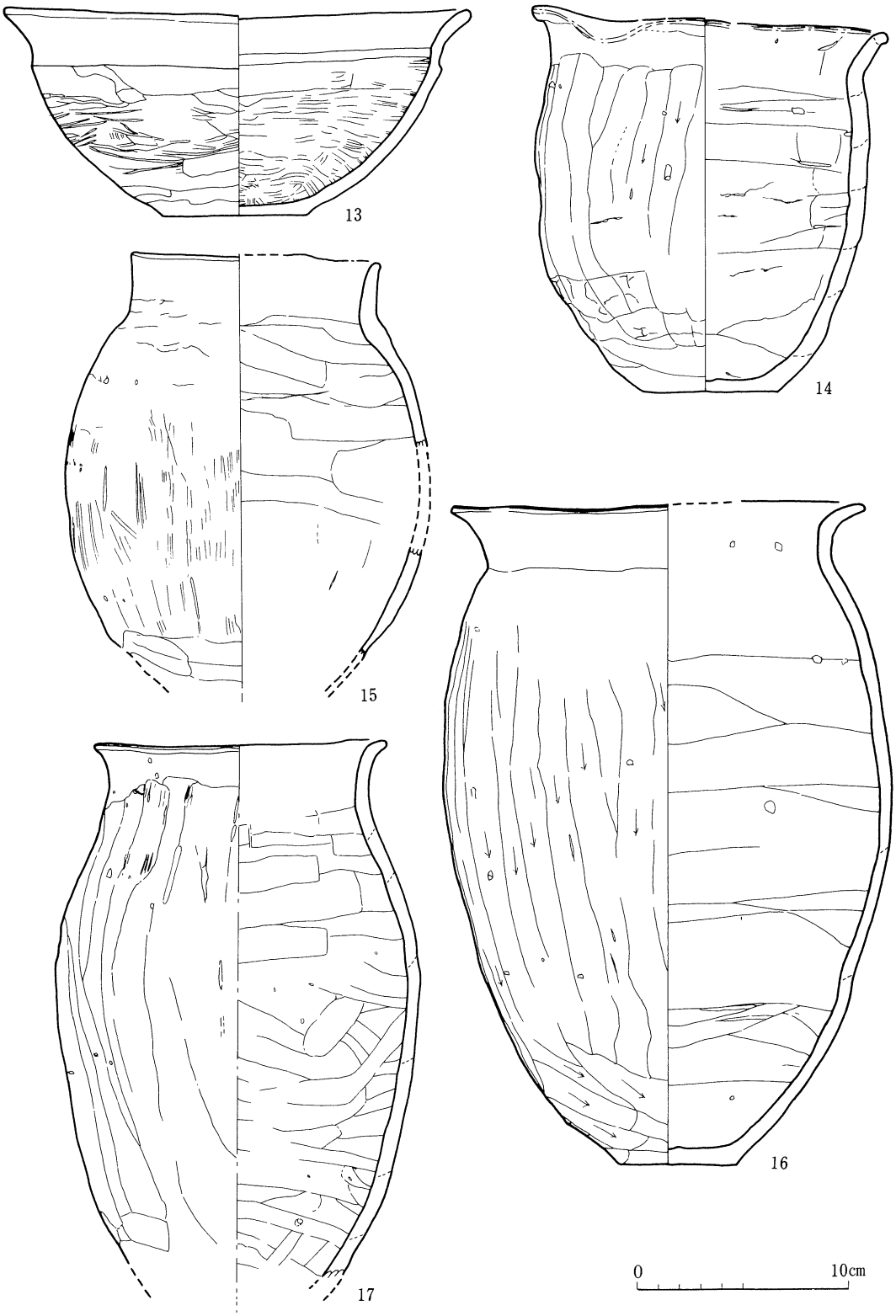


第175図　第127号住居跡カマド実測図

第127号住居跡は、調査地区の中央東寄りに位置し、東側の小谷に向って傾斜している地点である。第129号住居跡の南東隅が当住居跡のカマド付近を切っている。平面形体は、方形で、北西隅は丸みを帯びている。規模は、長軸5.13m、短軸4.98mを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－77°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で58cmである。床面は、傾斜面に設置されているため、東側の保存が悪く、約10cm削平されている。また、全体に西から東へ、5cm低くなっている。床面積は、約21.47㎡である。壁溝は、東側削平部分などを除いて、ほぼ全周し、幅は、3～10cm、深さは、3～17cmを測る。床面内のピットは、検出されていない。竪穴の覆土は、自然堆積とみられる。カマドは、西側壁のほぼ中央に設置され、南西側(左側上部)を第129号住居跡によって切られているため、保存状況は、悪い。出土遺物は、No.13の鉢が東側床面より、No.17の甕が北側床面より、また、No.7・8・12・14～19がカマド周辺より、他は、覆土下位より検出されている。



第176図　第127号住居跡出土遺物実測図(1～12)



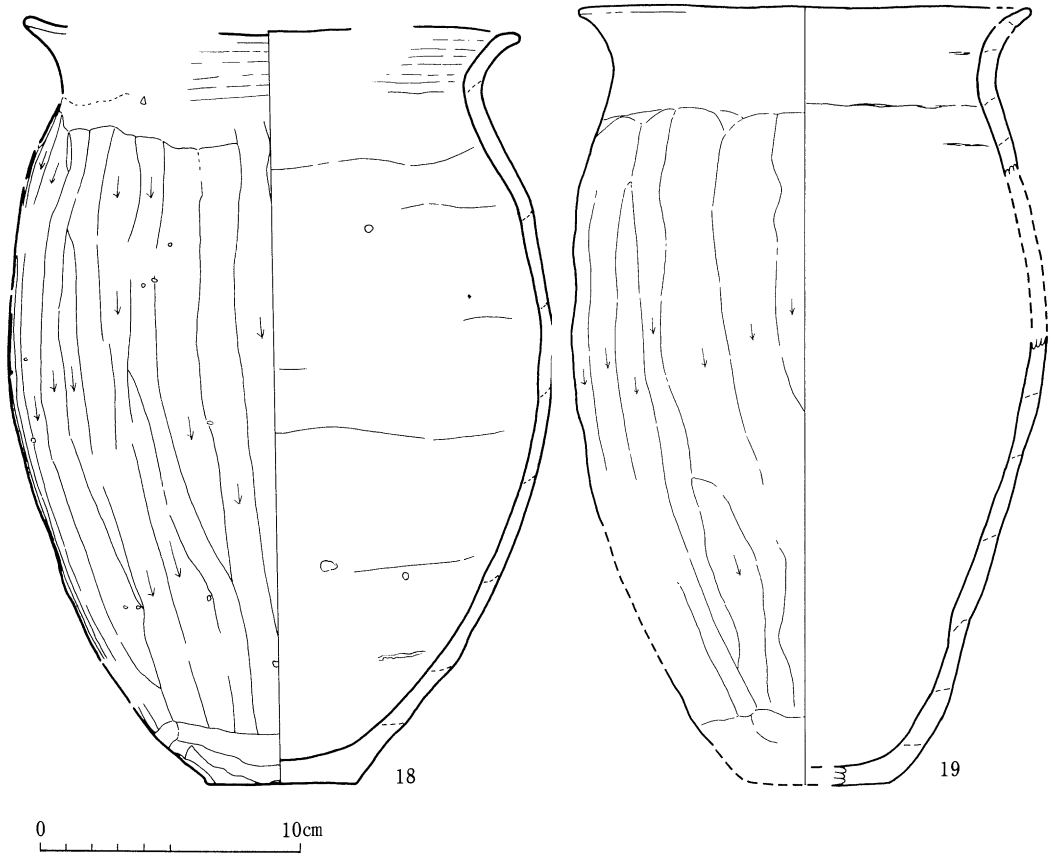
第177図　第127号住居跡出土遺物実測図(13～17)

第81表　第127号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図176 6	a.(鉢) b.覆土下位 c.全体の 1/6残存	底径5.5	d.緻密 e.良好	平底で、体部は椀状に立ち上がる。	体部＝横及び斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	体部＝ヘラミガキ黒色処理がなされる。 〈色調〉黒色
図176 7	a.坏 b.カマド及び周辺 c.完形	口径13.2 体部最大径14.1 器高4.9	d.緻密 e.良好	丸底で、浅い椀状を呈し、口縁部は、稜をもち、少し内傾して立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図176 8	a.坏 b.カマド及び周辺 c.完形	口径13.5 器高3.8	d.緻密 e.良好	やや平偏で、丸底、下位に明瞭な稜をもち、口縁部まで、浅い椀状を呈する。	全面＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色、暗褐色	全面＝ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色 茶褐色
図176 9	a.(高坏) b.覆土下位 c.脚部のみ	裾部径13.1 脚小径5.9	d.砂粒を含む e.少し不良	裾部は、少し横に広がり、立ち上がりは、柱状で、がっしりしている。	脚裾部＝横ナデ 脚部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色	脚裾部＝横ナデ 脚部＝ヘラケズリダシ 坏部＝ヘラミガキ
図176 10	a.須恵器蓋坏 b.覆土下位 c.全体の 3/5残存	口径9.8 器高3.9	d.砂粒を含む e.普通	小型で椀状を呈する。天井部は、丸みを帯びる。	天井部は、2段の左回転のヘラケズリがなされる。 〈色調〉暗灰褐色	〈色調〉淡灰褐色
図176 11	a.須恵器蓋坏 b.覆土下位 c.全体の 1/4残存	口径10.3 器高4.6	d.緻密 e.普通	小型で椀状を呈する。天井部は、少し尖っている。	10と同様 〈色調〉両面とも暗灰褐色	
図176 12	a.甕 b.カマド付近 c.完形	口径26.6 孔径8.8 器高24.0	d.緻密 e.普通	孔は広めで、胴部は孤状に立ち上がり、口縁部は、外反し、口唇部はつまみ出す。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 下位＝横方向ヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色	口縁部＝横方向の指ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、横方向のヘラミガキ 胴下位＝横方向ヘラケズリ
図177 13	a.鉢 b.東側床面 c.完形	口径22.1 頸部径19.4 底部径6.9 器高9.5	d.緻密 e.普通	平底で椀状に立ち上がり、口縁部は、稜をもって外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラケズリの後、横方向ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色、茶褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラミガキ 外面と同様の色調
図177 14	a.甕 b.カマド付近 c.完形	口径16.9 胴部最大径15.9 底径6.5 器高17.7	d.小礫4㎜以下を含む e.普通	平底で、器高が低く小型である。口縁部が窪んで注口のような形体を呈する。胴部最大径は上位。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位は、横方向 〈色調〉黒褐色、淡褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデ 〈色調〉黒褐色、暗褐色
図177 15	a.甕 b.カマド付近 c.全体の3/5	口径11.8 頸部径11.7 胴部最大径(17.3)	d.小礫3㎜～を含む e.普通	やや長胴で、底部を欠損、胴部最大径は中位、口縁部は、あまり外反しない。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリの後、縦方向のヘラミガキ 〈色調〉暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデ 〈色調〉黒褐色
図177 16	a.甕 b.カマド付近 c.5%欠損	口径19.6 頸部径16.3 胴部最大径21.3 底径5.6 器高31.3	15と同じ	長胴で、底部は、小さく、胴部最大径は中位、口縁部は、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 胴部下位＝斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、淡褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉淡褐色、暗褐色
図177 17	a.(甕) b.カマド付近 c.底部欠損全体の1/2	口径(8.9) 頸部径(12.3) 胴部最大径(17.3)	15と同じ e.焼成良好	長胴で、胴部最大径は上部に有り、口縁部は、小さく外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉茶褐色、黒褐色	16と同様 〈色調〉淡褐色、暗褐色
図178 18	a.甕 b.カマド付近 c.口縁部欠損、全体の80%	口径(19.9) 頸部径16.7 胴部最大径21.8 底径6.0 器高30.1	d.小礫4㎜以下を含む e.普通	長胴で、胴部は、やや丸みをもち、胴部最大径は、中位やや上で、口縁部は、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 胴下位＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色、暗褐色	16と同様 〈色調〉暗褐色
図178 19	a.(甕) b.カマド付近 c.全体の60%の残存	口径(18.0) 頸部径(15.3) 胴部最大径(18.9) 底部(6.9) 器高(31.1)	d.小礫4㎜以下を含む e.普通	長胴で胴部最大径は上部に有り、口縁部は、外反する。	18と同様 〈色調〉黒褐色、焼褐色	18と同様 〈色調〉淡褐色

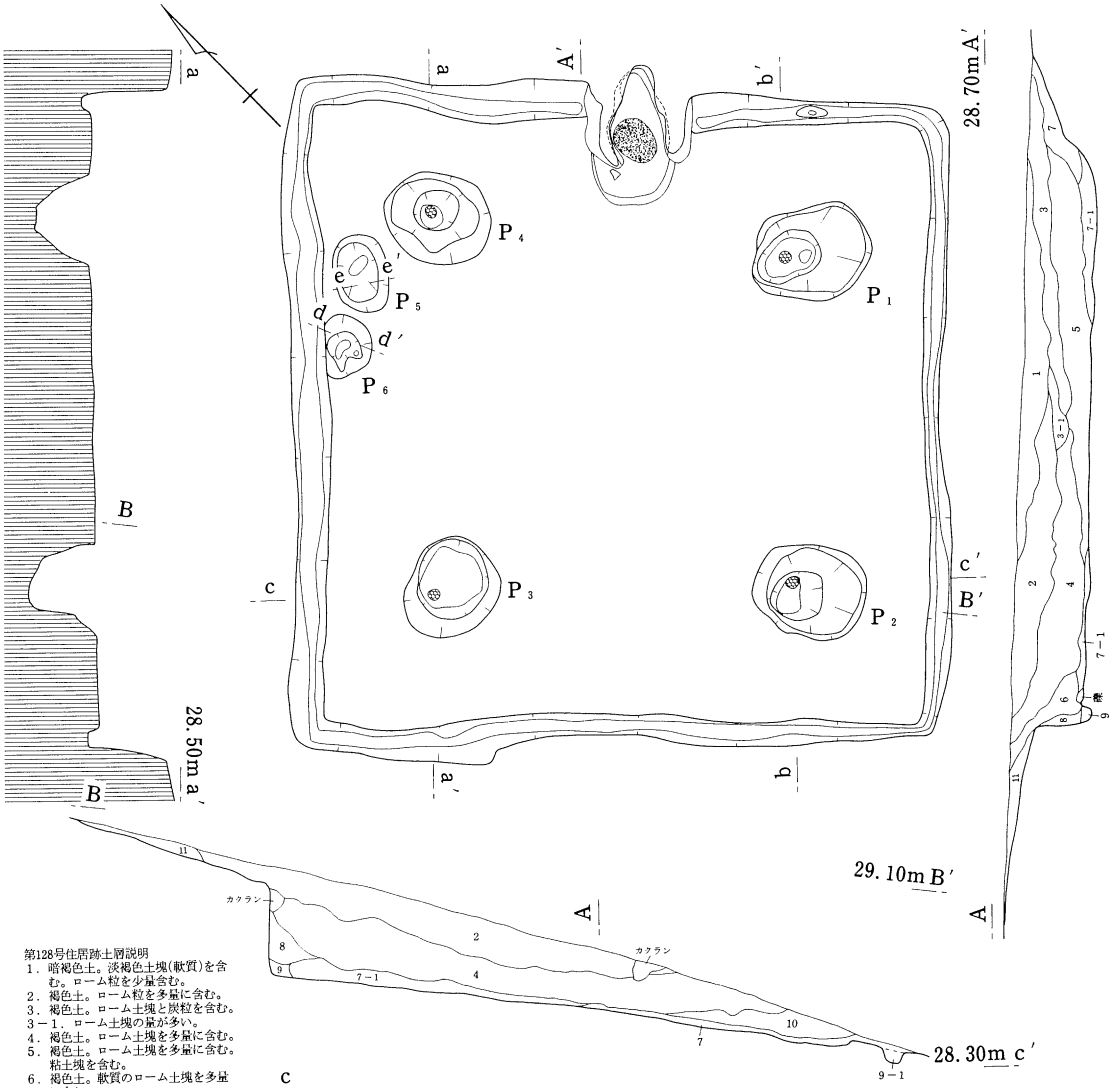
第82表　第127号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.器厚	器質 c.胎土 d.焼成	形態、成整形、文様等の特徴及び色調	出土位置他
図176 1	a.(坏) b.5～4.5mm	d.緻密 e.良好	口縁部の破片で、体部は浅い埦状を呈し、口縁部は稜をもち、直線的に小さく内傾する。口縁部外面＝横ナデ、体部外面＝横方向のヘラケズリ、内面＝横方向のヘラミガキ〈色調〉両面暗褐色	覆土内
図176 2	a.(坏) b.5～4mm	1と同様	体部は埦状で、口縁部は稜をもち、小さく直立する。口縁部内外面とも横ナデ、体部外面＝横方向のヘラケズリ、体部内面＝横方向のヘラミガキ〈色調〉褐色、暗褐色	覆土内
図176 3	a.(鉢) b.8.5～7mm	1と同様	直線的に大きく開いて立ち上がる体部をもつ。口縁部内外面とも横ナデ、体部外面＝ヘラケズリ、体部内面＝横方向のヘラミガキ〈色調〉外面、暗褐色･内面、淡茶褐色	覆土内
図176 4	a.(鉢) b.8～5mm	1と同様	直線的に大きく開いて立ち上がる体部をもち、口縁部は、稜を有する。内外面の成整形は、3と同様。内面の一部に赤彩が認められる。外面、暗褐色･内面、淡橙褐色	覆土内
図176 5	a.(坏) b.6～5mm	1と同様	薄手で埦状を呈する。口縁部外面は、横ナデ、体部外面は、横方向のヘラケズリ、内面は、全面ヘラミガキ〈色調〉両面暗褐色	覆土内

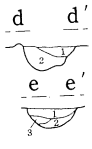


第178図　第127号住居跡出土遺物実測図(18･19)

（31）第128号住居跡

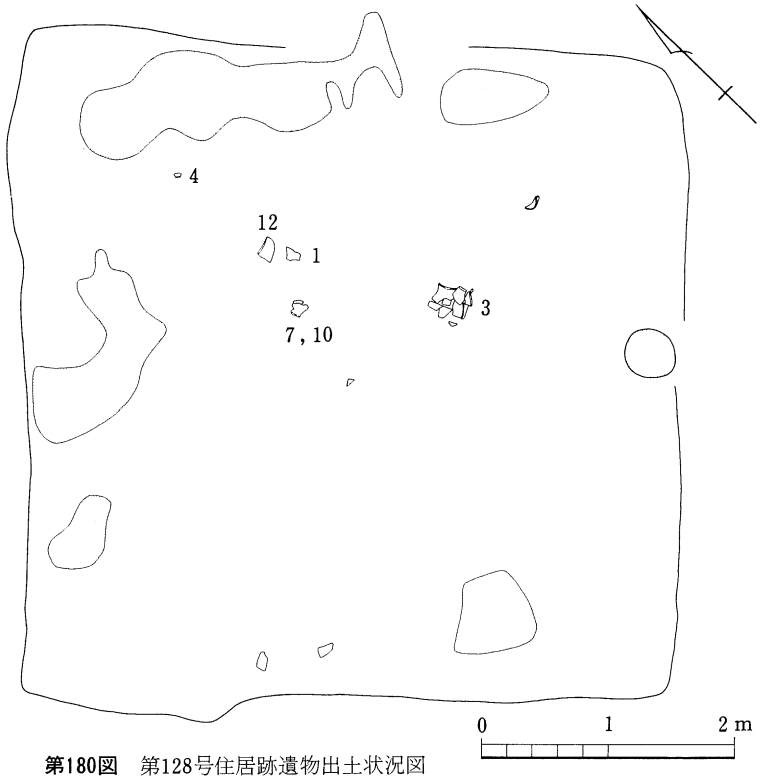


第128号住居跡土層説明
1．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。ローム粒を少量含む。
2．褐色土。ローム粒を多量に含む。
3．褐色土。ローム土塊と炭粒を含む。
3－1．ローム土塊の量が多い。
4．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
5．褐色土。ローム土塊を多量に含む。粘土塊を含む。
6．褐色土。軟質のローム土塊を多量に含む。
7．褐色土。ローム土塊をブロック状に含む。
7－1．粘土を全体に薄く含む。
8．褐色土(少し軟質)。ローム粒を多量に含む。
9．褐色土(軟質)。ローム粒をブロック状に含む。
9－1．少し硬質。
10．暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。
11．褐色土(少し硬質)。暗褐色土と褐色土がブロック状に呈する。

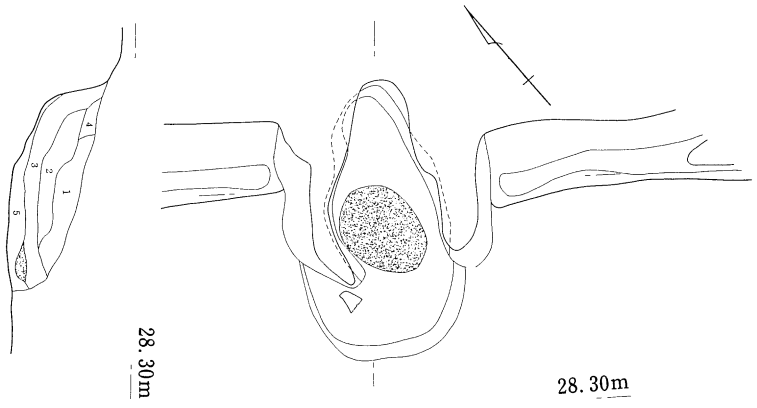


第128号住居跡d－d′，e－e′土層説明
1．褐色土(少し軟質)。ローム土塊を含む。
2．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
3．褐色土。ローム土塊をブロック状に含む。

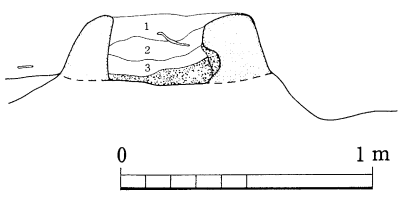
第179図　第128号住居跡実測図



第180図　第128号住居跡遺物出土状況図



第128号住居跡カマド土層説明
1．暗黄灰色土(軟質)。山砂を多量に含む。
2．暗黄灰色土(少し軟質)。山砂を含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
3．白灰色土(硬質)。粘土を多量に含む。山砂を少量含む。
4．明赤橙色土(軟質)。山砂が焼土化した土。
5．暗赤橙色土(軟質)。焼土と灰を多量に含む。炭化物を少量含む。



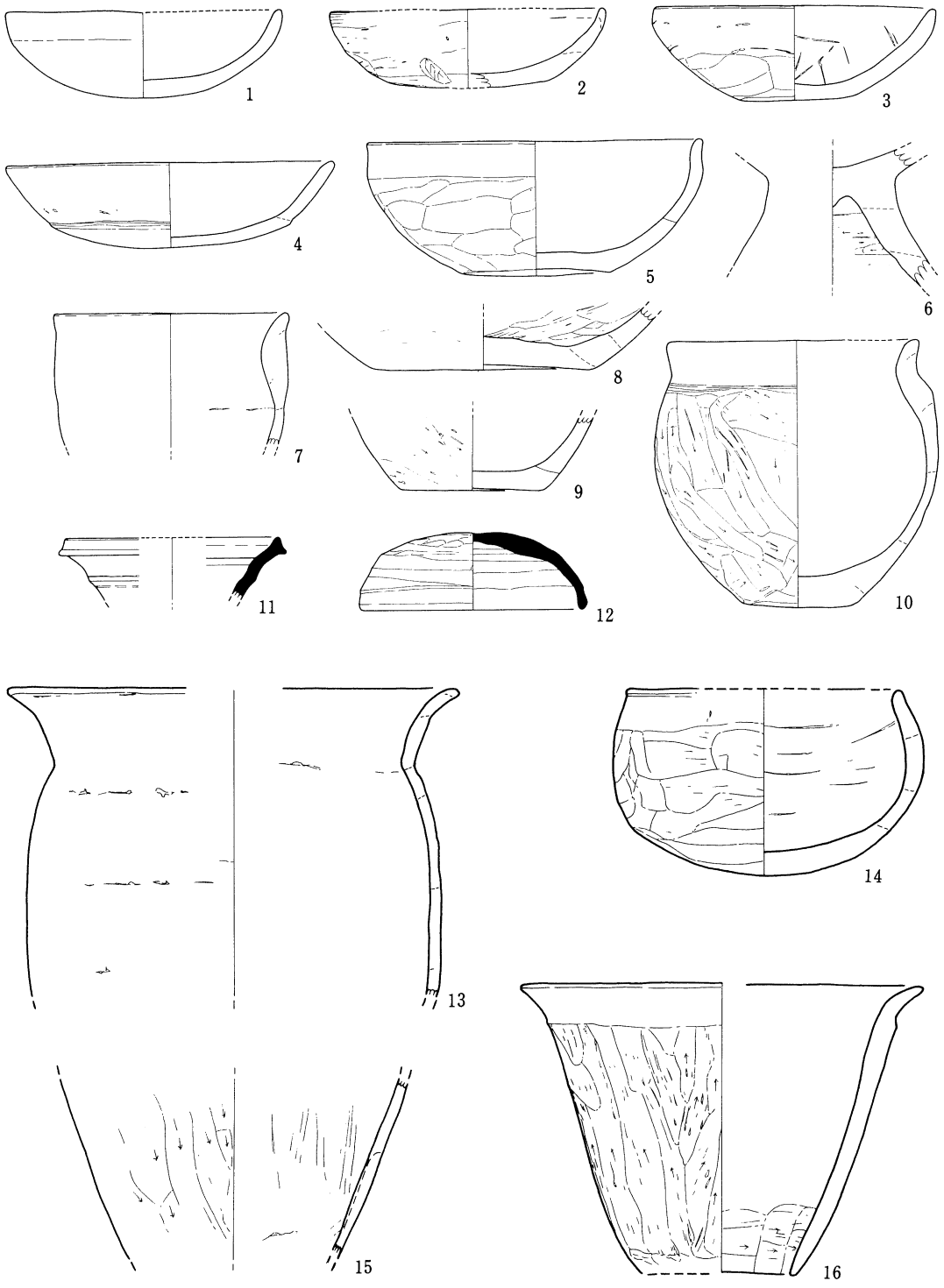
第181図　第128号住居跡カマド実測図

第128号住居跡は、調査地区の中央東寄りに位置し、東側の小谷に向かって傾斜している上部地点である。平面形体は、不整方形を呈し、規模は、長軸5.40m、短軸5.20mを測る。主軸方位は、N－44°－Eを長軸方向が示す。壁の立ち上がりは、東南に向かって傾斜しているため、北西側壁が高く、南東側壁が低く残っている。最大で75cmである。床面は、傾斜面に占地されているため、北西側より南東側が低く約15cmのレベル差がみられる。床面積は、約25.72㎡である。壁溝は、四周し、幅は、3～19cm、深さは、4～17cmを測る。床面内のピットは、6本検出され、P_1～P_4の4本は、主柱穴と考えられ、各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.26m、P_2～P_3が2.85m、P_3～P_4が3.05m、P_4～P_1が2.83mである。4本とも下端に柱のあたり痕跡が認められる。P_5とP_6は、北側床面に、各々が近接して存在し、P_6は、壁溝とする。また、下端

には、柱のあたり痕跡は認められない。竪穴の覆土は、上層は、自然堆積とみられるが、下層は、褐色土が主体で、中にローム土塊を多量に含んでおり、人為的な埋めもどしの可能性が有る。カマドは、北東側壁のやや南寄りに設置されている。竪穴壁を約30cm逆U字形に掘り込んでいる。出土遺物は、カマド前面床面付近に多く検出されている。他の遺物は、覆土下位の出土が多く、人為的に捨てられた可能性もある。

第83表　第128号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図182 1	a.坏 b.覆土中央 c.全体の2/3	口径12.5 器高3.9	d.緻密 e.少し不良	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、わずかに直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色・淡褐色	全面＝ヘラミガキ 両面とも摩耗が激しい 〈色調〉暗褐色
図182 2	a.坏 b.覆土 c.全体の1/3	口径(12.45) 器高(3.6)	d.砂粒を含む e.少し不良	丸底であるがやや平底に近く、体部は、浅い椀状で、口縁部は、短かく直立。	1と同様	1と同様
図182 3	a.坏 b.覆土 c.ほぼ完形	口径12.7 器高4.3	2と同様	平底で、体部は、浅い椀状で、口縁部は小さく直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色・淡褐色	全面＝ヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図182 4	a.坏 b.覆土 c.全体の3/4	口径14.8 器高3.9	d.緻密 e.普通	丸底で、器高の1/3付近より稜をもって外反ぎみに立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	全面＝ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図182 5	a.鉢 b.覆土 c.全体の70%の残存	口径(15.2) 器高6.2	d.砂粒を含む e.普通	平底で、体部は、椀状に立ち上がり、口縁部は、直立ぎみに立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色・黒褐色	全面＝ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図182 6	a.(高坏) b.覆土 c.脚部のみ残存	脚小径5.7	d.砂粒を含む e.少し良好	脚部は、八の字状に開き、脚裾端部は、欠損している。	摩耗が多い 脚部＝(縦方向)のヘラケズリ 〈色調〉褐色	坏下位＝ヘラナデ 脚部＝ヘラケズリダシ 〈色調〉暗褐色・黒褐色
図182 7	a.(鉢) b.覆土 c.体下位～底部欠損他は1/2	口径(10.4)	d.緻密 e.やや不良	口縁部は、直立ぎみに立ち上がり、器厚が厚くなり、口唇部は、つまみあげている。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉褐色	口縁部～体部＝ヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図182 8	a.(甕) b.覆土 c.底部のみ	底径9.9	d.砂粒を含む e.少し不良	平底で、胴部は、球状を呈し、やや大型と考えられる。	胴下位＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	胴下位＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色
図182 9	a.(甕) b.覆土 c.底部のみ	底径6.45	d.小礫2㎜以下を少量含む e.少し不良	平底で、胴部は、長胴を呈すると考えられる。	胴下位＝斜め方向ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、暗褐色	胴下位＝ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉暗褐色
図182 10	a.鉢 b.覆土 c.ほぼ完形	口径11.3 頸部径11.1 体部最大径12.9 底径5.2 器高12.1	d.砂粒を多く含む e.やや不良	平底で、体部最大径は、上部に有り、体部は球状を呈する。口縁部は、わずかに外反する。器厚は、底部と口縁部が厚い。	口縁部＝横ナデ 胴部＝斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、淡褐色	剝離が多く不明 〈色調〉暗褐色、褐色
図182 11	a.須恵器(長頸壷) b.覆土 c.口縁部のみ1/4残存	口径(9.6) 口唇部稜径(10.3)	d.緻密 e.普通	弧状をもつ逆八の字状に開き、口唇部は横方向につまんで稜をつくりだしている。	〈色調〉暗褐色	〈色調〉暗灰青色
図182 12	a.須恵器蓋坏 b.P_2付近 c.完形	口径10.0 器高3.5	d.砂粒含む e.普通	天井部は、やや平担で、体部は、椀状を呈する。小形である。	天井部は、3段により回転ヘラケズリを施す 〈色調〉淡灰色	〈色調〉灰色
図182 13	a.(甕) b.カマド内 c.上半部のみの残存	口径20.1 頸部径16.1 胴部最大径18.4	d.小礫3㎜を含む e.少し不良	長胴で、胴部最大径を上部にもち、口縁部は外反し、上部は、少し開きぎみ。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 両面とも少し摩耗し、また、粘土紐接合痕跡もわずかにみられる	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 〈色調〉両面とも暗褐色
図182 14	a.鉢 b.覆土 c.全体の80%の残存	口径12.2 体部最大径13.8 器高8.6	d.砂粒を含む e.普通	丸底で、体部は、球状を呈し、口縁部は少し内傾する。口唇部は、わずかに直立。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉黒褐色・褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色

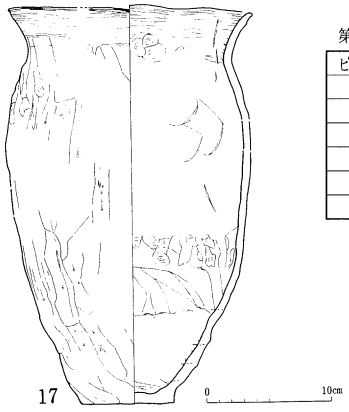


※ この他に、鉄滓が３点出土している。

第182図　第128号住居跡出土遺物実測図（１～16）

第84表　第128号住居跡出土遺物観察表(２)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図182 15	a.(甕) b.覆土 c.胴下位のみの残存		d.砂粒を多く含む e.良好	やや直線的に開いて立ち上がる。長胴甕の胴部下位と考えられる。	胴下位＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色、暗褐色	胴下位＝指ナデ? 〈色調〉褐色
図182 16	a.甑 b.覆土 c.完形	口径18.0 孔径6.8 器高13.1	d.砂粒を多く含む e.普通	大きめの孔をもち、胴部は、直線的に開き、口縁部は、整形による段をもち、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 下位＝横方向ヘラケズリ 〈色調〉両面とも褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 下位＝横方向ヘラケズリ
図183 17	a.甕 b.覆土 c.完形	口径19.4 頸部径16.3 胴部最大径19.5 底径7.3 器高31.8	d.小礫２㎜以下を含む e.良好	平底で長胴を呈し、胴部最大径は、上部に有り、口縁部は、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 一部に指痕跡有り 〈色調〉褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指ナデ 粘土紐接合痕跡が１本わずかに残る 〈色調〉暗褐色



第183図　第128号住居跡出土遺物実測図(17)

第85表　第128号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	97×75	43×27	61
P2	88×74	31×19	52
P3	82×70	51×47	52
P4	86×76	20×17	43
P5	64×43	19×9	17
P6	52×(38)	16×8	22

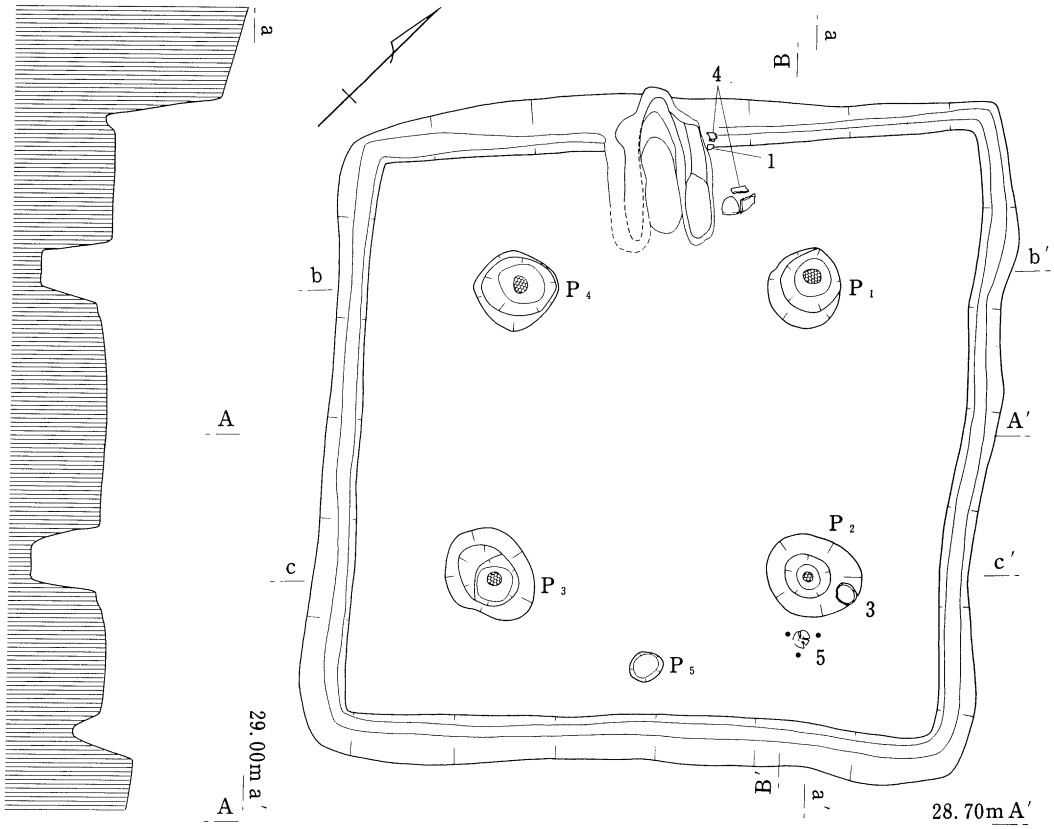
(32) 第129号住居跡

調査地区の中央やや東側に位置し、第127号住居跡の西側プランの一部を切っている。第128号住居跡が南約６ｍに、第120号住居跡が北東約７ｍに存在する。平面形体は、方形を呈し、規模は、5.20ｍ×5.20ｍである。主軸方位は、南西壁方向を測り、N°－46°－Wを示す。竪穴壁は、竪穴の位置が傾斜面に近いため、東側ほど残存状況が悪く、西側で110cm、東側で10cmを測る。床面は、ほぼ平坦で、踏み固められた面は、カマド前面から主柱穴に囲まれた床面中央付近に認められた。床面積は、24.60㎡である。壁溝は、四周し、幅は、６～17cm、深さは、８～20cmを測る。溝内の明確な小ピットは検出されなかった。床面内のピットは、５本検出され、P1～P4は、主柱穴とみられる。各ピット間の距離は、P1～P2が2.40m、P2～P3が2.50m、P3～P4が2.36m、P4～P1が2.30mを測る。P5は、カマドの向い側の壁近くに存在し、出入口相当施設用ピットと考えられる。焼土、炭化物は、検出されていない。竪穴の覆土は、黒褐色土、暗褐色土、褐色土を主体とし、ほとんどの層にローム土塊を多く含んでいる状況より、人為的に埋没した可能性が大きい。カマドは、北西側壁ほぼ中央に設置され、やや焚口の方向が、竪穴壁の直角方向より東南方向に傾いている。煙道部は、竪穴壁をほとんど掘り込んでおらず、立ち上がりは、かなり急傾斜である。出土遺物は、No.１・４は、カマド右側脇の床面より、No.３・５は、P2付近より検出されている。

第86表　第129号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	64×59	30×29	56
P2	78×64	20×17	54
P3	82×68	28×27	60
P4	68×64	38×32	53
P5	25×24	21×16	7

１は、土師器坏で口縁部から体部にかけての破片である。丸底で、浅い小型の坏で、口縁部は、やや直線的に外反する。口径は、



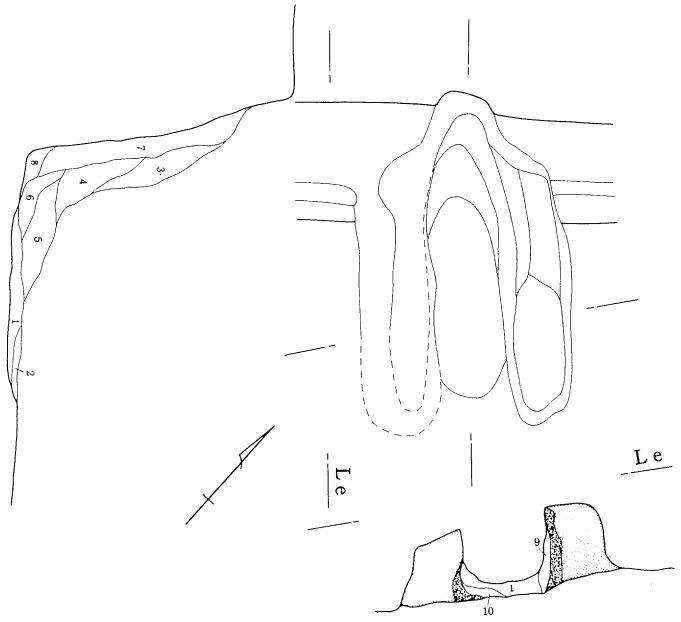
第129号住居跡土層説明

1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。ローム粒を含む。
3．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊を少量含む。
3－1．少し暗い。
3－2．淡褐色土塊が少ない。
4．暗褐色土(明るい)。ローム土塊を含む。
5．暗褐色土。ローム粒を多量に含む。
6．暗褐色土(少し暗く，少し軟質)。ローム土塊を含む。
7．褐色土。ローム粒と焼土粒を含む。
8．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
9．褐色土(軟質)。ローム粒をブロック状に含む。
10．褐色土。ローム土塊を含む。
10－1．少し硬質。
11．軟質のローム土塊。
12．暗褐色土。ローム土塊と焼土粒を少量含む。
13．褐色土。ローム粒と粘土塊を少量含む。

0　1　2 m

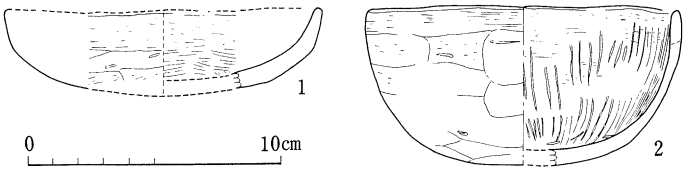
第184図　第129号住居跡実測図

第129号住居跡カマド土層説明
1．暗赤褐色土(少し軟質)。焼土粒、灰、粘土粒を含む。
2．暗灰褐色土。焼土粒、粘土塊を含む。
3．灰褐色土。粘土を多量に含む。焼土粒を少量含む。
4．灰褐色土。粘土塊と焼土塊を含む。
5．暗赤橙色土(少し軟質)。焼土を多量に含む。粘土塊を少量含む。
6．暗灰褐色土。粘土塊を多量に含む。焼土粒と灰を少量含む。
7．灰褐色土。粘土を多量に含む。焼土粒と炭粒を含む。
8．灰褐色土。粘土を多量に含む。ローム土塊を含む。
9．暗赤褐色土。焼土粒と粘土粒を多量に含む。
10．暗灰褐色土(軟質)。灰を多量に含む。焼土粒を含む。



0　1m

第185図　第129号住居跡カマド実測図



第186図　第129号住居跡出土遺物実測図(1・2)

12.6cm、器高は、3.5cmと推定される。胎土は、緻密。焼成は、普通である。外面の口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラケズリ、内面は、前面とも横方向のヘラミガキがなされる。色調は、外面は褐色、内面は、暗褐色を呈する。

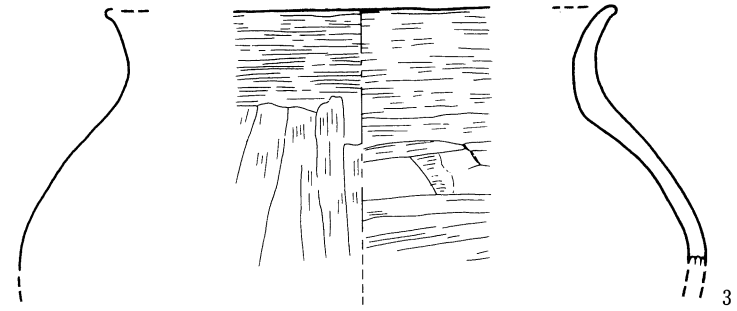
2は、土師器鉢で、底部の一部を欠損する。丸底で、大きめの椀状を呈し、いわゆる磁鉢状である。口径は、12.4cm、器高は、6.3cmを計る。また、器厚は、器形に比して薄手である。胎土は、緻密で、焼成は、普通である。外面の口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラケズリ及びヘラナデ、内面は、横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキが施される。色調は、両面とも、淡赤褐色を呈する。

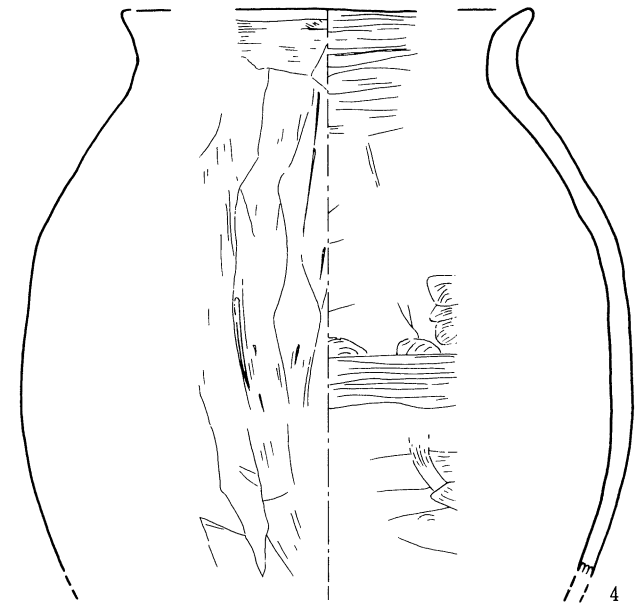
3は、土師器甕で、口縁部から胴上位にかけての破片である。大型の甕で、胴部は球状を呈し、口縁部は、弧状をもって外反する。最大径は、胴部中位にあるとみられる。口径は、23cmを計る。胎土は、砂粒を少し含み、焼成は、普通である。口縁部は、両面とも横ナデ、外面の胴部は、縦方向のヘラケズリ、内面の胴部は、横方向のヘラナデがなされる。色調は、外面が、

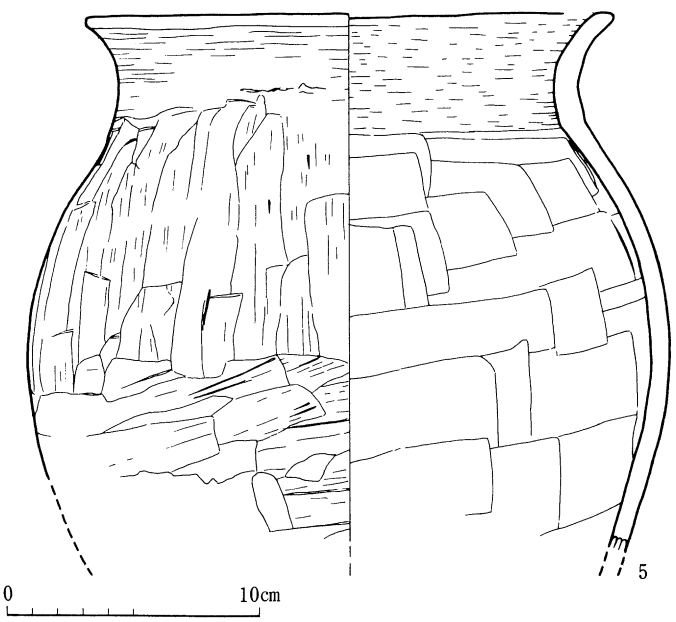
褐色、一部暗褐色、内面は、褐色を呈する。

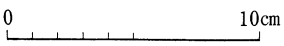
4も、甕で、口縁部から胴下部にかけての破片である。球状にちかい、やや長胴ぎみの形体で、最大径は、胴中位にもつ。口縁部はやや小さく外反する。口径は、16.4cm、胴部最大径は、24.2cmを計る。胎土は、小礫3mmを含む。焼成は、普通。口縁部は、両面とも横ナデ、外面の胴部は、縦及び斜方向のヘラケズリ、内面は、ヘラナデの後、ユビナデがなされる。色調は、外面が、黒褐色と暗褐色、内面は、暗褐色を呈する。

5も甕で、胴下半から底部を欠損する。大型で球状を呈し、口縁部は、やや大きく外反する。口径は、21cm、胴部最大径は、12.75cm。胎土は、砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、両面とも暗褐色と茶褐色を呈する。胴部外面は、縦方向のヘラケズリ、胴部内面は、ヘラナデである。



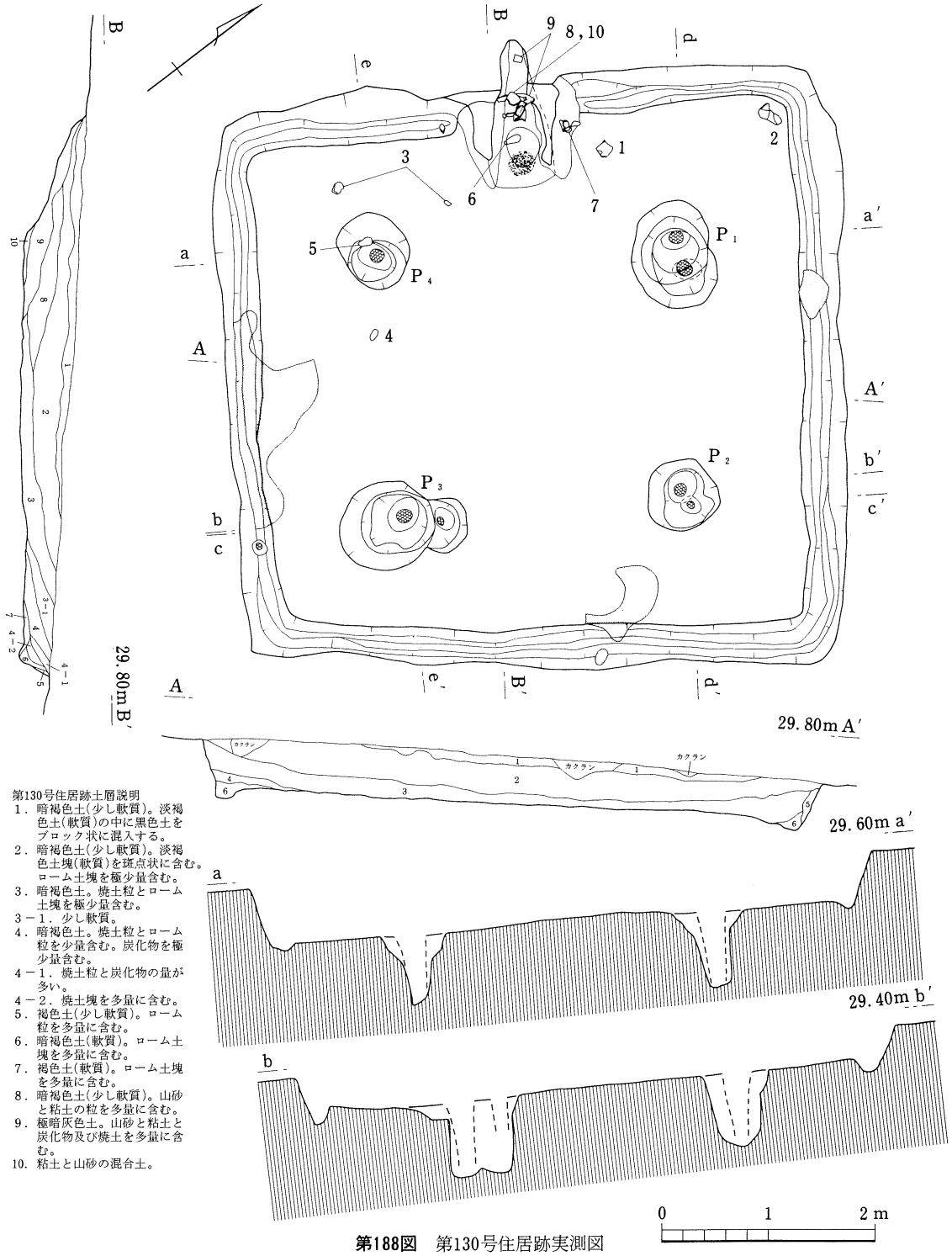






第187図　第129号住居跡出土遺物実測図（３～５）

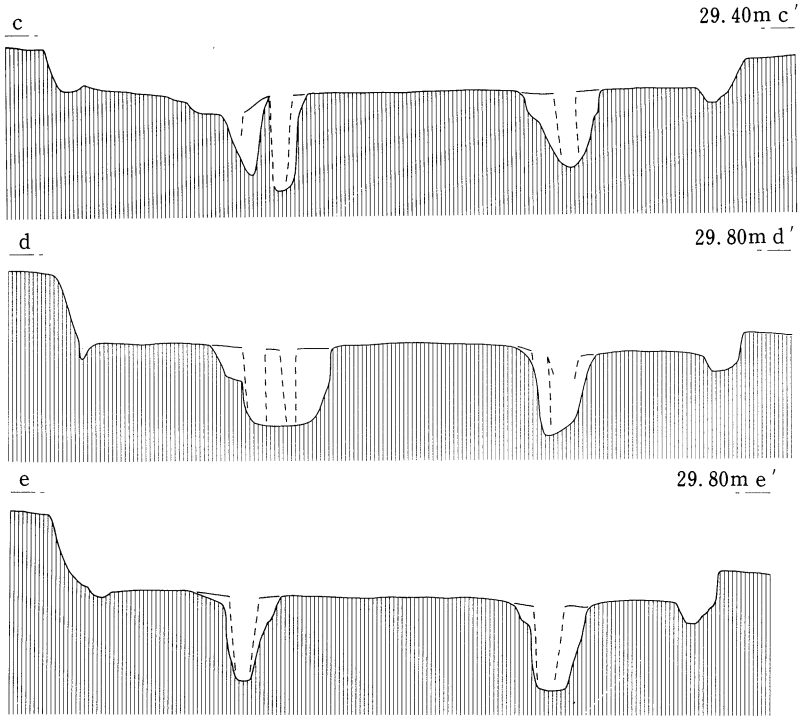
（33）第130号住居跡



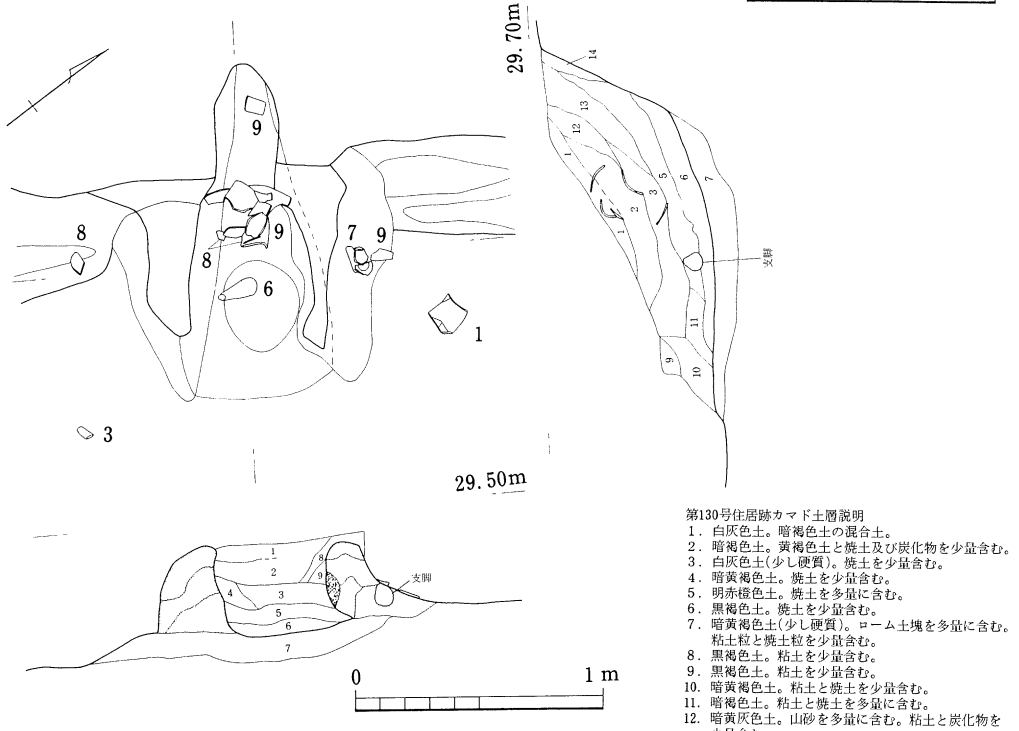
第130号住居跡土層説明

1．暗褐色土(少し軟質)。淡褐色土(軟質)の中に黒色土をブロック状に混入する。
2．暗褐色土(少し軟質)。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。ローム土塊を極少量含む。
3．暗褐色土。焼土粒とローム土塊を極少量含む。
3－1．少し軟質。
4．暗褐色土。焼土粒とローム粒を少量含む。炭化物を極少量含む。
4－1．焼土粒と炭化物の量が多い。
4－2．焼土塊を多量に含む。
5．褐色土(少し軟質)。ローム粒を多量に含む。
6．暗褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
7．褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
8．暗褐色土(少し軟質)。山砂と粘土の粒を多量に含む。
9．極暗灰色土。山砂と粘土と炭化物及び焼土を多量に含む。
10．粘土と山砂の混合土。

第188図　第130号住居跡実測図



第189図　第130号住居跡断面図（c－c′，d－d′，e－e′）　0　1　2 m



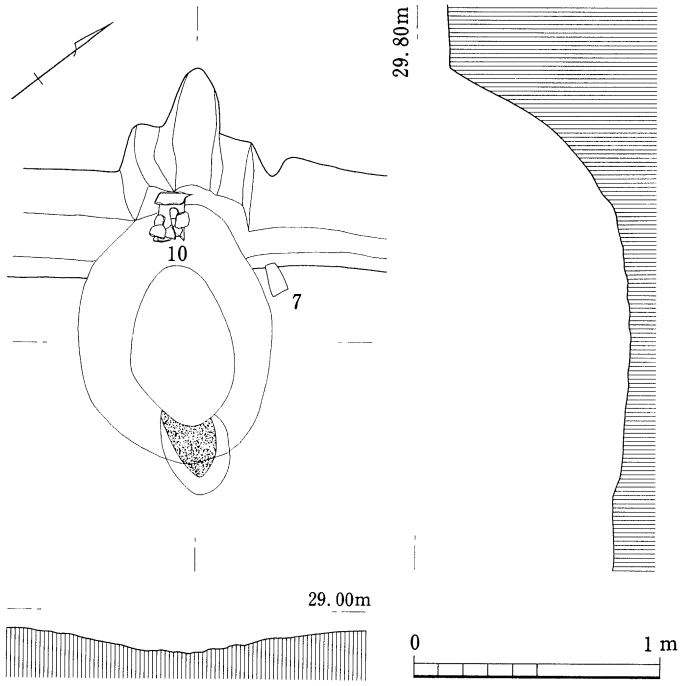
第190図　第130号住居跡カマド実測図

第130号住居跡カマド土層説明
1．白灰色土。暗褐色土の混合土。
2．暗褐色土。黄褐色土と焼土及び炭化物を少量含む。
3．白灰色土(少し硬質)。焼土を少量含む。
4．暗黄褐色土。焼土を少量含む。
5．明赤褐色土。焼土を多量に含む。
6．黒褐色土。焼土を少量含む。
7．暗黄褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多量に含む。粘土粒と焼土粒を少量含む。
8．黒褐色土。粘土を少量含む。
9．黒褐色土。粘土を少量含む。
10．暗黄褐色土。粘土と焼土を少量含む。
11．暗褐色土。粘土と焼土を多量に含む。
12．暗黄灰色土。山砂を多量に含む。粘土と炭化物を少量含む。
13．暗褐色土。山砂を多量に含む。
14．粘土に焼土粒とローム粒を少量含む。

調査地区の南東側に位置し、南東側の小谷に向って傾斜をはじめる地点に位置する。第119b号住居跡が南西約6m、第128号住居跡が東へ約3mに存在する。平面形体は、やや隅円ぎみの不整方形を呈し、規模は、長軸5.80m、短軸5.65mを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、N－55°－Wを示す。壁の立ち上がりは、傾斜部に占地されるため、北西側壁は高く残り、南東側壁は、低く、68～18cmの高さである。床面は、傾斜部のため、北西側より南東側は、約15cm低い。床面積は、約27.36㎡である。壁溝は、四周し、幅は、3～12cm、深さは、6～17cmを測る。床面内のピットは、4本検出され、P_1 P_2 P_3は、下端が2ヶ所ずつ存在する。また、各々柱のあたり痕跡が認められる。P_1～P_4とも主柱穴とみられる。竪穴での焼土の流れ込みは、南側、南東側及び北東側より検出されている。竪穴の覆土は、自然堆積とみられる。カマドは、北西側壁中央付近に設置され、煙道部は、竪穴壁を約40cm掘り込み、平面形は凸形を呈し、立ち上がりは、急傾斜で、高さは68cmを測る。出土遺物は、鉢?2点、高坏の脚2点、長胴の甕3点、土製支脚3点、石1点である。

第87表　第130号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図1921	a.(鉢) b.カマド右側床面 c.全体の1/6底部欠損	口径(10.6) 体部最大径(13.3)	d.緻密 e.普通	体部は、球状に立ち上がり、最大径は、上位に有り、口縁部は、内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、一部淡褐色	ヘラミガキ 〈色調〉暗茶褐色、一部黒褐色
図1922	a.(甕) b.北側隅床面 c.底部～胴下位の1/3を残存	底径(5.6) 体部最大径(16.5)	d.小礫3㎜を含む e.普通	平底で、体部は、球状にちかく、最大径は、体中位と思われる。	体部＝縦及び斜め方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、褐色	体部＝ヘラ横ナデの後、指ナデ 〈色調〉褐色
図1923	a.(高坏) b.西側床面 c.脚下部のみ1/3残存	脚下端径(12.9)	d.緻密 e.普通	八の字状に開いた脚部。	脚下端＝横ナデ 脚下位＝ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色、一部淡褐色	脚下端＝横ナデ 脚下位＝ヘラケズリダシ
図1924	a.(高坏) b.床面中央やや南西 c.脚部のみ	脚下端径(11.0) 脚小径(4.8)	3と同様	脚下位は、八の字状に開き、中位は、くびれて立ち上がり、接合部は、厚い。	脚下端＝横ナデ 脚部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも淡暗褐色	脚下端＝横ナデ 脚部＝ヘラケズリダシ
図1938	a.(甕) b.カマド内 c.口縁部と胴下位を欠損	胴部最大径(19.4)	d.小礫3㎜以下を含む e.普通	胴部最大径は中位。	口縁部＝横ナデ? 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗茶褐色一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉淡暗褐色一部黒褐色
図1939	a.(甕) b.カマド内 c.胴下位を欠損	口径18.1 胴部最大径18.6	d.小礫4㎜以下を多く含む e.少し不良	胴部最大径は、上位にもち、口縁部は、ゆるやかに開く。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝横方向ヘラケズリ 剝離と摩耗が多い	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉両面とも黒褐色、暗褐色、茶褐色
図19310	a.(甕) b.カマド内 c.底部を欠損する	口径(19.6) 胴部最大径(18.9)	d.小礫3㎜以下を含む e.普通	9と同様であるが、口縁部は、くの字状を呈する。全体の1/3の残存である。	9と同様 〈色調〉淡茶褐色	9と同様 〈色調〉淡褐色



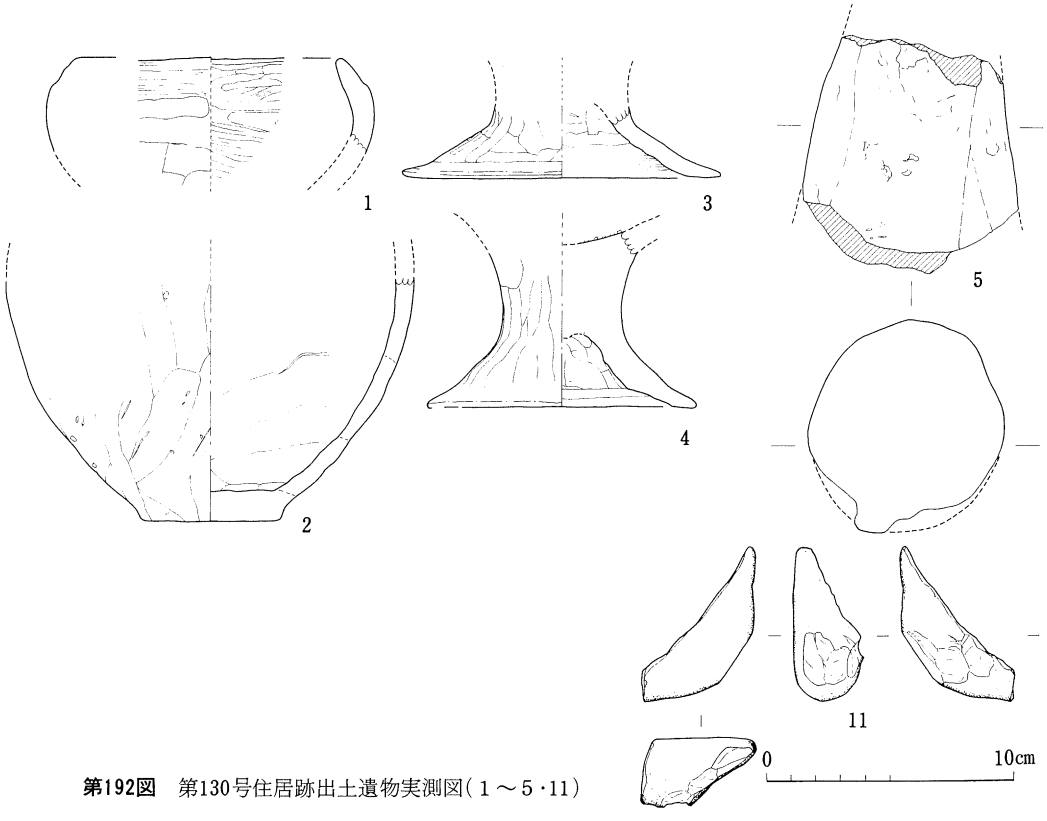
第191図　第130号住居跡カマド掘り方実測図

第88表　第130号住居跡ピット計測表(cm)

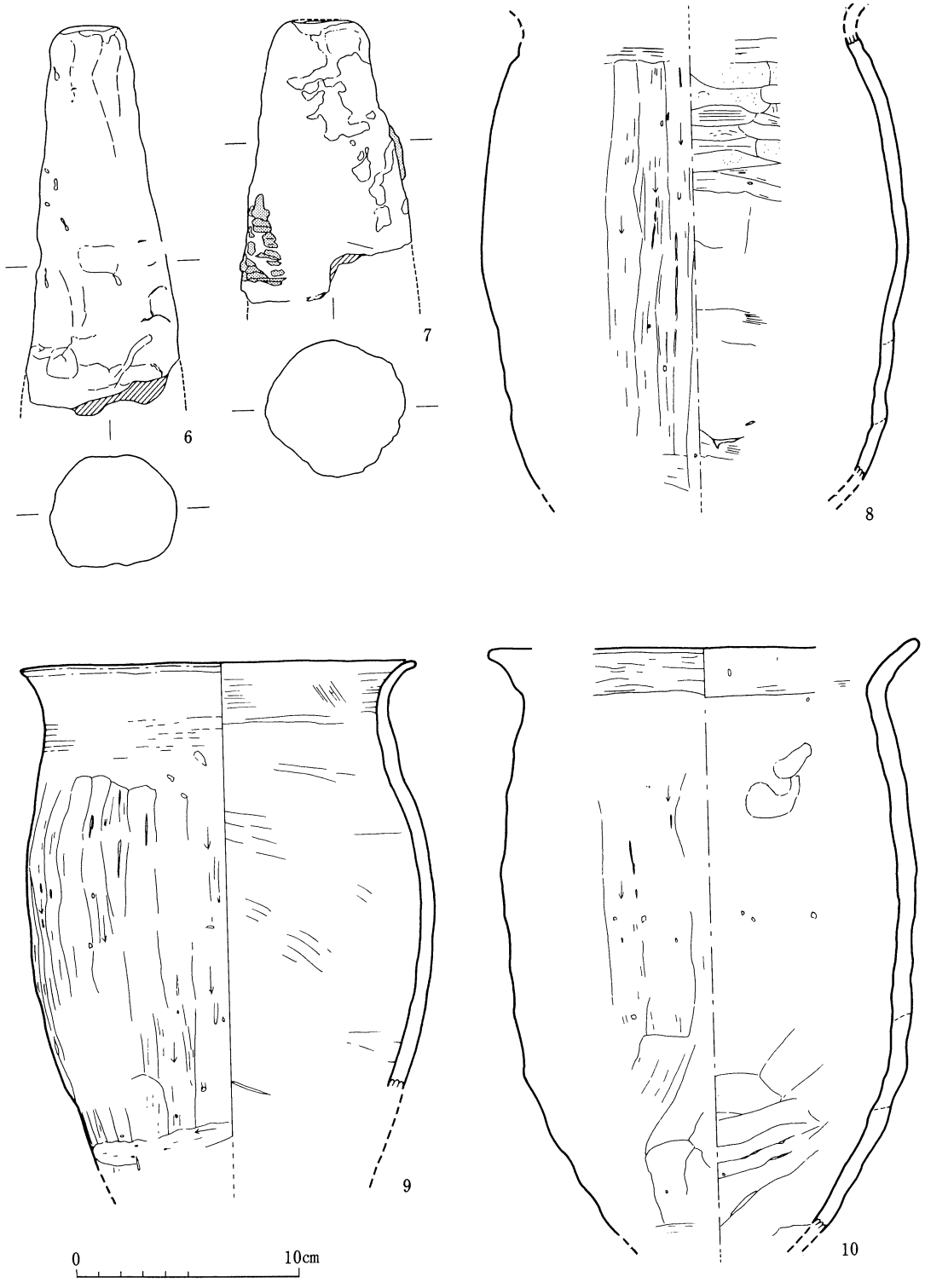
ピット名	上端	下端	深さ
P1	120×72	27×17	65
		28×19	64
P2	69×68	32×27	78
		19×16	73
P3	88×84	37×26	72
	52×(52)	23×18	70
P4	73×60	32×22	66

5.6.7. は、土製支脚で、いずれも上端ほど細くなる不整円柱形である。6.7の上端径は、各々2.7cmと2.9cm。

11は、小礫であり、使用痕が認められず、長さは、6.3cmを計る。色調は、青灰褐色。重さは、約41.8gである。

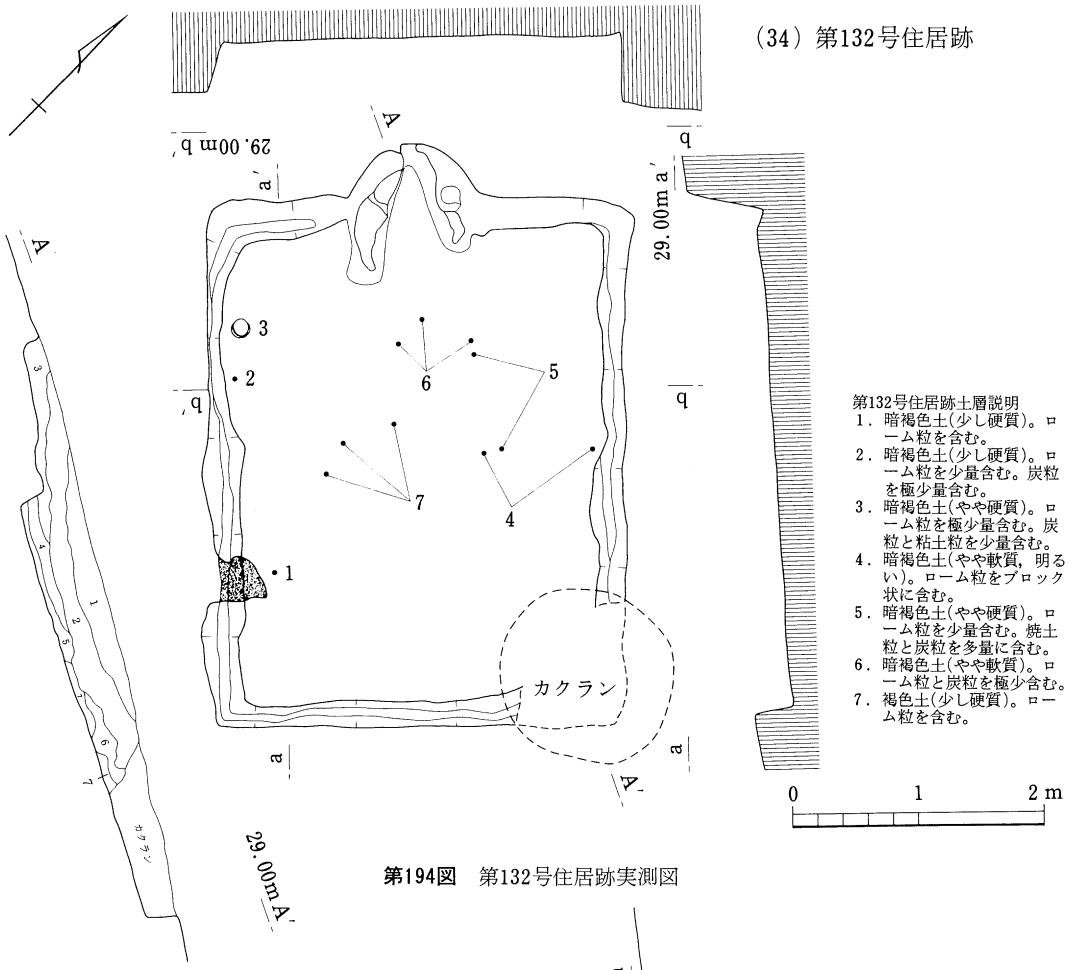


第192図　第130号住居跡出土遺物実測図(1～5・11)



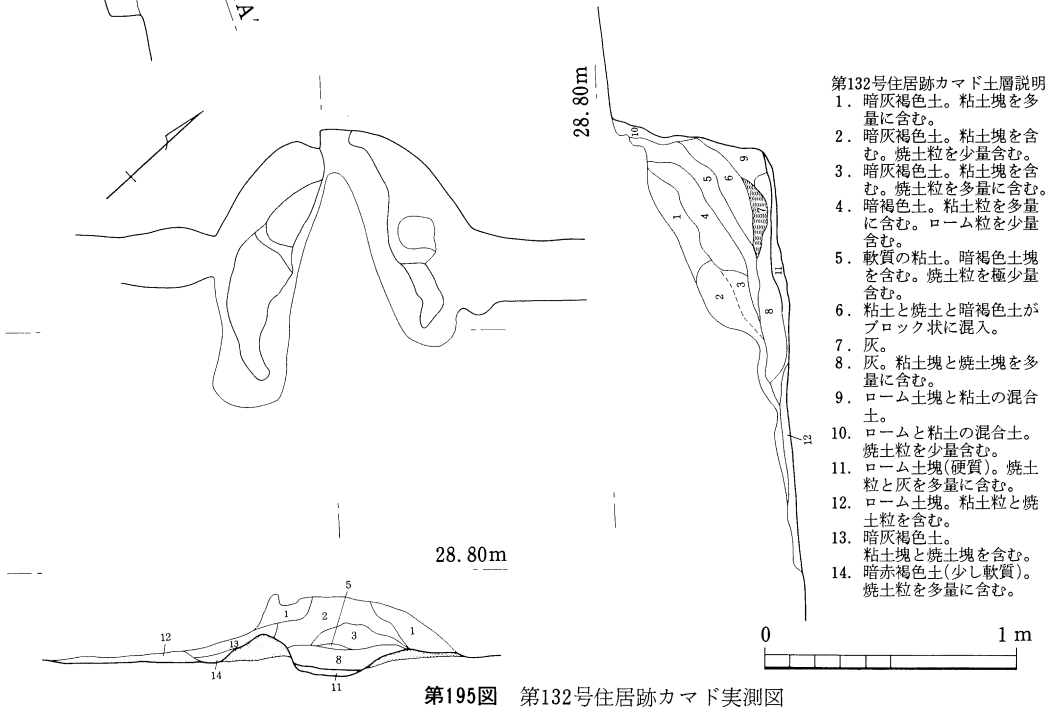
第193図　第130号住居跡出土遺物実測図（６～10）

（34）第132号住居跡



第132号住居跡土層説明
1．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
2．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を少量含む。炭粒を極少量含む。
3．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を極少量含む。炭粒と粘土粒を少量含む。
4．暗褐色土(やや軟質，明るい)。ローム粒をブロック状に含む。
5．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を少量含む。焼土粒と炭粒を多量に含む。
6．暗褐色土(やや軟質)。ローム粒と炭粒を極少量含む。
7．褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。

第194図　第132号住居跡実測図



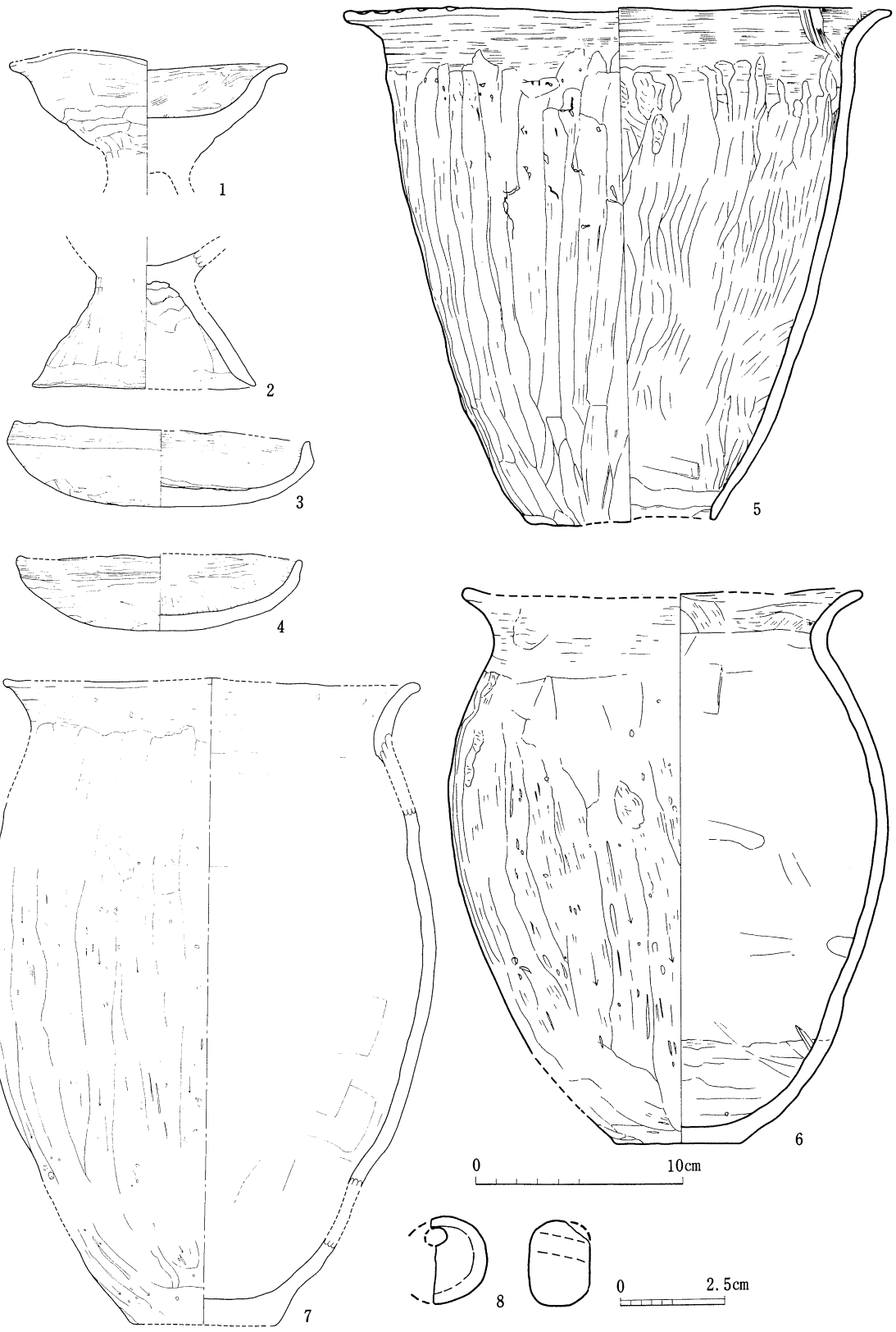
第132号住居跡カマド土層説明
1．暗灰褐色土。粘土塊を多量に含む。
2．暗灰褐色土。粘土塊を含む。焼土粒を少量含む。
3．暗灰褐色土。粘土塊を含む。焼土粒を多量に含む。
4．暗褐色土。粘土粒を多量に含む。ローム粒を少量含む。
5．軟質の粘土。暗褐色土塊を含む。焼土粒を極少量含む。
6．粘土と焼土と暗褐色土がブロック状に混入。
7．灰。
8．灰。粘土塊と焼土塊を多量に含む。
9．ローム土塊と粘土の混合土。
10．ロームと粘土の混合土。焼土粒を少量含む。
11．ローム土塊(硬質)。焼土粒と灰を多量に含む。
12．ローム土塊。粘土粒と焼土粒を含む。
13．暗灰褐色土。粘土塊と焼土塊を含む。
14．暗赤褐色土(少し軟質)。焼土粒を多量に含む。

第195図　第132号住居跡カマド実測図

調査地区の北東側に位置し、南東約８ｍで小谷に傾斜する地点である。東側の隅が円形の土坑(新しい掘り込み)により切られている。平面形体は、長方形を呈し、規模は、長軸4.25ｍ、短軸3.30ｍを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、Ｎ－44°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、55㎝である。床面は、平担であるが、踏み固められた面は、不明瞭である。床面積は、約12.28㎡を測る。壁溝は、北側隅が途切れる以外は四周し、最大幅10㎝、最深部６㎝である。床面内のピットは、検出されない。焼土の流れ込みは、南西側より１ヶ所認められる。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積を示す。カマドは、北西側壁中央に設置され、煙道部は、竪穴壁を大きな逆Ｕ字状に約40㎝掘り込み、立ち上がりは、急傾斜である。出土遺物は、高坏、坏(2)、甕(2)、甑、土製小玉がみられる。土製小玉は、径2.1㎝で、小孔は、片寄った位置にある。

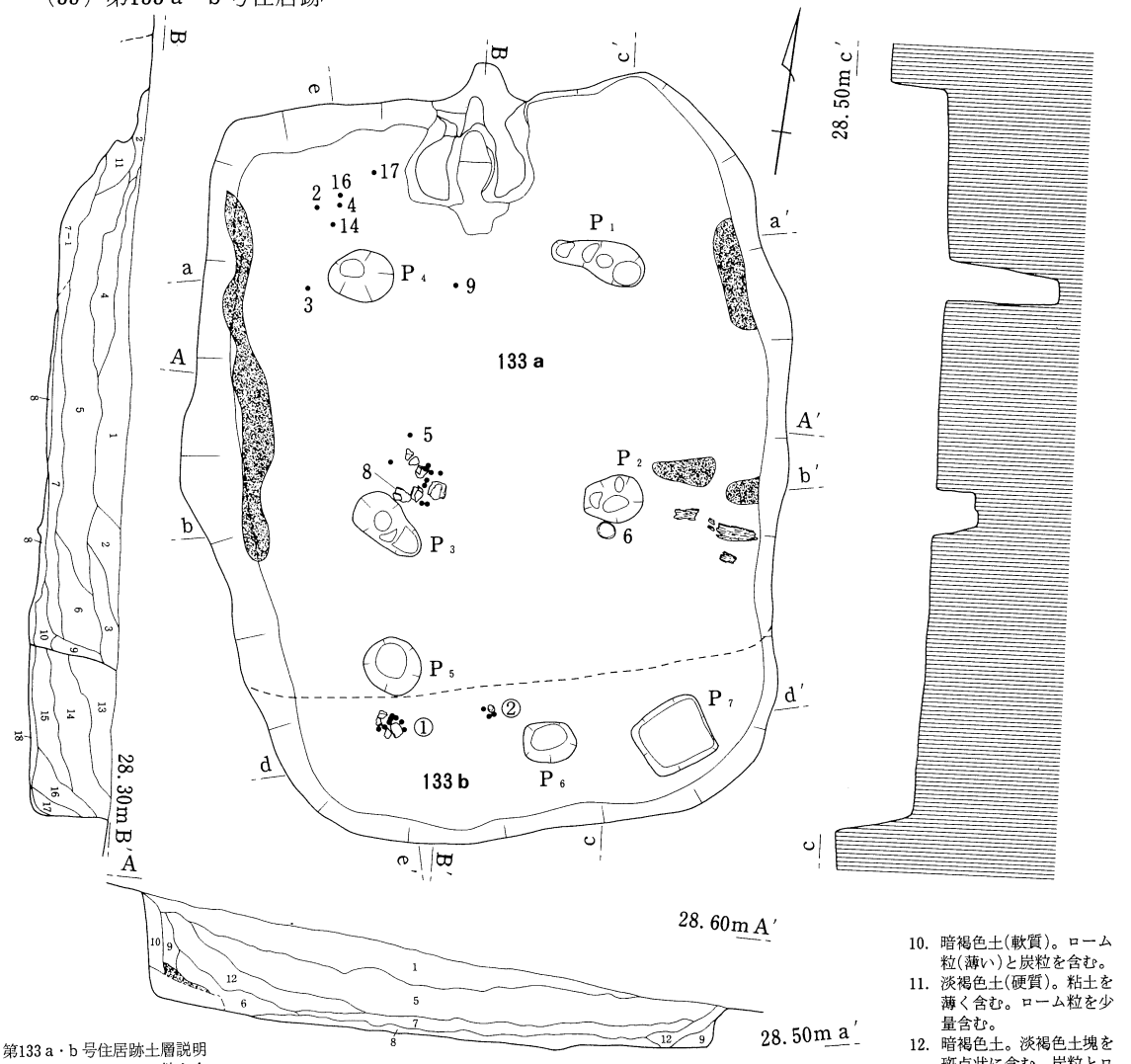
第89表　第132号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図196 1	a.(高坏) b.南側壁近くの床面 c.坏部のみ	口径13.5	d.緻密 e.わずかに不良	小型で埦状を呈し、口縁部は、小さく外反する。	口縁部～体中位＝横ナデ 体下半＝ヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、一部淡褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色、一部茶褐色
図196 2	a.(高坏) b.西側壁近くの床面 c.脚部のみ	脚裾部径10.8	d.緻密 e.少し不良	八の字状に開く脚部	脚裾部＝横ナデ 脚部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、一部淡暗褐色	口縁部＝横ナデ 脚部＝ヘラケズリダシ 〈色調〉暗褐色
図196 3	a.坏 b.西側壁近くの床面 c.口縁部が10%欠損	口径14.4 口縁最大径14.9 器高3.7	d.緻密 e.普通	やや大型で、丸底、体部は、扁平で、口縁部は、稜をもち、少し内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉褐色、暗褐色、黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝指ナデ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色
図196 4	a.坏 b.床面中央 c.全体の70%の残存	口径13.75 器高3.75	d.緻密 e.普通	丸底で扁平で口縁部は、稜をもち、やや外反ぎみに立ち上がる。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色、黒褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色
図196 5	a.甑 b.床面中央 c.全体の90%の残存	口径25.85 底径8.7 (孔径) 器高25.25	d.緻密 e.普通	大きめの孔をもち、丸みをもって立ち上がり、口縁部は、小さく外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部黒色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 〈色調〉淡褐色
図196 6	a.甕 b.床面中央 c.全体の90%の残存	口径19.05 最大径15.05 底径5.9 器高26.9	d.小礫３mm以下を含む e.わずかに不良	少し長胴で、胴最大径は上位、口縁部は小さく外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝横方向ヘラケズリ 〈色調〉褐色、黒褐色	口縁部＝指横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指ナデ 下位＝ヘラナデツケ 〈色調〉褐色、暗褐色
図196 7	a.甕 b.床面中央 c.全体の60%の残存	口径(19.75) 最大径(21.6) 底部径(6.7) 器高(31.4)	d.小礫３mm以下を多く含む e.普通	少し長胴で、最大径は、胴中位で、口縁部は、小さく外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝斜め方向 〈色調〉暗褐色、黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉淡褐色一部黒褐色



第196図　第132号住居跡出土遺物実測図

（35）第133 a・b 号住居跡

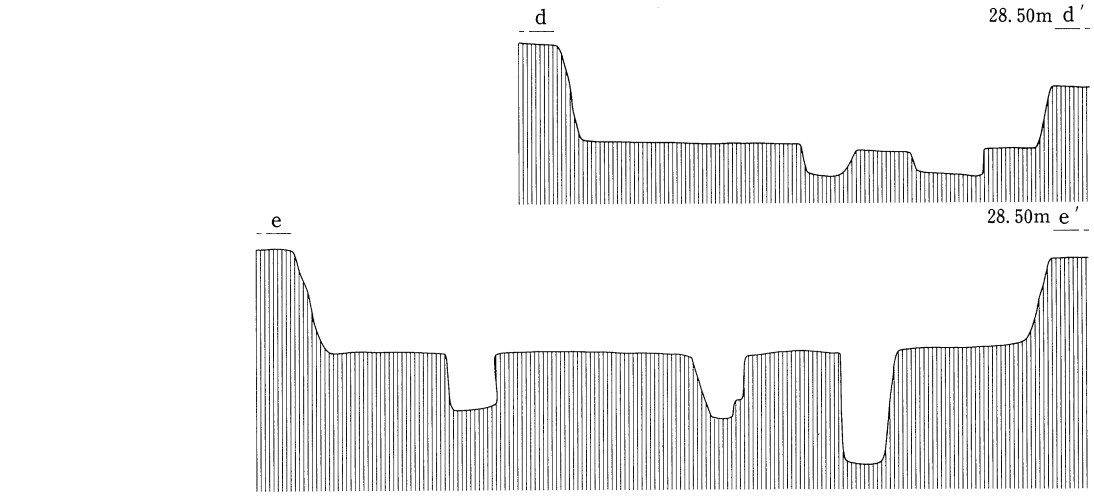


第133 a・b 号住居跡土層説明

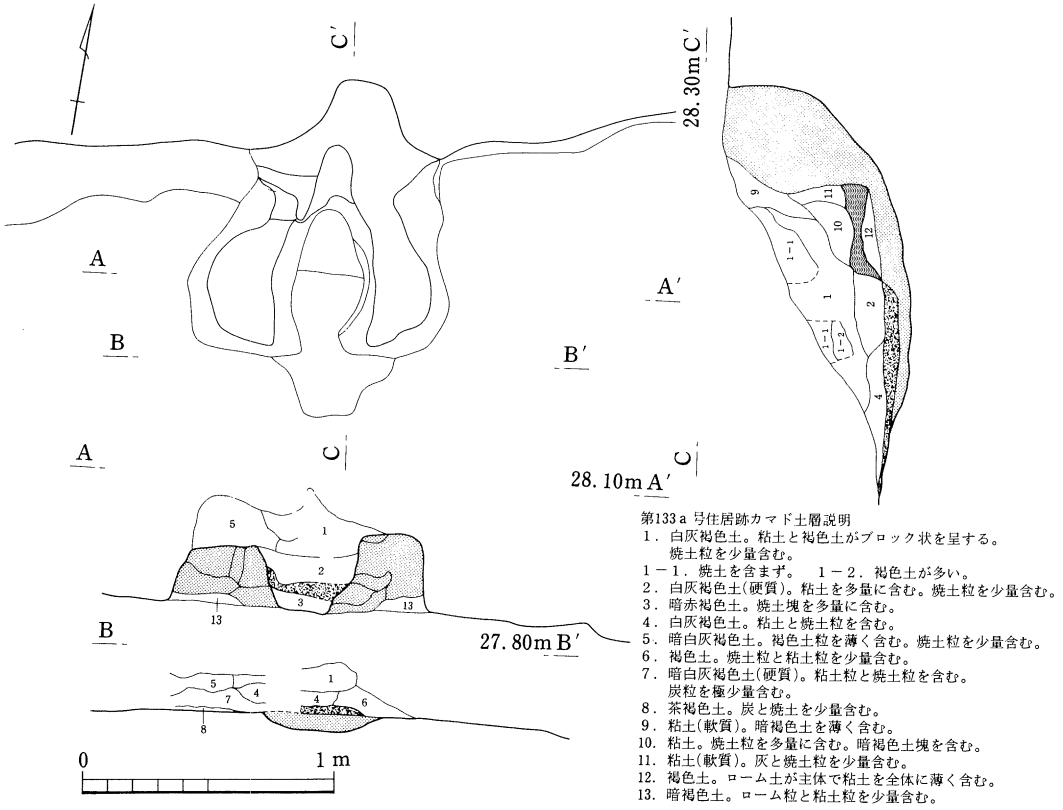
1. 黒褐色土。ローム粒を含む。炭粒を極少量含む。
2. 暗褐色土。ローム土塊（薄く少し軟質）を多量に含む。
3. 褐色土。ローム土塊を多量に含む。
4. 褐色土。ローム土塊（少し軟質）をブロック状に含む。
5. 暗褐色土。ローム土塊（少し軟質）を多量に含む。炭粒を少量含む。
6. 褐色土。ローム粒を多量に含む。
7. 黒褐色土。ローム粒を含む。炭粒を少量含む。
7－1. 粘土を薄く含む。
8. 褐色土（硬質）。ローム土塊をブロック状に含む。炭粒を極少量含む。
9. 褐色土（軟質）。ローム粒を含む。
10. 暗褐色土（軟質）。ローム粒（薄い）と炭粒を含む。
11. 淡褐色土（硬質）。粘土を薄く含む。ローム粒を少量含む。
12. 暗褐色土。淡褐色土塊を斑点状に含む。炭粒とローム粒を含む。
13. 褐色土（少し硬質）。ローム土塊（薄く、やや硬い）を多量に含む。
14. 褐色土（やや硬質）。ローム土塊を含む。
15. 暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。
16. 褐色土（少し軟質）。ローム粒を多量に含む。
17. 暗褐色土（軟質）。ローム粒を含む。
18. 暗褐色土（硬質）。ローム土塊をブロック状に含む。

133 b 覆土

第197図　第133 a・b 号住居跡実測図



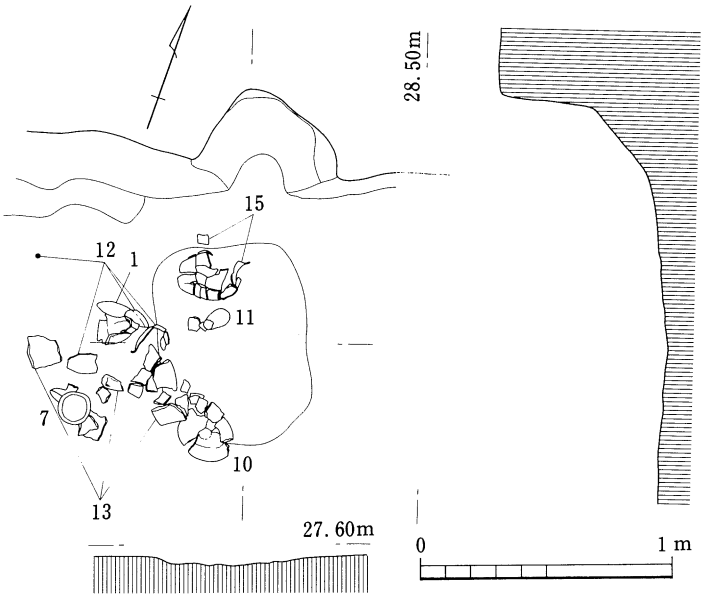
第198図　第133 a・b 号住居跡断面図（d－d′，e－e′）



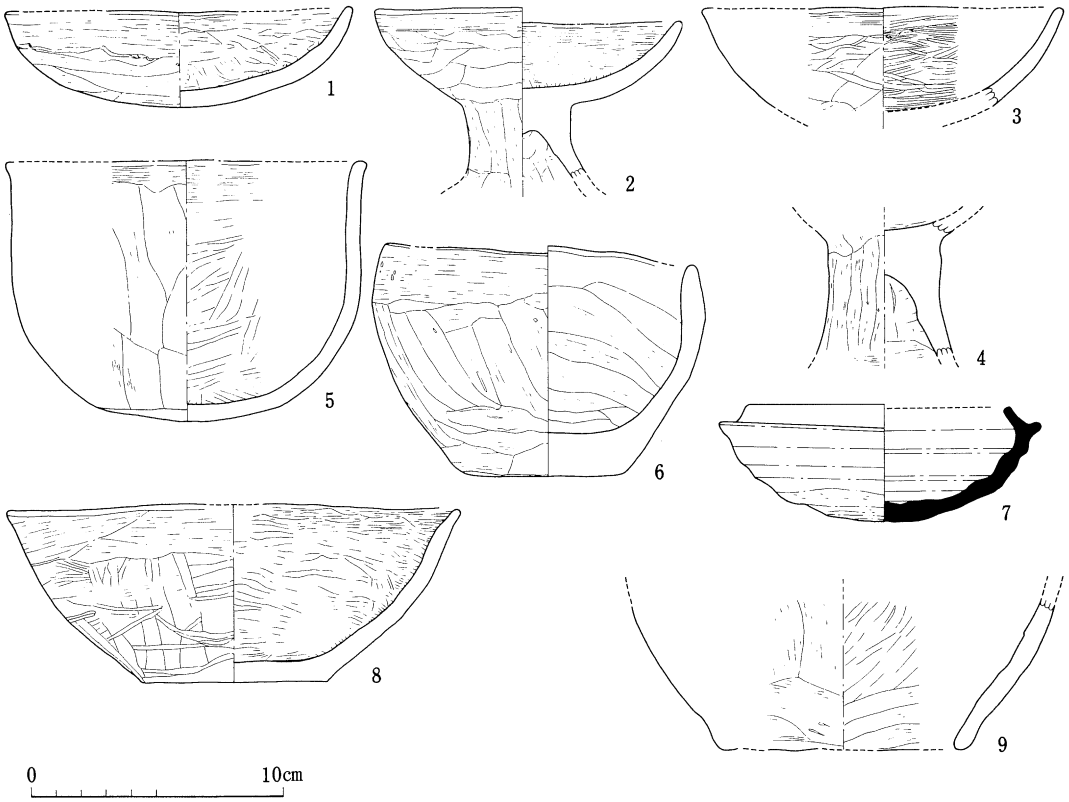
第199図　第133 a 号住居跡カマド実測図

第133 a 号住居跡は、調査地区の北東側に位置し、北と東にそれぞれ５ｍで傾斜面にうつり、北側と東側の谷を望める地点である。第134号住居跡が南に約1.5ｍの距離に所在する。また、第133 b 号住居跡の北側を大半切り込んでいる。平面形体は、胴張りの隅円長方形を呈し、規模は、長軸4.90ｍ、短軸4.75ｍを測る。主軸方位は、短軸をはかり、Ｎ－12°－Ｗを示す。壁

の立ち上がりは、傾斜面に近いため、西側壁が高く残り、最大で85cmを測る。床面は、ほぼ平担で、床面積は、約17.35㎡である。壁溝は、検出されていない。床面内のピットは、5本検出され、P_1～P_4は、主柱穴と考えられる。P_1は、下端が4ヶ所、P_2とP_3は、3ヶ所ずつ存在する。竪穴内への焼土の流れ込みは、東側と西側より認められる。また、炭化物が東側より検出されている。竪穴の



第200図　第133a号住居跡カマド掘り方等実測図



第201図　第133a号住居跡出土遺物実測図（1～9）

第90表　第133ａ号住居跡出土遺物観察表（１）

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図2011	a.(坏) b.カマド周辺 c.全体の1/3	口径(13.8) 器高3.8	d.緻密 e.少し不良	浅い椀状を呈する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 粘土紐接合痕がわずかに残る 〈色調〉暗褐色、一部黒色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色、一部淡褐色
図2012	a.高坏 b.カマド左側床面 c.脚裾部を欠損のみ	口径12.25 脚小径4.0	d.緻密 e.少し不良	脚は柱状にちかい形体で、坏部は、浅い椀状を呈する。	坏口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 脚部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、淡褐色、一部黒褐色	坏部＝ヘラミガキ 脚部＝ヘラケズリダシ 〈色調〉淡褐色、一部褐色
図2013	a.(坏) b.P_4の西側 c.底部欠損 全体の1/6	口径(14.4)	d.緻密 e.少し良好		口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色、一部茶褐色	全面＝ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色

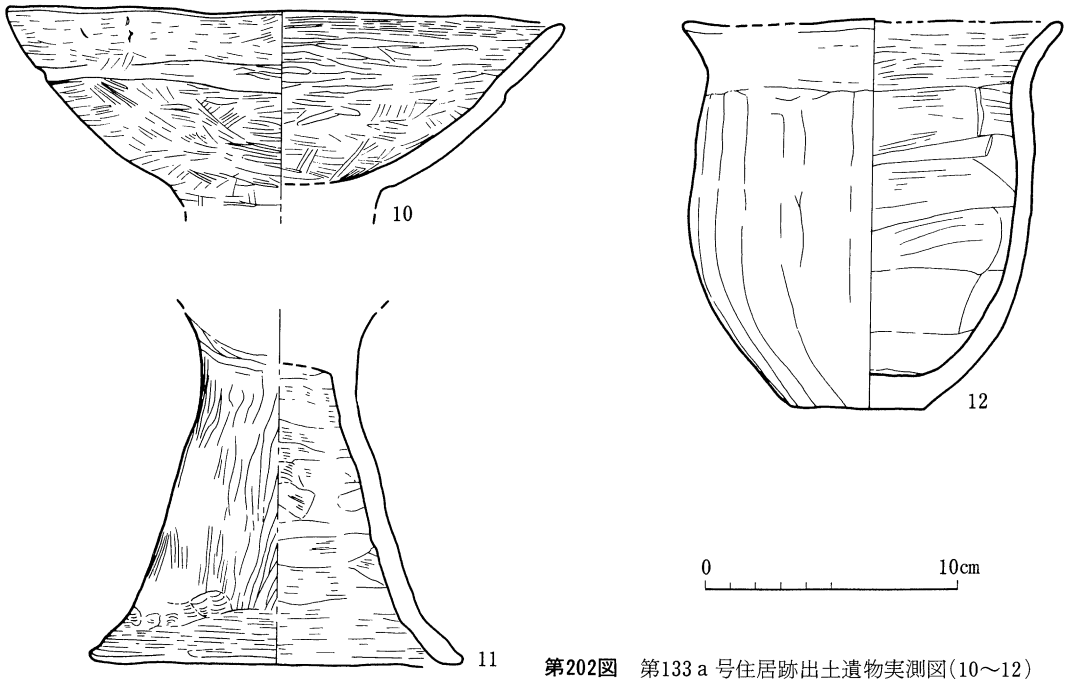
第91表　第133ａ号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	77×34	22×19	89
		14×11	32
		18× 9	30
		16×11	22
P_2	47×39	21×12	35
		12× 7	32
		12× 9	28

第92表　第133ｂ号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_3	64×36	18×18	32
		15× 6	35
		16×14	49
P_4	52×41	19×14	44
P_6	43×34	29×19	25
P_7	58×55	53×44	19

覆土は、暗褐色土と褐色土を主体とし、軟質のローム土塊を多量に含んでいる。人為的な埋めもどしの可能性が有る。カマドは、北側壁やや東寄りに設置され、煙道部は、竪穴壁を約25cm掘り込み、下部に粘土を厚く敷いている。出土遺物は、カマド左側床とカマド内より多く検出された。また、P_3とP_2付近でも少量検出されている。



第202図　第133ａ号住居跡出土遺物実測図(10～12)